

自伝的記憶の構造と機能

2006年

新潟大学大学院現代社会文化研究科

佐藤 浩一

【目次】

第1章	序論	1
第1節	はじめに	1
第2節	自伝的記憶の定義	3
	1. 「エピソード」を強調する定義	3
	2. 「個人史」を強調する定義	3
	3. 「自己」を強調する定義	4
第3節	日常記憶研究の広がり与方法の変化	4
	1. 日常記憶研究の広がり	5
	2. 日常記憶研究の方法論的特徴	6
第4節	自伝的記憶研究の方法	8
	1. 自伝的記憶研究が抱える事情	8
	2. 自伝的記憶研究の方法	9
	3. 内的妥当性と外的妥当性	14
	4. 自伝的記憶研究の妥当性	16
第5節	本研究の目的と概要	17
第2章	自伝的記憶の構造	22
第1節	自伝的記憶のインデックス	23
	1. 活動優位説	23
	2. 活動優位説に対する反証	24
	3. 時間情報の役割	25
	4. まとめ	28
第2節	自伝的記憶の系列	28
	1. 群化と方向転換	29
	2. event cueing 法による検討	30
	3. まとめ	32
第3節	研究1 event cueing 法による検討 - (1)	33
	1. 目的	33
	2. 標準的な方法との相違点	34
	3. 方法	35
	4. 結果	37
	5. 考察	44
第4節	研究2 event cueing 法による検討 - (2)	46
	1. 目的	46
	2. 方法	47
	3. 結果	48
	4. 考察	58

第5節	第2章のまとめと考察	61
	1. lifetime period	62
	2. 記憶をつなぐ原理	62
	3. 時間経過に伴う変化	65
	4. 機能との関連	66
第3章	自伝的記憶の機能	68
第1節	記憶の how と why	69
	1. 自伝的記憶の how と why	69
	2. 機能への着目	70
	3. how と why の必要性	72
第2節	三つの機能 - 自己, 社会, 方向づけ -	75
	1. 自己機能	75
	2. 社会機能	79
	3. 方向づけ機能	82
	4. 記憶は複数の機能を担う	88
第3節	回想研究と記憶の機能	89
	1. 高齢者の回想の適応的な意味	89
	2. 回想機能尺度	89
	3. 自伝的記憶研究と回想研究	90
第4節	研究3 思い出の中の教師 - 自伝的記憶の機能分析 -	92
	1. 目的	92
	2. 方法	95
	3. 結果	96
	4. 考察	111
第5節	研究4 思い出の中の教師 - 記憶の機能と想起特性 -	115
	1. 出来事か, 記憶か	115
	2. 記憶としての独自性	118
	3. 記憶特性の検討	119
	4. 方法	126
	5. 結果	127
	6. 考察	136
第6節	研究5 思い出の中の教師 - 自伝的推論の検討 -	137
	1. 自伝的推論	138
	2. 自伝的推論に影響する要因	140
	3. 目的	141
	4. 方法	142
	5. 結果	142
	6. 考察	155

第7節	第3章のまとめと考察	158
	1. 自伝的記憶の自己機能と方向づけ機能	158
	2. 「出来事」ではなく「出来事の記憶」が機能を担う	158
	3. 自伝的推論	159
	4. 構造との関連	160
	5. 今後の課題	160
第4章	人生全体を通じての自伝的記憶の想起 - 加齢に伴う変化 -	162
第1節	記憶の再構成	162
	1. 態度や動機に基づく選択的想起	163
	2. 潜在理論に基づく再構成	163
第2節	反復想起に見られる安定性と変動性	165
	1. 反復想起と信頼性	165
	2. 変動の持つ意味	165
	3. 二種類の安定性・変動性	167
第3節	研究6 自伝的記憶の安定と変動	169
	1. 目的	169
	2. 方法	171
	3. 結果	172
	4. 考察	181
第5章	総合論議	186
第1節	本研究のまとめ	186
	1. 自伝的記憶の構造	186
	2. 自伝的記憶の機能	189
	3. 自伝的記憶の構造と機能 - 統合的な枠組の提案 -	192
第2節	今後の検討課題	195
	1. いつ過去に立ち返るのか	195
	2. 構造と機能の適合性	197
	3. 経験の符号化と想起	198
	4. 加齢の影響	200
第3節	結び	202
引用文献		203
謝辞		229

第1章 序論 ^{*1}

第1節 はじめに

人は毎日様々な出来事を経験している。その中には日常茶飯事でとるに足らない出来事もあれば、後々振り返った時に「あの人と出会ったことがきっかけ」「あのことさえ無ければ」という気持ちを引き起こすような、重要な出来事もあるだろう。このように、これまでの生活で自分が経験した出来事に関する記憶は、「自伝的記憶 (autobiographical memory)」と呼ばれる。

自伝的記憶が認知心理学の一つのテーマとして注目を浴びたのは、1980年代以降である。しかしそのルーツは、1世紀以上もさかのぼることができる。人類学や社会学においては1900年代初頭から、人が自分の過去について語った内容(ライフストーリーあるいはライフヒストリー)が資料として利用されていた(Ruth & Kenyon, 1996)。今日「ナラティブ(narrative)」に対する関心が高まっているが(やまだ, 2000)、それはこうした伝記資料の活用に端を発していると言える。

心理学における自伝的記憶研究は Francis Galton と Sigmund Freud にさかのぼると言われる(Robinson, 1986)。Galton は自らが研究参加者となることで、単語から連想される観念の内容や鮮明度あるいは潜時を検討した(Galton, 1907)。Galton が用いた方法はその後「手がかり語法」として、自伝的記憶研究では頻繁に利用される手法になっている(Crovitz & Schiffman, 1974)。Freud は最初、患者のヒステリー症状の背景には幼児期の性的虐待体験があると考えていた。しかしやがて彼は、患者が「思い出した」記憶は実はファンタジーであると考えようになった(Freud, 1914)。これは自伝的記憶の再構成的性質と深く関わる問題である。1920年代以降も、Freud の抑圧説を実証的に検討しようとした人たちによって、「快な経験と不快な経験では、不快な経験の方が忘却されやすいのか」という問題意識のもとで検討が続けられた(Meltzer, 1930)。

*1 第1章, 第3節と第4節の内容は、佐藤(2002, 2005a)をもとに加筆修正を行った。

その後もこの問題は取り上げられ、「記憶」が「言語学習」と呼ばれていた 1940 年代・1950 年代にあっても、快経験と不快経験の保持を比較しようとする試みは続けられていた(例：Steckle, 1945)。これらの研究では、参加者に日記をつけさせて、その中の出来事の保持を検討したり、ある期間(例：その年の夏期休暇)に経験した出来事を想起させた上で、一定日数経過後に再び想起を求めるという手法が多用されていた(レビューとして神谷, 1996)。

ところが認知心理学が盛んになった 1960 年代以降、自伝的記憶の研究はしばらく表舞台から姿を消すことになった。当時の記憶研究の中心には短期記憶と長期記憶を分けるボックス・モデルの考え方があり(Atkinson & Shiffrin, 1968)、短期記憶の容量や、短期記憶から長期記憶に情報を転送するための符号化方略について、言語材料を用いた研究が多く行われていたのである。Tulving(1972)は個人が経験し、時空間的に定位できる出来事の記憶を「エピソード記憶」として概念化し、意味記憶・手続き記憶と並列させた記憶理論を提唱した。しかし現実には、「ある日、ある実験室で学習した記憶リストを再生する」ことが、エピソード記憶の研究だったのである。

こうした流れは 1970 年代後半に入って徐々に変化してきた。Linton(1975)は自分自身の経験を日誌法で記録して、その記憶を自ら検査するという方法で研究を行い注目された。さらに 1970 年代の終わりには、Neisser(1978)が認知研究における「生態学的妥当性(ecological validity)」の重要性を説き、「日常記憶(everyday memory)」あるいは「記憶の現実的な側面(practical aspects of memory)」といった表現が、研究のキーワードとして認識されるようになった。そのころから、日常経験の記憶に関わる研究も次第に盛んになったのである。1986 年には、当時の研究を集成した専門書"*Autobiographical memory*"が、Rubin によって編纂されている(Rubin, 1986)。試みに、アメリカ心理学会が作成しているデータベース PsycINFO で、関連する研究を検索してみよう。1990 年までは、個人的な経験の記憶は"life experiences"あるいは"reminiscence"といったキーワードのもとに整理されていた。1991 年になると"autobiographical memory"がキーワードとして登録され、雑誌論文だけでも年間数十件の研究が公刊されている。そして今日、自伝的記憶は発達、人格、感情、文化など様々な研究分野と結びつき(Rubin, 1996)、急激な進展を遂げつつある。

本研究は、こうした個人的な経験の記憶がどのような原理に従って構造化され、いかなる機能を果たしているのかという問題を、実証的に明らかにしようとする試みである。

第2節 自伝的記憶の定義

このように自伝的記憶は認知心理学の中の重要なテーマとして認識されてきたのであるが、その定義は研究者によって様々である。ここでは大きく三つの立場からの定義を紹介する。

1. 「エピソード」を強調する定義

Tulving の分類によると、エピソード記憶とは「日付のあるエピソードや事象についての情報、またそれらのエピソードや事象間の時間的・空間的關係についての情報を受け入れたり、貯蔵したりするシステム」である(Tulving, 1983, 訳書 p.26)。そしてこの定義に依拠するなら、自伝的記憶はエピソード記憶の一種ということになる。

研究者の中にもきわめて中立的に、自伝的記憶と上記の意味でのエピソード記憶をほぼ同義に扱う者がいる。「人生の中で体験したさまざまな出来事に関する記憶の総体」(相良, 2000, p.161)、「個人の過去に起こった出来事や経験にかかわる記憶」(高橋, 2000, p.230)、「これまでの人生で経験した出来事の再生」(Baddeley, 1997, p.211)、「自伝的記憶は、伝記的な情報や人生での経験に関する記憶である。他者の経験や公的出来事に関する知識、一般的な知識やスキルとは区別される」(Robinson, 1992, p.223)、「自伝的記憶とはこれまでの生涯を振り返って想起する個人的経験に関するエピソードであり、その個人に直接的なかわりのある過去の出来事に関する記憶である」(神谷, 2000, p.96)といった定義は、その例である。

2. 「個人史」を強調する定義

個々の「出来事」を強調する上記の立場とは対照的に、出来事がつながり「個

人史」を形成しているのが自伝的記憶の特徴であるとし、定義でもその点を強調することもある。「個人史の記憶」(森, 1995, p.24)、「過去の経験を時間軸に沿って整理し、わかりやすい自己物語として構成された自分史としての記憶」(榎本, 1998, p.26)といった定義が、その例である。

3. 「自己」を強調する定義

出来事を単位とするか、構成された出来事のつながりを単位とするかに限らず、あえて「自伝的」と呼ぶ以上、そこには「自己(セルフ)」が関わっていることが含意されている。そして多くの研究者は、自己との関わりという点を自伝的記憶の定義の中で強調することで、従来の実験室的記憶現象から区別しようとしている(Brewer, 1986)。「個人の過去の生活から想起されたエピソード。自伝的記憶を定義する特徴は自己に関連しているということである。想起された出来事は個人的に重要で、自己の構成要素になっている」(Cohen, 1996, p.147)、「自伝的記憶は様々な記憶の統合であり文脈情報(エピソード記憶)、世界に関する知識(意味記憶)を含む。それはまた感覚的・知覚的な細部も含む。日常的な出来事も重要な出来事も含んでいる。こうした出来事はそれを経験している自己との関連で統合されている。他者の経験に関する記憶は、いかに近い他者であっても、自伝的記憶ではない」(Haberlandt, 1999, p.220)、「その人の人生で経験された出来事の記憶。自己、感情、目標、個人的な意味が交わる交差点である」(Conway & Rubin, 1993, p.103)、「自伝的記憶は自己に関わる情報の記憶である。それは自己参照的な特質ゆえに他のタイプの記憶とは異なっている。しかし体制化や操作という点では似ているかもしれない」(Robinson & Swanson, 1990, p.321)、等の定義は、自己との関わりこそが自伝的記憶を他の記憶から区別する特徴であることを示唆している。

第3節 日常記憶研究の広がり与方法の変化

自伝的記憶は従来の実験心理学が扱ってきた記憶に比べると、統制が難しい対象であり、その探求には相応の方法論的な工夫が求められる。ここではまず、

日常認知研究が盛んになるに従って、記憶研究がどのように変化したかを簡単に振り返る。続いて、現在の自伝的記憶研究が特定の研究方法に縛られることなく、いわば「方法論的折衷主義」の立場に立っていることを指摘したい。そして研究の内的・外的妥当性という視点から、こうした方法論的折衷主義が研究遂行にとって必要であることを指摘する。

1. 日常記憶研究の広がり

1970年代後半から、「日常認知」研究が次第に盛んになり、現在では完全に市民権を獲得していると言えよう。こうした流れの中で、記憶研究も大きく変貌してきた。それまでの「実験室的記憶研究」の時代には、文字通り「実験室での統制された実験」が研究方法の主流であったが、今日では「自伝的記憶」に代表されるように、研究者による統制が難しいテーマについても、実験に限定されない多彩な方法を用いた研究が行われている。

記憶研究における変化を一言で表現するなら、「研究対象とする"記憶"そのものが豊かになるにつれて、研究方法も多様になった」と言えるだろう。

かつて記憶研究が学習心理学の一部として「言語学習」と称されていた時代には、系列学習や対連合学習といった手法を用いて、連合理論に基づく研究が行われていた(Jung, 1968)。記銘材料として用いられたのは無意味綴りや単語リストである。検討しているのが学習理論一般である以上、材料に何を用いるかはあまり大きな問題ではなく、そうであるならば実験者の側で統制しやすい材料を用いて、クリアな結果を導き出すことが大切だからである。当時の言語学習研究者たちが、こうした限定された手続きと材料で記憶の一般法則を明らかにできると信じていたかどうかは、定かではない。研究手法にあわないテーマや現象には蓋をして、いつのまにか、蓋をしたことを忘れてしまっていたのかもしれない。

ところが認知心理学の時代になると、研究対象である記憶そのものが複雑化してくる。記憶は単一のシステムではなく、「短期記憶・ワーキングメモリ・長期記憶」「手続き記憶・宣言的記憶」「エピソード記憶・意味記憶」等々、複雑なシステムの複合体であることが明らかになってきた。さらに日常生活を支える様々な記憶機能に関心が集まるようになった。その結果、顔の記憶、自伝

的記憶，感情の記憶，場所の記憶，行為の記憶，会話の記憶，展望的記憶等々，様々な記憶が，研究テーマとして咲き誇るようになったのである (Cohen, 1996)。

こうした状況では，「言語材料の対連合学習や系列学習を用いた研究によって，記憶システム全般を支配している連合法則が明らかになる」という姿勢をとり続けることは難しい。忘却曲線一つをとっても記憶内容によっては，Ebbinghaus (1885)が見出したのとは大きく異なる結果が得られるのである (例：Linton, 1982)。研究者たちは，そのテーマにふさわしい研究方法を工夫しなくてはならなくなった。

2．日常記憶研究の方法論的特徴

日常記憶研究の方法論的特徴を知る手がかりとして，Poon, Welke, & Dudley (1993)が行った分析を見てみよう。分析の対象となったのは 1988 年に刊行された *"Practical Aspects of Memory: Current Research and Issues"* から抽出された 30 編，1987-1988 年に刊行された *"Applied Cognitive Psychology"* から抽出された 30 編，1987-1988 年に刊行された *"Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition"* から抽出された 32 編の論文である。*"Practical Aspects of Memory: Current Research and Issues"* は日常認知をテーマとする学会の会報 (proceedings) であり，*"Applied Cognitive Psychology"* は日常認知研究の代表的な専門誌である。いずれにおいても日常記憶が多く扱われている。一方，*"Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition"* は伝統的な学習・認知研究の専門誌である。レビュー論文と病理学的なサンプルのものは除き，成人が参加した経験的な研究からランダムにサンプリングされた。以下の 5 つの観点から 3 種類の掲載論文が比較された。

- (1) 研究目的 新たな方法の開発・検討にあるのか (方法論的)，複数の理論や仮説を対比検討したり新たに得られたデータを理論にあてはまることにあるのか (理論的)，それとも仮説や理論やモデルの検証は行わずに，現象を検討することにあるのか (現象的)。
- (2) 理論的枠組 研究目的とは独立に，研究が何らかの理論的な枠組によって動機づけられているか。

- (3)研究計画 独立変数を操作した要因計画実験か、変数間の相関関係を記述した相関研究か、調査研究・日誌法・自然な場面での観察等、研究者による変数操作を含まない調査・観察研究か。
- (4)刺激や課題 無意味綴りなど日常生活ではめったに遭遇せず、実験的コントロールが容易な課題を用いているか、それとも、手紙の投函や事件の目撃など日常生活で遭遇し得る課題を用いているか。
- (5)結論 その研究がある理論的な立場を支持したか否かに言及しているのか(理論志向)、現実的場レベルの応用可能性に触れているのか(応用志向)、特定の方法のメリット・デメリットを強調しているのか(方法志向)、現象の理解に寄与している点を強調しているのか(現象志向)、それとも研究結果の要約にとどまっているのか(要約)。

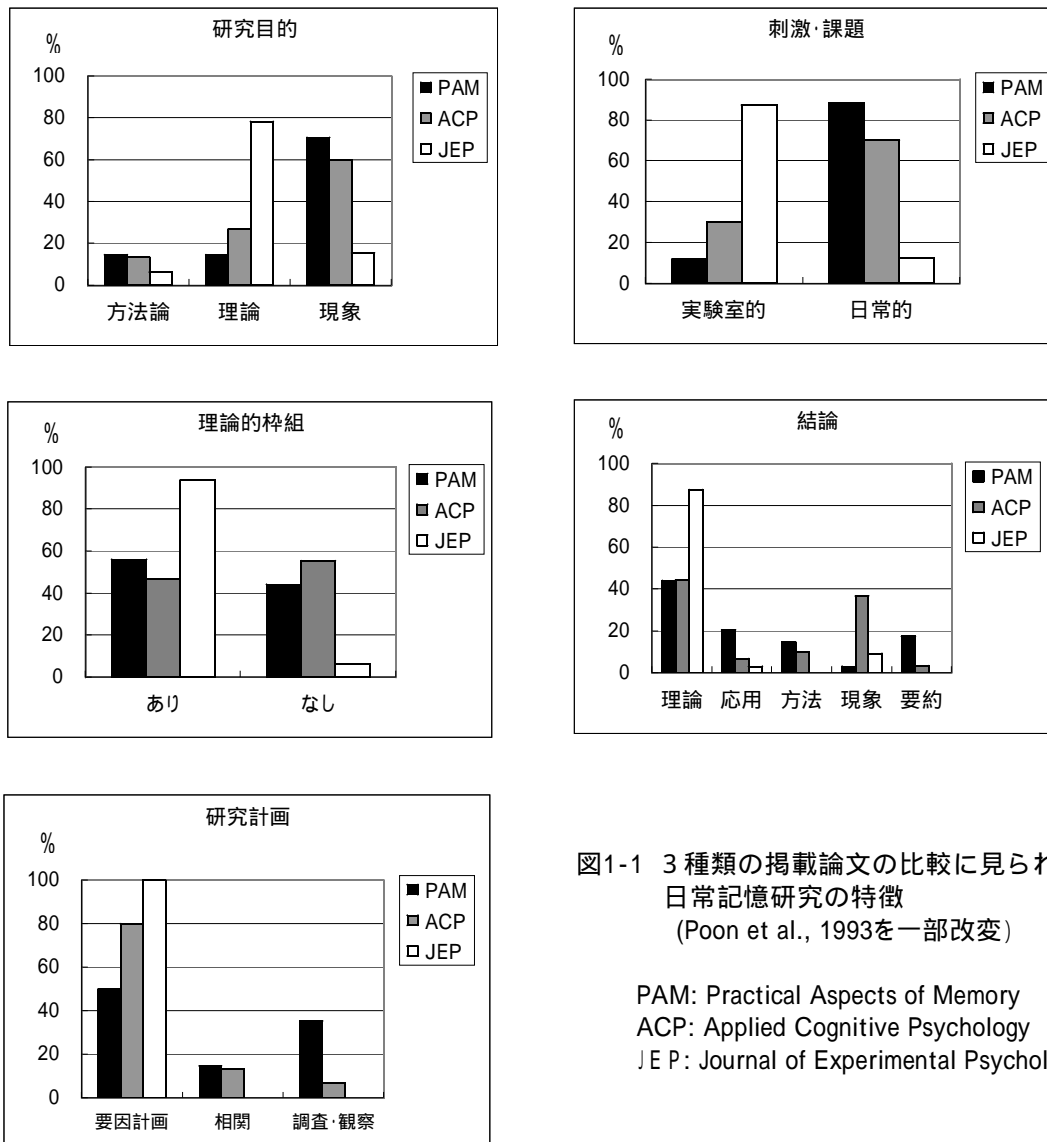


図1-1 3種類の掲載論文の比較に見られる
日常記憶研究の特徴
(Poon et al., 1993を一部改変)

PAM: Practical Aspects of Memory
ACP: Applied Cognitive Psychology
JEP: Journal of Experimental Psychology

分析の結果を図 1-1 に示す。この図から *Journal of Experimental Psychology* と比較すると、日常認知研究の特徴として日常的な刺激や課題を多用し、現象の記述を目的とした研究が多く、理論に依拠した研究は相対的に少ないと言える。ただし研究計画の主流は要因計画であるし、理論に動機づけられたり理論志向の結論を展開している研究も決して少なくない。日常記憶研究の中での差異は、ある特定の研究テーマが現象記述の段階にとどまっているのか、あるいは知見が集積し、仮説検証や理論構築の段階に至っているのかという違いを反映しているであろう。

第 4 節 自伝的記憶研究の方法

1. 自伝的記憶研究が抱える事情

上で述べたように、「記憶」はかつて「言語学習」だった。また認知心理学の時代になっても、「エピソード記憶」は「時間と場所が特定できる経験の記憶」であり、それを検討するためには「ある日ある時、ある実験室で記銘した(言語)材料の記憶」という状況が好んで用いられていた。そこでは全てが研究者の統制下にあり、実験以外の研究方法は不要であった。このように多くが研究者の統制下にあるという点は、日常記憶研究のいくつかのテーマにもあてはまるだろう。しかし自伝的記憶では、記憶内容は研究参加者の側にあり、研究者はそれを何とかして掘り出さなければならない。そこで、「実験」以外にも可能性のある方法を使うという積極性が、研究者には求められるのである。

また自伝的記憶はわれわれ一人一人の存在を支える記憶であり、パーソナリティ・発達・対人関係・感情等々と密接なつながりを有している。そのため、これら関連領域で開発された手法を借りることも、時には必要になる。また、他領域の研究に取り組んでいた人が、自伝的記憶研究に参加することもある。その場合、それまで別の領域で用いられていた手法がアレンジされて、自伝的記憶研究に持ち込まれることも十分考えられる。例えば、発達の研究者が認知発達の一環として自伝的記憶を検討する場合には、縦断研究や親子の会話分析といった、これまでの記憶研究ではあまり用いられない手法が利用されること

になる(例：Haden, 2003)。高齢者の精神的健康の問題に取り組んでいる研究者が、回想行動の頻度や質と精神的健康との相関を検討したり、語りの構造を分析することもある(例：長田・長田, 1994)。

先に紹介した Poon et al. (1993)の分析から 10 年以上が経過した現在、実験室的方法論をベースにしつつも、日常的な課題を取り入れ、要因計画以外の研究方法も利用するという特徴は、より鮮明になってきている。藤永(1999)は心理学における実証主義の発展に触れ、それが大きな進歩をもたらした反面、実験的手法になじまない対象が切り捨てられたことを指摘している。「今日の心理学は、方法のために内容を犠牲にするのではなく、研究目標を達成するための豊かな方法を生み育てるという課題に直面している」(藤永, 1999, p.228) という指摘は、自伝的記憶研究にとって重い意味を持っている。研究テーマや対象にあわせて多様な手法を取り入れていかなければ、自伝的記憶に接近することは困難なのである。

2．自伝的記憶研究の方法

こうした事情から、日常記憶研究の中でもとりわけ自伝的記憶研究では、伝統的な実験以外にも種々様々な手法が使われていることが考えられる。このことを確かめるために、自伝的記憶のいくつかの研究テーマについて、研究方法を大きく分類し、具体例を整理した(表 1-1)。表 1-1 では研究テーマとして、本研究の検討課題である自伝的記憶の構造と機能に加えて、自伝的記憶の再構成や感情など本研究と関わりの深いテーマを取り上げた。また自伝的記憶の発達・フラッシュバルブ記憶・脳研究など、本研究との関わりは弱いですが、研究が蓄積されており、方法の多様性を検討するのに適しているテーマも取り上げている。なお自伝的記憶は、自己(self)・社会(social)・方向づけ(directive)という三種類の機能を担うということが研究者間でほぼ了解されており(Bluck, 2003)、本研究でも機能をこれら三種類に分けて検討する。そこで表 1-1 でも、機能については自己・社会・方向づけに細分して示している。

自伝的記憶の収集方法としては、「手がかり語法」「ナラティブ法」「日誌法」等があるが(Rubin, 2005; Wenzel, 2005)、ここでは研究デザインに従って、以下のように方法を分類した。

表1-1 自伝的記憶研究のテーマと研究方法の具体例

方法 テーマ	記述的研究 (時間経過に伴う変化も含む)	相関的研究 (発達に伴う変化も含む)	実験的研究 (準実験も含む)	実験的研究 (参加者のタイプを操作)
構造と 検索	時間経過に伴う、自分自身の記憶の忘却を検討。(Linton, 1975; Wagenaar, 1986) event-cueing法で、どのような出来事がクラスタを構成して想起されるか検討する。(Brown & Schopflocher, 1998) 夏休みの出来事の自由回答から、その体制化を分析。(Barsalou, 1988)	発達(12~18歳)に伴い、ライフ・ナラティブの中に因果連関を示す表現が増える。(Habermas & Paha, 2001)	検索手がかり(言語材料や匂い)のタイプを操作し、潜時や想起率を比較。(Anderson & Conway, 1993; Barsalou, 1988; Conway & Bekerian, 1987; Ehrichman & Halpern, 1988; Fitzgerald, 1981; Herz & Schooler, 2002; Reiser et al., 1985; Robinson, 1976)	うつ状態・ストレス障害・PTSDと記憶の概括性。(Harvey et al., 1998; Williams, 1996)
パンプ 現象	パンプ現象。(Rubin et al., 1986) 想起された記憶内容の分析。(横・仲, 2006)	世代の異なる被験者で、パンプ効果を比較する。(Rubin & Schulkind, 1997) アメリカへの移住時の年齢が異なる人を対象に、パンプのずれを検討する。(Schrauf & Rubin, 1998)	教示や手がかり語を操作し、パンプ効果の変化を検討する。(Jansari & Parkin, 1996; Rubin & Schulkind, 1997)。	アルツハイマー型痴呆の高齢者と対照群で、パンプ効果を比較。(Fromholt & Larsen, 1991)
機能 (自己)	生活史の分析からライフ・テーマを抽出。(Csikszentmihalyi & Beattie, 1979)	自伝的記憶の想起と個人差変数との関連を検討。(社会的動機: Woike & Polo, 2001; 生殖性: McAdams et al., 1993; 自己複雑性: Sakaki, 2004) 高齢者で、経験への開放性(openness)と「アイデンティティ」機能が関連している。(Molinari et al., 2001)	学期のはじめを「最近」「だいぶん前」と教示し、その時点での自己に関する評価を求める。遠い過去に対しては批判的。(Wilson & Ross, 2001)	アイデンティティ・スタイルによる想起の違い。(Neimeyer & Metzler, 1994) 抑圧的コーピングスタイルによる想起の違い。(Newman & Hedberg, 1999)
機能 (社会)	記憶を共有することによる集団の維持。(Pillemer, 1992; 小林, 1987) 社会的な出来事の記憶でもパンプが見られる。(Holmes & Conway, 1999; Schuman et al., 1997) 会話に含まれる自伝的記憶は、相手との関係の中で自分を記述する内容が多い。(Hyman & Faries, 1992)	回想機能尺度における「教育・情報伝達」得点は、若年層より30歳代以上の方が高い。(Webster, 1997) 高齢者で、愛着スタイルと「教育・情報伝達」機能、外向性と「会話」機能が関連している。(Molinari et al., 2001)	聴き手の反応の仕方によって、語り手の側の内容が変化する。(Bavelas & Johnson, 2000)	親子の性別による想起スタイルの違い。(Fivush, 1998; Reese & Fivush, 1993) 自伝的記憶の性差(語りの緻密さや感情を伴う程度)。(Davis, 1999)
機能 (方向づけ)	「自分の人生に影響した出来事」の記憶を収集、分類。(Pillemer, 1998) 大学時代の記憶は、入学直後の出来事が想起されやすい。(Pillemer et al., 1986, 1988)	初経に対する予備知識がない女性ほど、その経験を詳細に想起できる。(Pillemer et al., 1987) 概括性の高い自伝的記憶を想起する人は、社会的問題解決課題の得点が低い。(Goddard et al., 1996, 1997)	過去の職業目標を回想し発表することが、講義への主体的参加と進路選択を促す。(白井, 2001)	抑鬱(自殺未遂)群と統制群で、概括性と社会的問題解決の関連を検討。(Evans et al., 1992; Sidley et al., 1997)
再構成	結婚生活に関する聴きとり。(Erikson et al., 1986) 語り手と聴き手の親密化に伴い、語られる内容が変化する。(小林, 1992) 結婚生活に対する満足度を想起。10年前の満足度を現在よりも低く想起する。(Karney & Coombs, 2000)	生理に対する不安の強い女性ほど、最近の生理を不快に想起。(McFarland et al., 1989) O.J.シン普森裁判の結果について、現在の評価と判決当時の想起との関連。(Levine et al., 2001)	内向性/外向性が成功と結びつくことを教示すると、被験者はそれに合致した記憶を想起。(Sanitioso et al., 1990) 「学習スキルを高める」コースを受講した大学生は統制群に比較すると、過去の自分のスキルを低く想起。(Conway & Ross, 1984)	抑うつ群・元抑うつ群・コントロール群が、両親の養育態度を想起。(Lewinsohn & Rosenbaum, 1987)

表1-1 自伝的記憶研究のテーマと研究方法の具体例 (続き)

方法 テーマ	記述的研究 (時間経過に伴う変化も含む)	相関的研究 (発達に伴う変化も含む)	実験的研究 (準実験も含む)	実験的研究 (参加者のタイプを操作)
フォールス・メモリー	フォールス・メモリー・シンドローム。(Loftus, 1993)	フォールス・メモリーを構成しやすいパーソナリティ特性に関する検討。(Hyman & Billings, 1998)	教示(イメージ化等)がフォールス・メモリーの形成に及ぼす影響。(Hyman & Pentland, 1996; Mazzoni et al., 1999)	双子児のきょうだいと年齢差が2歳以下の(双子児ではない)きょうだいで、「食い違っている記憶」の生起を比較。(Sheen et al., 2001)
高齢者の回想	人生の語りの類型化。(山口, 2000)	回想機能尺度の開発と、加齢やパーソナリティ変数との関連。(Cully et al., 2001; Molinari et al., 2001; Webster, 1997) 回想的量や質と適応との関連。(野村・橋本, 2001; 長田・長田, 1994; Taft & Nehrke, 1990)	回想法実施前後の変化。(黒川, 1994, 1995)	同一性達成度による、語りの構造の違い。(野村, 2002)
時間情報の想起	カレンダー効果。(Kurbat et al., 1998) 自分が経験した出来事の時間幅は正確に評定できる。(Burt, 1992)	タイムギャップ感(FOG)と鮮明度・感情強度等の関連。(下島, 2001) 示差性・感情価・重要度等と、出来事の順序判断の正確さとの関連。(Burt et al., 1998)	判断の基準となる出来事の違い(国内/国外)が、テレスコピングに及ぼす影響。(下島, 2001) 手がかりの呈示がカレンダー効果に及ぼす影響。(Kurbat et al., 1998)	人生の転機となった出来事の捉え方が、当時と現在で「同じ群」と「違う群」で、FOGを比較検討。(下島, 2001) 学年暦の異なる大学でカレンダー効果を比較。(Kurbat et al., 1998)
不随意的想起	日誌法で不随意的検索を収集し、その特徴や機能を分析する。(Berntsen, 1996; 神谷, 2003)	トラウマ記憶の不随意的想起(フラッシュバック)を予測する、出来事の変数は何か(示差性, 感情強度等)。(Berntsen, 2001)	感情価と特殊性が異なる単語の熟知性評定を求め、評定する際に自伝的記憶が不随意的に想起されたか検討。(雨宮・関口, 2006)	トラウマの不随意的記憶。5年以上前にトラウマを経験した人と、最近経験した人の比較。(Berntsen, 2001)
幼児の自伝的記憶の発達	2歳以前に経験した出来事(弟妹の誕生)の記憶の正確さ。(Eacott & Crawley, 1999) 最初期記憶と7歳以降の記憶の属性(心像性, 感情価, 等)の比較。(West & Bauer, 1999) 遠足等の記憶が時間経過に伴ってどう変化するか。(Hamond & Fivush, 1991; Hudson & Fivush, 1991)	認知発達との関連を検討。(心の理論: Welch-Ross, 1997; 言語発達: Harley & Reese, 1999; 初語時期や再認開始時期: 上原, 1998) 同じ出来事を経験した3歳児と4歳児の想起の比較。(Pillemer et al., 1994) 弟妹が生まれたときの年齢が異なる被験者を対象に、幼児期健忘を検討する。(Eacott & Crawley, 1998; Sheingold & Tenney, 1982)	手がかり(写真)を操作し、想起に及ぼす影響を検討。(Aschermann et al., 1998) 既有知識に合致する出来事と合致しない出来事の再生の比較。(Ornstein et al., 1998)	親の語りスタイルの相違や文化差が、子どもの語りの発達に及ぼす影響を検討する。(Han et al., 1998; Reese et al., 1993) 自己認知課題を通じた幼児と通過していない幼児の比較。(Harley & Reese, 1999)
感情, トラウマ, 抑うつ	収容所体験の、40年間にわたる忘却。(Wagenaar & Groeneweg, 1990) 海難事故生存者の記憶の妥当性。(Thompson et al., 1997)	トラウマが深刻であるほど、その記憶は精緻ではない。(Reviere & Bakeman, 2001) 侵入的記憶と鬱の関連。(Brewin et al., 1998)	気分一致効果。(Salovey & Singer, 1989) 快エピソードと不快エピソードの想起率(再想起率)の比較。(神谷, 1997) 「自己に注意を向けさせる」より「注意をそらさせる」教示を与えることで、鬱の患者でも、自伝的記憶のネガティヴさが低減する。(Lyubomirsky et al., 1998)	トラウマ歴を有する人と有しない人の、自伝的記憶(精緻化度)の比較。(Reviere & Bakeman, 2001) うつ状態・ストレス障害・PTSDと記憶の概括性や侵入性。(Brewin, 1998; Harvey et al., 1998)
フラッシュバルブ記憶	フラッシュバルブ記憶。(Brown & Kulik, 1977) フラッシュバルブ記憶の正確さ。(McCloskey et al., 1988; Wright et al., 1998)	重要度や感情反応とFBMとの関連。(Conway et al., 1994)	質問の順序がFBMの想起に及ぼす影響。(Wright et al., 1997)	人種による比較。(Brown & Kulik, 1977) 居住地域・人種・ジェンダー・社会的階層による比較。(Wright et al., 1998)
脳	脳損傷の事例研究。(Hodges & McCarthy, 1993)	アルツハイマー病患者における脳の各部位の定量的指標と、自伝的記憶インタビュー成績との関連を検討。(Gilboa et al., 2005)	想起内容による脳の活性化の違いをPETやfMRIで検討。(Conway et al., 1999; MaGuire, 2002)	脳損傷患者と統制群で、日常的な活動の実行手順を記述する際に、どのような自伝的記憶に依存しているか検討。(Dritschel et al., 1998)

- (1)記述的研究 現象の記述を主目的とする。時間経過に伴う変化を記述するものも含む。
 - (2)相関的研究 複数の変数間の相関を検討する。発達に伴う変化を検討するものも含む。
 - (3)実験的研究 研究者側が独立変数を操作し、参加者を無作為に割り当てる。準実験的なものも含む。
 - (4)実験的研究(参加者のタイプを操作) 様々な参加者のタイプによって、自伝的記憶の想起がどのように異なるかを検討する。
- 本研究の主要なテーマである「構造」と「機能」については、次に述べるように多様な研究方法が用いられている。

(1) 自伝的記憶の構造

「構造」とは、膨大な自伝的記憶を人がどのようなかたちで貯蔵し、いかに検索しているのかという問題である。Conway & Bekerian (1987)は検索手がかりを操作し、自伝的記憶の検索潜時に及ぼす影響を検討した。「大学時代」など"lifetime period (人生の時期)"を示す語に続けて、参加者がその時期に経験した出来事(例：イタリア旅行)を呈示し、さらにそこから特定の出来事の自伝的記憶を想起するよう求めた。すると、lifetime period を呈示しない条件に比較すると検索潜時が有意に短かった。ここから自伝的記憶は lifetime period によって大きく体制化されており、その中がさらに様々な出来事によって分かれているという階層構造が提唱された。これは実験的な手法で構造を検討した例である。

しかし自伝的記憶の構造(体制化)を規定するのは、時期や出来事などの明示的なものだけではない。本人が出来事の間どのような因果連関を認めるかも、構造に関わっている。この点に関して、Conway & Bekerian (1987)より素朴な手法で検討したのが、Brown & Schopflocher(1998a, 1998b)である。彼らは手がかり語から特定の自伝的記憶の想起を求め、さらにその記憶を手がかりとして、次の記憶を想起させるという手法(event cueing：出来事手がかり法)を開発した。そしてこの方法を用いた研究から、連続して想起された出来事ペアの約53%で、一方が他方の原因になっていることを見出した。この結果は、自伝的

記憶が因果連関に従って体制化されていることを示唆している。また，こうした因果連関による体制化は，発達に伴って次第に形成される。例えば Habermas & Paha(2001)が 12-18 歳の女性にライフストーリーを語ってもらったところ，年齢が上がるに従って，因果連関を示す表現(例：「あの時スポーツクラブに加入しなかったら友だちができなかっただろうし，今もまだ恥ずかしがり屋だったと思います」)が増えることが見出された。

(2) 自伝的記憶の機能

では自伝的記憶はいったい，何の役に立っているのだろうか。これが自伝的記憶の「機能」という問題である。自伝的記憶には，自己(自己の一貫性や自己評価を支える)，社会(対人コミュニケーションに寄与する)，方向づけ(行動や態度決定を支えたり動機づけるのに役立つ)という三種類の機能があるとされている(Bluck, 2003)。Pillemer (1998)は自伝的記憶を収集し，その内容分析に基づいて，自伝的記憶の方向づけ機能を明らかにした。こうした素朴な研究手法が用いられる一方で，実験的な検討も行われている。社会生活を営む上で遭遇する問題場面を呈示して(例「引っ越してきたばかりで近所に知人がいない」)，その解決策を考えさせる手続きは，「手段 - 目的問題解決課題 (means-ends problem-solving task)」と呼ばれている。Evans, Williams, O'Loughlin, & Howells (1992)は参加者にこの課題を求めるとともに，手がかり語法によって自伝的記憶の想起を求めて，どれくらい具体的な想起が可能かを検討した。その結果，具体的な内容を想起しにくい人ほど，手段 - 目的問題解決課題において有効な解決方法を思いつきにくいことが示された。このことは，自分が経験した出来事の記憶が，類似の場面の問題解決に活用できることを示唆している。

また自伝的記憶の機能については，高齢者の回想という領域で知見が重ねられている。その領域では，回想機能尺度(回想することにどのような意味があるかを検討する尺度)が開発され，年齢や高齢者のパーソナリティ変数等との相関が検討されている。例えば，「過去を回想することは他者に情報を伝えるのに役立つ」という意識は，アタッチメント・スタイルや外向性と関連しており(Molinari, Cully, Kendjelic, & Kunik, 2001)，若年より中高年に強く認められ

る(Webster, 1997)。

表 1-1 は決して、自伝的記憶の研究テーマを網羅したものではない。また研究方法の分類も、これ以外にあり得るだろう。しかし表 1-1 や「構造」「機能」の研究例で示したように、どのテーマについても、複数の研究方法からアプローチが可能なこと、逆に言えば、どのテーマについても、単一の方法に依存した研究では不十分なことが了解されるだろう。川口(2005)によると、メタ記憶研究のテーマである「喉まで出かかっている(tip of the tongue : TOT)」現象(Brown & McNeill, 1966)についても、記述的検討と実験的検討によるデータが収斂することで、メカニズムの解明へ進んでいるという。このように種々様々な研究方法を用いることは、次に論じるように、研究の妥当性という点からも必要なことと考えられる。

3 . 内的妥当性と外的妥当性

実験を行う際には、「統制」という問題を避けて通ることができない。この問題は Campbell によって、「内的妥当性(internal validity)」「外的妥当性(external validity)」として概念化された(Campbell, 1957; Campbell & Stanley, 1963)。実験的な処置が有意な効果を及ぼし、この効果が剰余変数では説明できない時に、研究は内的妥当性を有しているという。従って変数間の因果関係について確かな推論を下すためには、内的妥当性が備わっていなければならない。内的妥当性は条件統制の問題と密接に関連している。他方、外的妥当性とは、その研究で得られた結果をどのような集団や場面や条件にまで一般化できるかという問題である。日常記憶研究が強調する生態学的妥当性は、外的妥当性の一種であると言えよう。Campbell によるとこれら二つの妥当性の両立は困難なことが多く、内的妥当性を高めるための統制がしばしば外的妥当性を損なうという。内的妥当性を高めるために種々の条件を統制するとうことは、そこで得られた結果が統制された条件下でしか再現されないということになるからである。そしていずれか一方を選ぶのなら、内的妥当性の方が重要であると述べている。

内的妥当性を「その研究から得られた結論(解釈)のもっともらしさ」、外的妥当性を「その研究で得られた結論(解釈)の一般化可能性」と考えるなら、これら二つの妥当性は実験のみならず、準実験でも相関的研究や記述的研究でも

問題になる。こうした様々な手法を併用する日常記憶研究では、内的妥当性・外的妥当性をめぐって、どのような議論が展開されているのだろうか。

Banaji & Crowder(1994)も統制の重要性を強調しており、この点は Campbell と類似している。しかし彼らは、内的妥当性を高めることにより外的妥当性が低下するという考えには強く反対している。何らかの誤差によりその研究結果から確かな結論を引き出すことができない(内的妥当性が低下した)状況では、そこから得られた結論を一般化できるかという問題そのものが無意味になるからである。すなわち内的妥当性は外的妥当性の必要条件なのである。Banaji & Crowder (1994)は、実験社会心理学の人工性に疑問を感じた学生が、実際の会社をフィールドとして研究した例を紹介している。それによると様々な要因が存在して剰余変数の交絡が疑われ、結局解釈不可能な結果になってしまった。またフィールドとなった会社の特殊性ゆえに、同じ会社の他の支社にさえ一般化できるかどうか不明だったという。

Banaji & Crowder(1994)とは反対に Rubin(1989)は、統制よりも一般化可能性を重視している。Rubin によると研究には理論がいまだに発展していない段階と、理論が発展し対立仮説間の検証が求められる段階がある。そして日常記憶研究は残念ながら前者の段階にあり、まず頑健な現象を見出すこと、結果の不変性(regularity)を確立することが主要な目的である。研究が進展して後者の段階に至って、厳密な統制のもとでの仮説検証が目的になる。Rubin は不変性を見出すための研究方法上の三つの指針をあげている。第一は、参加者の学習経験やテストの文脈をあまり統制しないということである。それで不変性の高い結果が得られたら、その結果は広範な場面に一般化できることになる。第二は、データの中に潜んでいる不変性を掘り起こすために、様々な測度を用いて分析を行ってみるということである。そして第三は、検討を開始した時点では特定の理論や仮説にあまり強く依拠せず、結果を説明できる様々な理論を考えてみるということである。Rubin はこうした指針を適用した成功例として、TOT現象(Brown & McNeill, 1966)、散文の超長期記憶(Rubin, 1977)、自伝的記憶のバンプ現象(Rubin, Wetzler, & Nebes, 1986)などをあげている。

確かに日常記憶の研究テーマの中には統制が困難なものが少なくない。しかし Rubin も研究遂行上の統制を全く不要のものと考えているわけではない。あ

くまで「記憶研究における現在の理論的発展の状況を考えると、求められるのは不変性に他ならない。結果が繰り返し得られるために必要な水準を超えた統制は望ましくない」(Rubin, 1989, p.86, 下線筆者)のであり、決して結果の信頼性を損ないかねないような、杜撰な研究計画を推奨しているわけではない。さらに、日常記憶研究の中には既に理論的な検討の段階に至っているテーマもある。そうした研究においては厳密な統制が必要なことは言うまでもない。

4 . 自伝的記憶研究の妥当性

実験において内的妥当性を達成するには、剰余変数を統制することが必要不可欠である。実験室的記憶研究では、記銘材料の有意味度等が統制され、材料の等質性が保証された上で、研究者が操作した変数の影響が検討される。一方自伝的記憶研究では、記憶内容は研究者ではなく研究参加者の側にある。そのため例えば「椅子」という手がかり語に対して、ある人からは「小学校の木の椅子を思い出しました」、別の人からは「昨年、家族で旅行した時に、公園のベンチで休憩したことを思い出しました」と、鮮明度も具体性も大きく異なる回答が得られて、分析に苦慮するということが起きてしまう。

それでは、このような状況で内的妥当性を達成するには、どうすればよいだろうか。一つには、「徹底的に統制を追求する」という方向が考えられる。例えば想起を求める際に、「人生で経験した、一つの特定の出来事で、数時間を越えないもの(*a unique, specific event, from the person's own life, lasting no more than a few hours*)」(Wright & Nunn, 2000, p.481) という具合に、非常に厳しい制約を課すのである。あるいは「その出来事をこれまでどのくらい想起しましたか」と想起頻度を問い、これを制御変数として分析に組み込むのである(例：Conway, Anderson, Larsen, Donnelly, McDaniel, McClelland, & Rawles, 1994)。

しかし前者の場合では、得られた想起がこの基準を満たしているか否か確認するのは非常に困難である。*"unique, specific"* の基準は参加者によって異なるだろう。*"lasting no more than a few hours"* という判断は正しく行われるだろうか。報告内容はこの基準に合致していても、それは曖昧な想起内容を課題にあわせて精緻に記述し直した結果かもしれない。また後者の場合、想起頻度の正確さは想起内容の正確さ同様に判断が難しい。このように考えると、統制を徹

底的に追求するのは「労多くして益少なし」ということになりかねない。

そこで筆者は、外的妥当性の助けを借りることを提案したい。すなわち、ある研究から得られた結論が他の研究の結論と整合性が高ければ、それらの研究は「研究群」として妥当な知見を提供していると考えるのである。この場合、内的妥当性と外的妥当性を明確に区別していないため、大括りに「妥当性」と表現する方が適切だろう。あるいは様々な手法を用いた研究群からの証拠が収束して(convergent evidence)、自伝的記憶に関する妥当な(もっともらしさの高い)推論をもたらすという意味で、測定の妥当性になぞらえて、「収束的妥当性(convergent validity)」と呼べるかもしれない。もちろん筆者は、群としての妥当性が高まるなら、個々の研究は統制を放棄して構わないと主張しているのではない。最初から統制を放棄した杜撰な研究では、現象の再現可能性すらも危ういからである。再現性の高い頑健な現象が無ければ研究は進展しない。その一方で、あまりに厳密な統制を課すと、参加者の記憶をすくい上げることが困難になってしまう。このジレンマを解決する一つの方法が、収束的妥当性の追求である。

心理学の領域によっては、「現象の記述や相関的な研究を経て、実験的な研究に至ってはじめて、物事の因果関係が解き明かされ、モデルや理論が構築される」という枠組を考えることも可能であろう。しかし、統制の難しさや、実験に収まらないテーマも多いという自伝的記憶研究の事情を考えると、研究群としての収束的証拠を収集し、そこから自伝的記憶に関する妥当な結論を導くことが、研究を進める上での一つの現実的な方略ではないかと思われる。記述・相関分析・実験等、様々な手法からそれぞれにモデルや理論を構築し、それら一連の研究群から妥当な推論が得られた時、そこに自伝的記憶の全体像が浮かび上がるであろう。

第5節 本研究の目的と概要

ここではまず、本研究における自伝的記憶の定義を述べる。続いて本研究の目的と概要を示す。

1. 本研究での「自伝的記憶」の定義

本章第2節では、自伝的記憶の一般的な定義として、エピソード性を強調する定義、出来事のつながりを強調する定義、自己との関わりを強調する定義を紹介した。こうした定義に対して、本研究では以下のように考える。

実際の研究遂行上は、「1日以内の出来事」等と限定して、自伝的記憶の想起を研究参加者(以下、参加者)に求めることが多い(例：Wright & Nunn, 2000)。しかし自伝的記憶を定義する際には、「出来事」や「個人史」といったかたちで分析単位を限定することは、以下の理由から望ましくない。第一に、研究上は「特定の出来事」の想起を求めたとしても、人によってはきわめて抽象的・概括的な想起しかできないケースがある(overgeneral retrieval)。しかもそれは、参加者が実験手続きに従っていないという問題ではなく、抑うつ等の個人差と関連した理論的にも重要な問題なのである(Williams, 1996)。このように具体的に想起される記憶も、具体的には想起できない記憶も、自己と密接に結びついているのなら、いずれも自伝的記憶として扱うのが妥当だろう。第二に、個別の出来事の背景に何らかの目標やライフ・テーマが存在し、それが複数の記憶をつなげて構造化していることがある(Csikszentmihalyi & Beattie, 1979)。目標やテーマによって、記憶が自己と結びつくなら、こうしてつなぎ合わされた記憶もまた、自伝的記憶として扱うべきであろう。第三に、特定の出来事を思い出して語る際には、時間や空間を特定できない情報も、文脈情報として加わることがある。例えば「その前の学期まで、私とAさんは仲が良かったのに、2学期になって最初の日に喧嘩をしました」という想起では、具体的な出来事は「2学期最初の日の喧嘩」である。しかしこのエピソードが担う意味は、それ以前の文脈情報なしには理解しがたいであろう。また Levine, Svoboda, Hay, Wincour, & Moscovitch (2002)によると、高齢者は若年者に比べると出来事の細部情報の想起が少なく、特定の時間や空間と結びついていない情報(一般的な知識や長期間にわたる出来事)を多く想起するという。こうした情報は高齢者の自伝的記憶の特性を理解するための重要な鍵となる。

そこで本研究では、「出来事の記憶」「個人史の記憶」等、分析単位を限定することはせずに、「自伝的記憶」を「過去の自己に関わる情報の記憶」と定義する。その中には当然、感覚的・知覚的印象を伴って想起される特定のエピソード

ードが含まれる。これは従来のエピソード記憶と同じとみなして差し支えない。研究者の中には Nelson(1993)のように、「全てのエピソード記憶が自伝的記憶というわけではない。昨日の昼食はエピソード記憶であるが自伝的記憶ではない。昼食とは何かという一般的スキーマ以上に、私のライフストーリーにとっては意味がないからである。自伝的記憶は特定の、個人的で、長期間持続し、そして(通常は)自己システムにとって重要な意味を持つ」(Nelson, 1993, p.8)と考える者もいる。しかし、あるエピソードがライフストーリーにとって意味があるか否かを、研究者の側が決めることはできない。さらに本論文の研究6で明らかになるように、ある時点ではライフストーリーにとって重要とみなされたエピソードが、別の機会には他のエピソードに取って代わられるということも生じる。従って、エピソード記憶を重要度によって評価し、自伝的記憶とそれ以外の記憶に分ける必要はないだろう。

また本研究における自伝的記憶には、特定のエピソードだけでなく、「あの頃はよく～～した」というように、繰り返されたエピソードを要約するかたちの記憶や、「あの頃の私は内気だった」というように自己に関して抽象化された情報も含まれる。前者はエピソード記憶に比べると概括性が高いかたちで表象されている記憶である。後者はエピソードというよりは、自己知識の一部である。こうした概括性の高い記憶や自己知識も、個人史を構成する要素として重要な役割を果たすと考えられる。

さらに、想起された記憶の正誤も問題にしない。Marsh & Tversky (2004)は研究参加者に、「自分の経験を他者に話した」経験を記録させた。その中で、多くの経験は誇張されたり選択されたり何かが付加されたりしていたが、参加者たちは必ずしもこうした「歪み」を「不正確」として認識しているわけではなかった。記憶が原体験の正確な複写であることはあり得ない。歪みや選択があっても、本人がそれを自分の経験として想起するなら、自伝的記憶である。

2. 本研究の目的と概要

自伝的記憶の研究は過去 20 年間にわたって急速に、多方面へと拡大していった(Rubin, 1996)。それはこの記憶が、発達、パーソナリティ、感情、社会、コミュニケーション、文化など様々な研究と結びつく可能性を秘めたテーマで

あるからに他ならない。このように研究が広がっている中であって、自伝的記憶の中心的な問題として検討されなければならないテーマがある。それは自伝的記憶の「構造」と「機能」である。

「構造」とは本章・第4節で述べたように、膨大な自伝的記憶を人がどのようなかたちで貯蔵し、いかに検索しているのかという問題である。人間の記憶システムを解明する上で、意味記憶の構造が重要であったように、自伝的記憶の構造もきわめて重要なテーマである。構造は自伝的記憶研究の比較的初期から検討されていたが、近年"event cueing"と呼ばれる方法が開発され、新たな研究段階を迎えている(Brown, 2005)。本論文の研究1と研究2では event cueing 法を用いて、想起された出来事間の内容的関連性や時間的関連性を詳細に検討することを通して、自伝的記憶がいかなる原理に従って構造化されているのかを明らかにする。

「機能」は比較的最近になって関心が高まっているテーマである。自伝的記憶はいったい何の役に立っているのだろうか。あるいは、何のためにわれわれは膨大な自伝的記憶を貯蔵しているのだろうか。研究3では、小学校から高校までで経験した教師との関わりをめぐる記憶を取り上げ、職業選択との関連を検討する。そして自伝的記憶が長期にわたって人を動機づけたり判断を方向づける機能を担っていることを明らかにする。研究4では、重要な機能を担う記憶が独自の想起過程を伴うことを、記憶特性質問紙を用いた評定から検討する。この検討を通して、もとの出来事ではなく、その出来事の記憶が機能を果たしていることを指摘する。さらに研究5では、われわれが過去の経験を現在の自己と結びつけて認識する過程について検討を加える。具体的には、過去の重要な出来事と現在の自己とを結びつける認識が、教員や大学生といった参加者の立場に伴い変化することを検討する。

また、自伝的記憶の構造も機能も、加齢に伴って変化することが考えられる。そこで本研究の研究6では、青年期の参加者と中年期の参加者に自伝的記憶の想起を繰り返し求め、どの程度安定した想起が行われるのかという視点から、加齢に伴う構造の変化を検討する。さらにここで見出された構造上の変化(加齢に伴う記憶表象の安定化)が、機能的にはいかなる意味を有しているのか考察する。

ところで表 1-1 に示したように，自伝的記憶研究は様々な方法を折衷的に用いており，そのことが研究の収束的妥当性にもつながっている。本研究においても，単一の研究パラダイムに依拠するのではなく，下にあげる様々な方法を用いて，自伝的記憶の構造と機能に接近する。

- 研究 1 検索手がかりの種類を操作する実験的研究
- 研究 2 検索手がかりの種類を操作する実験的研究
- 研究 3 想起内容の分析に基づく記述的研究
参加者のタイプ(教職志望の強さ)を操作する実験的研究
- 研究 4 出来事の重要度を操作した実験的研究
加齢(時間経過)の影響を検討する相関的研究
- 研究 5 想起内容の分析に基づく記述的研究
参加者のタイプ(社会的な立場)を操作する実験的研究
- 研究 6 加齢の影響を検討する相関的研究
想起時期を操作した実験的研究

第2章 自伝的記憶の構造 ^{*2}

自伝的記憶は情報のランダムな集積ではない。それではどのような原理に従って構造化されているのであろうか。実は、自伝的記憶の構造を検討した研究は、必ずしも多くない。この問題は当初、後述する「活動優位説 (activity dominance hypothesis)」をめぐる検討されたが、そこでの検討が途中で行き詰まったことも、研究が少ない一因かもしれない。

自伝的記憶の構造は、「インデックス (indexing)」と「系列 (sequencing)」という二つの問題に分けて検討されている (Taylor & Tversky, 1997)。前者(インデックス)は、ある出来事の記憶の中でどのような情報が、その記憶を検索するためのインデックスとしての役割を果たしているのかという問題である。例えば「1985年の夏に私は初めて、N大で開催された学会で研究発表を行った」という記憶を考えてみよう。この記憶を引き出すには、「1985年の夏」という手がかりが有効なのであろうか。それとも「学会発表」という手がかりの方が有効なのだろうか。この問題を明らかにするには、様々な検索手がかりを呈示して自伝的記憶の想起を求め、検索潜時等を検討するという方法が用いられる。一方後者(系列)は、複数の記憶がどういう原理に従ってつながっているのかという問題である。自伝的記憶は時間軸に沿って、古いものから新しいものへと並んでいるのだろうか。それとも何らかの内容やテーマを共有する記憶がまとまって、クラスタを形成しているのであろうか。この点を明らかにするには複数の出来事の想起を求めて、引き出された記憶相互の関連を検討するという方法が用いられる。

本章ではまず、「インデックス」「系列」という二つの視点から、自伝的記憶の構造に関してこれまで明らかにされてきた事柄を概観する。続いて event cueing 法と呼ばれる手法を用いて、自伝的記憶の構造を検討する。その結果から、数年程度の幅を持つ lifetime period が、自伝的記憶の構造に大きな役割を

^{*2} 第2章、第1節と第2節の内容は佐藤(2002a, 2002c)をもとに、第3節の内容は Sato (2002)をもとに、第4節の内容は佐藤(2006b)をもとに、それぞれ加筆修正を行った。

果たしていることを指摘する。

第1節 自伝的記憶のインデックス

1. 活動優位説

自伝的記憶の構造を探る一つの方法は、種々の手がかりを呈示して記憶の検索を求め潜時を測定するというものである。手がかりがインデックスと合致していれば、それだけ検索が促進されると予測されることから、こうして測定された潜時は自伝的記憶のインデックスの特徴を明らかにするものと考えられる。これまでの研究では Reiser, Black, & Abelson (1985)の「活動優位説」をめぐって検討が行われてきた。

Reiser et al. (1985)は「活動 (activity)」と「一般的行為 (general action)」という2タイプの手がかりを参加者に呈示し、手がかりと合致する特定の経験を想起するよう求めた。「活動」とは「図書館に行く」「レストランで食事をする」などのプロトタイプの行動系列であり、「一般的行為」とは「予約をする」「席に着く」など活動の構成要素となる行動を表している。Reiserらは、最初に「活動」を手がかりとして呈示し次に「行為」を呈示する方が、「行為」を先に呈示して次に「活動」を呈示するよりも、自伝的記憶を想起するまでの潜時が短いことを見出した。また「活動」と「行為」を単独で呈示する条件を比較したところ「活動」の方が潜時が短かった。さらに「行為」だけでなく「行為と活動」を手がかりとして同時に呈示することで、潜時が短縮された。

Roschらは意味記憶内の自然カテゴリーには抽象化のレベルによって、下位水準(例：台所用テーブル) - 基礎水準(例：テーブル) - 上位水準(例：家具)という3つの階層が存在すると考えた。このうち基礎水準は日常生活で最も利用されやすい、最適の水準とされている(Rosch, Mervis, Gray, Johnson, & Boyes-Braem, 1976)。Reiser et al.(1985)は上記の結果から、意味記憶に基礎水準があるのと同様、出来事の記憶にも基礎水準が存在すると考えた。そして人が出来事を符号化し記憶にとどめる際には、「活動」が基礎水準として機能していると主張した。個々の出来事はある「活動」の1事例として記憶され、「活

動」が記憶のインデックスとなる。そのため自伝的記憶を想起する時には「活動」が最も有効な検索手がかりとなる。これよりも抽象的な手がかりが与えられたなら、記憶を検索するためにさらに文脈を特定しなければならない。またあまりに特定性の高い手がかりが与えられたら、それに合致する記憶を検索するにはかなり精緻な探索が求められることになる。

2. 活動優位説に対する反証

Reiser et al.(1985)の議論には二つの主張が含まれていた。一つは自伝的記憶を構成する情報に抽象化の水準が存在し、「活動」が最適の水準であるという主張である。もう一つは「活動」が自伝的記憶のインデックスになっているという主張である。人の情報処理において抽象化の最適水準が存在するというのは魅力的な仮説である。しかしその後の研究ではこの第一の点が論じられることはなく、もっぱら第二の点を中心に検討が加えられた。そしてその限りにおいては、活動優位説を支持する結果は得られていない。

Reiser et al.(1985)は「活動」と「行為」という二つの手がかりの効果を比較したに過ぎない。Barsalou (1988)は「活動(例：テレビを見る)」「人(例：母親)」「場所(例：カフェテリア)」「時間(例：午後)」という4種類の手がかりのうち2つを組み合わせで呈示して、自伝的記憶の想起を求めた。Reiser et al.(1985)と同様に2つの手がかりの呈示順序が操作されたが、どの組み合わせでも手がかりの順序は検索潜時に影響しなかった。例えば「活動」に続いて「人」手がかりを呈示しても、あるいは反対に「人」に続いて「活動」手がかりを呈示しても、そこから自伝的記憶を検索するのにかかる潜時には差が無かった。このように「活動」を含む組み合わせで呈示順序の効果が見られなかったことは、活動優位説に反する結果である。

Barsalou(1988)はまた、実験者が作成した手がかりではなく、参加者自身に「この夏休み中にした活動」「何かを一緒にした人」「何かをした場所」「何か起きた時間」を答えさせた。そしてその1-2週間後に参加者が先に答えた内容を手がかりとして呈示し、その手がかりを含む出来事を60秒間でできるだけ多く想起するよう求めた。その結果、検索潜時のみならず、参加者が生成した手がかりや想起された出来事の数についても、「活動」の優位性は認められ

なかった。このように Barsalou の一連の研究からは、人や場所や時間もインデックスとして、活動と同程度に利用され得ることが示されている。

以上は反応潜時を指標とした研究であるが、それとは異なるパラダイムを用いた研究でも、活動優位説に反する結果が得られている。Berntsen (1996, 1998) は、思い出そうという意図が無いにもかかわらず想起される記憶(不随意記憶, involuntary memory)を、日誌法を用いて収集した。不随意記憶は決して珍しいことではなく、一日に 5-6 回経験する参加者も少なくなかった。想起された出来事と想起した状況の共通点を検討したところ、「物」「活動」あるいは「人」が共通であるケースの多いことが示された。また、収集された全 700 のケースのうち 32%では、想起された出来事とその時の状況の共通点が一つだけではなく、「人と場所」などのように複数の共通点が指摘されていた。このことは一つの記憶に複数のインデックスが付与されていることを示唆している。

このように、Reiser et al.(1985)と同様のパラダイムを用いた研究でも、またより自然な状況に近い場面での検討からも、「活動」のみが自伝的記憶のインデックスになっているという結論は得られなかった。「活動」「人」「場所」など様々な情報が自伝的記憶のインデックスとして、等価に機能していることが示されたのである。

3 . 時間情報の役割

これまでの検討で様々なインデックスが存在することが示唆された。しかし一方、インデックスとしての有効性が低いことが指摘されている情報もある。それは厳密な時間情報である。Wagenaar(1986)は 6 年間にわたって毎日一つないし二つの出来事について、「誰」「何」「どこ」「いつ」「その他の詳細」に分けた記録を残した。そしてテストでは一部の情報が手がかりとして呈示され、残りの情報が検索できるか否か検討された。その結果、「何」(例:「最後の晩餐」を見に行った)が手がかりとして最も有効であり、一方「いつ」(例:1983年9月10日、日曜日)は最も効果が小さいことが示された。ここで用いられた時間情報はきわめて示差性が高く、その意味では検索手がかりとして有効であっても不思議ではない。にもかかわらず効果が低かったことから、インデックスとしてはそれよりも幅のある時間情報が用いられると推測される。先に紹介

した Barsalou(1988)の研究で、時間情報が「午後」というようなきわめて一般的な表現になっており、手がかりとしての有効性が「人」や「活動」など他の情報と差が無かったことは、この点と合致している。日付まで特定した時間情報は、自伝的記憶のインデックスとして最適の水準ではないと言えるだろう。

幅のある時間情報がインデックスとして機能していることは、プライミング手続きを用いた Conway & Bekerian(1987)や Dijkstra & Kaup (2005)によっても指摘されている。Conway & Bekerian (1987)は第1刺激(プライム)に続いて第2刺激(手がかり語)を呈示し、第2刺激から過去の出来事が想起されたら反応キーを押すよう参加者に求めた。プライムの有無を操作したところ、プライムとして幅のある時期を示す語(例：大学時代)を呈示し、手がかり語として参加者がその時期に経験した出来事(例：イタリア旅行)を呈示した場合に、プライミング効果が見られた。「時期」に続いて「出来事」が呈示された条件では「出来事」のみが呈示された条件に比較して、自伝的記憶の検索潜時が有意に短くなったのである。一方、活動(例：図書館に行く)や意味カテゴリー(例：スポーツ)をプライムとして用いた条件では、プライミング効果は認められなかった。Dijkstra & Kaup (2005)もまた、幅のある時間情報を想起文脈として呈示することにより、特定の出来事の想起が促進されることを見出した。

こうした結果から Conway は、自伝的記憶の階層構造モデルを提唱した(Conway, 1992, 1996a, 1996b; Conway & Pleydell-Pearce, 2000; 図 2-1 参照)。このモデルでは特定性の異なる3水準の階層を想定している。最上位に位置するのは、「Aで働いていた時」「Xと同居していた時」のように、本人にとって重要な他者や活動や場所に関わる時間情報(人生の時期：lifetime periods)である。lifetime period は数年程度の幅を有している。またその中にはさらに、「対人関係」「仕事」といった内容(テーマ)に従って、構造化されている。その下の階層は、出来事に関する一般的な知識(一般的な出来事：general events)である。これは数日～数ヶ月の幅で認識される出来事である。ここには「夕方によく散歩した」のように繰り返された出来事だけでなく、「自動車の運転教習」「パリへの旅行」のように特定性の高い出来事も含まれる。(従って「一般的」という表現は誤解を招くおそれがある。あくまで次の「出来事の細部」に比べると一般性が高いという意味である)。さらにその下に、出来事の細部(event specific

knowledge)が位置している。これは個々の経験における知覚印象までも含む細部の情報であり、数秒～数時間の幅で認識される。このモデルでは、手がかりが呈示されると「人生の時期」から「一般的な出来事」や「出来事の細部」へと検索が絞り込まれ、課題に合致した想起が可能になるまで検索が行われると仮定している。図 2-2 は、これら 3つの階層構造で表象されている、特定性の異なる情報の例を示している。



図2-1 自伝的記憶の階層構造モデル (Conway, 1996a)

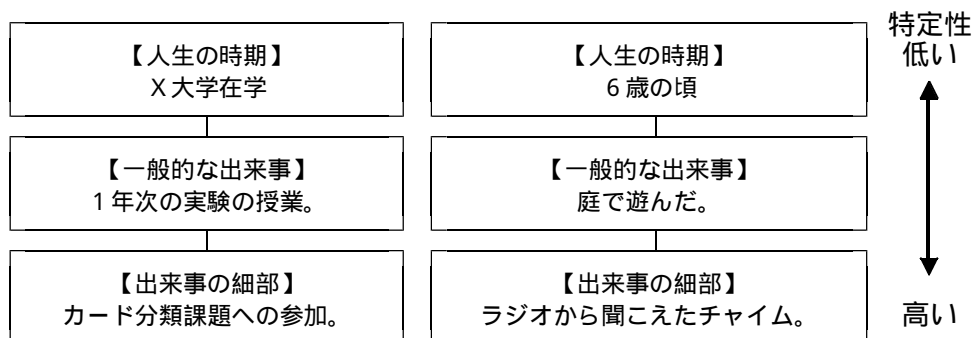


図2-2 階層構造に表象されている情報の例
(Conway, 2005; Conway & Pleydell-Pearce, 2000 より作成)

4. まとめ

以上のように、検索手がかりの効果を検討した研究では、活動優位説を支持する結果は得られていない。一連の研究は、種々の検索手がかりがほぼ同じ有効性を有していることを示していた。このことは、それぞれの自伝的記憶には「活動」「人」「物」「場所」「時期」など複数のインデックスがつけられており、状況に応じて必要とされる記憶を柔軟に検索できることを示唆している。

もちろん、全ての自伝的記憶において、これら様々なインデックスが同じ重みで機能していると考えerることには無理がある。ある記憶では「人」が最も示差的なインデックスとして機能し、他の情報は副次的なインデックスにとどまるということもあるだろう。あるいは「場所」が最も有効なインデックスとなっている出来事もあるだろう。Fitzgerald(1980, 1981)は検索潜時を指標として、中学生では名詞も動詞も感情語も自伝的記憶の検索手がかりとしての有効性に差が無いが、大学生になると感情語からの検索潜時が長くなることを見出した。大学生を対象とした Haque & Conway (2001)や Robinson(1976)の実験でも、感情語は名詞や動詞に比較すると、自伝的記憶の検索手がかりとして有効性が低いことを見出している。発達に伴って情報処理様式が変化し、自伝的記憶のインデックスも変化するのかもしれない。人が日々の出来事を様々な視点で符号化していると考えerなら、その結果として、自伝的記憶のインデックスも多様で柔軟な仕組みになっていると言えるだろう。これまでの研究ではこうした様々な記憶を全てひとまとめに検討した結果、個々の記憶に特異なインデックスの有効性が均されて、特定の情報の優位性が認められなかったのではなかろうか。

第2節 自伝的記憶の系列

日常生活では、ある記憶が別の記憶を引き出したり、会話の中で一連の出来事が次々と想起されるということも多い。それでは記憶相互はいかなる原理に従って結びつけられているのであろうか。複数の自伝的記憶がどのような関連でつながっているかという問題は、「インデックス」に対して「系列」と呼ば

れる。その最小単位は二つの記憶の間のつながりであるが、これがさらに積み重なることで、ライフストーリーが構築されると考えられる (Bluck & Habermas, 2000)。その意味で系列は、自伝的記憶の構造と同時に機能にも関連する重要な問題である。

1. 群化と方向転換

自伝的記憶の系列構造を探る上で示唆的な知見が、人工的な材料を用いた偶発記憶の実験から得られている。Lancaster & Barsalou (1997)は、36の出来事を示す刺激文を作成した。出来事としては「デブラ・ウィンガーがハワイで復員軍人の日にボートを買った(下線筆者、以下同様)」「アラン・アルダがダラスで母の日にボートを買った」など「活動」を共有するものや、「バーバラ・ウォルターズがメキシコで7月4日にボートを買った」「バーバラ・ウォルターズがフランスでイースターの日曜日に賞を授与した」など「人」を共有するもの、あるいは「場所」を共有するものや「時間」を共有するものが作成された。また「ドリー・パートンがエイプリル・フールの日ダラスで泳いだ」「ドリー・パートンが3月の始めにイタリアで泳いだ」など、二つの要素を共有する出来事も作成された。これらの出来事は7秒間ずつ呈示され、参加者はその出来事をイメージし、イメージのしやすさを評定するよう求められた。そして36の出来事が呈示された後で、偶発再生が求められた。

参加者の偶発再生を検討したところ、特に「人」と「活動」を共有する刺激文で多くの群化が認められた。ただし「人」と「活動」では群化をもたらす効果に違いは認められなかった。またそれらよりは少ないが、「時間」や「場所」による群化も生じることが見出された。従って「人」や「活動」が出来事の記憶をつなげる軸として重要な役割を果たし、時間や場所も副次的に利用されていると言える。

また再生の途中で、下記のように群化のパターンが変化することが見出された。

1. 「カール・セーガンが洗濯物を乾かした」
2. 「マーガレット・サッチャーが洗濯物を乾かした」
3. 「マーガレット・サッチャーが絵を描いた」
4. 「マーガレット・サッチャーが木を植えた」 (下線筆者)

ここでは「活動」による群化から「人」による群化へと、群化が変化している。こうした変化は「方向転換(pivoting)」と名づけられた。Lancaster & Barsalou (1997)が再生を検討したところ、活動から人、人から活動、人から場所など、多様な方向転換が見出された。

こうした方向転換は Lancaster らが用いたような人工的な材料だけではなく、自伝的記憶の想起でもしばしば認められる。Barsalou(1988)は大学生に夏期休暇中の出来事の想起を求め、想起の中に方向転換が生じることを指摘している。例えば友人のことを続けて想起していた参加者が、友人との水泳を想起したことをきっかけに、今度は水泳の記憶を続けて想起した。複数の記憶をつなぐ系列構造の原理として「人」だけが有効に働いているのだとすると、こうした方向転換は認められないはずである。方向転換が生じるということは、出来事の記憶が複数の軸によって多次的に構造化されていることを示唆している。

2 . event cueing法による検討

近年 Brown らは手がかり語法に基づいて、自伝的記憶の系列構造を検討する新たなパラダイムを開発した。この手法は event cueing 法と名づけられた (Brown & Schopflocher, 1998a, 1998b)。

自伝的記憶の系列構造を規定する軸は、「人」や「活動」など明示的なものだけではない。例えば「子どもが死んだ」「そして母は家に閉じこもった」という二つの出来事は、人も活動も共有していない。しかしその間に因果関連を認めることは難しくあるまい。多くの研究者が自伝的記憶は個々の出来事が因果関係や主題によって結びつけられた、物語的な構造をなしていると考えている (Barclay, 1996; Bruner, 1987; Gergen & Gergen, 1988; Robinson, 1992; Robinson & Taylor, 1998)。ところで参加者にこれまでの人生を振り返って一連の出来事を語ってもらった場合 (Bruner & Feldman, 1996; Hirst & Manier, 1996)、仮にそこに物語的な構造が現れたとしても、それが自伝的記憶の構造を反映しているのか、あるいは「ライフストーリーを語る」という課題要求によるものなのかはわからない。

event cueing 法では最初に手がかり語を呈示したり、あるいは人生を振り返ったりして、いくつかの自伝的記憶を想起するよう参加者に求める。そして次

にこうして想起された出来事をランダムな順序で呈示して、それと関連する別の出来事の想起を求める。こうして、手がかりとなった出来事(cueing-event)とそこから想起された出来事(cued-event)の対が多数収集される。そして収集された cueing-event - cued-event の対について参加者自身が、(a)同じ人が含まれているか、(b)同じ活動(activity)が含まれているか、(c)同じ場所で起きた出来事か、(d)一方が他方の原因か、(e)一方が他方を含んでいるか、(f)二つともより大きな出来事の一部であるかを判定する。最後に cueing-event と cued-event がランダムな順序で再呈示され、参加者は全ての出来事について日付や重要度を評定する。

Brown らは内容的・因果的に関連した出来事をまとめて表象している、物語的な記憶構造の存在を考え、「出来事クラスタ(event cluster)」と名づけた。そして event cueing 法によって収集された cueing-event と cued-event の対について、一方の出来事が他方の原因となっている場合、一方が他方を含んでいる場合、両者がさらに大きな出来事の一部である場合(すなわち、上記の判定基準で d ~ f に該当する場合)に、これら二つの出来事が「同じ出来事クラスタに属している」と判定した。Brown & Schopflocher(1998a)は 150 人の参加者から 14 個ずつの cueing-event を引き出し、それらを手がかりに 14 個の cued-event の想起を求めた。最初の 2 試行は練習とし、さらに概括性の高い記述は省かれたが、1,500 以上の cueing-event - cued-event 対が分析された。その結果、二つの出来事が同じ出来事クラスタに属するケースが全体の 77%で見出され、かつそのうちの 68%では二つの出来事が因果関係にあることがわかった。Brown (2005)の実験 2 では、cued-event の想起に先立って「cueing-event と同じストーリーに属する出来事」を想起するよう教示を与えられる条件が設けられた。この条件では通常の「cueing-event と関連して最初に頭に浮かんだ出来事」を想起するよう求める条件に比べると cued-event の検索潜時が短かった。また cueing-event と cued-event が出来事クラスタを構成する率も、通常の方法で想起する条件より高かった(68%に対して 93%)。このことから Brown (2005)は、通常の event cueing 法では、自伝的記憶内で出来事クラスタが構成されている程度が過小評価されているのではないかと論じている。

また同じ出来事クラスタに属する出来事の対はそうでない対に比較すると、

時間的に接近し、人や場所や活動を共有する率が高く、cued-event の検索潜時
も有意に短かった(Brown, 2005; Brown & Schopflocher, 1998a)。Wright & Nunn
(2000)も、同じ出来事クラスタに属する出来事は明瞭度、重要度、感情価、感
情強度においても互いに類似していると指摘している。

ただし二つの出来事が出来事クラスタを形成する率は、cueing-event の古さ
や重要度によっても変化する。Brown(2005)は cueing-event として最近 1 週間
の出来事(先週条件)、1-5 年前の出来事(近過去条件)、4-12 歳の出来事(遠過
去条件)の 3 条件を設定した。その結果、遠過去条件(54%)より先週条件(69%)
の方が、クラスタ率が高かった。また cueing-event の重要度を操作した Brown
& Schopflocher (1998b)は、重要度の高い条件(82%)が低い条件(72%)よりもク
ラスタ率が高いことを見出した。

このように条件によって結果には差異が認められるが、Brown らはそれ以上
に、cueing-event と cued-event の対が非常に高い率で出来事クラスタを形成し
ていることに着目している。人は日常生活でしばしば、目標志向的な活動を営
み、行為を計画したり実行したり反省したりしている。Brown らはこうした活
動の副産物として、複数の出来事がクラスタを形成するのではないかと指摘し
た。そこでは複数の出来事が、一つの物語の中の隣接するエピソードのように
時間的に接近し文脈情報を共有し、そして因果連関をなしているのである。

3. まとめ

自伝的記憶はインデックスと系列という二つの問題として検討されてきた。
研究パラダイムが異なっていることから、本章ではこれら二つを個別に論じた。
しかし、ある記憶を想起すると、次はそれとインデックスを共有する別の記憶
が想起されると考えるなら、「インデックス」と「系列」は同じ問題である
とも言える。ただし因果関係などはあくまで二つの出来事の間で成立するもので
あり、個別の出来事に「原因」「結果」というインデックスがついているわけ
ではない。

自伝的記憶の構造については現在までのところ研究が不足しており、明確な
結論が得られていないというのが実状である。おそらく間違いないのは、自伝
的記憶の構造について単一の原理を求める試みは失敗したということである。

インデックスを検討した研究は活動優位説から出発したが、活動だけでなく人や場所なども同様にインデックスとして機能することが見出された。系列を検討した研究からも、人や活動によって記憶が群化され、それらを軸として想起の方向転換が生じることが見出された。event-cueing 法を用いた研究は出来事クラスタという原理の優位性を示しているように見えるが、同じクラスタに含まれる出来事は、活動関係にある他、活動や人を共有する率も高く、そこには複数の構造化原理が含まれている。従って、記憶には複数のインデックスがつけられており、記憶相互は複数の軸に従って多次元的に構造化されていると考えられるべきだろう。この多次元性は出来事を経験し符号化する際の、処理の多様性に起因すると思われる。また自伝的記憶が様々な機能を果たすためには、このように多次元的で柔軟な構造になっていることが必要なのであろう。

第3節 研究1 event cueing 法による検討 - (1)

1. 目的

本研究では event cueing 法を用いた二つの実験によって、自伝的記憶の構造を検討する。その前に event cueing 法の長所と短所を整理しておく。event cueing 法を用いた Brown らの研究では参加者に、「ライフストーリーを語る」という課題が与えられたわけではない。それにもかかわらず、二つの出来事が因果等で結びつく出来事クラスタが多く見出された。すなわち、「語る」という課題要求が交絡しない状況で、自伝的記憶が物語的な構造をなしていることを明らかにしたと言える。また出来事クラスタを構成しているか否かにかかわらず、cueing-event と cued-event の関係を分析することで、自伝的記憶の構造を検討することができる。例えば Brown & Schopflocher (1998a)によると、cueing-event と cued-event が「人」を共有する率は 49%、「活動」を共有する率は 39%、「場所」を共有する率は 52%であり、自伝的記憶は人・活動・場所そして因果など複数の軸に従って構造化され、つなげられていることが示唆される。

一方、event cueing 法には手続き上の問題点もある。第一に、この方法では参加者が二つの出来事について「一方が他方の原因となっている」「一方が他

方を含んでいる」「両者がさらに大きな出来事の一部である」と評価した場合に、出来事クラスタが形成されていると判断される。このように曖昧な基準を用いることで、クラスタ率が過大評価されている可能性がある。第二は参加者の負担である。個々の研究によって異なるが、Brownらの実験では概ね1.5～2時間を要することが多い。

本研究では出来事クラスタの検討に主眼を置くのではなく、cueing-event と cued-event がいかなる原理に従って結びついているかを分析し、そこから自伝的記憶の構造について考察を加える。まず研究1では cueing-event と cued-event の間の時間的な関連を検討する。event cueing 法を用いたこれまでの研究では、cueing-event と cued-event の時間的な関係は、副次的に分析されていたに過ぎない。しかしながら時間的な構造は、Conway の階層構造モデル(図 2-1 参照)にも示されるように、自伝的記憶相互を結びつけて一貫性を与える一つの重要な原理である(Conway & Bekerian, 1987; Conway & Pleydell-Pearce, 2000)。本章・第1節でも検討したように、lifetime period と呼ばれるある程度幅のある時間情報(例：A社で仕事をしていた時期)は、個別の自伝的記憶を引き出す手がかりとして有効に機能する。出来事クラスタを構成する出来事は時間的に接近しているという知見(Brown & Schopflocher, 1998a)からも、cueing-event と同じ lifetime period に属する cued-event が想起されやすいことが予想される。研究1ではまた、cueing-event と cued-event の内容面・感情面のつながりについても分析を加え、時間経過に伴って cueing-event と cued-event の内容面・感情面でのつながりがどう変化するのかを検討する。

2. 標準的な方法との相違点

以上の検討と目的を踏まえ、研究1では、いくつかの点で標準的な event cueing 法とは異なる方法を用いる。第一に、標準的な手法よりも簡便な手法を用いて参加者の負担を軽減する。研究1では、手がかり語から自伝的記憶の想起を求め、それを cueing-event として、連想される出来事を想起させる(cued-event)。そしてこうして想起された出来事を cueing-event として、次の出来事の想起を求めるのである。すなわちこの方法では想起された出来事は、先行する出来事から引き出された cued-event であると同時に、次の出来事を引

き出す cueing-event として用いられる。

第二に、標準的な手法では cueing-event と cued-event の関係について、「一方が他方の一部になっているか」「二つとも、さらに大きな出来事の一部であるか」という判断を求めている。しかし参加者によって基準が大きく異なり曖昧であることから、この判断を本実験では求めない。

第三に、先行研究から、特に制限を課さなければ、参加者は最近の出来事を想起する傾向があることが示されている (Brown & Schopflocher, 1998a, 1998b)。そうすると人生全体にわたる自伝的記憶の構造を検討するのは困難になる。そこで本研究では、lifetime period を示す手がかり語(例：小学校 1-3 年)を最初に呈示することで、cueing-event として遠い過去の出来事も収集できるようにする。

最後に、event cueing 法を用いた先行研究では、出来事の感情面の関連はほとんど検討されていない。しかし記憶研究においては、気分と一致した出来事が想起されやすいという、気分一致効果(Bower, Gilligan, & Monteiro, 1981)の存在が知られている。また、社会的な状況がどのように表象されているかを検討した研究からは、感情が状況を分類する一つの基準として機能しているという知見が得られている (Bower & Forgas, 2001)。Forgas (1976)はクラスタ分析を用いて、様々な社会的状況が「その状況で感じる親密さ」「その状況でどう振る舞うかわかっているか」「快 - 不快」という 3 次元上に表現されることを見出した。例えば「結婚披露宴への出席」「実験に参加すること」「論文指導を受けること」が類似の状況として表象されており、Forgas は「フォーマルで、ややストレスフル」という感情面・評価面での類似性が、一見異質な場面をまとめていると論じている。従って感情や気分は、気分一致効果によって記憶の想起に影響を及ぼすだけでなく、自伝的記憶を構造化する原理として機能している可能性が示唆される。そこで本研究では、個々の出来事にまつわる感情についても回答を求め、cueing-event と cued-event 間の感情的な関連も検討する。

3 . 方法

(1) 参加者

大学生 37 名(男性 9 名, 女性 28 名, 平均年齢 20.1 歳)であった。

(2) 手続き

実験は授業時間を利用して集団で実施された。参加者には A4 版の回答用紙が配布された。回答用紙の冒頭には手がかり語として、「小学校 1-3 年」「中学校 1-3 年」「最近 1 年間」という 3 つの時期のうち一つが印刷されており、その下に自伝的記憶を記入する 10 個の欄が設けられていた。参加者は冒頭に示された時期に自分が経験した出来事を思い出して、回答欄 1 に記入するよう求められた。その後、その出来事から最初に連想される別の経験を回答欄 2 に記入し、さらに 2 番目の出来事から連想される経験を回答欄 3 に記入するよう求められた。以下同じ要領で、全部で 10 の自伝的記憶を想起し記述するよう求められた。すなわちこの手法では想起された出来事は、先行する出来事から引き出された cued-event であると同時に、次の出来事を引き出す cueing-event にもなっている。2 番目以降の出来事については、最初に指定された時期に限定されないことが指示された。なお最初に「小学校 1-3 年」の出来事を想起した参加者は 12 名、「中学校 1-3 年」は 14 名、「最近 1 年間」は 11 名であった。

10 の自伝的記憶が記述された後で参加者は別紙を渡され、その出来事を経験した時期と、その出来事にまつわる感情を回答した。時期については何歳あるいは何年生の何月かを回答した。感情は「非常に不快」「不快」「快」「非常に快」「快と不快が入り交じっていた」「快でも不快でもない」から一つを選択した。さらに n 番目の出来事(cueing-event)と n+1 番目の出来事(cued-event)との関連について回答した。参加者一人は 10 の出来事を想起しているので、出来事 1 と 2、2 と 3 等々、全部で 9 つの cueing-event - cued-event 対について、関連性を回答することが求められた。参加者は、(1)二つの出来事が同じ人物を含んでいるか、(2)同じ場所で経験した出来事か、(3)同じ行為や活動を含んでいるか、(4)一方が他方の原因になっているか、(5)その他の理由でつながっているか、諾否法で回答した。(1)~(3)については、具体的に「誰」「どこ」「どのような行為・活動」が含まれているのか記述を求めた。(4)については「どちらの出来事が原因になっているのか」、(5)についてはどのようなつながりか、記述を求めた。

4．結果

一人の参加者から，cueing-event と cued-event の対が 9 対，全体では 333 対が収集された。時期が曖昧であったり，複数の時期にまたがる概括的な記述を除いて，合計 317 の cueing-event - cued-event 対(想起された出来事対の 95.2%)が分析対象となった。

(1) cueing-event と cued-event の時間的な関係

cueing-event と cued-event の間の時間関係を検討するために，出来事を経験した時期を，時期 1(小学校入学前)，時期 2(小学校 1-3 年)，時期 3(小学校 4-6 年)，時期 4(中学校)，時期 5(高等学校)，時期 6(高校卒業後)の 6 つに大別した。317 の cueing-event - cued-event 対の時間関係を整理した結果を表 2-1 に示す。この表は例えば，cueing-event と cued-event の両方とも時期 1 に属していたものが 5 対，cueing-event が時期 1 で，cued-event が時期 2 だったものが 3 対あったことを示している。収集された 317 対のうち，228 対は cueing-event と cued-event が同じ時期，89 対は異なる時期であり，差は有意であった($\chi^2(1) = 60.95, p < .001$)。すなわち，参加者は cueing-event と同じ時期に経験した出来事を，cued-event として想起する傾向が強かったと言える。(なお，以下で cueing-event と cued-event が「同じ時期に属する」という場合は，上記の要領で大別した時期が一致していることを意味する)。

また，cueing-event と cued-event の間の時間間隔を検討した。それぞれの出来事を経験した時点での年齢あるいは学年が曖昧なケース(例：「中学」とのみ

表2-1 cueing-event と cued-event の時間関係

cueing-event の時期	cued event の時期						cueing-event と cued-event の時間関係	
	1	2	3	4	5	6	同じ時期	異なる時期
時期 1: 小学校入学前	5	3	0	0	1	0	5	4
時期 2: 小学校 1-3 年	1	18	4	3	3	4	18	15
時期 3: 小学校 4-6 年	1	2	10	3	2	3	10	11
時期 4: 中学校	1	0	2	44	12	7	44	22
時期 5: 高等学校	0	0	1	4	40	14	40	19
時期 6: 高校卒業後	2	0	4	6	6	111	111	18
計							228	89

数値は該当する cueing-event - cued-event の対の数。

回答し学年が不明なケース)を除いて, cueing-event と cued-event の間の時間間隔(年数の絶対値)を求めた。その結果を表 2-2 に示す。二つの出来事が同じ時期に属している場合には, 時間間隔の平均は 1 年未満であることが多かった。すなわち参加者は, cueing-event と同じ時期に属し, その中でも時間的に接近した出来事を cued-event として想起する傾向が強かったのである。

表2-2 cueing-eventとcued-eventの時間間隔(年)

cueing-eventの時期	cueing-eventとcued-eventの時間関係					
	同じ時期			異なる時期		
	平均	SD	n	平均	SD	n
時期1:小学校入学前	0.40	(0.55)	5	6.13	(4.59)	4
時期2:小学校1-3年	0.67	(0.84)	18	6.31	(4.33)	13
時期3:小学校4-6年	0.75	(0.86)	10	5.41	(3.09)	11
時期4:中学校	0.25	(0.50)	30	3.50	(2.17)	18
時期5:高等学校	0.57	(0.54)	35	2.32	(1.70)	17
時期6:高校卒業後	0.48	(0.84)	106	6.63	(4.38)	15

ただしこの傾向は, cueing-event の時期によって異なっている。cueing-event の時期ごとに, 二つの出来事が同じ時期に属している比率と, 異なる時期に属している比率を比較した。その結果, cueing-event が中学校以降の lifetime period (時期 4 ~ 6)に属している場合には, 同じ時期の出来事が想起される比率が有意に高かった(時期 4, $\chi^2(1)=7.33, p<.01$; 時期 5, $\chi^2(1)=7.47, p<.01$; 時期 6, $\chi^2(1)=67.05, p<.001$)。これに対して, cueing-event が中学校以前の lifetime period (時期 1 ~ 3)に属している場合には, 比の差は有意ではなかった(時期 1, $\chi^2(1)=0.11$; 時期 2, $\chi^2(1)=0.27$; 時期 3, $\chi^2(1)=0.05$)。従って, 比較的最近の出来事が cueing-event になった場合には, それと同じ時期の出来事が想起されやすい。これに対して, 相対的に古い時期の出来事が cueing-event になった場合には, それと同じ時期の出来事だけでなく, 異なる時期の出来事も想起されやすいと言える。

以上は, 全ての cueing-event - cued-event 対を対象とした分析である。そこで別の観点から, 上記の結果を確認するための分析を試みた。第一に, 相対的に古い時期(時期 1-3)の出来事と, 新しい時期(時期 4-6)の出来事をともに想起した 15 名の参加者について, cueing-event と cued-event の間の時間間隔(年数)を求めた。その結果, cueing-event が時期 1-3 に属する場合, そこから引き出された cued-event との間隔は平均 4.8 年($SD=2.4$ 年)であった。cueing-event

が時期 4-6 に属する場合，そこから引き出された cued-event との間隔は，平均 2.4 年 ($SD=2.1$ 年) であった。両者の差は有意であり ($t(14)=2.89, p<.01$)，相対的に古い時期に属する cueing-event からは，時間間隔の離れた出来事も想起されることが示された。第二に，想起された出来事が時間軸上でどの程度散らばっているかを検討した。10 の出来事を経験した各時点での年齢について，参加者ごとに平均・SD・レンジを求めた。そしてその結果を，最初に与えられた手がかり語の 3 群(「小学校 1-3 年」「中学校 1-3 年」「最近 1 年間」)ごとに整理した。群内平均を表 2-3 に示す。SD とレンジについて，分散分析によって群間の差を検定したところ，SD ($F(2,36)=7.41, p<.01$) とレンジ ($F(2,36)=8.25, p<.01$) のいずれでも有意な差が認められた。下位検定(Ryan 法)の結果，最初に「小学校 1-3 年」の出来事から想起を始めた群では，他の 2 群に比較して SD，レンジともに有意に大きく，それだけ時間軸上で広範囲に散らばった出来事が想起されたことが示された。

表2-3 想起された出来事を経験した時点での年齢
(最初の手がかりごとの分析)

最初に呈示された手がかり	平均	SD	レンジ
小学校1-3年	14.05	3.97	11.38
中学校1-3年	15.92	2.35	6.78
最近1年間	18.96	1.67	4.82

以上の分析より，相対的に最近の出来事からは，同じ時期に属する最近の出来事が想起されやすいこと，相対的に古い出来事からは，同じ時期の出来事ばかりでなく遠い時期に属する出来事も想起され，想起された出来事が時間軸上で広い範囲に分散しやすいことが確認された。

(2) cueing-event と cued-event の感情面の関連性

cueing-event と cued-event の間に，気分一致効果が見られるか検討した。想起された出来事に伴う感情を快(「非常に快」あるいは「快」)，不快(「非常に不快」あるいは「不快」)，複合(「快と不快が入り交じっていた」)，中性(「快でも不快でもない」)に 4 分類し，収集された全ての cueing-event - cued-event 対について，感情の関連を整理した。その結果を表 2-4 に示す。分布の偏りが

表2-4 cueing-eventとcued-eventの感情の関連性

cueing-event に伴う感情		cued-eventに伴う感情			
		快	不快	複合	中性
快	度数	70	24	16	14
	%	(56.5)	(19.4)	(12.9)	(11.3)
	残差	5.1**	-4.8	0.2	-0.7
不快	度数	26	67	7	6
	%	(24.5)	(63.2)	(6.6)	(5.7)
	残差	-3.8	7.4**	-2.2	-2.8
複合	度数	13	11	12	4
	%	(32.5)	(27.5)	(30.0)	(10.0)
	残差	-0.9	-1.1	3.6**	-0.6
中性	度数	12	7	3	16
	%	(31.6)	(18.4)	(7.9)	(42.1)
	残差	-1.0	-2.3	-0.9	5.7**

** p<.01

有意であり($\chi^2(9)=95.52, p<.001$)，気分一致効果が認められた。残差分析の結果，快・不快・複合・中性のいずれについても，cueing-event と cued-event の感情が一致するケースが，期待値よりも有意に多かった。

続けて，二つの出来事の時期の異同や，cueing-event の古さも加味して，気分一致効果を検討した。その結果，cueing-event と cued-event が同じ時期に属するか否かにかかわらず，気分一致効果が認められた(表 2-5，同じ時期， $\chi^2(9)=42.23, p<.001$ ；異なる時期， $\chi^2(9)=64.37, p<.001$)。同様に，cueing-event が古い時期(中学校以前：時期 1～3)に属する場合にも，新しい時期(中学校以後：時期 4～6)に属する場合にも，気分一致効果が認められた(表 2-6，古い時期， $\chi^2(9)=24.52, p<.01$ ；新しい時期， $\chi^2(9)=74.04, p<.001$)。残差分析の結果，一部の例外はあるものの(cueing-event と cued-event が異なる時期に属する場合の複合感情，cueing-event が中学校入学前である場合の快感情)，cueing-event と同じ感情の cued-event が有意に想起されやすいことが示された。

以上より，cueing-event と cued-event の時間的な関係にかかわらず，同じ感情を伴う出来事が続けて想起されやすいことが示された。複合感情や中性感情を伴うケースは少ないため結果の信頼性に若干の問題は残るが，少なくとも快感情や不快感情については，cueing-event と同じ感情を伴う cued-event が想起されやすいと言えるだろう。

表2-5 cueing-eventとcued-eventの時期の異同と気分一致効果

cueing-eventに 伴う感情		cueing-eventとcued-eventが 同じ時期に属する				cueing-eventとcued-eventが 異なる時期に属する			
		cued-eventに伴う感情				cued-eventに伴う感情			
		快	不快	複合	中性	快	不快	複合	中性
快	度数	43	18	11	11	27	6	5	3
	%	(51.8)	(21.7)	(13.3)	(13.3)	(65.9)	(14.6)	(12.2)	(7.3)
	残差	3.2**	(3.4)	0.0	0.2	4.4**	-3.7	0.5	-1.7
不快	度数	21	48	5	5	5	19	2	1
	%	(26.6)	(60.8)	(6.3)	(6.3)	(18.5)	(70.4)	(7.4)	(3.7)
	残差	-2.7	5.8**	-2.2	-2.1	-2.9	4.7**	-0.6	-1.8
複合	度数	11	8	11	1	2	3	1	3
	%	(35.5)	(25.8)	(35.5)	(3.2)	(22.2)	(33.3)	(11.1)	(33.3)
	残差	-0.4	-1.2	4.0**	-1.7	-1.2	-0.1	0.1	1.8+
中性	度数	10	5	2	11	2	2	1	5
	%	(35.7)	(17.9)	(7.1)	(39.3)	(20.0)	(20.0)	(10.0)	(50.0)
	残差	-0.3	-2.1	-1.0	4.5**	-1.5	-1.0	0.0	3.5**

** p<.01 + p<.10

表2-6 cueing-eventの時期と気分一致効果

cueing-eventに 伴う感情		cueing-eventが 中学校以前(時期1~3)				cueing-eventが 中学校以後(時期4~6)			
		cued-eventに伴う感情				cued-eventに伴う感情			
		快	不快	複合	中性	快	不快	複合	中性
快	度数	9	7	3	2	61	17	13	12
	%	(42.9)	(33.3)	(14.3)	(9.5)	(59.2)	(16.5)	(12.6)	(11.7)
	残差	1.3	-1.4	0.9	-0.5	4.9**	-4.6	-0.2	-0.6
不快	度数	8	21	2	2	18	46	5	4
	%	(24.2)	(63.6)	(6.1)	(6.1)	(24.7)	(63.0)	(6.8)	(5.5)
	残差	-1.3	2.9**	-1.0	-1.7	-3.4	6.6**	-1.9	-2.3
複合	度数	1	0	1	0	12	11	11	4
	%	(50.0)	(0.0)	(50.0)	(0.0)	(31.6)	(28.9)	(28.9)	(10.5)
	残差	0.6	-1.3	2.0**	-0.5	-1.3	-0.5	3.2**	-0.5
中性	度数	2	1	0	4	10	6	3	12
	%	(28.6)	(14.3)	(0.0)	(57.1)	(32.3)	(19.4)	(9.7)	(38.7)
	残差	-0.2	-1.8	-0.9	3.7**	-1.1	-1.7	-0.6	4.5**

** p<.01

(3) cueing-eventとcued-eventの内容面の関連性

それでは内容的には、cueing-event と cued-event の間には、どのような関連が認められるだろうか。参加者には cueing-event と cued-event が(1)同じ人物を含んでいるか、(2)同じ場所で経験した出来事か、(3)同じ行為や活動を含ん

でいるか、(4)一方が他方の原因になっているか、という判断を求めた。それぞれについて諾否法で判断を求めたが、「諾」と判断された比率は、(1)人(21.8%)、(2)場所(5.7%)、(3)行為・活動(41.0%)、(4)因果(14.2%)であった。ただし行為・活動や因果の判断基準は参加者によりばらつきがある。そこでここでは参加者自身の判断をそのまま集計するのではなく、参加者の想起内容ならびに判断を参考に、cueing-event と cued-event の関連性を、表 2-7 に示す「行為・活動・文脈」「解釈・意味・評価」「要素」「その他」という4カテゴリーに分類した。

分類は二人の評定者が独立に行い(一致率 84.9%)、不一致のケースは分類し直した。表 2-7 に示すカテゴリーは相互排反的であり、全ての cueing-event - cued-event 対は4つのカテゴリーのいずれかに分類された。行為・活動・文脈が共通である対においては、人や物などの要素が共通であるケースも多い。例えば「試合出場」という活動が共通の場合、そのメンバーも共通である。しかし(1)行為・活動・文脈あるいは(2)解釈・意味・評価のように、よりグローバルな関連が認められる場合には、そちらに分類した。従って(3)要素は、人や

表2-7 cueing-eventとcued-eventの内容面の関連性の分類基準

(1)行為、活動、文脈が共通である。

- ・行為とは「席に着く」など個別的な行動を指す。
- ・活動とは行動系列であり、「図書館に行く」のように限定的なものから、「受験」「大会出場」のように幅のあるものまでを含む。
- ・「部活動」のように、大きな文脈を共有するケースもここに含める。例えば、試合とミーティングは活動や行為としては異なっているが、いずれも「部活動」という文脈によって結びついている。

(2)出来事の解釈や意味・評価などが共通あるいは関連している。

- ・一方が他方の原因、きっかけ、出発点になっている。
- ・いずれの出来事も「努力が報われた経験」「失敗経験」としてとらえるなど、評価的な意味が似ている。
- ・「成功経験」と「失敗経験」のように、二つの出来事の評価が対比的にとらえられている。

(3)要素が共通である。

- ・出来事に含まれる物、人、場所、等の要素が共通である。

(4)その他

表2-8 cueing-eventとcued-eventの内容面での関連性

関連性	%	event	時期	内容	備考
行為・活動・ 文脈	44.9	cueing	中学校2年	テニス部で試合に出場した。	「部活動」という文脈が共通である。
		cued	中学校3年	地区大会ダブルスでベスト8になった。	
解釈・意味・ 評価	20.1	cueing	高校1年	高校のクラブ活動、バドミントン。やり始めの頃は体がついていけなかったが、まわりの人たちに助けられて続けることができた。	「周囲の人に支えられてがんばった経験」という意味づけが共通である。
		cued	高校3年	受験。自分一人だったら多分挫折してしまっただろうが、まわりを見てがんばれた。	
要素	24.8	cueing	大学1年	祖母が入院している病院へ、父と兄と一緒にいった。	「兄」という人物が共通である。
		cued	中学校 (学年不明)	兄は飼い猫の口に入れて叱られた。私はこっそり手を入れて遊んだ	
その他	10.2	cueing	高校2年	高校の文化祭でファッションショーをしたのが、すごく格好良かった。	高校生の頃の印象的な出来事を順番に想起しているだけであり、それ以上の関連はない。
		cued	高校3年	大に合格した。	

想起内容は参加者の回答を簡略化している。

物や場所といった要素のみが共通であり、それ以上のつながりは見出しにくいケースを指している。収集された出来事のうち、こうした関連があると判断されたケースの比率と、記述の例を表 2-8 に示す。全体としては、cueing-event と cued-event が行為・活動・文脈を共有しているケースが多かった。

それでは内容面でのつながりは、出来事の時間的な側面と関連しているのだろうか。cueing-event と cued-event が同じ時期か異なる時期か、また cueing-event がいつの時期の出来事かという観点から結果を整理し、内容面でのつながりとの関連性を表 2-9 に示す。偏りは有意ではなく、二つの出来事が同じ時期に属していても、異なる時期に属していても、行為・活動・文脈を共有するケースが多かった($\chi^2(3)=2.99, ns$)。また cueing-event の時期との関連を検討したが、やはり有意な偏りは認められなかった($\chi^2(3)=5.09, ns$)。従って想起された出来事の時期的な古さや時間関係にかかわらず、二つの出来事は行為・活動・文脈を共有していることが多く、次いで出来事の解釈・意味・評価、人や物などの要素によって結びついていることが示された。

表2-9 出来事の時間的な側面と内容面との関連性

cueing-event と cued-eventの時期	cueing-eventの 時期	行為・活動・ 文脈	解釈・意味・ 評価	要素	その他
同じ時期	中学校以前(時期1-3)	16 (48.5)	11 (33.3)	4 (12.1)	2 (6.1)
	中学校以後(時期4-6)	85 (43.6)	37 (19.0)	50 (25.6)	23 (11.8)
異なる時期	中学校以前(時期1-3)	9 (30.0)	10 (33.3)	9 (30.0)	2 (6.7)
	中学校以後(時期4-6)	29 (49.2)	14 (23.7)	13 (22.0)	3 (5.1)

数値は該当するcueing-event - cued-eventの対の数。()内は%。

5 . 考察

(1) 自伝的記憶の時間構造

自伝的記憶の階層構造を示した Conway(1996a)のモデルでは、最上位に lifetime period が想定されている。lifetime period とはその人の個人史を区切る期間であり、年単位の幅を持つことが多い。もちろん人によって「A社で働いてきた期間」「Xと同居していた頃」のように、様々なかたちで個人史を区切ることができるが、同時に、ある社会・文化においては共通の lifetime period が存在すると考えても良いだろう。例えば小学校時代、中学校時代といったものである。

cueing-event と cued-event の時間関係を検討したところ、表 2-1, 2-2 に示されたように、cueing-event と同じ時期に属し、かつ cueing-event から1年以内に経験された出来事が、cued-event として想起されやすいことが示された。このことは、「中学校時代」といった社会的に共有された時期が、自伝的記憶を区切る lifetime period として機能し、同じ lifetime period 内で経験された出来事が密接に結びつけられていることを示している。また反対に、lifetime period をまたいだ出来事の間にはつながりが形成されにくいこと、形成されるとしても、それは lifetime period 内の出来事同士のつながりに比べると弱いことが示唆される。

ただし、こうした構造は時間経過に伴って変化する。cueing-event が古い場合には、cueing-event とは異なる時期に属する出来事も想起されやすくなった。この結果は先行研究とも合致している。Brown(2005)の実験では、cueing-event

として、最近1週間以内の出来事を想起する条件、1-5年前の出来事を想起する近過去条件、4-12歳の出来事を想起する遠過去条件が設けられた。cueing-event と cued-event の間の時間間隔を検討したところ、cueing-event が古い時期に属するほど、二つの出来事の間隔が開くことが見出された。こうした結果は、時間経過に伴って lifetime period の間の境界が曖昧になり、その結果 lifetime period をまたぐ出来事の間にも、感情や内容的な関連性に基づいて連合が形成されることを示唆している。

(2) 感情による結びつき

気分一致効果は、cueing-event と cued-event の時間的な関係(同じ時期か異なる時期か、いつの出来事か)にかかわらず認められた。中性感情あるいは複合感情を伴う出来事はもともと多くないので結論は下しがたいが、快感情あるいは不快感情については、感情が一致する出来事が想起されやすいと言えるだろう。このことは、感情が自伝的記憶の想起や系列構造を規定する一つの要因となっていることを示唆している。

(3) 内容による結びつき

内容面では、cueing-event と cued-event が行為・活動あるいは文脈を共有するケースの多いことが示された。先にも論じたが lifetime period という時間枠が自伝的記憶をまとめる機能を果たしているため、cueing-event と同じ時期に属する出来事が想起されやすい。ただし同じ lifetime period に属する出来事は、単に時間的に接近しているという理由だけで連想されるわけではない。同じ行為・活動を含んでいたり活動文脈を共有するなど、内容的にも関連しているからこそ、cueing-event が cued-event を引き出すのである。

event cueing 法を用いた Brown らの先行研究では、参加者自身に cueing-event と cued-event が活動を共有しているかの判断を求めた。その結果、例えば 30 ~ 49% の cueing-event - cued-event 対が活動を共有していると判断されていた(数値は、二つの出来事がクラスターを形成するか否か等によって異なる)。本研究でも cueing-event と cued-event は行為・活動・文脈を共有するケースが多いことが見出された。自伝的記憶を検索するインデックスとして活動が優位であ

るという仮説は先行研究からは否定されているものの、検討の余地があるのかもしれない。自伝的記憶を体制化する行為や活動の役割については、研究2の結果と合わせて後で再度検討する。

その一方で、Brownらの先行研究と本研究では、二つの出来事が「因果」によって結びついている比率に、大きな差がある。本研究で参加者自身が判定した結果によると、全体の14.2%の対で「因果関係がある」という回答が得られている。これに対してBrown(2005)では36-46%という数値が報告されている。これは本研究では、「cueing-eventから最初に連想された出来事を記述する」という指示を与えたことによるのかもしれない。Brownらの研究ではcued-eventの想起に際して"*somehow related to the cueing event*"と教示を与えることが多く、最初から関連の強い出来事が想起される方向にバイアスがかかり、因果関連性が過大評価された可能性が考えられる。

また「人」を共有する率は、本研究の参加者自身による判断では21.8%であるが、Brown(2005)では30～60%であった(数値は、二つの出来事がクラスを形成するか否か等によって異なる)。標準的なevent cueing法では、一つのcueing-eventからcued-eventを想起すると、次の試行では全く別のcueing-eventが呈示される。これに対して本研究では、10の出来事を連鎖的に想起する方法が用いられた。その結果、例えば

参加者9 出来事1：中2のとき親友と喧嘩をして長期間話さなかった。

出来事2：その親友は別の高校を受験して離れてしまった。

出来事3：親友がいないまま高校に行くのは不安でかなりやせた。

出来事4：高校に行ってみるとすぐに友だちができた。(一部省略)

のように、自分の事柄について時間順序を追って経緯を説明するような想起も多く報告された。そのことが「人」の少なさに結びついたのであるかもしれない。

第4節 研究2 event cueing法による検討 - (2)

1. 目的

研究1の主要な結果として、(1)自伝的記憶は基本的にlifetime periodという時間枠の中で、行為・活動・文脈や感情を共有する出来事が結びつくかたちで

体制化されている，(2)cueing-event が遠い過去の出来事である場合には，cueing-event とは異なる時期に属する出来事も想起される，という2点が示された。

ただし研究1で収集された自伝的記憶は，相対的に最近の出来事が多く，cueing-event と cued-event 間の時間関係という点でも，最近の cueing-event が最近の cued-event を引き出すというケースが多かった。こうした偏りがあるため，別の手続きを用いて，研究1の結果を確認することが必要であろう。そこで実験2では cueing-event の時期を操作して，最近の出来事と遠い過去の出来事の想起を求める。さらに，cueing-event と同じ時期の出来事を想起する条件と，異なる時期の出来事を想起する条件を設定し，時期の異同が想起プロセスや想起された出来事の特徴に及ぼす影響を検討する。そして自伝的記憶の構造を規定する時間枠の働きや，自伝的記憶がどのような原理に従ってつながっているのかを検討する。実験2で検討する問題は，以下の通りである。

- (1)cueing-event と同じ時期(lifetime period)に属する cued-event は，異なる時期に属する cued-event よりも想起されやすいのか。
- (2)cueing-event が遠い過去の出来事である場合には，cueing-event と異なる時期に属する出来事も，同じ時期に属する出来事と同様に想起されやすいのか。
- (3)cueing-event と cued-event 間の時間間隔は，cueing-event の古さによって変化するのか。
- (4)同じ lifetime period に属する二つの出来事は，異なる lifetime period に属する二つ出来事よりも，互いに密接に関連しているのか。
- (5)内容面と感情面において，cueing-event と cued-event はどのような原理に従って結びついているのか。
- (6)cueing-event と cued-event の内容的・感情的な関連は，両者が同じ時期に属する場合と異なる時期に属する場合では異なっているのか。

2．方法

(1) 参加者

大学生 60 名(男性 16 名，女性 44 名，平均年齢 20.8 歳)であった。

(2) 手続き

実験は授業時間を利用して一斉に行われた。参加者には 10 頁からなる A4 版の冊子が配布された。参加者は最初に、「小学校 1-3 年」「中学校 1-3 年」「最近 1 年間」のそれぞれの時期に経験した印象に残る出来事の一つずつ想起し、記述するように求められた。また、(1) その出来事を経験した時の学年(年齢)、(2) 出来事に伴う感情(快、不快、快でも不快でもない、快と不快が入り交じっていた)、(3) 想起された記憶の鮮明度(1:非常にあいまい～ 6:非常に鮮明)、(4) 想起の困難度(1:非常に簡単～ 6:非常に困難)を評定した。

続いて cued-event の想起に移った。最初に想起された三つの出来事を cueing-event として、参加者はそれらから連想される出来事を想起し回答欄に記述し、cueing-event と同様の評定(学年、感情、鮮明度、困難度)を行った。29 名の参加者は、各 cueing-event と同じ時期の出来事の一つずつ想起し、その後で、各 cueing-event と異なる時期の出来事の一つずつ想起した。残り 31 名の参加者は、異なる時期の出来事の一つずつ想起し、その後で同じ時期の出来事を想起した。なおここで「同じ時期」とは、cueing-event を想起する際に指示された「小学校 1-3 年」「中学校 1-3 年」「最近 1 年間」を指し、学年や年齢まで同じである必要はないことが教示で強調された。

計 6 つの cued-event が想起できた参加者は続けて、cueing-event と cued-event の関係について評定した。cueing-event と cued-event の対が全部で 6 対あるが、それぞれの対に関して、(1) 関連の強さ(1:まったく関連がない～ 7:非常に関連がある)、(2) 因果関係の強さ(1:まったく因果関係がない～ 7:非常に因果関係がある)、(3) 同じ人を含むか否か、を評定した。「人」については具体的に誰であるかという記述も求めた。また cueing-event と cued-event の間のつながりを、自分自身の言葉で記述するよう求めた。

3 . 結果

(1) cued-event の想起困難度と鮮明度

cued-event 想起の困難度を図 2-3 に示す。cueing-event の時期(小学校 1-3 年、中学校 1-3 年、最近 1 年間) × cueing-event と cued-event の関係(同じ時期、異なる時期)の分散分析を行った結果、時期の主効果($F(2,118)=13.61, p<.001$)、

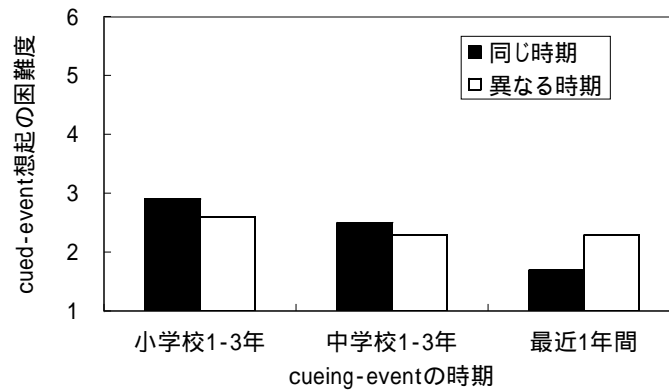


図2-3 cued-event想起の困難度

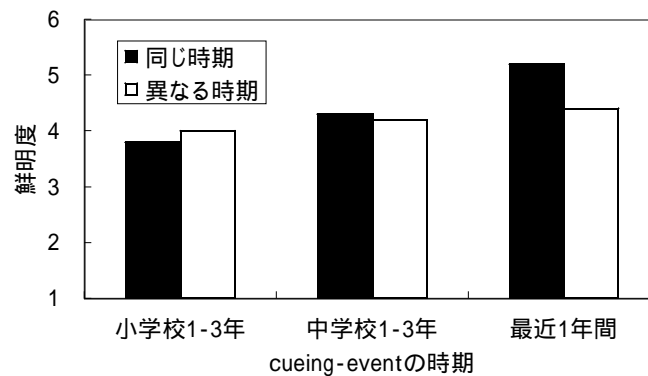


図2-4 cued-eventの鮮明度

時期 × 関係の交互作用 ($F(2,118)=7.43, p<.001$) が有意であった。単純主効果の検定の結果, cueing-event が最近 1 年間に属する場合に, 同じ時期の出来事は異なる時期の出来事よりも簡単に想起されることが示された。

想起された cued-event の鮮明度を図 2-4 に示す。cueing-event の時期(小学校 1-3 年, 中学校 1-3 年, 最近 1 年間) × cueing-event と cued-event の関係(同じ時期, 異なる時期)の分散分析を行った結果, 時期の主効果 ($F(2,118)=20.25, p<.0001$), 時期 × 関係の交互作用 ($F(2,118)=9.74, p<.001$) が有意であった。単純主効果の検定の結果, cueing-event が最近 1 年間に属する場合, 同じ時期の cued-event は異なる時期の cued-event に比べて, 有意に鮮明に想起されることが示された。

以上の結果は, 最近 1 年間の出来事から同じく最近 1 年間の出来事を想起しようとする, 鮮明な記憶が簡単に想起されやすいことを示している。また, 小学校 1-3 年と中学校での出来事を cueing-event にした場合には, cued-event がそれと同じ時期であろうが異なる時期であろうが, 想起の鮮明さや困難度に

は影響がなく、やや鮮明な cued-event が比較的簡単に想起された。この結果は、cueing-event が相対的に古い場合には、同じ時期の出来事と同程度に異なる時期の出来事も想起されるという研究 1 の結果と整合するものである。

(2) cueing-event と cued-event の時間的関連性

(2)-1 cueing-event と cued-event の時間間隔

cueing-event と cued-event の時間間隔(年数差の絶対値)を整理した結果を、図 2-5 に示す。

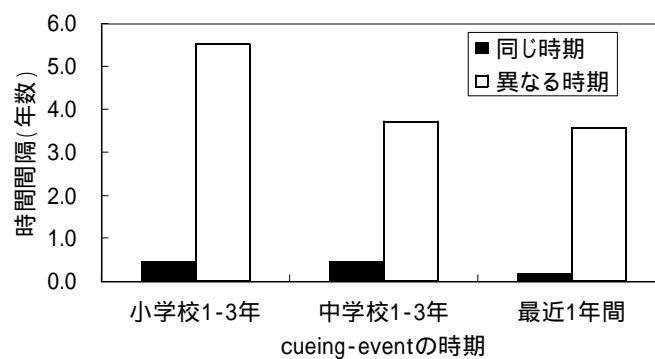


図2-5 cueing-event と cued-event の時間間隔

cueing-event の時期(小学校 1-3 年, 中学校 1-3 年, 最近 1 年間) × cueing-event と cued-event の関係(同じ時期, 異なる時期)の分散分析を行った結果, 時期の主効果($F(2,118)=10.19, p<.001$), 関係の主効果($F(1,59)=256.27, p<.0001$), 時期 × 関係の交互作用($F(2,118)=7.97, p<.001$)が有意であった。関係の主効果は、cueing-event と cued-event が異なる時期に属する方が同じ時期に属するよりも、両者の時間間隔が開いていることによる。時期 × 関係の交互作用は、cueing-event と異なる時期の cued-event を想起する場合にのみ、cueing-event の時期の効果が有意であったことを示す。すなわち、同じ時期の出来事を想起する場合には、cueing-event の時期にかかわらず、そこから 1 年以内の出来事が想起されやすかった。この結果は研究 1 (表 2-2 参照)とも合致する。これに対して異なる時期の出来事を想起する場合、cueing-event が小学校 1-3 年の条件では中学校 1-3 年や最近 1 年間の条件に比較して、時間的に離れた出来事が想起された。この結果は、cueing-event が遠い過去の出来事である場合、時間的に離れた cued-event も想起されるという研究 1 の結果(表 2-1, 表 2-3 参照)と

合致する。

(2)-2 cueing-eventとcued-eventの時間関係 - 両者が同じ時期に属する場合

cueing-event と cued-event が同じ時期に属する場合の、両者の時間関係を整理した。その結果を表 2-10 に示す。参加者には「同じ時期とは、『中学校 1-3 年』なら『中学校 1-3 年』であり、学年や年齢まで同じである必要はない」と教示を与えていた。にもかかわらず cueing-event が小学校 1-3 年の条件でも中学校 1-3 年の条件でも偏りが有意であり(小学校 1-3 年, $\chi^2(4)=30.00, p<.001$; 中学校 1-3 年, $\chi^2(4)=18.11, p<.01$), cueing-event と同じ学年の出来事が想起されやすかった。中学校では中 3 の出来事が想起されやすいためこの傾向が曖昧になっている。しかし残差分析の結果からは, 中学時代の出来事についても, cueing-event と同じ学年の出来事が cued-event として想起されるケースが, 期待値よりも有意に多いことが認められた。

cueing-event が最近 1 年間の条件では, 参加者によっては想起できない時期があり, 表 2-10(c)では - で示している。例えば最近 1 年間の cueing-event として大学 2 年時の出来事を想起した参加者は, 2 年生あるいは 3 年生に限定される。この参加者たちが大学 4 年時の出来事を想起することはあり得ない。同様に cueing-event として大学 3 年時の出来事を想起した参加者は, 3 年生あるいは 4 年生に限定される。この参加者たちが「最近 1 年間」という条件で 1 年時の出来事を想起することはない。全学年をまとめたところ, cueing-event と cued-event が同じ学年に属しているケース(49 件, 81.7%)が, 異なる学年に属するケース(11 件, 18.3%)より有意に多かった($\chi^2(1)=24.07, p<.001$)。

(2)-3 cueing-eventとcued-eventの時間関係 - 両者が異なる時期に属する場合

cueing-event と cued-event が異なる時期に属する場合の、両者の時間関係を整理したのが, 表 2-11 である。cued-event の時期は研究 1 に準じて「小学校入学前」「小学校 1-3 年」「小学校 4-6 年」「中学校」「高等学校」「高校卒業後」に大別した。二つの出来事が同じ時期に属することは無いので, 表中の該当するセルは - で示している。cueing-event の時期が「小学校 1-3 年」($\chi^2(4)=30.67, p<.001$), 「中学校 1-3 年」($\chi^2(4)=58.50, p<.001$), 「最近 1 年間」($\chi^2(5)=51.80,$

表2-10 cueing-eventとcued-eventの時間関係（同じ時期）

cueing-eventの時期		cued-eventの時期			
		小学校1年	小学校2年	小学校3年	
小学校1年	度数	19	3	5	
	%	(70.4)	(11.1)	(18.5)	
	残差	5.2**	-3.3	-2.0	
小学校2年	度数	2	11	6	
	%	(10.5)	(57.9)	(31.6)	
	残差	-2.7	2.7**	0.0	
小学校3年	度数	0	6	8	
	%	(0.0)	(42.9)	(57.1)	
	残差	-3.1	0.9	2.3*	

cueing-eventが中学校1-3年の条件		cued-eventの時期		
		中学校1年	中学校2年	中学校3年
中学校1年	度数	2	0	4
	%	(33.3)	(0.0)	(66.7)
	残差	2.3*	-1.5	0.0
中学校2年	度数	1	12	11
	%	(4.2)	(50.0)	(45.8)
	残差	-1.0	3.7**	-2.8
中学校3年	度数	2	3	25
	%	(6.7)	(10.0)	(83.3)
	残差	-0.5	-2.7	2.7*

cueing-eventが最近1年間の条件		cued-eventの時期			
		大学1年	大学2年	大学3年	大学4年
大学1年	度数	6	2	-	-
	%	(75.0)	(25.5)	-	-
大学2年	度数	5	4	2	-
	%	(45.5)	(36.4)	(18.2)	-
大学3年	度数	-	0	33	1
	%	-	(0.0)	(97.1)	(2.9)
大学4年	度数	-	-	1	6
	%	-	-	(14.3)	(85.7)

*p<.05 ** p<.01

p<.001), のいずれの条件でも度数の偏りが有意であった。残差分析の結果, cueing-event が小学校 1-3 年の条件では, 小学校 4-6 年の出来事が想起されやすかった。また cueing-event が中学校 1-3 年の条件では, 高校の出来事が想起されやすかった。cueing-event が最近 1 年間の場合には, 高校と高校卒業後(実

表2-11 cueing-eventとcued-eventの時間関係（異なる時期）

cueing-eventの 時期		cued-eventの時期					
		小学校 入学前	小学校 1-3年	小学校 4-6年	中学校	高等学校	高校 卒業後
小学校1-3年	度数	9	-	29	7	6	9
	%	(15.0)	-	(48.3)	(11.7)	(10.0)	(15.0)
	残差	-1.0	-	5.5**	-1.6	-1.9	-1.0
中学校1-3年	度数	0	4	9	-	34	13
	%	(0.0)	(6.7)	(15.0)	-	(56.7)	(21.7)
	残差	-3.9	-2.6	-1.0	-	7.1**	0.3
最近1年間	度数	0	2	5	8	20	25
	%	(0.0)	(3.3)	(8.3)	(13.3)	(33.3)	(41.7)
	残差	-3.5	-2.8	-1.7	-0.7	3.5**	5.2**

** p<.01

質的には大学入学後)の出来事が想起されやすかった。すなわち、「異なる時期」とは言っても極端に離れた時期の出来事が想起されるわけではなく、cueing-eventに隣接する時期の出来事が想起されやすいと言える。

(3) cueing-eventとcued-eventの感情面の関連性

研究1と同様、想起された出来事に伴う感情を「快」「不快」「複合(快と不快が入り交じっていた)」「中性(快でも不快でもない)」に分類した。全体の41.4%で、cueing-eventと感情が一致するcued-eventが想起されていた。cueing-eventの時期、cueing-eventとcued-eventの関係(時期の異同)をこみにして、cueing-eventに伴う感情とcued-eventに伴う感情の関連を整理した結果が、表2-12である。cueing-eventが複合感情を伴う場合以外では、cueing-eventと同じ感情を伴う出来事がcued-eventとして想起されやすいことが示された。

ただしcueing-eventとcued-eventの関係(時期の異同)やcueing-eventの古さによって、気分一致効果も変化する可能性がある。そこで、cueing-eventの時期(小学校1-3年、中学校1-3年、最近1年間)およびcueing-eventとcued-eventの関係(同じ時期、異なる時期)ごとに、cueing-eventとcued-eventの感情の関連性を検討した。² 検定の結果、cueing-eventが最近1年間の条件でのみ偏りが有意であった(表2-13)。複合感情や中性感情の場合は曖昧であるが、快・不快については二つの出来事の時期の異同にかかわらず偏りが有意であり、気分一致効果が認められた(同じ時期、表2-13(a), $\chi^2(9)=25.68, p<.05$; 異なる時

表2-12 cueing-eventとcued-eventの感情の関連性

cueing-event に伴う感情		cued-eventに伴う感情			
		快	不快	複合	中性
快	度数	71	27	14	20
	%	(53.8)	(20.5)	(10.6)	(15.2)
	残差	24.1**	-15.2	-3.2	-5.7
不快	度数	27	53	18	22
	%	(22.5)	(44.2)	(15.0)	(18.3)
	残差	-15.7	14.7**	2.3*	-1.3
複合	度数	19	16	8	11
	%	(35.2)	(29.6)	(14.8)	(20.4)
	残差	-0.2	-1.3	1.0	0.5
中性	度数	11	19	7	17
	%	(20.4)	(35.2)	(13.0)	(31.5)
	残差	-8.2	1.8	0.0	6.5**

* $p < .05$ ** $p < .01$

期, 表 2-13(b), $\chi^2(9)=19.40, p < .05$ 。

(4) cueing-eventとcued-eventの関連性・因果関連性

想起された全ての cueing-event - cued-event 対について, 関連性評定と因果関連性評定の相関を検討したところ, 有意な相関が見られた($r=.695, p < .001$)。ただし相関の強さは, cueing-event と cued-event の時期が同じか否か, また cueing-event がいつの時期の出来事かによって異なっていた($r=.446 \sim .823$)。そこで以下では, 関連性と因果関連性は個別に分析する。

また関連性と因果関連性の評定結果の分布を検討したところ, 因果関連性が高く評定されたケースでは関連性も高く評定されていた。これに対して因果関連性が低く評定されたケースでは, 関連性の評定は散らばりが大きくなっていた。因果関連性が 6 ~ 7 のケースにおける関連性の標準偏差は 0.72 であったのに対し, 因果関連性が 1 ~ 2 のケースにおける関連性の標準偏差は, 1.64 であった。ここから参加者は, 因果関連性の高いケースでは関連性も高く評定していたが, 因果関連性の低いケースについては, 因果関連以外も考慮に入れて関連性を評定していたことがわかる。

cueing-event と cued-event の関連性評定の結果を図 2-6 に示す。cueing-event

表2-13 cueing-eventが最近1年間の条件での気分一致効果
(a) cueing-eventとcued-eventが同じ時期

cueing-eventに伴う感情		cued-eventに伴う感情			
		快	不快	複合	中性
快	度数	20	4	4	4
	%	(62.5)	(12.5)	(12.5)	(12.5)
	残差	2.9**	-2.9	-0.2	-0.2
不快	度数	2	9	2	0
	%	(15.4)	(69.2)	(15.4)	(0.0)
	残差	-2.4	3.7**	0.2	-1.6
複合	度数	4	2	2	1
	%	(44.4)	(22.2)	(22.2)	(11.1)
	残差	0.0	-0.4	0.9	-0.2
中性	度数	1	2	0	3
	%	(16.7)	(33.3)	(0.0)	(50.0)
	残差	-1.5	0.3	-1.0	2.8**

(b) cueing-eventとcued-eventが異なる時期

cueing-eventに伴う感情		cued-eventに伴う感情			
		快	不快	複合	中性
快	度数	17	5	5	5
	%	(53.1)	(15.6)	(15.6)	(15.6)
	残差	2.8**	-2.6	-0.2	-0.2
不快	度数	3	8	2	0
	%	(23.1)	(61.5)	(15.4)	(0.0)
	残差	-1.1	2.8**	-0.1	-1.8
複合	度数	1	3	1	4
	%	(11.1)	(33.3)	(11.1)	(44.4)
	残差	-1.7	0.2	-0.5	2.4*
中性	度数	1	2	2	1
	%	(16.7)	(33.3)	(33.3)	(16.7)
	残差	-1.1	0.2	1.2	0.0

* p<.05 ** p<.01

の時期(小学校1-3年, 中学校1-3年, 最近1年間) × cueing-event と cued-event の関係(同じ時期, 異なる時期)の分散分析を行った結果, 時期の主効果($F(2,118)=5.69, p<.01$), 関係の主効果($F(1,59)=29.28, p<.0001$)が有意であった。cueing-event が中学校あるいは最近1年間に属する場合には, 小学校1-3年に属する場合よりも, cueing-event と cued-event の関連性が強く評定された。また cueing-event と cued-event が同じ時期に属する場合には, 異なる時期に属する場合よりも, 二つの出来事の関連性が強く評定されていた。

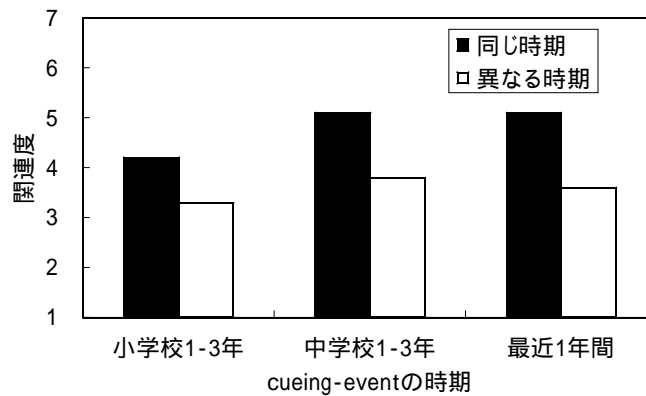


図2-6 cueing-eventとcued-eventの関連度

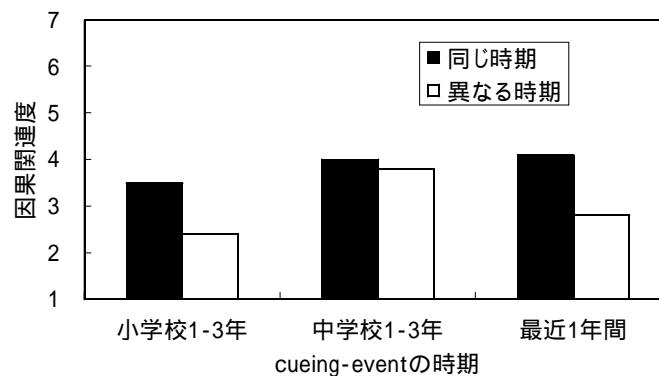


図2-7 cueing-eventとcued-eventの因果関連度

cueing-event と cued-event の因果関連性の評価結果を図 2-7 に示す。cueing-event の時期(小学校 1-3 年, 中学校 1-3 年, 最近 1 年間) × cueing-event と cued-event の関係(同じ時期, 異なる時期)の分散分析を行った結果, 関係の主効果($F(1,59)=29.36, p<.0001$)が有意であり, cueing-event と cued-event が同じ時期に属する場合には, 異なる時期に属する場合よりも, 二つの出来事間に強い因果関連があると評価されていた。また, 時期の主効果が有意傾向を示していた($F(2,118)=2.38, p<.10$)。関連性と同様, cueing-event が中学校や最近 1 年間の出来事である場合, 因果関連性が高く評価される傾向があった。

(5) cueing-eventとcued-eventの内容面の関連性

(5)-1 人の共有関係

全体の 33.9%(122 対)で, cueing-event と cued-event が人物を共有していた。これは研究 1 よりも高い値である。研究 1 では 9 つの cueing-event - cued-event 対が連続して想起されたために一連の流れを形成しやすく, そのことが「人」

の共有率を低下させたのではないかと考察した。研究2で研究1よりも高い数値が得られたことは、この推測を裏付けている。cueing-event - cued-eventの時期の異同との関連を整理したのが表2-14である。両者が同じ時期に属する場合には、人物を共有する率が高いことが示された($\chi^2(1)=31.00, p<.0001$)。

表2-14 cueing-eventとcued-eventの時期の異同と「人」の共有

cueing-eventと cued-eventの時期	人を共有 する	人を共有 しない
同じ時期	86 (47.8)	94 (52.2)
異なる時期	36 (20.0)	144 (80.0)

数値は該当するcueing-event - cued-eventの対の数。
()内は%。

(5)-2 内容面の関連性

参加者による想起内容ならびに、二つの出来事が「人」を共有しているかという点に関する参加者自身の判断に基づき、cueing-event と cued-event の間の関連性を、研究1に準じて(1)行為・活動・文脈、(2)解釈・意味・評価、(3)要素、(4)その他の4カテゴリーに分類した(表2-7参照)。分類は二人の評定者が独立に行い、一致率は78.3%であった。不一致のケースについては、再度分類し直した。各カテゴリーの比率と、記述の例を表2-15に示す。全体としては、cueing-event と cued-event が同じ行為・活動・文脈を含むケースや、解釈・意味・評価が関連しているケースが多く、研究1と整合する結果であった。

続いて、cueing-event と cued-event の時間的な条件によって、両者の内容面の関連性が異なるか検討した。二つの出来事が同じ時期に属するか否かという観点から整理したところ偏りが有意であり(表2-16, $\chi^2(3)=7.89, p<.05$)、cueing-event と cued-event が同じ時期に属する場合には行為・活動・文脈、異なる時期に属する場合には要素を共有する率が相対的に高いことが示された。また二つの出来事が同じ時期に属する条件で、cueing-event の時期による有意な偏りが認められた(表2-17, $\chi^2(3)=18.88, p<.01$)。残差分析の結果、cueing-event が最近1年間の出来事である場合にはcued-event と行為・活動・文脈を共有し、小学校1-3年の出来事である場合にはcued-event と解釈・意味・評価や要素を共有する率が相対的に高いことが示された。

表2-15 cueing-eventとcued-eventの内容面の関連性

関連性	%	event	時期	内容
行為・活動・文脈	51.4	cueing-event	大学3年	教育実習に行った際、中学生の言葉づかいに驚いた。注意すると、なぜ自分が注意されているのかわかっていなかった。
		cued-event	大学3年	教育実習では教具作り、指導案作り、空授業に追われ、睡眠時間が普段の1/3程度だった。
解釈・意味・評価	27.8	cueing-event	中学校2年	剣道個人の部でベスト5になったこと。
		cued-event	高校3年	文化祭の準備で一週間泊まりこんだ。生徒会長だったので最後のあいさつで感動したら、皆も感動していた。(どちらも自分なりに頑張ったものへの結果)
要素	16.4	cueing-event	小学校1年	ランドセルを背負ったままトイレに行ったら、ランドセルのカギがしまっておらず、トイレに教科書を落とした。
		cued-event	小学校6年	家が写真屋なので女の子のお客さんに私のランドセルを貸してあげた。
その他	4.4	cueing-event	大学3年	小学校の教育実習のお別れ会で、子どもが泣いてくれた。
		cued-event	大学2年	成人式で、朝早くから着付けをして苦しくて大変だった。(どちらも、2005年の出来事)。

想起内容は参加者の回答を簡略化している。

()内は、cueing-eventとcued-eventのつながりに関する、参加者自身のコメントである。

表2-16 二つの出来事の時期の異同と内容面の関連性

cueing-eventと cued-eventの時期	カテゴリー				
		行為・活動・ 文脈	解釈・意味 評価	要素	その他
同じ時期	度数	102	51	21	6
	%	(56.7)	(28.3)	(11.7)	(3.3)
	残差	2.0*	0.2	-2.4	-1.0
異なる時期	度数	83	49	38	10
	%	(46.1)	(27.2)	(21.1)	(5.6)
	残差	-2.0	-0.2	2.4*	1.0

* p<.05

4. 考察

(1) 自伝的記憶の時間構造

(1)-1 自伝的記憶をまとめるlifetime periodの機能

実験2の結果は、研究1の結果と整合するものであった。すなわち、自伝的記憶は基本的にはlifetime periodによってまとめられていること、ただし相対

表2-17 cueing-eventの時期と二つの出来事の内容面の関連性
(cueing-eventとcued-eventが同じ時期に属する条件)

cueing-eventの 時期		カテゴリー			
		行為・活動・文脈	解釈・意味・評価	要素	その他
小学校1-3年	度数	22	23	11	4
	%	(36.7)	(38.3)	(18.3)	(6.7)
	残差	-3.8	2.1*	2.0*	1.8
中学校1-3年	度数	38	13	8	1
	%	(63.3)	(21.7)	(13.3)	(1.7)
	残差	1.3	-1.4	0.5	-0.9
最近1年間	度数	42	15	2	1
	%	(70.0)	(25.0)	(3.3)	(1.7)
	残差	2.6**	-0.7	-2.5	-0.9

* p<.05 ** p<.01

的に古い cueing-event からは，異なる時期に属する cued-event も想起されることが見出された。以下に詳しく検討する。

図 2-5，表 2-10 に示されているように，cueing-event と同じ時期の出来事を想起する条件では，cueing-event の古さ(小学校 1-3 年，中学校 1-3 年，最近 1 年間)にかかわらず，同じ学年で経験した出来事を想起する率が高かった。また cueing-event と異なる時期の出来事を想起する条件でも，cueing-event に隣接する時期の出来事を想起する率が高かった(表 2-11 参照)。小学校 1-3 年の cueing-event からは小学校 4-6 年時の出来事が想起され，中学校での cueing-event からは高校の出来事が想起され，そして最近 1 年間の cueing-event からは，大学入学後の経験が想起されやすかった。また同じ時期に属する出来事は，異なる時期に属する出来事よりも，密接に結びついていた。すなわち cueing-event と cued-event が同じ時期に属する条件では，異なる時期に属する条件に比べて，両者は関連性・因果関連性が強いと判断されていた(図 2-6，図 2-7 参照)。これらの結果は lifetime period が自伝的記憶をまとめる時間枠として重要な役割を果たしていることを示している。同じ lifetime period の中で，時間的に接近した複数の記憶が，緊密な結びつきを形成しているのである。

なお想起の困難度と鮮明度の評定からは，最近 1 年間の出来事から同じ時期(最近 1 年間)の出来事を想起する場合に，鮮明な記憶を簡単に想起できることが示された(図 2-3，図 2-4 参照)。ただしこの結果は，cueing-event と cued-event の関連の強さを示すというよりは，単に最近の出来事が想起されやすいことを示しているのであろう。

(1)-2 時間経過に伴う変化

その一方で、時間経過に伴って記憶をまとめる lifetime period の機能が弱まることを示唆する結果も得られた。cueing-event とは異なる時期に属する cued-event の想起を求めたところ、cueing-event が「小学校 1-3 年」の条件では、「中学校 1-3 年」や「最近 1 年間」の条件に比べて、時間的に離れた cued-event が想起されやすかった(平均 5.5 年, 図 2-5 参照)。このように、古い cueing-event からは時間的に離れた cued-event が想起されるという結果は、研究 1 と合致している。また cueing-event の古さを操作した Brown(2005)でも、cueing-event が古くなるほど cueing-event と cued-event の時間間隔が開くことが見出されている。さらに本研究では、古い出来事が cueing-event になった場合、同じ時期の出来事を想起するのも異なる時期の出来事を想起するのも困難度に差は無く(図 2-3 参照)、想起された出来事の鮮明度も変わらなかった(図 2-4 参照)。このことから古い時期の出来事は、時間的に離れた出来事とも結びつきやすいことが示唆される。ただし、その結びつきは同じ時期に属する出来事の場合に比べると弱い。また、隣接する時期を越えてさらに離れた出来事との間に連合が形成されるのは稀である。

(2) 感情による結びつき

気分一致効果が認められ、cueing-event と同じ感情を伴う出来事が想起されやすかった。ただしそれは最近 1 年間の出来事を cueing-event とした場合に限られていた。実験 1 では感情がインデックスとして機能する可能性が論じられたが、インデックスとしての機能は限定的であり、時間経過とともに弱まっていくものと思われる。

自伝的記憶を引き出す手がかりとして感情語の有効性を検討した先行研究でも、感情語が自伝的記憶を引き出す検索手がかり(インデックス)として有効性が低いことが指摘されている。例えば Robinson(1976)は反応潜時を指標とした研究を行い、感情語(例「悲しい」)が動詞や名詞に比べると自伝的記憶を引き出す検索手がかりとしての有効性が低いことを見出している。また神谷(2004)は感情語と内容語(例「旅行」)を手がかりにして自伝的記憶を繰り返し想起させた。その結果、感情語を手がかりにした場合、一度は想起された記憶が二度

目には想起されないケースが多いことを見出している。

(3) 内容による結びつき

全体の半数以上のケースで、cueing-event と cued-event が行為・活動・文脈を共有していた。次いで、cueing-event の解釈・意味・評価から cued-event が引き出されたケースが多かった。「cueing-event から連想される出来事」の想起を求めたのだが、研究1と同様、単に時間的に接近している出来事が想起されるというケースはほとんど見られなかった。想起された cued-event はほとんどが、cueing-event と意味的に関連していた。これは event cueing 法を用いた研究で、多くの出来事がクラスタを構成していたこととも合致する。

二つの出来事を結びつける原理は、時間経過に伴って変化した。二つの出来事が同じ時期に属する条件や、cueing-event が最近1年間の出来事である条件では、行為・活動・文脈が共通である率が高かった。これに対して、cueing-event と cued-event が異なる時期に属する条件や、cueing-event が遠い過去(小学校1-3年)の出来事である条件では、想起された出来事が物や人や場所などの要素を共有しているケースや、解釈・意味・評価が共通である率が高まっていた。すなわち、時間的に接近した出来事は行為・活動・文脈で結びつきやすかった。これに対して時間的に離れた出来事では、それ以外の原理で結びつくケースが相対的に増えていた。

研究1では、cueing-event と cued-event の時間関係にかかわらず、二つの出来事は行為・活動・文脈によって結びついているケースが多かった。研究2の結果は、二つの出来事が異なる時期に属する条件では要素の役割が高まることを示しているものの、行為・活動・文脈が最も優位である点は変わらない。従って、行為・活動・文脈が二つの出来事を結びつける主要な原理になっているという点では、研究1と研究2の結果は整合していると言えよう。

第5節 第2章のまとめと考察

本章では自伝的記憶がどのような原理で構造化されているのかを検討した。

先行研究の検討からは、特定の情報(例：人)がインデックスとして機能しているのではなく、人や活動や行為など様々な情報がインデックスになっていることが示唆された。そして複数の記憶がこれら種々のインデックスによって柔軟につながられている可能性が指摘された。本章の二つの研究では event cueing 法を用いて、自伝的記憶の構造が検討された。以下では研究 1 と研究 2 の結果をまとめ、自伝的記憶の機能の問題へとつながる課題を提起する。

1 . lifetime period

二つの研究の結果、数年程度の幅を持つ lifetime period が、自伝的記憶をまとめる時間枠として、非常に強固な機能を果たしていることが示唆された。cueing-event と同じかあるいは隣接する lifetime period に属する cued-event が、最も想起されやすかった。さらに、同じ時期に属する出来事の間には、異なる時期に属する出来事に比較して、強い関連性・因果関連性が認識されていることが示された。

Conway のモデル(Conway, 1996a, 1996b; Conway & Pleydell-Pearce, 2000)では lifetime period が自伝的記憶をまとめる枠組として明示されているが、その役割を実証的に示した研究は、Conway & Bekerian (1987)と Dijkstra & Kaup (2005)だけである。これら二つの実験は lifetime period を先に呈示したり前もって想起することで、特定の出来事の想起が促進されることを、反応潜時を指標として検証していた。本研究はこれらとは異なる方法を用いて lifetime period の役割を実証したと言えよう。

2 . 記憶をつなぐ原理

(1) 活動と行為

活動や行為が自伝的記憶のインデックスとなっているという説(活動優位説)は反応潜時を指標とした研究(Barsalou, 1988)では否定された。また人工的な材料を用いて自伝的記憶の系列を検討した Lancaster & Barsalou (1997)でも、「人」による群化と「活動」による群化が同じ程度観察されたことから、活動優位説は疑問視されている。

しかし本研究では、cueing-event と cued-event が行為や活動によって結びつ

いているケースが最も多かった。研究2で二つの出来事が異なる時期に属する場合には、部分的な要素情報によって結びつく率が高まっていたが、それでも、行為・活動・文脈で結びつくケースが最も多かった。青年から高齢者までの参加者について自伝的記憶を収集した Cohen & Faulkner (1988)も、本人が主体となっている出来事が、傍観者となっている出来事よりはるかに多く、全体の約 75%を占めることを報告している。これらの結果は、人が「自分は何をしているか」という視点から日々の経験を分節化し、一連の「出来事」あるいは「エピソード」として認知していることを示唆している。

活動優位説を否定した先行研究(Barsalou, 1988; Lancaster & Barsalou, 1997)では、活動も行為もかなり狭い意味で限定的にとらえられていた。例えば「活動」の例として「レストランに行く」、「行為」の例として「席に着く」等があげられる。本研究(研究1・研究2)では、同じ部活動に関わる内容であれば「試合出場」も「ミーティング」も、「同じ行為・活動・文脈を共有している」として分類した。おそらく日常生活で、この二つ(試合とミーティング)を全く別の出来事として切り離してとらえることはないだろう。自伝的記憶研究では、非常に特定性の高い情報を「出来事」として収集することが多い(例: "*a unique, specific event, from the person's own life, lasting no more than a few hours*", Wright & Nunn, 2000, p.481)。ところが Burt, Kemp, & Conway (2003)の研究では、人が認識する「出来事」は、もっと大きな単位であることが示されている。Burt らは日誌法で日々の活動記録を収集し、さらにそれらをまとめて「出来事」を構成するように求めた。参加者が一つの記録を一つの出来事として判断するケースは少なく、複数(2 ~ 6)の関連する記録がまとめて一つの「出来事」として判断されることの方が多かった。また一つの出来事がカバーする範囲も、長い場合には数十日にわたっていた。従って、非常に個別的な活動がインデックスとなったり、記憶をつなげる機能を果たしているというよりも、人は一連の目的的な行為系列を一つの活動として認識し、その文脈の中で生じた出来事は互いに密接な関連を有するものとして理解しているのではなかろうか。

(2) 出来事の解釈や意味

cueing-event と cued-event を結びつける原理として、行為・活動・文脈に次

いで多かったのは、出来事の解釈・意味・評価であった。表 2-8 や表 2-15 に例示されているように、行為・活動・文脈を共有する出来事が表面的に類似しているのに対して(例：「教育実習で生徒の言葉づかいに驚いた」と「授業の準備に追われた」、いずれも教育実習中の出来事)、解釈・意味・評価を共有する出来事は、それよりも高次の類似性を示していると言える(例：「剣道の試合でベスト5になった」と「文化祭の準備で泊まり込み、生徒会長として最後の挨拶をしたら皆も感動した」、いずれも頑張った成果)。

人が出来事からこうした高次の意味づけを引き出し、それに従って複数の出来事を記憶することは、教訓的な主題を持つ物語文を材料とした実験からも示されている。Johnson & Seifert (1992)の実験では参加者は最初の学習セッションで、複数の物語を記憶した。続くテスト・セッションでは参加者に、新たな物語や物語の一部が呈示された。参加者はこれらを読み、読んでいる最中に学習セッションで記銘した物語を想起したか、想起したのはどの物語だったかを回答した。その結果、テスト・セッションで呈示された物語と共通の主題を持つ物語が想起されやすいことが示された。また Seifert, McKoon, Abelson, & Ratcliff (1986)の実験では、主題が同じ物語の間で、プライミング効果が生起することが見出された。先にAという物語を呈示することで、Aと同じ主題を持つBという物語の展開に関する判断時間が短縮された。これらの結果は、物語の主題(教訓)という高次の類似性に基づいて、記憶が体制化されていることを示している。

(3) 感情

研究1では cueing-event と cued-event の間に気分一致効果が認められた。しかし研究2ではこの効果は、最近1年間の出来事を cueing-event とした条件に限定されるものであることが示された。研究1に先立って、感情が自伝的記憶をつなげる基準として機能している可能性を指摘したが、予想されたほどの効果は得られなかったと言える。感情そのものの記憶も減衰すること(Robinson, Rosen, Evans, Revill, David, & Rees, 1980)、感情はその出来事に対する現時点での評価に基づいて再構成されること(Levine, 1997)を考えると、比較的最近の経験に付随する感情は鮮明なかたちで保持されており、類似の出来事を引き

出す手がかりとなり得るが、遠い過去の出来事に付随する感情は強度が低下しており、他の出来事を引き出す手がかりとしての効果が弱くなっていることが推測される。

3．時間経過に伴う変化

このように自伝的記憶は lifetime period という時間枠と、内容 - 特に本人が主体的に関与した活動やその意味 - という二つの原理に従って構造化されていると考えられる。cueing-event と cued-event の時間関係(時期の異同)や、cueing-event の古さによって、二つの出来事の内容面の関連性は若干変化した。しかし活動やその意味によって結びつくケースが多いという点は変わらない。二つの出来事の時期が異なっても、行為・活動・文脈や解釈・意味・評価で結びついているケースは、研究1でも研究2でも、70%程度認められた。その意味で、内容に基づく構造は時間経過の影響を受けにくいと言えるだろう。

一方、lifetime period という時間枠による構造は、時間経過に伴って弱くなることが示唆された。研究1では cueing-event が遠い過去の出来事である場合、異なる lifetime period に属する出来事が cued-event として想起されることも多かった。研究2では、小学校1-3年の cueing-event から、それとは異なる時期の cued-event を想起する条件で、二つの出来事間の時間間隔が長くなることが見出された。こうした変化の背景には、二つの理由が考えられる。第一に、cueing-event が遠い過去の出来事である場合、それと同じ lifetime period で経験された他の出来事が、忘却されている可能性がある。そうすると参加者は他の lifetime period で経験された出来事を検索しなければならない。第二に、古い時期については時間情報の示差性が低下する(Glenberg & Swanson, 1986)。そのため lifetime period 間の境界が曖昧になり、記憶をまとめる lifetime period の効果が低減していることが考えられる。この場合、異なる時期に経験された出来事の間にも活動や意味に基づく結びつきが形成されるのではなかろうか。そして参加者が意図的に検索しなくとも、他の lifetime period に属する出来事で、cueing-event と活動や意味等を共有する出来事が想起されるのだろう。

研究2では cueing-event が最近1年間の条件を除いては、cued-event と cueing-event が同じ時期に属する条件でも異なる時期に属する条件でも、

cued-event 想起の困難さや鮮明度には差が無かった。もし第一にあげたように、同じ時期に経験された出来事が忘却されたために、他の時期を検索しなければならぬのだとすると、二つの出来事が異なる時期に属する条件では同じ時期に属する条件に比べて、cued-event の想起は困難になるはずである。そうならなかったことは、第二の解釈の妥当性が高いことを示唆する。すなわち、時間経過に伴い lifetime period による体制化の影響が弱まった結果、他の時期に属する出来事とも結びつきが形成される。そして時間的に離れた出来事も cued-event として想起されるのである。

4．機能との関連

自伝的記憶の重要性が論じられる時にはしばしば、それが自己やパーソナリティあるいはアイデンティティの基盤となるという側面が強調される。多くの研究者が、自伝的記憶によって自己の連続性が保証されると唱えている (Bluck, 2003)。ところが本章では二つの実験を通して、自伝的記憶が基本的には lifetime period という時間枠によって体制化されており、その中で自伝的記憶が結びついていることが示唆された。それでは、人の生涯とは数年程度の lifetime period の連続に過ぎないのだろうか。それとも自伝的記憶には、数年の幅を超えて自己の一貫性を支える機能があるのだろうか。

おそらく event cueing 法で収集される記憶は、cueing-event と時間的に接近し、行為・活動・文脈といった点で表面的に類似している出来事に偏っているのであろう。そのため、本人にとって重要な出来事の記憶、lifetime period を越えてその後の人生に影響を与えるような記憶を探ることは難しいのかもしれない。

しかし重要な出来事の場合、時間的に離れているにもかかわらず、その人の中で強く結びついていることもある。Pillemer (2001) は子どもの頃の経験がその後の職業選択に影響を与えたケースを紹介している。例えば精神科医の Lenore Terr の場合、小学校 4 年生の時に広島原爆投下のニュース映像を見たことが、子どものトラウマを研究することになった一つの契機であるという。Terr のキャリア選択を他の要因から説明することも可能であろう。しかし本人の中では、小学校 4 年時の出来事とキャリア選択が、約 20 年の年月を越えて

結びついていると言える。McLean & Thorne (2003)は大学生の自伝的記憶を収集し、そこに「何かを学習した」「洞察を得た」経験が含まれているか検討した。その結果、平均 14 歳頃の記憶について「そこから何かを学んだ」「洞察を得た」という意味づけがなされていることが見出された。こうした記憶は、その出来事を経験した 14 歳時点から数年というスパンを越えて、さらに長い範囲にわたって影響を与えていることが想像される。また手がかり語法を用いて高齢者が想起した記憶を整理すると、青年期に経験された出来事が最も多く、「バンブ現象」と呼ばれている。Fitzgerald(1988, 1996)はバンブ現象の理由として、青年期には自己に関わる鮮明な記憶が形成されるのではないかと論じている。このことは、自己に関わる重要な記憶の場合、老年期になっても接近可能性が高く、現在の自己と結びついて認識されていることを示唆している。

以上より、重要度の高い出来事の記憶を検討することで、より長い時間にわたって自己を支える記憶の働きを明らかにし、記憶の構造に関してもさらなる知見が得られることが期待される。そこで次の章では、青年期において非常に重要な意味を持つ「職業選択」という問題を取り上げる。そして小学校からの自伝的記憶がいかにして、lifetime period という時間枠を越えて、青年期の職業選択や判断を方向づける機能を果たしているかを検討する。

第3章 自伝的記憶の機能 ^{*3}

第2章では自伝的記憶の構造を検討した。本章では構造との関連にも注意を向けながら、自伝的記憶の機能を検討する。

まず、機能に関わる研究が次第に重視されるようになった背景を論じる。次に自伝的記憶が担う機能を「自己」「社会」「方向づけ」という三種類に分けて、それぞれについて研究の現状を概観する。さらに高齢者の回想研究で明らかにされた回想機能と、自伝的記憶の機能との関連を論じる。

先行研究の検討に続いて、三つの研究を通して、自伝的記憶が持つ自己機能と方向づけ機能の存在を検証し、記憶がこれらの機能を果たす過程を明らかにする。研究3では職業選択と自伝的記憶の関連を、教員養成課程に所属する大学生を対象に検討する。その結果から、自伝的記憶が職業選択あるいは様々な行動・判断を方向づける機能を果たしていることを指摘する。研究4では、自己機能や方向づけ機能を有する自伝的記憶が、出来事として特殊なだけでなく、記憶としての特殊性を有していることを、記憶特性の検討を通して明らかにする。この検討を通して、「過去の出来事」ではなく「過去の出来事の記憶」が、その人の自己形成や判断等に影響を及ぼす機能を持っていることを論じる。研究3・研究4では、人が過去の出来事を想起し、「あの出来事が出発点だった」「あの経験から学んだ」等と認識しているケースが多く収集された。このように出来事と出来事、あるいは出来事と自己を結びつけて認識する過程は「自伝的推論 (autobiographical reasoning)」と呼ばれている。研究5では研究4のデータを再分析し、自伝的推論の内容を検討する。また現在その人が置かれている立場が、自伝的推論に影響し過去を意味づける可能性を検討する。

*3 第3章、第1節～第3節の内容は、佐藤(1998, 2002a, 2004)をもとに加筆修正を行った。第4節の内容は、佐藤(2000)をもとに加筆修正を行った。第5節の内容は、佐藤(2006a, 2007)をもとに加筆修正を行った。

第1節 記憶のhowとwhy

1. 自伝的記憶のhowとwhy

Bruce (1985, 1989) は記憶研究に how と why という二つの問いが存在することを指摘している。Bruce によると、従来の記憶研究は一貫して、記憶現象の根底にある一般的なメカニズムとプロセス(記憶の how)を明らかにすることを目的としていた。そして、このメカニズムが現実世界の中でいかに有用で適応的な機能を果たしているかという点(記憶の why)は、ほとんど検討されてこなかったとしている。彼は従来の記憶研究に欠落していた視点を指摘し、生態学的に妥当な記憶研究(Neisser, 1978, 1982)が目指す一つの方向として、記憶の機能を明らかにし、how と why を結びつけることを主張した。

自伝的記憶の研究は、生態学的妥当性を標榜する日常記憶研究の一領域である。それでは自伝的記憶研究では、how と why がともに検討されてきたのであろうか。自伝的記憶研究が始まった当初は、忘却速度(Linton, 1975)、バンブ現象(Rubin, 1982)、インデックス(Reiser et al., 1985)等、どちらかといえば、how に関わる問題が検討されることが多く、why を強調した検討は少なかった。このことは、Pillemer (1998)が著書 "*Momentous events, vivid memories*" の中で、「本書のきわだった特徴は、全体を通して、記憶の機能を他の何よりも強調したことである」(p.16)と述べていることにもうかがえる。それほどに、自伝的記憶の機能に焦点を当てた検討は行われてこなかったのである。

それではなぜ、自伝的記憶の機能に関する研究が少なかったのであろうか。二つの理由が考えられる。第一に、逆行性健忘のように記憶を失った悲劇を見れば、自伝的記憶の重要さは一目瞭然である。このように自伝的記憶が重要な機能を担っていることがあまりに自明のものであったために、かえって機能の検討が行われなかったのではなからうか。第二の理由として、われわれは自伝的記憶の重要さを認めつつも、同時に、日常生活では自伝的記憶を意識的に利用することが少なく、それが何かの役に立っているという感覚を持ちにくいことが考えられる。例えば人は様々な失敗経験を意識的に想起し、行動の調整に役立てることが少ない。Chapman & Underwood (2000)は自動車ドライバーが

「事故寸前」の経験をした際の記録と再生を照合し、事故寸前の経験であっても2週間以内に80%が再生されなくなることを見出した。Ross & Buehler (1994b)は日常生活での課題遂行(例：レポートの作成)が予想より遅れるという現象に着目した。Rossらが大学生に質問したところ、予想よりも遅れた経験を覚えている大学生は多かった。ところが、現在遂行中の課題がいつ終了するかを発話思考法(thinking aloud method)を用いて予測させたところ、過去の失敗あるいは成功経験に言及した発話プロトコルは、全体の7%に過ぎなかった。人は過去の経験を覚えていても、それを利用することは少ないのである。

2. 機能への着目

しかしながら近年の自伝的記憶研究では、機能に対する関心が高まってきている。その一つの成果として、専門誌"Memory"は2003年に「自伝的記憶 - 日常生活における機能の検討(Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life)」と題する特集を組んだ。この特集号の企画にあたって Bluck (2003)は、これまでの自伝的記憶研究が "how much we remember", "how well we remember" に重点を置いていたことを指摘し、これに対し、"why and how humans remember both mundane and significant life events" を探求することを提言している(下線筆者)。

機能への関心が高まった背景には、いくつかの理由や研究遂行上の事情があるように思われる。

第一は、自伝的記憶の正誤を問題にしにくいということである。そのため自伝的記憶研究では、"how much", "how well" という問題を設定することがそもそも難しい。ではこうした状況では、いかなる問題設定が考えられるだろうか。Wright(1997)は日常記憶研究で、参加者の自己報告の正確さが評価できない状況で得られた結果について、どのような検討が可能かを整理している(表3-1)。これによると、たとえ自伝的記憶の正誤が判定できなくとも、ある人が何をどのように想起しているかということと、その人の様々な特性との関連を検討することは可能である。このことは自伝的記憶がいかにその人の自己と結びついているかという問題 - すなわち自伝的記憶の自己機能 - を検討する方向を示唆している。

表3-1 記憶の正確さに関わる研究の特性と方向性 (Wright, 1997)

研究の特性		研究の方向性(何が検討できるか)
出来事の正確な記録が残っているか。	YES	想起の正確さを検証できる。
NO		
参加者はその出来事について複数回の再生を求められたか。	YES	想起の信頼性を評価できる。また、想起の正確さの上限を評価できる。
NO		
複数の参加者がそれぞれ異なる時点で質問されたか。	YES	時間経過に伴う系統的な想起のバイアスを測定できる。
NO		
その回想は一度だけ記録されたか。	YES	想起と参加者の様々な特性との関連を観察できる。

第二に、「正誤が判定できないから次善の策として機能を検討する」という消極的な理由ではなく、「正誤にかかわらず記憶は重要な機能を果たしている」という認識が広がったことがあげられる。1990年代に、カウンセリングを受けたクライアントが、幼児期に肉親から性的虐待を受けたという誤記憶を想起し両親を起訴するという「虚偽記憶症候群(false memory syndrome)」が大きな問題となった(Conway, 1997; 高橋, 1997)。これは、記憶の客観的な正誤にかかわらず、自伝的記憶が対人関係に影響し判断を方向づけるということを示す一つの(不幸な)例である。このように様々な機能を果たすにあたっては、想起内容が細部に至るまで正確であることよりも、それが心理的に現実であることの方が重要なのである(Pillemer, 1992, 1998; Pillemer, Picariello, Law, & Reichman, 1996)。例えばアイデンティティにしても、「われわれが自分自身の身に起こったと信じている出来事によって決定されるのかもしれない。われわれの幻想もファンタジーも再構成された記憶も、過去や現在の客観的な出来事と同様に、アイデンティティの一部を形成する」のである(Singer & Salovey, 1993, p.157)。

第三に、自伝的記憶に限らず、われわれの認知が一個人の中に閉ざされたものではなく、社会的な性質を帯びているという認識が広まったことである。このことは自伝的記憶が社会的な機能を果たしているという問題意識につなが

り、幼児は親子の会話を通じて自伝的記憶を語るスキルを発達させるという研究を引き起こした(例：Haden, 2003)。また成人においても、ともに語ることが、対人関係の形成や維持に影響するのではないか(Pillemer, 1992)、あるいは否定的な出来事を他者に語ることで感情の調整に役立つのではないか(Pasupathi, 2003)、という機能面の意義が指摘されている。

3 . howとwhyの必要性

自伝的記憶の how と why は、一枚のコインの表裏である。自伝的記憶がどのように処理され想起されるか、という背景には、なぜそのように処理されることが必要なのか、という問題が潜んでいる。Bluck(2003)が指摘したように、how と why の両面の理解が必要なのである。このことを、自伝的記憶の分布で見られるバンブ現象を例に考えてみよう。

(1) バンブ現象

青年期から前成人期(10-30 歳頃)にかけての出来事は、他の時期に比較して想起されやすい。この現象はレミニセンス・バンブ(あるいは単に「バンブ」と呼ばれ、50 歳以上の人々が参加した研究で繰り返し見出されている(Jansari & Parkin, 1996; Rubin, 2000; Rubin & Schulkind, 1997; Rubin, Wetzler, & Nebes, 1986)。

バンブ現象は社会的な出来事を扱った研究でも繰り返し見出されている。Rubin, Rahhal, & Poon (1998)は1900 年代初頭から現代までのアカデミー賞や野球のリーグ戦の優勝チームあるいは重大ニュースを材料として再認テストを作成し、平均年齢 70 歳の参加者では 10-30 歳の時期に重なる出来事の再認成績が最も優れていることを見出した。様々な出来事のキーワードやそれに関わる人名を参加者に呈示して出来事の概要を答えさせた研究でも、類似のバンブ現象が見出されている(Belli, Schuman, & Jackson, 1997; Schuman, Belli, & Bischooping, 1997)。また米国をはじめとしてドイツ、日本、リトアニアで多くの世代の人に「この 50 年間で起きた国内外の出来事や変化のうち最も重要と思われるものを指摘してください」と問うたところ、回答者が青年期から前成人期にかけて経験した出来事が指摘されることが多かった(Schuman, Akiyama,

& Knauper, 1998; Schuman & Rieger, 1992; Schuman, Rieger, & Gaidys, 1994; Schuman & Scott, 1989)。バンプの時期は映画や読書などの好みを形成する時期でもある。この時期に読んだ本，聴いた歌，観た映画は記憶に残り，後で肯定的に評価される (Rubin et al., 1998)。

(2) バンプ現象を説明する二つの仮説

それではなぜ，青年期から前成人期が自伝的記憶にとって特別なのであろうか。現在まで認知的なプロセスを強調する仮説と，自己との関わりを強調する仮説が提出されている。前者は how の視点からの説明であり，後者は why の視点からの説明である。

(2)-1 認知的なプロセスを強調する仮説

Rubin et al. (1998)はバンプの時期が発達上の移行期に該当することに着目した。この時期は急激な変化の時期であり，人は多くの新奇な出来事を経験する。こうした出来事は示差性が高く，順向抑制の影響を被りにくい。さらに人は新奇な出来事に対しては，それを既存の枠組に組み込もうとして意味を求める努力を費やす。こうした認知的な操作が，移行期の出来事の記憶を促すのである。しかし急激な変化の時期であるということは，符号化時と検索時で条件の不一致が生じやすく，検索を困難にするという問題も含んでいる。安定した時期はこれと反対の影響を及ぼす。安定期の初期に獲得された情報はその後も繰り返し利用されやすい。このことは情報をその都度リハーサルすることにつながる。その一方で，安定期に経験された出来事は示差性が低く，順向抑制を被りやすい。さらに符号化の際に意味を求める努力を伴っていない。こうした要素は記憶を阻害する可能性が高い。こうしたことから Rubin et al. (1998)は，急激な変化が落ち着き始める安定期の最初が，記憶にとっては最も好ましい時期であると考えた。この時期に経験された出来事は意味を求めて精緻に符号化され，発達しつつある認知構造に組み込まれ，安定して検索される。この説明はバンプ現象を引き起こす認知的なプロセスを強調しており，how の視点に立つと言えよう。

(2)-2 自己との関わりを強調する仮説

しかし変化の時期は、そこで遭遇する出来事の示差性や理解だけでなく、そもそも自分が何者かという自己観やアイデンティティの感覚にも大きな影響を及ぼす時期である(Holmes & Conway, 1999)。Fitzgerald (1988)は鮮明な記憶の想起を求めた実験で、手がかり語法よりも顕著なバンブが得られることを見出した。また Fitzgerald(1996)の研究で 60-75 歳の参加者に「自分の人生で起きた出来事についてストーリーを書くように」という教示を与えたところ、顕著なバンブが得られた。さらに通常の手がかり語法ではバンブが出現しにくいとされている 30-46 歳の参加者でも類似のバンブが得られた。Fitzgerald (1988, 1996)はこれらの結果から、青年期から前成人期にかけてアイデンティティ形成と結びつく自己志向的(self-oriented)な活動が行われ、自己に関わる鮮明な記憶が多く形成されるのではないかと考えた。こうした記憶は、自分は何者かという自己物語(self narrative)に組み込まれる。成人期になると自己物語は安定し、新たな要素を組み込む必要もなくなるし、また組み込もうとしても組み込めないことも起きる。このように Fitzgerald の説は、バンブの背景にアイデンティティ形成という活動の存在を指摘した。自伝的記憶が自己形成の一端を担うことを強調しているという意味で、この説は why の視点に立つものと言えよう。

認知説と自己説のいずれが適切かを実験データに基づいて決めることは、おそらく不可能だろう。自己と深く関わる出来事であれば、繰り返しリハーサルされたり精緻に符号化されると考えられる。Fitzgerald(1996)でも、参加者の書いたストーリーに含まれていた出来事は、自己にとって重要であるだけでなく、他者に語ったり自分で考える頻度の高い内容が多かった。

このように、how と why いずれの視点に立つ問いの立て方も、自伝的記憶の理解には必要である。このことは決して、バンブ現象だけに限定的なことではない。how と why の二つの視点が現象の理解に有益であることを示す例を、さらに二つ紹介しよう。第一に、後に詳述する Pillemer らの研究では、大学時代に経験した出来事のなかでも入学直後の記憶が優れていることが見出された(Pillemer, Goldsmith, Panter, & White, 1988; Pillemer, Picariello, Law, & Reichman, 1996)。この結果について、入学直後は移行期であり、その時期の

経験は新奇で示差性が高いためであるという, "how"を強調した解釈が可能である。これに対して Pillemer は, 移行期の記憶はその後の行動を方向づけるといふ重要な機能を担っているので 繰り返し想起され記憶に残りやすいという, 機能を重視した解釈を提出している。第二に, 抑うつ傾向の強い人は具体的な自伝的記憶を思い出しにくく, 概括的な想起にとどまる傾向がある (Williams, 1996; Williams & Broadbent, 1986)。このこと自体は自伝的記憶の how に関する説明である。これに対して, 辛い出来事を想起しネガティブな感情がよみがえるのを防ぐ一種の防衛機制として, 概括的な想起が機能していると考えられることとできる (Pillemer, 2001)。

第2節 三つの機能 - 自己, 社会, 方向づけ -

これまでの自伝的記憶研究からは, 自伝的記憶の機能として自己 (self), 社会 (social), 方向づけ (directive) という三種類が指摘されている (Bluck, 2003)。以下ではこれら三種類の機能について, 主要な知見を概観する。

1. 自己機能

「自己」機能とは, 自伝的記憶が自己の連続性や一貫性を支えたり, 望ましい自己像を維持するのに役立つという面を指す。また, 過去と現在を対比させることで成長を実感するのに役立つという面もあるだろう。心的外傷や脳損傷等によって自分自身の歴史を想起することができなくなれば, それはアイデンティティを失った状態と言える。その意味で自伝的記憶は, 自己の連続性やアイデンティティの基盤になっていると言える (Barclay, 1996; Robinson & Swanson, 1990; Ross & Buehler, 1994a)。

(1) 自己定義記憶

自伝的記憶の中には, その人のアイデンティティと密接に結びついていて, 強い感情を伴って鮮明に想起されるものがある。このように「私」を象徴する記憶を Singer & Salovey (1993)は「自己定義記憶 (self-defining memory)」と

呼んだ。これは文字通り、「自分はいったい誰なのか」という問いかけに答を与えてくれる記憶である。

自己定義記憶の研究では、参加者に対して次のような説明が与えられる。

少なくとも1年以上前の出来事で、鮮明でしっかり記憶されており、個人的に重要で、今のあなたがどのようにできあがったかを効果的に伝えてくれる記憶(*conveys powerfully how you have come to be the person you currently are*)。(McLean & Thorne, 2003, p.637)

少なくとも1年以上前の出来事で、あなたにとって馴染み深く明瞭で重要で(*very familiar, clear, and important*)、何度も思い出されたり、そのことについて考えたような記憶。自己理解に役立ち、例えば友人にそのことを話すとすると重要な情報を効果的に伝えるような記憶(*the type of memory told to a friend to convey important information powerfully*)。強い感情を伴うが、それはポジティブな感情であることも、ネガティブな感情であることも、また両者が混ざっていることもある。

(Moffitt & Singer, 1994, p.26)

そして例えば次のような記憶が報告される。

中間テストの数学で失敗して、ある夜、近所の小道に散歩に出かけた。2月の冷たい空気の中で、自分の最優先事項は何だろう、なぜ失敗したのだろうと考えた。そのときの冷え冷えした感じは今でも覚えている。それ以来、宿題はきちんとやろうと決心して、あまり大切にない事柄に気を散らされないようになった。(Blagov & Singer, 2004, p.482)

夕食の間中、父との別れが迫っていることを考えて涙が流れそうだった。父は私を残して行き、3ヶ月は会えないだろう……自分はひとりぼっちになるんだという感覚に強く襲われ、これからどうなるだろうと思ったことが思い出される。(McLean & Thorne, 2003, p.638)

すなわち自己定義記憶とは、ある程度過去の出来事で、鮮明で、重要で、強い感情を伴い、繰り返し想起され、そしてアイデンティティに関する重要な情報を伝えてくれる記憶である。また自己定義記憶は一つの出来事だけが単独で存在しているのではない。関連する他の記憶と結びついてネットワークを形成している(Singer & Blagov, 2004b; Singer & Salovey, 1993)。

自己定義記憶の研究では通常、こうした記憶を数件から十件程度想起することが求められる。例えばMoffitt & Singer (1994)は10の自己定義記憶を想起するよう参加者に求め、想起された記憶の重要度を0-6の7段階で評定させ、平

均 4.35($SD=0.71$)という高い値を得た。すなわち、誰もがこうした記憶を持っており、それらを想起することは難しいことではない。

ところで、ある記憶が上記のような自己定義記憶の特性を備えていたとしても、その記憶が自分にとってどういう意味を持つかという考察の程度においては個人差がある。例えば「自殺未遂した友人を毎日病院に見舞った。そのことが二人の関係を強めた」という自己定義記憶を想起したとしよう。これについて単に「自分にとって重要な思い出」としか考えられない人もいれば、「人のそばにいて手助けすることの大切さを学んだ。だから重要だ」と理解を深める人もいるだろう(Blagov & Singer, 2004)。Blagov & Singer (2004)はこのような自己定義記憶に対する意味づけと、適応指標(Weinberger Adjustment Inventory)との関連を検討し、適応レベルの高い人では、自己定義記憶が自分にとってどういう意味があるか考察していることが多いという結果を得た。このことは、自己定義記憶をどう意味づけて解釈し、そこから何を学ぶかということが、パーソナリティと結びついていることを示している。

(2) 自伝的記憶とパーソナリティ

自伝的記憶が自己と関わるものである以上、個人差の検討が不可欠である。そこで次に個人の動機や心理社会的発達段階が、自伝的記憶の個人差と関連していることを示す研究を紹介する。

(2)-1 社会的動機と自伝的記憶

Woike, Gershkovich, Piorkowski, & Polo (1999)はTATを用いて,"communion"と"agency"という二つの対照的な社会的動機をとらえた。"communion"は他者との親密な関係を維持しようとする動機である。"agency"は個人として独立して何かを達成し、かつ他者に対して統制を及ぼしたいという動機である。Woikeらは大学生にTATを実施し、agency動機が高く communion動機が低い者(agency群)と、反対に communion動機が高く agency動機が低い者(communion群)を選択した。そして10分間でポジティブあるいはネガティブな経験を一つ想起して記述するよう求めた。ポジティブな経験の想起内容を分析した結果、communion群の参加者は、対人関係にまつわる出来事(愛情、友情、等)を、

社会的な文脈から切り離された個人的な出来事(達成, 賞賛, 等)よりも多く想起していた。これに対して agency 群では, 個人的な出来事の方を多く想起していた。

さらにこうした動機の違いは, 自伝的記憶の語り方にも影響していることが示唆された。Woike らは想起内容が「分化」という視点から記述されているか「統合」という視点から記述されているか検討した。分化とは「母は近所の人より気さくだった」「僕は良い聴き手で, 彼は良い語り手だった」というように内容を対比的にとらえる語り方である。一方, 統合とは「プレッシャーから判断をしくじった」「兄は父と同じように状況に対処した」というように内容同士の連関を強調する語り方である。収集された記述ごとに, 記述全体に占める統合的な記述の比率を求めたところ, ポジティブな出来事でもネガティブな出来事でも, communion 群では統合の率が高く, agency 群ではこの率が低かった。すなわち communion 群は自己や他者や出来事を相互に関連し統合したものと認知しているのに対して, agency 群ではそれらが互いに独立し分化していると認知していることが示唆されたのである。

(2)-2 Eriksonの心理社会的発達段階と自伝的記憶

Conway & Holmes (2004)は高齢者を対象に, 人生を7つの時期(例: 10-19歳)に区切って, それぞれの時期で経験した出来事の想起を求めた。そしてそれぞれの想起内容が, Erikson (1959)の発達段階説における心理社会的危機(例: アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散)との関連を検討した。その結果, ある出来事を経験した時期と心理社会的危機との間に明確な対応が認められた。例えば青年期には, 「アイデンティティ対アイデンティティ拡散」という危機を解決して, アイデンティティを形成することが大きな課題となる。そしてこの課題に関連する自伝的記憶は, 10-19歳の時期に最も多く報告されていた。同様に「親密さ」や「孤独」に関連する記憶は, 20-29歳の時期に最も多く報告されていた。これらの結果は, それぞれの発達段階における主要な課題が, 出来事の符号化や記憶の接近可能性(accessibility)を強く規定することを示唆している。

Erikson(1982)は成人期における発達課題として生殖性(generativity: 生成世

代性，世代継承性とも訳される)という概念を提唱した。これは子孫を生き育てることだけでなく，生産性や創造性を包含する概念であり，新しいものを生み出し，世話し，次の世代に伝えていくことを意味する。McAdams は「知識やスキルの伝達」，「コミュニティへの寄与」，「他者の世話」等の領域から構成される生殖性尺度を作成した(McAdams & Aubin, 1992)。そして 25-74 歳の参加者を対象に，生殖性尺度に加えて，最近 2 ヶ月間に行った生殖性に関わる行動のチェックリスト(誰かにスキルを教えた，子どもに本を読んだ，コミュニティの集会に参加した等)を実施した。また自伝的記憶の想起を求め，どのくらい生殖性のテーマ(例：何かを作った，何かを他者に与えた)が含まれているか分析した。その結果，生殖性尺度得点・生殖性に関わる行動の頻度・自伝的記憶の生殖性相互の間に，強い相関関係が認められた(McAdams & Aubin, 1992; McAdams, Aubin, & Logan, 1993)。生殖性の強い人は実際にそのような行動が多いし，自伝的記憶の中にもそうした内容が多く含まれていたのである。

さらに，生殖性と結びついた記憶が独自の語り方をされることも指摘されている。McAdams らは生殖性の高い人と低い人のライフストーリーを比較し，生殖性の高い人では，悪い出来事や否定的な感情の後に良い出来事や肯定的な感情が語られやすいことを見出した。「夫の性的問題に苦しんだが，そのことから自分の人生を自分でコントロールするようになった」という例がこれにあたる。一方生殖性の低い人では，良い出来事の後に悪い出来事が語られやすかった。「完璧な模型飛行機を作ったのに，いじめっ子にそれを壊された」という例がこれにあたる(McAdams, Diamond, Aubin, & Mansfield, 1997; McAdams, Hart, & Maruna, 1998)。McAdams らの一連の結果も，成人期における発達課題が，自伝的記憶の内容や想起過程と強く関わっていることを示唆している。

2．社会機能

「社会」機能とは，自伝的記憶が対人関係やコミュニケーションにプラスの影響を及ぼすことを指している(Barclay, 1996; Neisser, 1988; Pillemer, 1992; Robinson, 1992)。自分の過去経験を他者に開示することは，相手を楽しませたり，何かを教えたり，相手との親密な関係を形成・維持するのに有効であろう。過去の出来事を詳細に語るにより，そのメッセージの信頼性や真実性が高

まったり、コミュニケーションが豊かになるということもある。また発達研究では、自伝的記憶は発生段階から社会的な性質を伴っていると指摘されている。親と子が共通の出来事について語ることを通して、子どもの自伝的記憶が発達するのである(Haden, 2003; Nelson & Fivush, 2000; Ornstein, Haden, & Hedrick, 2004)。

(1) 自伝的記憶とコミュニケーション

自伝的記憶を想起することは、円滑なコミュニケーションにとって有益である。例えば自分の経験から相手の気持ちを類推したり行動を理解することもできるだろう(Cohen, 1998; Robinson, 1992; Robinson & Swanson, 1990)。

またコミュニケーション場面で、われわれは自分の過去経験を開示することがある。Skowronski & Walker (2004)は過去6ヶ月間に経験した出来事を参加者にあげさせるとともに、その出来事をこれまでに想起した理由を評定させた。その結果、「細部を思い出す」「感情を再現する」「その出来事をよく理解する」等、個人的な理由で思い出すよりも、「他者に話すため」という社会的な理由で思い出すことが多かった。Pasupathi & Carstensen (2003)は参加者に1週間ポケットベルを携帯させた。ポケットベルは1日5回ランダムな間隔で鳴り、参加者はそのときどのような活動をしていたか記録した。その結果、参加者の記録の平均20%が、他者と一緒に互いに過去のことを話したり聞いていたという内容であった。その他の社会的な活動が平均56%であったことを考えると、日常生活では互いに過去経験を話し合うことが少なくないと言えよう。Hyman & Faries(1992)は会話の中で自伝的記憶が言及されたケースを収集し、どのような文脈で記憶が利用されたかを分析した。その結果、「話題になっている内容に関して自分自身の経験を紹介する」「他者に自分自身のことを説明する」「現在の自分の関心を説明する」といった、社会的な関係の中で自己を記述するという用いられ方が多いことを見出した。このように話し手が自伝的記憶に言及し、それに対して聴き手が共感的に応答すると、話し手はいっそう精緻なストーリーを語るようになる(Bavelas, Coates, & Johnson, 2000; Skowronski & Walker, 2004)。

さらに、個人的な経験を語ることは、抽象的な情報を伝えるよりも聴き手の

注意を引きつける。コンピュータ・ネットワーク上でのコミュニケーションを検討した研究によると、特定の個人的なエピソードを含む発言に対しては、他者からの反応が返って来やすいという(Beals, 1991)。個人的な経験談は抽象的な情報よりも説得力が強く、聴き手に強い影響を与える。Borgida & Nisbett (1977)は大学の新生に対して、心理学関連の授業を選択するための手がかりとして、過去の受講生による授業評価を呈示した。その際に、受講者全員の評価平均を呈示する(例:「112 人の評価平均が5段階の3 (good)だった」)よりも、特定の受講者の感想(例:「私はこの授業を5段階の3 (good)と評価しました」)を呈示する方が、授業選択に強く影響することが見出された。

(2) 記憶と集団の凝集性

集団の成員が記憶を共有することは、集団全体をまとめることにつながる。例えば試合終了間際に逆転負けを喫したバスケットボール・チームの成員がそのことを繰り返し思い出すことは、単に「途中であきらめるな」という一般的な教訓以上に成員を強く動機づけ、チームとしての凝集性を高めるのである(Pillemer, 1992)。

社会学者のMyerhoff (1992)は、20世紀初頭にアメリカに移住してきたユダヤ系移民にとって記憶を共有することの意味を、次のように指摘している。

彼らはホロコーストによって消されてしまった文化・社会の継承者である。年老いて死を目前にし、彼らの後にはその文化を直接経験する人がいないことを知っている。また、世代の断絶ゆえに、彼らの記憶を受け継ぐ人もいない。記憶を担っているという高齢者の意識は、同世代としての記憶やコホート意識を強め、その集団に緊急の(しかも実現できないかもしれない)使命を与えることになる。(下線筆者)

(Myerhoff, 1992, p.232)

これは、ユダヤ系移民の社会や文化に特有のことではない。小林(1987)は地方出身者が都会で構成した同郷団体の活動や、そこに関わる人たちのライフヒストリーの聴き取りから、同郷団体が集合的記憶(collective memory)の装置として機能していることを指摘している。また小林(1998)は、自分史を書く人たち(平均 71.3 歳)の集まりを参与観察した。そしてそこでの自己紹介が戦争体験を語り合う場になったことを報告し、こうした場を「記憶の共同体」として

とらえている。このように、まったく同じ経験ではないにせよ、ある時代あるいは類似の経験を共有し語り合うことは、個人のアイデンティティを確認するとともに、同世代や同郷人としての集団的なアイデンティティ形成にも寄与すると言える。先に述べたバンプ現象が社会的な出来事についても見られるという知見は、この時期がわれわれの世代アイデンティティの形成と重なっていることを示しているとも言えよう(Holmes & Conway, 1999)。

また同世代だけでなく、異世代間で自伝的記憶を伝えることは、語り手と聞き手をつなげ、ともに同じ歴史を共有しているという意識を育むことにつながる。Myerhoff (1992)は、授業の一環として大学生が高齢者のライフヒストリーを聞き取る試みを紹介している。学生の多くは、自分たちと同じ人種や民族の高齢者から聞き取りを行った。この活動は語り手である高齢者たちにとっては、他者から注目され、自分の存在を記録にとどめ、アイデンティティを確認する機会になった。同時に聞き手となった学生にとっては、過去の文化や歴史と自分との連続性を確認する機会になった。また、学生たちはこれまで老いに直面する機会が少ないために高齢者を遠ざける傾向があったが、この活動はそうした態度を弱めることにもつながった。

3. 方向づけ機能

「方向づけ」機能とは、自伝的記憶が様々な判断や行動を方向づけるのに役立つという面を指す。自伝的記憶が経験の集積であるなら、それは自らの価値観を確認したり、判断の根拠となることが考えられる。例えば、多くの人にとって価値観に影響を及ぼした出来事を想起することは難しくない。また人は現在の問題と類似した過去経験を想起することで、問題解決やプランニングに役立たせることがある。さらに過去経験が人を動機づけたり、態度形成に寄与するものも、一種の方向づけ機能である。

(1) 移行期の記憶

ところが認知心理学では、特定の出来事の記憶がこうした機能を担っているという認識は、一般的ではなかった。認知心理学ではスクリプトやスキーマなどの抽象的な知識の方が重視されてきた。例えば Tulving は「世界に関する知

識は、概して個人的記憶よりも有益である」(1983, 訳書 p.66)と指摘している。

これに対して Pillemer は、特定の経験を覚えておくことが重要な機能を果たすことを強調した。Pillemer は大学の在校生と卒業後 2 年・12 年・22 年が経過した卒業生に、大学生活の記憶を思い出すように求めた。その結果、入学直後の出来事が特に多く想起されることが見出された。またこれらの出来事は強い感情を伴っていた(Pillemer, Goldsmith, Panter, & White, 1988; Pillemer, Rhinehart, & White, 1986)。このように移行期の記憶が想起されやすい理由として Pillemer は、この時期の記憶が特殊な機能を持っていたからではないかと解釈している。すなわち、新入生にとって大学とは全く新しい環境であり、物事がどのように流れていくのかというスクリプトがいまだに形成されていない。そのため新入生はこの時期のエピソードに特に注意を払い、個々の出来事の記憶は、新しい環境でどのように行動すべきかという行動の指針としての機能を果たす。ところが次第に環境に慣れてくるとスクリプトにそった行動が可能になり、個々の出来事を鮮明に記憶しておく必要性が弱まる。つまり移行期の記憶は、スクリプトができるまでの間に行動を方向づけるために繰り返し参照され、その結果、後々までも鮮明に想起されることになる(Pillemer, Picariello, Law, & Reichman, 1996)。

Pillemer はまた 17-25 歳の女子学生で、初潮を経験した時の記憶を検討した。その結果多くの学生が、いつどこで何をしていた時に初潮を迎えたか、その時どんな気持ちがあったかといったことに関して、詳細に想起できることが明らかになった。これも移行期の記憶として、スクリプトができるまでの間、彼女たちの行動を方向づける機能を果たしていたと解釈できる。さらに当時の準備状態や予備知識と記憶との関連を検討したところ、予備知識の少なかった女性ほど初潮経験を詳細に想起するという傾向が見い出された。十分に準備していた女性の場合、既にある程度スクリプトが形成されていたと考えられる。初潮経験の記憶は、突然初潮を迎えた女性にとって、より重要な機能を果たしたのであろう(Pillemer, Koff, Rhinehart, & Rierdan, 1987)。

(2) 四つの方向づけ機能

大学での経験に限らず、一瞬の出来事が鮮明に記憶に残り、その後の人生に

影響を及ぼすことがある。このように、特定の時間・場所で経験した出来事の記憶で、その状況の詳しい説明や感覚印象を含み、「確かに経験した」という確信を伴う記憶を、Pillemer は個人的出来事記憶(personal event memory)と呼んだ。Pillemer は移行期の記憶、大学で影響を受けた経験の記憶、あるいは様々な人物の自叙伝の内容を分析し、個人的出来事記憶を収集した。彼は出発点(originating events)、転換点(turning points)、基準点(anchoring events)、類推(analogous events)という四種類の出来事に着目した。そしてこれらの出来事の記憶が、人を動機づけたり判断やプランニングの基盤になるという方向づけ機能を担っていることを強調した(Pillemer, 1992, 1998, 2003)。

「出発点」とは、職業や進路などを選択するきっかけとなった出来事の記憶、あるいは現在まで続いている信念体系や態度が自分の中に誕生した瞬間の記憶である。また友情や愛情といった対人関係の出発点も、ここに含まれる。出発点の記憶は自らの態度を確認し、目標を追求する際の動機づけの源になる。「出発点」の一つの変形が「転換点」であり、これはそれまでの自分の信念や態度、自分が歩んできた道筋を変更するきっかけとなった出来事の記憶である。また出発点ではないが、その人の態度や価値観あるいは信念に強い影響を与えた出来事もある。そのような出来事の記憶は「基準点」となり、人は自分の能力や価値観に疑問を抱いた時、そこに立ち返るのである。最後に、自伝的記憶はその出来事を経験した時と類似した状況で想起され、行動や判断を決めるのに役立つ。これは自伝的記憶の「類推」機能である。

Pillemer が分析した自伝的記憶の中から、それぞれの例を示そう。

【出発点】私は左の前の方の席、友人の隣に座っていました。……正確な素材は思い出せませんが、それはエジプト美術に関する 教授の講義でした。彼女は素晴らしい先生でした。講義はとても楽しく、彼女は壇上を行ったり来たりしながら、とどまることなく話していました。時間はあっという間に過ぎました。……先生の講義で私は美術史に夢中になり、講堂を出る時には「これこそ私の求めていたものだわ」と思っていました。

(Pillemer, 1998, p.73)

【転換点】大学2年生の時に英文学のコースをとりました。私はそこで論ぜられる作品が好きで、レポートも楽しんで書いていました。でもある詩についての解釈を書いた時です。私自身は、詩句にこめられた特別な意味に、すごくひらめいたと思っていました。ところがレポートを返す時に先

生は、私とその詩を全く理解しておらず、英文学を専攻して欲しくないと思うとまで言われたのです。このときの先生の厳しい顔や、きゅっと引き締まった口元を思い出します。こんな人にはなりたくないわ、と思いました。そして専攻を英文学から社会学に変えたのです。(Pillemer, 1998, p.78)

【基準点】ある教授が、自分の知っている最も優秀な人たちはウェルズリー(筆者注：Pillemer が調査を実施した大学)の自分のクラスの出身者だっておっしゃいました。先生がウェルズリーの学生をこんなにも高く評価していることが、私の気持ちを後押ししてくれました。私は自分の能力をそんなに低く評価していなかったのですが、それでもそれ以来、自分の能力に疑問を感じたり、人からそんな目で見られて嫌になると、この先生の言葉が聞こえてくるんです。そして他の人にもできたのだから、私にだってできるわって気分になるのです。(Pillemer, 1998, p.74)

【類推】もう一つの大切な経験は美術史のレポートです。先生からは美術館に行くよう言われたのですが、私は手元の写真を見て、ある彫像について書きました。返ってきたレポートには成績がついておらず、研究室に来るようにというコメントが記されていました。後で先生から、その彫像は現在修復中であると聞かされました。先生の指示に従わずにレポートを書いたために、私はレポートを新たに書かなければなりませんでした。ずいぶん困りましたが、「近道はいけない」という大切なことを学びました。・・・近道をしたくなると、このことを思い出すのです。

(Pillemer et al., 1996, p.331)

出発点や転換点あるいは基準点は、自分の選択や行動の原点と言える。これらの記憶は、人が迷った時に行動の指針を与えてくれたり、ある方向へと動機づける機能を担っている。また類推は、より具体的な行動指針を示したり、プランニングのヒントを与えてくれる。自伝的記憶がこうした機能を果たしているという指摘は、他の研究とも整合する。以下に、Pillemer の議論を支持する研究をいくつか見てみよう。

(3) Pillemerの議論を支持する知見

(3)-1 自伝的記憶と問題解決

Pillemer が指摘した「類推」機能は、思考研究で扱われるアナロジー推論(Gick & Holyoak, 1980; Holyoak & Thagard, 1995)や事例ベース推論(Kolodner, 1992)とも関連が深い。事例ベース推論とは一般的なルールに基づいて問題解決を試

みるのではなく、過去の類似の出来事を想起して「あの時はこうだったから、今度も(は)こう対処しよう」とする問題解決方略であり、一から考えるよりも手っ取り早い解答を与え、前回の過ちを避けることを可能にしてくれる。Kolodner(1992)は、様々な嗜好の客を夕食に招待しようとしている人が、以前の類似の状況でいかにして菜食主義者を満足させたか思い出しながら献立を考えたという例を紹介している。これは自伝的記憶の類推機能の例に他ならない。

アナロジー推論や事例ベース推論が可能になるためには、ベースになる自伝的記憶を具体的に想起し、それを新たな問題場面にあてはめて考えることが必要である。自伝的記憶を具体的に想起できなければ、それを推論に生かすこともできない。この点については手段 - 目的問題解決課題を用い、自殺未遂者や鬱患者に関する検討が多く行われている。手段 - 目的問題解決課題では「恋人同士が喧嘩別れをした」「引っ越してきたばかりの人が知り合いをほしがっている」等の社会的な状況での問題と、「再び仲良くなった」「隣近所に知り合いが増えた」という結末が呈示され、こうした結末をもたらすような適切な手段をできるだけ多くあげることが求められる。またこの課題とは別に手がかり語法で自伝的記憶の想起を求め、想起された記憶の概括性が検討される。その結果、抑うつレベルや反応潜時(一般的反応傾向)を統制しても、自伝的記憶の概括性と手段の有効性の間に有意な負の相関が得られた(Evans, Williams, O'Loughlin, & Howells, 1992; Sidley, Whitaker, Calam, & Wells, 1997)。自伝的記憶の概括性が高い - すなわち特定の自伝的記憶を想起しにくい - 参加者は、手段 - 目的問題解決課題においても、有効性の高い解決方略を生成することが難しかった。この結果は、特定の出来事を想起することが類推機能を果たし、問題解決を促進することを示している。

アナロジー推論が有効に行われるためには、想起された経験(ベース領域)と目前の事態(ターゲット領域)が単に表層的に類似しているだけでなく、高次の抽象的な関係においても類似していなければならない(福田, 1997, 2001; Gick & Holyoak, 1983)。このことを自伝的記憶の類推機能にあてはめると、ある記憶を想起することが適切に類推機能を果たすには、特定性の高い情報が検索できるだけでなく、過去の経験を適切に抽象化して現在の問題に適用することが必要であると言える。先に紹介した「類推」の例で大学生は、「近道はいけな

い」ということを学んだと報告している。これは特定の経験から適切な抽象化が行われた例であろう。

(3)-2 生活史の分析

Csikszentmihalyi & Beattie (1979)は成人の生活史の分析から、子どもの頃の問題の認知的・情動的表象が「ライフ・テーマ」として、現実世界に対する認知や対処方法の基礎になっていることを指摘した。例えばある人は両親が移民であったために不当な扱いを受けた。そのことが彼のその後の選択を方向づけ、法律家としてマイノリティの権利を守る職業を選ばせたのだと回想している。これは自伝的記憶が出発点として認識されている一例である。

Mackavey, Malley, & Stewart (1991)は心理学者 49 人の自伝を分析し、出発点あるいは移行期の記憶の重要性を示す結果を得た。Mackavey らは自伝の中から、「その後の人生やライフストーリーに重要な影響を及ぼしたものとして想起される経験 (autobiographically consequential experiences)」を収集した。こうした経験は人生を通じて均等に分布しているわけではなく、成人前期 (22-35 歳) に多く見られた。この時期は大学卒業から大学院までの時期であり、心理学者のキャリアとしてはまさしく出発点あるいは移行期に該当する。さらにこれらの記憶は、強い感情や鮮明なイメージを伴って想起されていた。

(3)-3 教訓と洞察

McLean ら (McLean, 2005; McLean & Thorne, 2003; Thorne, McLean, & Lawrence, 2004) は、想起された記憶から教訓 (lesson) や洞察 (insight) を引き出す過程を「意味づけ (meaning making)」と呼んだ。例えば「母親と争って物を投げつけた」という記憶から、「そんなことをしてはいけない」という状況特定の教訓 (具体的な行動の指針) や、「自分は感情のコントロールに問題がある」という抽象的な洞察が引き出されることがある。「教訓」は Pillemer の「類推」と非常に近い概念である。また「洞察」は教訓以上に自己理解につながったり、広範な場面で判断や行動を方向づける機能を果たすだろう。

Thorne et al. (2004) の研究では参加者に自己定義記憶の想起を求めたところ、その約 23 % に意味づけを示す記述が含まれていた。そして、達成感や楽

しい経験に関連する記憶よりも(例：恋人と楽しい時間を過ごした)，葛藤や緊張を含む経験の記憶(例：自分の不安を恋人に告白して気まずい雰囲気になった)の方が意味づけされやすいことが指摘されている。こうしたネガティブな経験を注意深く処理して教訓や洞察を引き出すことは，将来同じ失敗を繰り返さないためにも必要であろう。

Bluck & Glück(2004)は15-70歳までの参加者に，「自分が何か賢明な(wise)ことを考えたり話したり行った経験」を想起させ，さらにその経験から何か教訓を学んだか問うた。すると全員がこうした経験を想起することができ，しかも約80%の参加者が「教訓を学んだ」と回答した。こうした経験の多くはネガティブな状況で生じたものであった。参加者たちはネガティブな状況に賢明に対処した経験から，他の場面にも応用できる知恵や人生観を学んだと言える。

4．記憶は複数の機能を担う

ここまでは自己・社会・方向づけという三種類の機能を分けて検討してきた。しかし現実には，ある記憶が複数の機能を担うことも考えられる。例えば Pillemer が指摘した「出発点」「転換点」「基準点」は，その記憶を想起することで自らを動機づけたり，今後の方向を示してくれるという意味で，方向づけ機能を担っている。同時にこれらの記憶は，過去から現在までの一貫性や成長を実感させてくれるという意味で，自己機能を担っているとも言えるだろう。同様に記憶から「教訓」や「洞察」が引き出されると，それはその後の判断や行動に指示を与える。さらにこうした意味づけの過程により，ネガティブな経験から肯定的な意味が引き出されると，自分がその経験を通じて成長したという感覚がもたらされ(King, Scollon, Ramsey, & Williams, 2000)，自分の人生に対する肯定的な認識が獲得される(Debats, Drost, & Hansen, 1995)。このことは，こうした記憶が方向づけ機能と同時に自己機能も担い得ることを示唆している。また，大学生の自己定義記憶を検討した McLean (2005)は，収集された自己定義記憶の90%がこれまで，「自分のことを説明する」「聴き手を楽しませる」など様々な目的のために，他者に対して語られていたことを見出した。すなわち，これらの記憶は方向づけ機能と同時に，社会機能も担っていた。このように一つの記憶が状況によって，様々な機能を果たし得る。

第3節 回想研究と記憶の機能

記憶の機能については自伝的記憶研究とは別に、高齢者の回想に関する研究でも検討が進められてきた。ここでは高齢者の回想研究を取り上げ、そこで明らかにされた記憶の機能が、自伝的記憶研究が明らかにした機能と整合することを示す。

1. 高齢者の回想の適応的な意味

昔を懐かしみ過去を回想するという行動はしばしば、高齢者の一般的な特徴と考えられ、しかも否定的なイメージと結びつくことが多い。最近のことは忘れて昔のことばかり思い出す、現実に適応できなくなったために過去に逃避する、あるいは過去を美化し「昔は良かった」と表現することは、老いゆえの愚痴として周囲からは疎んじられかねない。こうした考えに対して、高齢者の回想が持つ適応的な機能を強調したのが Butler(1963)である。Butler によると自分の過去を振り返るライフレビュー(life review)は、死を意識することによって起こる自然なプロセスである。それは抑うつや罪悪感あるいは過去の出来事に対する反芻的な思考といった精神病理的徴候を引き起こすかもしれない。しかしまた、その過程で未解決の心的葛藤を解決し統合に導いたり、自分の人生を受容したり、人生に新たな意味を与えたり、パーソナリティの再構成を導く可能性も持っている。Butler の提言はその後、高齢者の回想療法(回想法)に取り入れられ、成果をあげている(野村, 1998)。

2. 回想機能尺度

Butler の提言から 20 年が経過した 1980 年代に入ってから、高齢者の回想が担う機能について、質問紙を用いた実証的な研究が行われ始めた。Romaniuk & Romaniuk(1981)は 58-89 歳の高齢者を対象に過去を思い出すことの効果を検討した調査から、「自己への関心・イメージ促進」「現在の問題解決」「実存・自己理解」という 3 因子を抽出した。3 番目の因子は「過去を思い出すことは、過去の問題解決に役立つ」「自己理解を促進するのに役立つ」「人生の意味を決

めるのに役立つ」という内容であり、Butler のライフレビューに類似している。Taft & Nehrke(1990)は単に過去を振り返る頻度ではなく、Romaniuk らの見出した第3因子の効果を強く感じている高齢者ほど、自我統合得点が高くなることを見出した。このことはライフレビューが自我統合という機能を果たしていることを示唆する。

Webster(1993, 1997)は17-91歳までの参加者で、「過去を回想する理由」51項目を用いて調査を行った。その結果、「退屈軽減」(例：退屈を軽減するため)、「死の準備」(例：人生を十分に生きたことがわかり死を穏やかに受け入れるため)、「アイデンティティ」(例：自分をよく理解するため)、「問題解決」(例：現在の困難を解決するのに役立つため)、「会話」(例：会話を簡単にするため)、「去った人との親密さの維持」(例：去った人を思い出すため)、「辛い体験の再現」(例：過去の傷を忘れないようにするため)、「教育・情報提供」(例：若い家族に自分が若かった時代のことを伝えるため)という8因子を抽出され、回想機能尺度(Reminiscence Functions Scale: RFS)が作成された。またWebsterは回想機能が年齢によっても変化することを見出した。青年は成人や高齢者に比較すると、「辛い体験の再現」「同一性」「問題解決」の因子得点が高い。30歳から40歳代にかけては「教育・情報提供」得点が増加し、以降は一定のレベルにとどまっている。そして「死の準備」得点は30歳代から単調増加して、老年期には特に高くなる(Webster, 1993, 1995, 1998)。

3. 自伝的記憶研究と回想研究

自伝的記憶研究と高齢者の回想研究は、互いに全く別の領域として発展してきた。近年になって初めて、両者を統合的に結びつけようという試みが始まっている。

Bluck, Alea, Habermas, & Rubin (2005)は、どういう時に過去を振り返るかを問う Telling About Life Experiences (TALE)尺度を構成した。この尺度は、自伝的記憶研究が主張する三つの機能に対応する28項目から構成されている。大学生で調査を行った結果、「方向づけ」(例：人生の選択をしなければならないのにどの道をとったらよいか不明確なとき)、「自己の連続性の確認」(自分が以前と同じ人間だろうかと考えるとき)、「他者との関係を作る」(例：自分

の似たような経験を話して相手の気持ちをよくしてやりたいとき)、「他者との関係を育む」(例：他の人の人生についてもっとよく知りたいとき)という4因子が抽出された。また同じ参加者に Webster の回想機能尺度(RFS)をあわせて実施したところ、「方向づけ」因子はRFSの「問題解決」「アイデンティティ」との関連が強く、同様に「連続性」因子は「アイデンティティ」、「関係を育む」因子は「会話」との関連が強かった。この研究は、自伝的記憶研究と回想研究から導き出された機能が概念的に重複することを示しており、両方の研究をつなぐ契機となるものであろう。

また Webster(2003)は高齢者の回想研究から指摘された8つの機能を、社会-自己、成長(順向)-喪失(逆行)という2軸で整理し、自伝的記憶研究が指摘する三つの機能との対応を論じている(表3-2)。「辛い体験の再現」のように、自伝的記憶研究ではあまり取り上げられない機能もあるが、これも辛い体験を想起して、それを何に活用するかを考えると、「成長している自己を確認する」「他者に教える」「同じ辛い体験を繰り返さない」というかたちで、自己・社会・方向づけの機能とつながっていることが推測される。

表3-2 回想研究と自伝的記憶研究で指摘された機能の対応

	社会	自己
成長(順向)	会話, 教育と情報 <社会>	アイデンティティ, 問題解決 <自己> <方向づけ>
喪失(逆行)	死の準備, 親密さの維持 <自己> <社会>	退屈軽減, 辛い体験の再現 (自伝的記憶研究では未確認)

< >は自伝的記憶研究で指摘されている機能。

研究の背景は異なっているものの、自伝的記憶研究からも回想研究からも、「自己」「社会」「方向づけ」という三種類の機能の存在が示された。一つの記憶が複数の機能を担うケースもあるだろうが、これら三種類を枠組として、機能の検討を進めることは妥当であると言えよう。

次節からは自伝的記憶の機能の中でも、特に自己機能・方向づけ機能に焦点を当てた検討を行う。これらの機能の検討は、構造の理解にも寄与すると期待される。第2章では数年単位の lifetime period が、自伝的記憶の構造に重要な

役割を果たしていることが示された。一方、第2章の総合論議で検討したように、より重要な出来事の記憶は、lifetime period の範囲を超えて、その後の判断等に影響を及ぼしたり、現在の自己と結びいて認識されていると考えられる。研究3～5では、自己機能や方向づけ機能を通して、長いスパンで自己を支える自伝的記憶の構造が存在する可能性が検討される。

第4節 研究3 思い出の中の教師 - 自伝的記憶の機能分析 -

1. 目的

(1) 自伝的記憶の自己機能・方向づけ機能の検討

研究3は大学生の職業選択と自伝的記憶との関連を検討することを通して、自伝的記憶の持つ自己機能と方向づけ機能を探ることを目的としている。アイデンティティ・ステータスを測定する Marcia のパラダイムにおいて、イデオロギーと職業が二つの重要な領域として扱われていることからわかるように (Marcia, 1966)、青年期の職業選択は自己に関わる重要な問題である。研究3では、教員養成系学部2年生に、小学校から高校までの教師に関わる自伝的記憶の想起を求める。そして教職に就くことを本人がどのくらい強く希望しているかという意識と、想起内容との関連を検討する。職業選択は様々な要因に規定されるが、教職の場合は親から子への職業継承が多い(田中・小川, 1982)。これは教師という職業の選択基盤に、身近な大人との継続的な関わりがあることを示唆する。教職志望意識の強い学生では、教職を志望するきっかけとなった記憶、あるいは教職という目標にとって基準点となるような記憶が多く想起されると予想される。その意味で、職業選択と関連づけて自伝的記憶を検討することは、方向づけ機能の存在を明らかにするのにも適しているだろう。

Pillemer の一連の研究は自伝的記憶を収集し、そこから方向づけ機能を有する出来事を抽出、分類するという手法を用いていた。彼の研究は自伝的記憶を幅広く収集し、様々な機能を豊かに記述しているが、同時に、逸話レベルにとどまっているという問題点を抱えている。職業選択という領域に限定して、本人の目標と関連づけて自伝的記憶を検討することにより、自己機能や方向づけ

機能の存在を検証し、その内容や特徴をより明確にとらえることが可能になると考えられる。

ところで Pillemer は自叙伝の記述を分析したり、「大学で影響を受けた経験」の想起を求めることによって、記憶の方向づけ機能を検討した。すなわち最初から、ある程度重要性が認識されている記憶に焦点を当てて機能を検討した。しかしわれわれの日々の経験が実はあまり重要でもなくユニークでもない出来事の蓄積であることを考えるならば(Barclay & DeCooke, 1988; Barclay & Subramaniam, 1987)、最初から影響のあった出来事だけに限定しない方が、自伝的記憶の機能を検討するには適しているだろう。例えば、教職を志望する背景には、特に重要度が高くなくとも教師に関わる肯定的な記憶が蓄積されていることも考えられる。そこで本研究では参加者に、まず一定時間で教師にまつわる記憶をできるだけ多く想起するよう求め、その内容を簡単に記述させ、当時の感情等の評定を求める。そしてその後で、自分が記述した中から「考え方や進路等に影響を及ぼした出来事」を選択するよう求める。

(2) 個人的「出来事」ではなく、個人的出来事「記憶」の影響を探る

またこの手続きを用いることにより、Pillemer の研究では不十分だった点について検討することが可能になる。先にあげた転換点の例を考えてみよう。

レポートを返す時に先生は、私とその詩を全く理解しておらず、英文学を専攻して欲しくないと思うとまで言われたのです。(略)こんな人にはなりたくないわ、と思いました。そして専攻を英文学から社会学に変えたのです。(Pillemer, 1998, p.78)

この女性が専攻を社会学に変えたのは、教師に厳しく評価されたためだろうか。それとも、厳しく評価されたことの記憶が彼女を動かしたのだろうか。過去に経験した「出来事」ではなく「出来事の記憶」が方向づけ機能を担っていると主張するためには、影響のあった出来事が記憶として特殊なものであることが示されなければならない。そうでなければ「過去の出来事が影響した」というだけであり、「出来事の記憶が影響した」という必然性がなくなってしまう。Pillemer の初期の研究(Pillemer, Rhinehart, & White, 1986)では、大学時代の出来事を思い出す順に記述させ、人生への影響度と鮮明度の間に有意な相関

があることを見出している。すなわち人生に影響を及ぼしたと認識される出来事は、鮮明に想起されるという意味で、記憶としての特殊性も有している。ところがそれ以降の研究では、この問題が扱われることはほとんどなく、「出来事」ではなく「出来事の記憶」が方向づけ機能を有することが暗黙裏に仮定されているようである。

研究3では、影響のあった出来事とそうでない出来事の両方が収集される。さらに、個々の記憶をどれくらい鮮やかに想起できるかという「鮮明度」と、それらを現在までどのくらい頻繁に想起したり人に語ったりしているかという「想起頻度」の評定が求められる。これにより、影響のあった出来事とそうでない出来事では、その内容のみならず、想起過程にも差異があるのかを検討する。Pillemer(1998)による個人的出来事記憶の検討から、その人にとって重要な出来事はそれを経験した時点だけでなく、思い出したり他者に語ることを通して、鮮明な記憶として影響を与え続けていることが予想される。

(3) 自伝的記憶の構造との関連

さらに職業選択という、大学生にとって重要なテーマに関わる記憶を分析することにより、自伝的記憶の構造に関しても新たな知見が得られる可能性がある。第2章において event cueing 法を用いて検討したところ、cueing-event と同じ lifetime period に属する出来事が、cued-event として想起されるケースが多かった。cueing-event と異なる時期の出来事を想起するよう指示した場合にも、隣接する時期の出来事が想起されるケースが多かった。また同じ lifetime period に属する記憶は、異なる lifetime period に属する記憶に比べると、互いに強く関連していることが見出された。以上の結果から、自伝的記憶は数年単位で分節化された lifetime period によってまとめられ、時間的に離れた出来事の間に関わりつきを認識することは少ないことが示唆された。

しかしもしそうだとするならば、人間の時間展望は、数年程度の過去と未来だけから構成される、きわめて限定的なものになってしまう。例えば現在の自己は、過去数年以内に経験された出来事から形成されているに過ぎないということになる。それではわれわれが遠い過去から蓄積してきた記憶には、何の機能もないということになるだろう。一方、第2章の最後に指摘したように、重要な

出来事の記憶は長い時間を経ても互いに結びついていたり、現在の自己とのつながりが認識されたりすることがある。職業選択と関連させて教師にまつわる記憶を収集した場合には、「小学校の時の先生の影響で、現在教職を目指している」というように、現在の目標と結びついた遠い過去の出来事が想起されたり、「担任の教師に憧れたので、大学は教育学部を選んだ」というように、時間的に離れた出来事を結びつけて認識しているケースが見出される可能性が高い。すなわち本人にとって重要な出来事の記憶を問うことで、過去の出来事と現在の自己が、あるいは時間的に離れた出来事同士が、lifetime period の枠を越えて結びついている可能性を検討できるだろう。

2. 方法

(1) 参加者

調査は国立大学教育学部(教員養成系)の2年生に対して、複数の講義時間を利用して行われた。記入漏れのあった回答ならびに、幼稚園および養護学校教諭を希望している参加者を除いて、最終的に361名(男子121名,女子240名,平均年齢19.7歳, $SD=0.7$)の結果が分析された。

(2) 質問紙の構成と手続き

質問紙は、年齢、学年、性別、教職を志望する意識の強さを記入するフェイスシートと、教師にまつわる思い出を記入する用紙から構成されていた。

教職志望意識については、教職に「ぜひつきたい」「つきたい」「あまりつきたくない」「つきたくない」という4選択肢から1つを選択するように求め、「ぜひつきたい」あるいは「つきたい」を選択した場合は、さらに希望する校種(小学校, 中学校, 高等学校, 幼稚園, 養護学校)を回答するよう求めた。この回答に基づいて、参加者は教職志望の強さにより3群に分けられた。ただし教職を志望している場合でも、希望校種によって大学での教育課程や専攻が異なる。そこで参加者のタイプをある程度統制するため、幼稚園および養護学校教諭を希望している参加者は除いた。「ぜひつきたい」を選択した参加者141名(男子51名,女子90名)を教職志望・強群、「つきたい」を選択した参加者139名(男子52名,女子87名)を志望・中群、「あまりつきたくない」あるいは「つきた

くない」を選択した参加者 81 名(男子 18 名,女子 63 名)を志望・弱群とした。

教師にまつわる思い出については, B4 版の用紙の両面に 12 個の回答欄を設け, 最高 12 個の出来事について回答できるようにした。個々の出来事ごとに, 以下の記述あるいは評定が求められた。なお(5)(6)は調査の途中で追加され, 一部の参加者のみに問われた。

- (1)教師にまつわる思い出の内容の自由記述。
- (2)その出来事を経験した時の学年あるいは年齢。
- (3)その出来事を経験した時に感じた感情(快, 不快, どちらでもない, の中から 1 つを選択する)。
- (4)その記憶の鮮明度(「1: 非常に曖昧」から「4: 非常に鮮明」までの 4 件法)。
- (5)その出来事について現在まで一人で考えたり思い出したりした頻度(「1: ほとんど思い出さなかった」から「5: 非常にしばしば思い出した」までの 5 件法)。
- (6)その出来事について現在まで他の人に話したり話題にした頻度(「1: ほとんど話さなかった」から「5: 非常にしばしば話した」までの 5 件法)。

参加者は小学校入学から高校卒業までを振り返り, 教師にまつわる思い出をできるだけ多く思い出して, その内容や学年, 感情等を 20 分間にわたって回答するよう求められた。想起する順序などの検索方略について特別の指示は与えられなかった。その後, 自分が想起した出来事の中で, その後の自分の行動, 習慣, 考え方, 進路選択等に影響を及ぼしたと思われる出来事を選択し, どのような影響であったかを欄外に記述するよう求められた。

3. 結果

(1) 想起された出来事

参加者が記述した出来事の総数は, 教職志望・強群が平均 5.6($SD=2.1$), 中群が平均 5.4($SD=2.3$), 弱群が平均 5.9($SD=2.1$)であった。1 要因 3 条件の分散分析を行ったが, 教職志望の強さによる差は認められなかった($F(2,358)=1.09, ns$)。ここから, この課題に回答する際の動機づけは, 志望強度にかかわらず同じ水準であったと推測できる。

続いて参加者が記述した出来事を時期別・感情別に整理して、一人あたりの平均想起数を求めた。時期は小学校 1-3 年，小学校 4-6 年，中学校，高校に，感情は快，不快，他(快でも不快でもない)に分類した。結果を図 3-1 に示す。この図から，志望・強群では他の 2 群に比較して，快感情を伴う出来事が不快感情を伴う出来事よりも多く想起されているという特徴が見られる。このことを確認する方法として，想起数について志望強度×時期×感情の 3 要因分散分析を行うことが考えられる。ところが一人あたりの平均想起数が平均 5～6 個であるため，時期と感情の両方を独立変数とすると，データが分散分析に適さない分布を示してしまう。そこで，ここでは想起数について志望強度×時期の分散分析，志望強度×感情の分散分析を個別に行う。

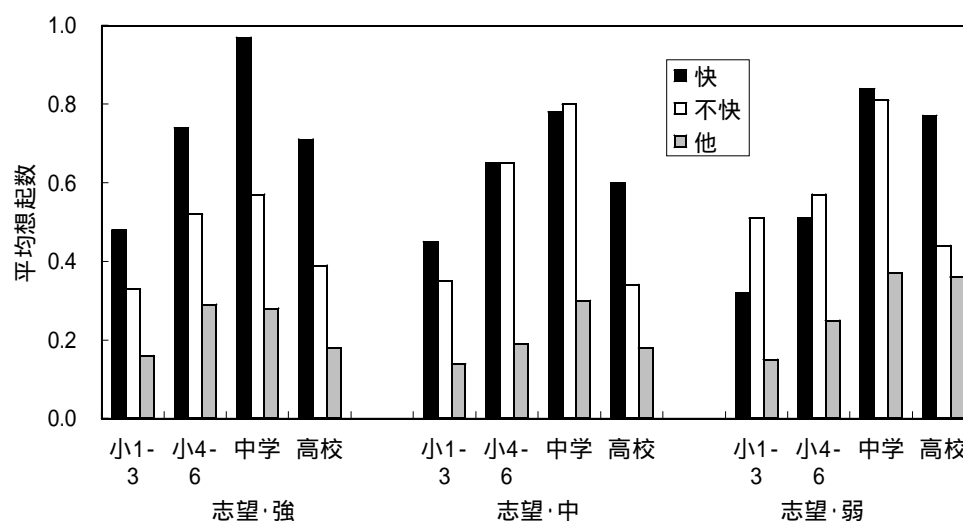


図3-1 教職志望の強さと想起された出来事の数 (時期・感情ごとの分析結果)

図 3-2 に，感情をこみにした，時期別の平均想起数を示す。志望強度(強，中，弱)×時期(小学校 1-3 年，小学校 4-6 年，中学校，高校)の分散分析を行ったところ，時期の主効果のみ有意であった($F(3,1074) = 30.7, p < .01$)。下位検定(Ryan 法)の結果，小学校 4-6 年と高校の出来事の想起数の間には有意差が無かったが，その他の全ての組み合わせの間で有意差が認められた。志望強度にかかわらず中学校での出来事が最も多く想起され，次いで小学校 4-6 年と高等学校，そして小学校 1-3 年の出来事の想起数が最も少ないことが示された。このことは，教師にまつわる記憶への接近可能性が単に時間経過のみによって規定されているわけではないことを示している。

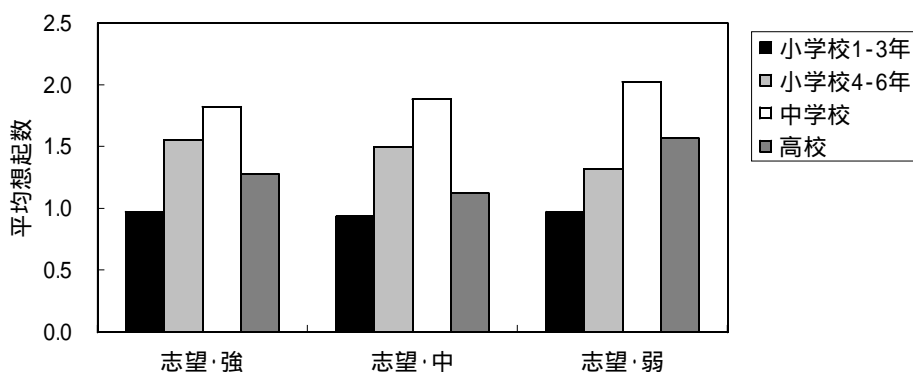


図3-2 教職志望の強さと想起された出来事の数
(時期ごとの分析結果)

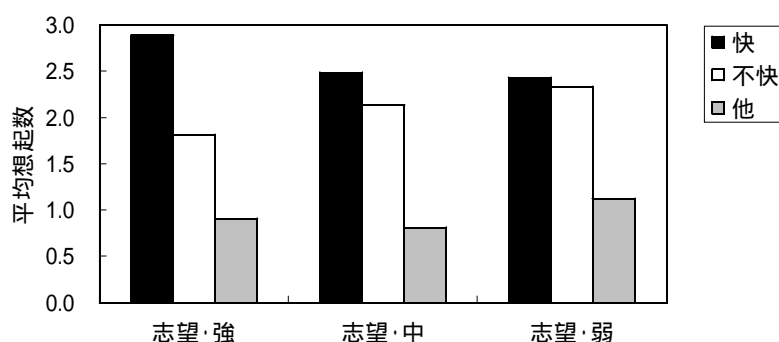


図3-3 教職志望の強さと想起された出来事の数
(感情ごとの分析結果)

図 3-3 に、時期をこみにした、感情別の平均想起数を示す。志望強度(強, 中, 弱) × 感情(快, 不快, 他)の分散分析を行ったところ、感情の主効果($F(2,716)=106.5, p<.001$)と志望強度 × 感情の交互作用が有意であった($F(4, 716)=3.5, p<.01$)。下位検定(Ryan 法)を行ったところ、不快事象数について志望強度の主効果が有意であり、志望・強群は志望・弱群に比較して不快な出来事の想起数が有意に少なかった。

このように、想起数については、志望強度にかかわらず中学校での出来事が多く想起されること、また、志望・強群では不快な出来事の想起が少ないことが示された。この第二の点を詳細に検討するために、各参加者の想起内容について、想起された出来事の時期別に、快感情を伴う出来事の想起数と不快感情を伴う出来事の想起数の差(快得点)を求めた。この値が正であれば、その時期の想起内容が快方向に偏っており、逆に負であれば不快方向に偏っていることを示している。その結果を図 3-4 に示す。快得点について志望強度(強, 中, 弱) × 時期(小学校 1-3 年, 小学校 4-6 年, 中学校, 高校)の分散分析を行った。

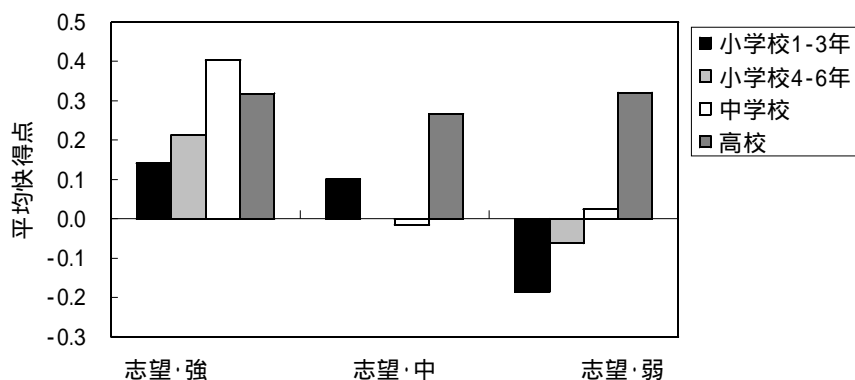


図3-4 教職志望の強さと各時期で想起された出来事の快得点

志望強度の主効果が有意であり ($F(2,358)=5.13, p<.01$) , 下位検定(Ryan 法)の結果, 志望・強群と他の2群の間に有意な差が認められた。また時期の主効果が有意であり ($F(3,1074)=4.31, p<.01$) , 高校と小学校1-3年, 高校と小学校4-6年の間に有意な差が認められた。志望強度×時期の交互作用は有意ではなかった。従って, 志望・強群は他の2群に比べると想起内容が快方向に偏っていること, また高校時代の出来事は他の時期の出来事に比較すると, 志望強度にかかわらず快方向に偏っていることが示された。

(2) 影響を受けた出来事

(2)-1 影響を受けた出来事

参加者が「影響を受けた」と指摘した出来事の数, 志望・強群で平均1.8個 ($SD=1.4$) , 志望・中群で1.6個 ($SD=1.4$) , 志望・弱群で1.4個 ($SD=1.2$) であった。ただし参加者によってもとの想起数が異なっている。そこで, 参加者ごとに影響を受けた出来事と想起数との比率を求めた。その結果を表3-3に示す。比率を角変換し, 志望強度(強, 中, 弱)の効果を分散分析で検討したところ, 志望強度の主効果が有意な傾向を示した ($F(2, 358)=2.72, p<.10$)。教職志望意

表3-3 教職志望の強さと「影響を受けた」出来事の比率

	志望		
	強	中	弱
平均	0.32	0.30	0.25
SD	0.21	0.23	0.21

識の強い学生は、自分が想起した出来事に対して「その出来事から影響を受けた」と認識する率が高いと言えよう。志望・強群の学生は教師にまつわる過去の出来事とそれ以降の自己との結びつきを、より密接に感じていると言える。

(2)-2 影響を受けた出来事と感情

影響を及ぼした出来事の記憶内容をさらに詳細に検討するために、まず、快、不快、その他のそれぞれの出来事について、それらを最低1つは想起した参加者について、影響を指摘した人数比の検討を行った。図3-5に示すのはその結果である。例えば快事象を1つ以上想起した参加者は、志望・強群では135名いたが、そのうちの103名(76.3%)が、快事象から1つ以上の影響を指摘したことを示している。反対に、快事象を想起したにもかかわらず、そこから何の影響も指摘しなかった参加者は32名(23.7%)いた。図3-5より、志望強度にかかわらず快感情を伴った出来事から影響を受けたと考えている人の比率が高いことがわかる。また快感情を伴う出来事については影響を指摘した人数比の偏りが有意であり(表3-4, $\chi^2(2)=6.63, p<.05$)、残差分析の結果、志望・強群の

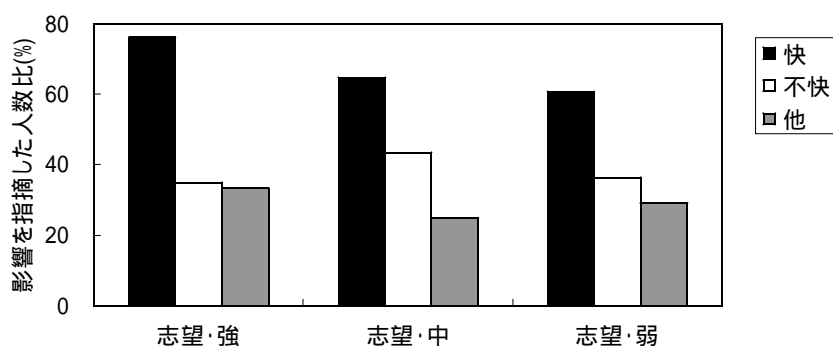


図3-5 教職志望の強さと影響を指摘した人数比 (感情ごとの分析結果)

表3-4 快感情を伴う出来事からの影響を指摘した参加者と指摘しなかった参加者の人数比

		志望		
		強	中	弱
指摘した	度数	103	83	45
	%	(76.3)	(64.8)	(60.8)
	残差	2.5*	-1.1	-1.6
指摘しなかった	度数	32	45	29
	%	(23.7)	(35.5)	(39.2)
	残差	-2.5	1.1	1.6

* p<.05

参加者で快感情を伴う出来事を想起した人は、それらの出来事から影響を受けたと認識する率が高いことが示された。

(2)-3 影響を受けた出来事と時期

同様の分析を想起された出来事の時期についても行った(図 3-6)。その結果、小学校 1-3 年の時に経験された出来事を想起した参加者において、偏りが有意傾向を示した(表 3-5, $\chi^2(2)=5.29, p<.10$)。残差分析の結果、この時期の出来事を想起した志望・強群の参加者は、この時期の出来事から影響を受けたと指摘する率が高く、逆に志望・弱群では、この時期の出来事から影響を受けたと指摘する率が低かった。図 3-6 の全体的な傾向は、最近の出来事になるほど、影響を認識する参加者が増えていることを示している。しかし同時に、志望・強群の参加者は小学校低学年で経験した出来事についても、影響を受けたと認識していた。

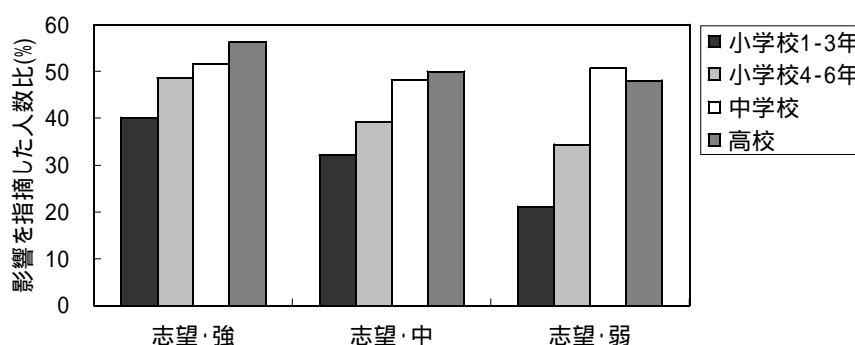


図3-6 教職志望の強さと影響を指摘した人数比 (時期ごとの分析結果)

表3-5 小学校1-3年の出来事からの影響を指摘した参加者と指摘しなかった参加者の人数比

		志望		
		強	中	弱
指摘した	度数	33	26	11
	%	(40.2)	(32.1)	(21.2)
	残差	1.9+	-0.1	-2.0
指摘しなかった	度数	49	55	41
	%	(59.8)	(67.9)	(78.8)
	残差	-1.9	0.1	2.0*

+ p<0.1 * p<0.05

(2)-4 影響の内容

参加者はどのような出来事から、いかなる影響を受けたと認識しているのだろうか。想起された出来事の内容と影響について、参加者の記述内容を下記の8カテゴリーに分類した。分類は二人の評定者によって独立に行われ(一致率 84.0 %), 不一致のケースは改めて分類し直した。それぞれの影響の具体例は表 3-6 に示されている。

- (1)教師への肯定的な見方：特定の教師に対して「尊敬している」「見習いたい」「こんな人間になりたい」と感じるようになった。あるいは特定の教師に限定せず、教師一般に対して肯定的な見方をするようになった。
- (2)教師への否定的な見方：特定の教師に対して、こんな人間にはなりたくないと感じるようになった。教師にはなるまいと感じた。あるいは特定の教師に限定せず、教師一般や学校に対して、否定的な見方をするようになった。
- (3)教職志望：教師になりたいという職業選択のきっかけになった。「こんな教師になりたい」という、教師としてのモデルになった。(1)と類似しているが、(3)は「教師」という職業選択や、教師になった場合の目標に言及している。
- (4)反面教師：こんな教師にはなりたくないと思った。
- (5)考え：考え方や態度、価値観に影響を受けた。
- (6)学習・行動・性格面での肯定的な変化：自信がついたり励みになった等、学習でのプラスの影響を受けた。自分の行動を反省した。行動習慣や性格面でのプラスの影響を受けた。
- (7)学習・行動・性格面での否定的な変化：ある教科が嫌いになった等、学習面でのマイナスの影響を受けた。行動習慣や性格面でのマイナスの影響を受けた。
- (8)進路：進路選択に際して影響を受けた。ただし教職という職業選択に言及しているケースは(3)に分類される。

それでは教職志望の強さによって、特徴的な影響というものがあるのだろうか。この点を検討するため、これら8カテゴリーのそれぞれについて、各群の参加者のうち、その影響を指摘した人数比を比較した(図 3-7)。その結果、教

表3-6 影響を受けた出来事の記述例

(1) 教師への肯定的な見方

(出来事) 小3の時、学校では話づらい話を自宅に呼んでいただいて聞いてもらえた。(影響) 人間的にも優れている人でこんな人間になりたいと思った。

(出来事) 小4の担任は本当に子どもを愛しているんだとひしひしと感ずることのできる先生で、いつも子どもと同じ視点で物事をとらえてくれた。「小学校の先生にどうやったらなれるの」と聞いた時、「子どもが好きだったら先生になれるよ」と答えてくれたことが思い出に残っている。(影響) 今でも、出会えて良かったと思える教師でした。

(出来事) 中3の時、職員室によく行って、いろんな先生と仲良くなった。(影響) 先生もいろんな人がいることがわかり、アットホームだと思うようになった。

(2) 教師への否定的な見方

(出来事) 中2の体育の先生からは保健体育のテストで字や絵が下手で何が書いてあるのかわからないと言われ、60点くらいの点数しかとれなかった。とてもショックで何を言っても聞いてもらえず泣いた。(影響) あの先生たちと絶対に同じ職業に就きたくないと思った。

(出来事) 中3の時、足を怪我して休んでいたから、斜め懸垂の日に注意された(内容は忘れたが)、見下すような目で見られた。(影響) 中学校の教師にだけはならないようにしよう。

(出来事) 中3の時、友だち2人と割り当てられている掃除場所の掃除が終わったので、他の友だちが掃除している保健室に行って遊んで帰ってきたら、普段全く怒らない担任の男の先生が「掃除さぼるんじゃないか」とすごい剣幕で怒った。「掃除した」と言ったら「いいわけすんな」とまた怒られた。(影響) 学校の先生に対して少し不信感を持つようになった。それ以降は、特定の先生とすごく仲良くなるということがなくなった。

(3) 教職志望

(出来事) 小2の担任の女の先生が帰る時にいつもアコースティックギターを弾いてくれてみんなで歌を歌った。放課後その先生と2人でギターに合わせて歌を歌った。そのとき先生は私を見て、自分の小さい頃みたいと言ってくれたのがうれしかった。(影響) 教師になりたいと思った最初のきっかけ。

(出来事) もともと理科が好きだったが、小5の夏休みの宿題で行った理科研究を夏休み後に先生と考えながら何日間も放課後まで研究を続けた。県で最優秀賞をいただいた。(影響) 先生に憧れる気持ちはあったが、これ以降は私も理科の楽しさを教えられようになりたいと思うようになった。

(出来事) 中1のとき家庭のことで悩んでいた時、いろいろ相談にのってもらった。(影響) この先生を見て、自分も将来先生になりたいと思った。

(4) 反面教師

(出来事) 中3の時は病気がちで体育を見学することが多かった。その体育の授業でストレッチをしている時に、見学している私に向かって先生が「だめだなー、もう」と言った。その先生にとっては見学する人が出ない授業を誇りに思っているらしく、私はとても不快だった。(影響) 子どもの心を傷つけるような、こんな先生にだけはなりたくないと思った。

(出来事) 高2の生物の授業でテストの平均点が悪かったら「おまえらアホやな。もう(学校) やめてけ」と言われた。また「なんでこんな問題できないの」とも言われた。(影響) 生徒を中傷するようなことは言うてはダメだと思った。

(出来事) 高2になって勉強するようになって成績が良くなったら先生の態度が変わった。(影響) こういう先生にだけはなりたくないと思った。

表3-6 影響を受けた出来事の記述例（続き）

(5) 考え

(出来事)小4の時6年生を送る会で「走れメロス」の劇をやることになり、担任が歌を全て作曲したりして皆で成功させた。(影響)皆で協力することの大切さを知った。

(出来事)小5の時の先生が産休に入るためにみんなで「おめでとうございます、がんばってください」と一人一輪ずつバラの花をプレゼントした。先生が泣いて喜んでくれた。私たちが先生喜んでくれるかなと思ってやった行動が、本当に喜んでもらえてうれしかった。(影響)それから自分だけでなく、どうやったら人は喜んでくれるのか考えるようになった。

(出来事)中2の歴史の授業で教科書に載っていない太平洋戦争の話をした。(影響)歴史の見方が変わった。

(6) 学習・行動・性格面での肯定的な変化

(出来事)小6の担任の「自主性」という言葉をクラスの目標に掲げ、発言する時にせよ何にせよ、徹底的に私たちに身につけさせた。(影響)自主的に行動することが今できるのはこの先生のおかげ。

(出来事)中1の時、私の得意だった絵をよくみてくれた先生が、壁画の話をもってきてくれて、それを描き、今でも残っている。(影響)今の自信につながっている。

(出来事)中3のプールの授業で女子が、泳げる体調であるのに話を合わせて見学届けを出した。それについて先生は怒るというよりも先生の悲しみを私たちに訴えた。とても人間味を感じた。(影響)人間的に自分というものを見つめる機会を持つきっかけとなった。

(7) 学習・行動・性格面での否定的な変化

(出来事)小3の体育の授業の時、登り棒に登れないのは私だけで、一生懸命やったのに「何やってるんだ」と怒られた。(影響)行動が消極的になった。

(出来事)小4の図画で運動会の絵を水彩で塗っていたら、人の髪の毛の黒から塗り始めた私を見て、クラスの人全員に「こういうのはダメ」と言われた上に怒られた。(影響)その後、絵を描くのが嫌いになった。

(出来事)中2の時、先生に頼まれていたものを提出しに行ったら「遅い」と言われていきなり殴られた。(影響)その先生が社会の先生だったので、中学・高校とずっと社会が嫌いだった。

(8) 進路

(出来事)高校最後の福島国体で優勝した時、うれしくて試合が終わった瞬間先生に抱きついた。先生も泣いてくれ本当に今までよくやったと言ってくれた。(影響)自分の進路を決める理由の1つになった。

(出来事)中3の理科の先生が他の理科の先生とは比べ者にならないほど楽しく面白くわかりやすい理科の授業をする人だった。また趣味で音楽をやっていて(かなりつこんだところまで)、この人に影響されて音楽を志したと言っても過言ではない。

(出来事)高2の社会の授業が面白く興味を持たせてくれた。(影響)社会の勉強を大学でしようと思った。

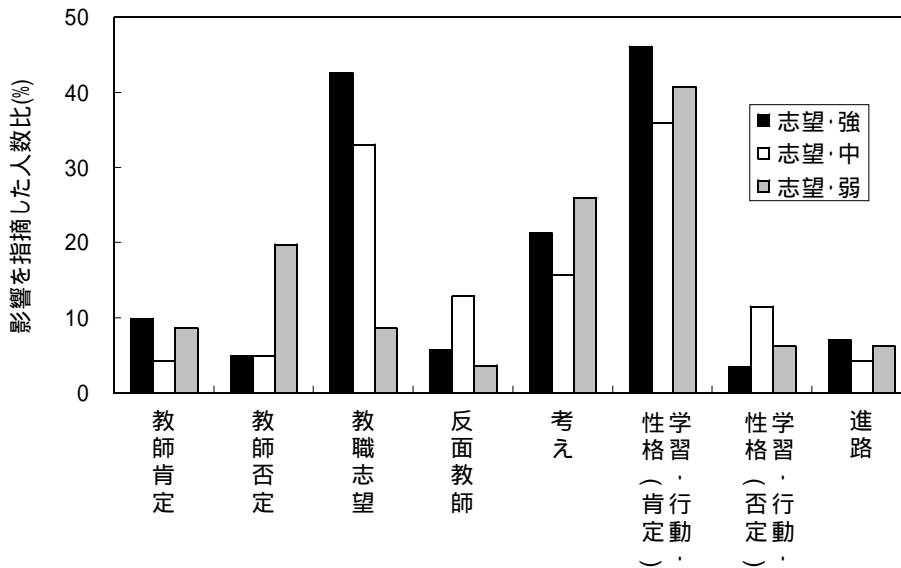


図3-7 教職志望の強さとそれぞれの影響を指摘した人数比

師への否定的な見方($\chi^2(2) = 19.5, p < .01$), 教職志望($\chi^2(2) = 27.8, p < .01$), 反面教師($\chi^2(2) = 7.7, p < .05$), 学習・行動・性格面での否定的な変化($\chi^2(2) = 6.8, p < .05$)という四つのカテゴリーで、志望強度による有意な偏りが認められた(表 3-7)。

残差分析の結果に基づいて各群の参加者が指摘した影響の特徴を整理すると、次のようにまとめることができる。すなわち、志望・強群では教師になりたいと思ったきっかけや、こういう教師になりたいというモデルとなったという影響を指摘した人数比が高かった。逆に、学習・行動・性格面での否定的な影響を指摘した人数比が低かった。この群は他の2群に比較すると、教師からの肯定的な影響を強く認識し、その記憶に動機づけられている群であると言える。志望・中群では、反面教師としての影響ならびに学習・行動・性格面での否定的な影響を指摘した人数比が高かった。ただし、教職志望のきっかけや、学習・行動・性格面での肯定的な影響を指摘した参加者も少なくはない。従って、教師からの肯定的な影響と否定的な影響をともに受けている、アンビバレントな群であると言える。最後に志望・弱群では、教師や教職に対して否定的な見方をするようになったという影響を指摘した人数比が他の群より高かった。また志望・強群とは反対に、教職を志望するきっかけとなったという影響を指摘した人数比が低かった。学習・行動・性格面での肯定的な影響を指摘し

表3-7 教職志望の強さと影響を指摘した人数比
(教職志望の強さによる偏りが見られた影響)

		志望		
		強	中	弱
[教師への否定的な見方]				
指摘した	度数	7	7	16
	%	(5.0)	(4.3)	(19.8)
	残差	-1.7	-2.1	4.4**
指摘しなかった	度数	134	132	65
	%	(95.0)	(95.7)	(80.2)
	残差	1.7	2.1*	-4.4
[教職志望]				
指摘した	度数	60	46	7
	%	(42.6)	(33.1)	(8.6)
	残差	3.7**	0.6	-5.0
指摘しなかった	度数	81	93	74
	%	(57.4)	(66.9)	(91.4)
	残差	-3.7	-0.6	5.0**
[反面教師]				
指摘した	度数	8	18	3
	%	(5.7)	(12.9)	(3.7)
	残差	-1.3	2.7**	-1.6
指摘しなかった	度数	133	121	78
	%	(94.3)	(87.1)	(96.3)
	残差	1.3	-2.7	1.6
[否定的な変化]				
指摘した	度数	5	16	5
	%	(3.5)	(11.5)	(6.2)
	残差	-2.2	2.5*	-0.4
指摘しなかった	度数	136	123	76
	%	(96.5)	(88.5)	(93.8)
	残差	2.2*	-2.5	0.4

* p<.05 ** p<.01

た参加者は他の2群と差が無いが、これら否定的な出来事の記憶が強く影響し、「教職に就きたくない」という意志決定につながっていると推測される。

(2)-5 過去から現在につながる影響

それでは上で明らかにされた特徴的な出来事は、小学校から高校までの間に一様に分布しているのだろうか。影響を及ぼした出来事のうち、現在の自己との関わりが明らかなのは、志望・強群と志望・中群にとっては「教職を志望したきっかけ」「こんな教師になりたいというモデルになった」という出来事(表3-6の「教職志望」)であり、反対に志望・弱群にとっては「教師全体に対して否定的な見方をするようになった」「教師にはなるまいと感じた」という出来事(表3-6の「教師への否定的な見方」)である。そこでこれらに該当する記述に限定して、経験された時期を整理した。これらの出来事を想起した参加者

は、志望・強群が 60 名、志望・中群が 46 名、志望・弱群が 16 名であった。該当する参加者全体での総度数を表 3-8(a)に示す。いずれの影響においても時期による差が有意であった(志望・強群, $\chi^2(3) = 17.5, p < .01$; 志望・中群, $\chi^2(3) = 9.0, p < .05$; 志望・弱群, $\chi^2(3) = 12.4, p < .01$)。ただし表 3-8(a)には、一人の参加者が該当する出来事を複数想起したケースも含まれている。そこで該当する複数の出来事を想起した参加者を除いて、人数を整理した結果を表 3-8(b)に示す。やはりいずれの影響においても、時期による差が有意であった(志望・強群, $\chi^2(3) = 24.1, p < .01$; 志望・中群, $\chi^2(3) = 6.6, p < .10$; 志望・弱群, $\chi^2(3) = 15.0, p < .01$)。いずれの結果からも、教職志望という現在の自己と強く結びつく出来事の記憶は、小学校高学年から中学校に偏っていることがわかる。参加者が想起した内容は、もともと中学校時代の出来事が多かった(図 3-1 参照)。従って表 3-8(a)(b)に示した記憶が小学校高学年から中学校に偏っているのは当然だという見方もできる。しかしここで重要なのは、教師にまつわる出来事を想起したときに、時間的に現在に接近した出来事よりもこの時期の

表3-8 教職志望の強さと各群に特徴的な影響を経験した時期

(a) 総度数に基づく分析

志望	影響の内容		時期			
			小学校1-3年	小学校4-6年	中学校	高校
強	教職志望	度数	5	29	21	15
		%	(7.1)	(41.4)	(30.0)	(21.4)
		残差	-12.5	11.5**	3.5**	-2.5
中	教職志望	度数	7	14	22	11
		%	(13.0)	(25.9)	(40.7)	(20.4)
		残差	-6.5	0.5	8.5**	-2.5
弱	否定的な見方	度数	1	4	14	1
		%	(5.0)	(20.0)	(70.0)	(5.0)
		残差	-4.7	-2.7	7.3**	-4.7

** p<.01

(b) 人数に基づく分析

志望	影響の内容		時期			
			小学校1-3年	小学校4-6年	中学校	高校
強	教職志望	度数	2	26	14	9
		%	(4.9)	(39.0)	(34.1)	(22.0)
		残差	-3.5	4.3**	0.4	-1.2
中	教職志望	度数	5	10	16	8
		%	(12.8)	(25.6)	(41.0)	(20.5)
		残差	-1.8	0.1	2.3*	-0.6
弱	否定的な見方	度数	0	3	9	1
		%	(0.0)	(23.1)	(69.2)	(7.7)
		残差	-2.1	-0.2	3.7**	-1.4

* p<.05 ** p<.01

出来事が多く想起され、しかもそこに、現在の自己と結びつく内容が含まれているということである。このことは、重要な自伝的記憶については、lifetime period という時間枠に制約されることなく、その枠を越えて現在の自己と結びついて認識されていることを示している。

(2)-6 記述の特定性

参加者の回答には、時間と場所を特定できるエピソードを記述したものと、そうでないものが混在していた。記述内容が特定の出来事か一般的な記述か、二人の評定者が独立に分類し(一致率 94.0 %), 不一致の場合は再度分類し直した。影響を受けた出来事は全部で 587 件が収集されたが、そのうちの 254 件(43%)は、時間と場所が特定できない一般的な記述であった。これらは特定のエピソードというよりも、一連の類似の出来事や一人の教師にまつわる様々な思い出がまとまってスキーマ化したものであり、Conway の階層構造モデル(Conway, 1996b; 第 2 章・第 1 節参照)では「一般的な出来事(general events)」に該当する。

職業や進路の選択と直接結びつくのは「教職志望」「教師への肯定的な見方」「教師への否定的な見方」という影響であるが、前二者と後者では記述の特定性が異なっていた。「肯定的な見方」につながった出来事では 26 件中 17 件(65%)、「教職志望」につながった出来事では 132 件中 74 件(56%)が、下記のように一般的な記述になっていた。

小 1-2 年の担任の先生がいつも明るく、まるで母親のようだった。優しさと厳しさがあった。その姿に憧れて教師になりたいと思うようになった。

小 5 の時の先生は宿題の日記や作文をみんなの前で読んでほめてくれた。いつも厳しい先生だったけれど、一人一人の良いところを見つけ、全員のことをほめていたので、それがそれぞれの自信になった。私もそんなふうに、子どもたちを勇気づけてあげられる教師になりたいと思いました。

これに対して「否定的な見方」につながった出来事では、35 件のうち 28 件(80%)が、次に示すような特定のエピソードだった。

中 1 の時クラスで起きた悪いことを全部自分のせいにさせられた。教師に対して嫌悪の気持ちがわいた。

受験高校を決める際、1 つランクが上の高校を受けられる範囲にいたのに、

「おまえには無理だ」と先生に威圧的に受験校のランクを1つ下げたところを受けさせられた。このとき、教師とはあのような先生ばかりかと教師嫌いになった。

² 検定の結果は有意であり($\chi^2(2)=6.88, p<.05$)、「肯定的な見方」や「教職志望」につながった出来事については一般的な記述が多く、「否定的な見方」につながった出来事では特定のエピソードが多かった。

今回の分析では、特定のエピソードも一般的な記述もともに「1つの記憶」としてカウントした。しかし一般的な記述の背景には複数のエピソードがあることを考えると、今回の結果で示された以上に、志望・強群の記憶は快方向に偏っているのかもしれない。

(3) 影響を受けた出来事とそれ以外の出来事 - 記憶としての違い

ここまでで示されたように、教師との関わりの中には、参加者を教職志望へと方向づけた出来事もあれば、逆に教職志望から遠ざけた出来事もあった。また進路や職業を選択するきっかけになった出来事だけでなく、態度や価値観、行動、習慣等に影響した出来事も想起された。しかしそれだけであれば、ある出来事的那个人に影響を及ぼしたというだけのことであり、あえて「自伝的記憶がそのような機能を担っていた」と考える必要はない。そこで、参加者が「影響を受けた」と認知している出来事とそうでない出来事では、記憶としての特性に差異があるかを検討する。

本研究では想起された出来事について、どのくらい鮮明に想起されるか(鮮明度)、またその出来事についてこれまで一人で思い出したり(個人想起頻度)、他者と話題にしたことがどのくらいあったか(対人想起頻度)という点について評定を求めた。参加者ごとに、「影響を受けた」と指摘された出来事とそうでない出来事について、鮮明度・個人想起頻度・対人想起頻度の平均値を求め、志望強度(強, 中, 弱)×影響(有, 無)の分散分析を行った。ただし、影響を受けた出来事を全く指摘しなかった参加者、ならびに想起した全ての出来事に対して「影響を受けた」と指摘した参加者は、この分析から省かれた。鮮明度については、志望・強群 121 名、志望・中群 111 名、志望・弱群 63 名のデータが分析された。また想起頻度を問う項目は、調査後半に参加した人に対しての

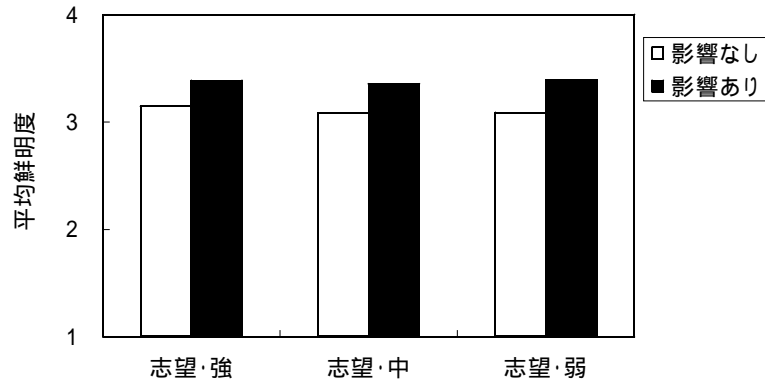


図3-8 教職志望の強さ，想起された出来事の影響と鮮明度

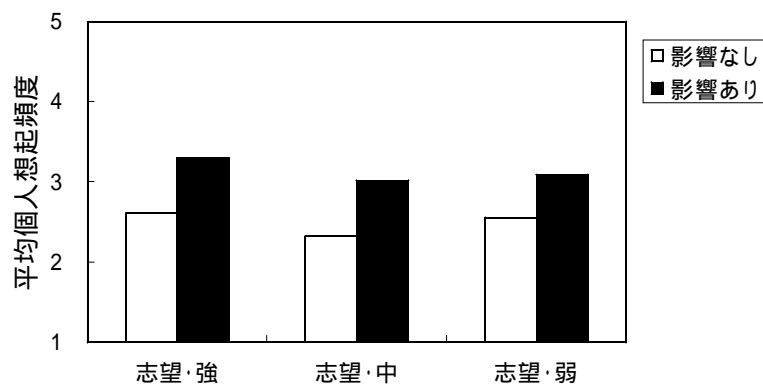


図3-9 教職志望の強さ，想起された出来事の影響と個人想起頻度

み設定されていた。そのため分析に用いられたのは，志望・強群 24 名，志望・中群 17 名，志望・弱群 12 名のデータである。

分散分析の結果，鮮明度(図 3-8)と個人想起頻度(図 3-9)において，影響の主効果が有意であった(鮮明度, $F(1,292)=50.55, p<.01$ ；個人想起頻度, $F(1,50)=20.31, p<.01$)。対人想起頻度の平均評定値はどの条件でも 2.0 前後と低く，影響の主効果，志望強度の主効果，交互作用のいずれも有意ではなかった。参加者が「影響を受けた」ととらえている出来事はそうでない出来事に比較して，これまで一人で思い出したり考えたりする頻度が高く，またより鮮明に想起されると言える。この結果は，こうした出来事が後の行動や選択に直接影響しただけでなく，自伝的記憶として保持され繰り返し想起されつつ，その後も影響を及ぼしていること，そしてそのことが記憶の鮮明さを強める結果をもたらしたことを示唆している。

4. 考察

(1) 教職志望意識と自伝的記憶の機能

研究3では教育学部(教員養成系)の大学生に、小学校から高校までの教師にまつわる自伝的記憶の想起を求めた。教職に就くことを志望する意識の強さと想起内容の関連を検討したところ、教職志望意識の強い参加者はそうでない参加者に比較すると不快な出来事の記憶が少なく、相対的に快方向に偏っていることが示された。また想起された出来事から影響を受けたという認識も強く持っていた。こうした肯定的な記憶や、影響力のある出来事の記憶が蓄積し、その人を教職へと動機づける基盤として機能していると推測される。

同時に志望強度の強い参加者では、自分が想起した出来事に対して「その出来事から影響を受けた」と指摘する率が高く、過去の出来事とその後の(あるいは現在の)自分の行動や態度との間に、密接な連関を感じていることが示唆された。しかも志望強度の強い参加者は、小学校低学年の時点で経験した出来事について、「影響を受けた」と判断する率が高かった。

参加者が「影響を受けた」と指摘した出来事の記憶と、Pillemer (1998)が指摘した4つの方向づけ機能(出発点、転換点、基準点、類推)との対応を考えてみよう。

志望・強群の回答で多かったのは「教師になろうと思ったきっかけ」の記憶であり、これは出発点に該当する。これに対して志望・弱群で特徴的に見られたのは「教師全体に対して否定的な見方をするようになった」「教師にはなるまいと思った」という記憶である。これは内容としては志望・強群とは対照的であるが、職業や進路の選択に直接関わり、出発点あるいは転換点として機能している点は同じである。いずれも職業選択において、その人を動機づける記憶と言えよう。

「学習・行動・性格面での肯定的な変化」「否定的な変化」につながった出来事の記憶は、職業や進路の選択に直接影響したとは考えにくい。しかし表3-6にあげた例にも見られる「先生の指導で英語が好きになった」「その後、絵を描くのが嫌いになった」「今の自信につながっている」「行動が消極的になった」等々の記述は、参加者が現在の自分と過去の出来事を結びつけ、その出来事が今の自分につながる出発点や転換点であると認識していることを示唆する。こ

うした出来事が現実に出発点となったことを確認する術はないが、本人がそれを出発点として認識していることが重要なのである。

価値観や考え方に影響を及ぼした出来事の記憶は基準点に該当する。人によっては、それが出発点となったり、類推機能を果たしているケースもあるかもしれない。また「こんな人間になりたい」、「こんな人にはなりたくない」、「こんな教師になりたい」、「こんな教師にはなりたくない」といった記憶も、参加者の態度や価値観を構成する一要素として、基準点としての機能を果たすだろう。さらに、「こんな教師になりたい」「こんな教師になりたくない」という記憶は、本人が将来教職に就いた時に類推機能を果たし、行動や態度に影響することが予想される。

Pillemer (1998)は自叙伝や大学生活の記憶の分析から、自伝的記憶が方向づけ機能を担っていることを指摘したが、記述的な分析にとどまっていた。これに対して研究3は、自伝的記憶と教職志望意識との間に関連があることを明らかにし、自伝的記憶が方向づけ機能を有していることを検証したと言える。さらに Pillemer が指摘した4つの方向づけ機能に該当する内容が見出され、こうした機能が一般性を持つことが示された。

先行研究では自伝的記憶の内容が心理社会的発達段階(Conway & Holmes, 2004)や社会的動機(Woike, Gershkovich, Piorkowski, & Polo, 1999)と関連していることから、記憶が自己機能を有することが指摘されてきた。これらに加えて研究3は、自伝的記憶が職業選択という青年期の自己にとって重要な課題と密接に関連していることを明らかにし、自己機能の一端をとらえた。強い感情を伴って鮮明に繰り返し想起され、かつ人生の目標と結びついているという意味で、教職への動機づけに関わる記憶は自己定義記憶と言ってよいだろう。

(2) 記憶としての特殊性

さらに今回の結果では、参加者が「影響を受けた」と認識している出来事は、他の出来事と比較すると、これまでに頻繁に思い出されており、現在も鮮明に想起されることが示された。これらの出来事は参加者に影響を与えたという意味で特殊な出来事であるだけでなく、記憶としても、影響を及ぼさなかった出来事とは異なっていると言える。ある出来事とその後の行動や態度に直接影響

ただだけでなく、自伝的記憶として保持され繰り返し想起されることにより、影響を与え続けていると考えられる。こうした記憶が鮮明に想起されるのは、その出来事がもともと強い感情を引き起こしたことによるのかもしれないが、繰り返し想起されたことも、鮮明度を高めるのに寄与しているのであろう。

ただし、教師にまつわる出来事が他者と話題になることは少なかった。先行研究では、自伝的記憶は他者に語るというかたちでリハーサルされることが多いと指摘されている(McLean, 2005; Skowronski & Walker, 2004)。McLean (2005)の研究で収集された自己定義記憶の場合、平均 18.8 歳の参加者が平均 13.3 歳頃の出来事を想起しており、約 90%の自己定義記憶が他者に語られていた。また移行期の記憶が想起されやすいことを指摘した Pillemer らの研究でも、収集された記憶の約 70%は、これまで他者に話されたことがあった(Pillemer et al., 1986, 1988)。一方、自伝的記憶には文化差があり、米国に比べると中国や韓国の子どもは、自分が経験した出来事の詳細や、出来事に対する評価を語ることが少ないことが指摘されている(Han, Leichtman, & Wang, 1998)。またアメリカと中国の大学生に最初期記憶(earliest memory)の想起を求めた研究でも、アメリカ人大学生の方が特定の出来事について詳細に想起することが見出されている(Wang, 2001)。今回の結果も、こうした文化差の一つの表れであるのかもしれない。

(3) 記述の一般性と特定性

参加者の想起内容の多くは特定の出来事に関するものであったが、一般的・概括的な記述も認められた。そして影響を受けた出来事の中でも、肯定的な内容の場合は一般的な記述が多く、否定的な内容の場合は特定の記述が多かった。太田・越智(1996)と越智(2004)は大学生の最初期記憶を検討し、同様の傾向を見出している。太田らの研究では、快記憶は「小学校の遠足」「家族旅行」など、長い時間にまたがるものが一連の出来事全てを含んで報告されるケースが多かった。これに対して不快記憶は「自転車でのケガ」「ペットの死」など、快記憶に比べると瞬間的で特定の記憶が多かった。

自伝的記憶の概括性は、抑うつとの関連で議論されることが多い(Williams, 1996)。しかし以下に検討するように、この問題は記憶の機能とも関連するこ

とが推測される。自伝的記憶の研究では、機能の検討を目的としたものに限らず、1日あるいは数時間以内の特定の出来事の想起を求めることが多い(e.g., Wright & Nunn, 2000)。こうして引き出された特定性の高いエピソードは、他者に情報を与えたり楽しませたり、会話に説得力を与えるなど、対人場面で有益な機能を果たすと考えられる。また手段 - 目的問題解決課題を用いた検討からは、特定性の高い自伝的記憶を想起できることが、問題解決に有効に働くことが指摘されている(Evans et al., 1992; Sidley et al., 1997)。本研究で「否定的な見方」につながった記憶は、ネガティブで特定性の高いエピソードであった。不快な経験を避けるには、その状況をできるだけ具体的に覚えておくことが必要であり、そのために、特定性の高い記憶表象が形成されていると考えられる。これに対して肯定的な内容では、スキーマ化した概括的な記憶が報告されることが多かった。その人を教職へと動機づけたり、「小学校の頃の先生の影響で教職を選択した」というライフストーリーを構成するには、それが最適レベルの抽象度であり、それ以上細分化したり、より特定の記憶を検索することには、あまり意味がないのかもしれない。これらの結果は、特定のレベルから抽象的なレベルまで、構造のレベルに応じて自伝的記憶が異なる機能を果たしている可能性を示唆している。

(4) 自伝的記憶の構造との関連

研究1・研究2では、数年程度の幅を持つ lifetime period が自伝的記憶の構造に重要な役割を果たしており、各々の lifetime period で経験された出来事同士が強く結びついていることが示唆された。しかし研究3で収集された重要な出来事の記憶は、lifetime period の枠を越えて、その後の自己に影響を及ぼしている。研究3で得られた三つの結果がそのことを示している。第一に、影響を受けた出来事とそれを経験した時期との関係を見ると、全体としては最近の出来事ほど「そこから影響を受けた」と認識される率が高い。しかし参加者は小学校高学年や中学校時代の出来事についても、少なからずその後の自分に影響を与えたと認識していた(図 3-6 参照)。第二に、教職を志望する意識が強い参加者は、小学校低学年の出来事から既に、「影響を受けた」と認識している率が他の群よりも高かった(表 3-5 参照)。第三に、現在の教職志望と直接結び

つく影響に関しては、中学校や小学校高学年に経験されているケースが多かった(表 3-8 参照)。以上の結果は、個人の職業選択や態度に関わるような重要な記憶の場合、数年程度の lifetime period を超えて現在との結びつきが認識されていることを示している。

研究 4・研究 5 では二つの方向で、研究 3 を発展させる。研究 4 では、現在に影響を及ぼすような重要な出来事の場合、それが出来事として特殊だけでなく、記憶としても特殊な想起過程を伴っていることを検討する。この問題について研究 3 では、参加者の一部だけで鮮明度と想起頻度を検討したに過ぎなかった。研究 4 ではまず、この問題に関わる検討が従来の研究でも不十分であった点を指摘する。その上で様々な世代の参加者で、重要度の高い出来事と低い出来事の想起過程の差異を詳細に検討する。また研究 3 で示されたように、重要な出来事は長い時間が経過しても、現在の自己と関連づけて認識されている。研究 5 では研究 4 のデータを再分析し、過去の出来事を現在の自己と結びつけ意味づける過程について、検討を加える。

第 5 節 研究 4 思い出の中の教師 - 記憶の機能と想起特性 -

1. 出来事か、記憶か

研究 3 は、教師にまつわる自伝的記憶が職業選択に強く関わり、自己機能や方向づけ機能を果たしていることを明らかにした。しかし研究 3 の目的でも述べたように、自伝的記憶の研究においては、出来事そのものではなく、あくまでも記憶が様々な機能を担っていることを明らかにしなければならない。そうでなければ、過去の出来事と現在の職業選択を結ぶものとして「自伝的記憶」を位置づける必要はなくなってしまふ。この点について研究 3 では「鮮明度」「想起頻度」を検討し、もとの出来事ではなく、その出来事を繰り返し鮮明に想起することが機能を有するのだと指摘した。しかし研究 3 では鮮明度と想起頻度を検討しただけであり、しかも想起頻度は一部の参加者でしか検討されていなかった。そこで研究 4 では、本人にとって重要な意味を有し様々な機能を担う出来事は、その内容が特殊であるだけでなく、記憶としても特殊性を有してい

るということを、より詳細に検証する。これは実は研究3に限られる問題ではない。これまでの研究では、こうした機能を担う自伝的記憶が、記憶としてどのような特性を有しているかという検討が不十分だった。この点を、自伝的記憶の自己機能に関わる Singer らの研究と、方向づけ機能を強調する Pillemer の研究を例に説明しよう。

(1) Singerらの自己定義記憶

第一の例は、本章第2節の自己機能の項で紹介した「自己定義記憶」である。自伝的記憶の中でも、その人のアイデンティティと密接に結びついていて「私」を象徴する記憶は、「自己定義記憶」と呼ばれる (Singer & Salovey, 1993)。

自己定義記憶は「私がどんな人間かを表す」という内容面での特性だけでなく、「繰り返し想起される」「強い感情を伴う」「鮮明に想起される」といった想起過程の特性や、「他の記憶と結びついている」という構造上の特性を有するとされている (Singer & Blagov, 2004a, 2004b)。しかしこれらは臨床場面でのクライアントの語りから引き出された特性であったり (Singer & Blagov, 2004a)、自己定義記憶について評定を求めた結果から主張されていることに過ぎない。例えば Moffitt & Singer (1994) は想起された10の自己定義記憶の鮮明度を0-6の7段階で評定させ、平均4.74 ($SD=0.77$) と高い評定が得られたことを報告している。しかし自己定義的でない記憶との比較が行われているわけではない。また大学生の自己定義記憶を検討した McLean (2005) は、収集された自己定義記憶の90%がこれまで、「自分のことを説明する」「聴き手を楽しませる」など様々な目的のために、他者に対して語られていたことを見出している。しかしここでも、自己定義記憶とそれ以外の記憶が比較されているわけではない。自伝的記憶が社会機能を有することからも推測されるように、記憶を人に語ること自体は日常生活で珍しいことではないし (Hyman & Faries, 1992; Marsh & Tversky, 2004; Pasupathi & Carstensen, 2003)、語られる記憶が全て自己定義的であるわけでもない。自己定義記憶が象徴する経験が本人にとって特別に重要であることは認めるにしても、他の記憶と比較して、自己定義記憶の構造や想起過程の独自性が検証されているとは言えない。

(2) Pillemerの個人的出来事記憶

第二の例は本章第2節の方向づけ機能の項で紹介した「個人的出来事記憶」である。Pillemer(1998, 2001, 2003)はスキーマやスクリプトのように抽象的な知識構造だけでなく、一回だけの出来事の記憶であっても重要な機能を担っていることを強調し、特定の時間と場所において生起した、特定の出来事の記憶を「個人的出来事記憶(personal event memory)」と名づけた。そしてその内容分析から、「出発点」「転換点」「基準点」「類推」という四つの機能を提唱した。

方向づけ機能の項であげた例からもうかがわれるように、個人的出来事記憶は非常に鮮明である(例:「このときの先生の厳しい表情や、きゅっと引き締まった口元を思い出します」Pillemer, 1998, p.78)。Pillemerによると出発点などの機能を持つ個人的出来事記憶は、「その時点での個人的な環境についての詳細な説明を含んでいる。また感覚イメージ(視覚, 聴覚, 嗅覚, 触覚)も含んでいる。この記憶を思い出す人は、その出来事が現実起きたことを信じている」(Pillemer, 2001, p.124)という。すなわち、鮮明に確信を持って想起されるという意味で特徴的な想起過程を伴っているというのである。

また、「以来、自分の能力に疑問を感じたり、人からそんな目で見られて嫌になると、先生の言葉を思い出すのです」(Pillemer, 1998, p.74)という基準点の例にも示されるように、個人的出来事記憶は想起頻度が高いことも示唆される。Pillemer自身も個人的出来事記憶は「長期的な目標や、顕在的あるいは潜在的なプランと結びつく。そしてその記憶は最初の経験の後も長期間にわたって、その人を励まし動機づけ刺激し続ける」(Pillemer, 2001, p.127)、また「最初の出来事そのものよりも、繰り返し想起される記憶が信念や態度を支え続けている」と強調している(Pillemer, 2001, p.128)。すなわち、こうした出来事は経験した時点において影響を及ぼすだけでなく、繰り返し想起され、記憶として影響を及ぼし続けるとされている。

このように個人的出来事記憶は独自の機能を担っており、かつ繰り返し鮮明に想起されるという意味で、記憶としての独自性を有している可能性が高い。しかしPillemerの議論は、多数の事例に基づいているものの、必ずしも十分な検証を経ているわけではない。むしろ「個人的出来事記憶は、強い確信度を伴って鮮明に繰り返し想起され、方向づけ機能を果たし続ける」という仮説を、

自明のこととして扱っているかのようである。

2．記憶としての独自性

このように Singer らや Pillemer は、自己機能や方向づけ機能を有する記憶は、そうでない記憶に比べると、繰り返し鮮明に想起されると仮定している。しかしながら、こうした記憶とそうでない記憶で、想起過程(鮮明さ、想起頻度等)や構造(他の記憶とのつながり)を比較しているわけではない。はたして、重要な出来事の記憶は、他の記憶とつながって鮮明に想起される - より一般的には、記憶内容が特殊であれば構造や想起過程も特殊である - と考えて良いものだろうか。この問題について、トラウマ記憶の特殊性をめぐる議論がヒントを与えてくれる。

非常に不快な感情を伴って経験された出来事は、トラウマ記憶として、記憶の中でも特殊な位置を占めると考えられることが多い。特に事例研究からは、トラウマ記憶は断片化しており、一貫性に欠けると指摘される (Berntsen & Rubin, 2006; Byrne, Hyman, & Scott, 2001; Foa, Molnar, & Cashman, 1995; Porter & Birt, 2001)。しかしトラウマ記憶に限らず、時間経過に伴い断片化することは十分考えられる。トラウマという内容の特殊性が、記憶として構造や想起過程の特殊性を伴うと考える必然性は無い。

トラウマ記憶の特性を非トラウマ的な記憶と比較して検討した研究は、ほとんど行われていない。数少ない実証的な検討の一つに Porter & Birt (2001) によるものがある。Porter らは大学生に、これまでの人生で最もトラウマ的な経験と、最もポジティブな感情を伴う経験を想起させ、鮮明さ等の評定を求めた。その結果、ポジティブ記憶に比べてトラウマ記憶は記述内容が詳細で、自身の感情状態に言及することが多く、これまでの想起頻度も高かった。その一方で、記憶の鮮明さ、一貫性、全体的な質 (poor-excellent) はポジティブ記憶と差が無かった。また Byrne et al. (2001) は、トラウマ経験・ネガティブ経験・ポジティブ経験の記憶特性を比較した。その結果、全体的な鮮明さ、詳細さ、一貫性、正確さに対する確信度、リハーサル頻度は、3種類の記憶の間に差が無かった。また視覚的・聴覚的細部情報の量や、その経験の直前の出来事の記憶などはポジティブ記憶が優れており、トラウマ記憶とネガティブ記憶の間には差が無か

った。

特別な出来事の記憶が特別な想起過程や構造を伴うというのは、自明のことと思われるかもしれない。しかし現実にそうとは限らない。

3．記憶特性の検討

(1) 本研究の目的

研究3も含めて、これまで自伝的記憶の機能を検討した研究では、出来事そのものではなく記憶が機能を担っているという点についての確認が不十分であった。本研究では、自己機能や方向づけ機能を有する記憶が独自の想起過程を伴っていることを、記憶特性の検討を通じて明らかにすることで、「出来事」そのものではなく「出来事の記憶」が重要な機能を果たしていることを示す。

そこで研究4では参加者に、中学時代の教師にまつわる記憶の想起を求め、より包括的に様々な視点から記憶特性を検討する。参加者にはまず、中学時代の教師にまつわる三つの出来事の想起を求める。そして「その経験から何かを学んだ」「その経験がその後の自分に影響を与えた」「自分を理解するのに、その経験が重要な意味を持っている」という視点から三つの出来事を順位づけてもらうことにより、自己機能や方向づけ機能を有する重要な出来事と、そうでない出来事を収集する。そしてこれらの記憶特性の評定を求め、重要な出来事の記憶が内容だけでなく構造や想起過程においても特殊であるのか検討する。

また本研究では、幅広い年齢層(19-50歳)の参加者を対象とすることにより、時間経過が想起過程に及ぼす影響を検討する。自伝的記憶も時間経過に伴って忘却されることから(Linton, 1982; Rubin, 1982; Wagenaar, 1986; White, 2002)、想起される記憶の鮮明さや詳細さは、時間が経つほど低下すると考えられる。しかし重要度の高い記憶は、自己定義記憶(Singer & Blagov, 2004a, 2004b)や個人的出来事記憶(Pillemer, 2001)として、時間経過にもかかわらず鮮明に想起されると予測される。

(2) 先行研究における記憶特性の評価

これまでの自伝的記憶研究では、出来事の新奇性や経験時の感情を問うたり(例：Wagenaar, 1986)、想起の鮮明度や想起頻度を問うことが多かった(例：

Rubin & Schulkind, 1997)。また鮮明度や想起頻度だけでなく、記憶特性をより包括的に検討するための尺度も作成されている。先行研究で検討されてきた記憶特性は、出来事そのものに関わる特性と、想起経験に関わる特性に分けられる。Berntsen & Rubin (2006)はトラウマ経験がその人のライフストーリーやアイデンティティにとってどれほど中心的なものとして認識されているかを検討する尺度(Centrality of Event Scale: CES)を開発した(表 3-9)。これは出来事そのものに対する認識や意味づけを問う尺度である。

表3-9 Berntsen & Rubinの出来事の中心性質問紙 (Berntsen & Rubin, 2006)

カテゴリー*	項目例
参照点	<ul style="list-style-type: none"> ・この出来事は私が他の経験について考えたり感じたりするやり方に影響を与えた。 ・この出来事は私が新たな経験を理解するための参照点となった。
アイデンティティ	<ul style="list-style-type: none"> ・この出来事は私のアイデンティティの一部になった。 ・この出来事は私のライフストーリーの中心的な部分になっていると感じる。
転換点	<ul style="list-style-type: none"> ・この出来事は私の人生を永続的に変えた。 ・この出来事は私の人生の転換点だった。

*因子分析の結果は1因子構造であった。ここではBerntsenらの研究の発想を示すために、Berntsenらが想定していた内容を「カテゴリー」と表記する。

一方、Johnson, Foley, Suengas, & Raye (1988) はリアリティ・モニタリング研究の発想に則り、自伝的記憶の想起経験がどのような現象的特性を伴っているかを検討した。Johnsonらは参加者に実際に経験した出来事と想像上の出来事の想起を求め、38項目からなる「記憶特性質問紙(Memory Characteristics Questionnaire: MCQ)」によって想起経験を評定させた。高橋・清水(2002)は、これら38項目が表3-10に示す8因子から構成されていることを見出した。

またRubin, Schrauf, & Greenberg (2003)は、自伝的記憶の想起に伴う主観的な感覚として、「その出来事を再体験しているという感覚」と「その記憶が正しいという確信」という二つを重視した。さらに、出来事そのものの特性や、想起過程を検討する項目を含めて、19項目からなる「自伝的記憶質問紙(Autobiographical Memory Questionnaire: AMQ)」を構成した(表3-11)。

表3-10 Johnsonらの記憶特性質問紙 (Johnson et al., 1988 ; 高橋・清水, 2002)

因子	項目例*
鮮明度	この出来事の記憶全体の鮮明度は、きわめてはっきりしている。
事後回想	振り返ってみると、この出来事は大きな意味を持っていた。
時間情報	この出来事が何年に起こったか、はっきりしている。
全体印象	そのときの感じは良かった。
感覚経験	この出来事の記憶には匂いがたくさんある。
空間情報	この出来事の記憶の中の事物の位置関係は、はっきりしている。
奇異性	出来事の筋が奇妙である。
前後関係	この出来事の前に起こった関係する出来事を、はっきり覚えている。

*項目例は高橋・清水(2002)を参考に訳し直した。

表3-11 Rubinらの自伝的記憶質問紙 (Rubin, Schrauf, & Greenberg, 2003)

カテゴリー*	項目例
再体験	<ul style="list-style-type: none"> ・ 私はもとの出来事をもう一度繰り返しているように感じる。 ・ その出来事が私の身に起きたと知っているだけでなく、思い出すことができる。 ・ その出来事を思い出すと、現在から振り返って観察しているというよりは、そのときに引き戻されて再び主人公になったように感じる。
確信	<ul style="list-style-type: none"> ・ その出来事は自分が思い出した通りに起きたものであり、想像や脚色は混ざっていない。
出来事	<ul style="list-style-type: none"> ・ この記憶は重要なメッセージを与えてくれたり、基準点や転換点になっているという意味で、私の人生にとって重要だ。 ・ それは特定の時点で一回だけ起きた出来事である。
想起過程	<ul style="list-style-type: none"> ・ その出来事を心の中で見ることができる。 ・ その出来事を思い出すと、断片的な事実や一場面ではなく、一貫したストーリーとして浮かんでくる。 ・ その出来事を思い出すと、当時と同じ気分を感じる。

*Rubinらは因子分析を行っていないので、ここでは「カテゴリー」と表記する。

このようにこれまでの研究では、出来事の内容と想起過程を検討する項目が考案されている。このうち、出来事の内容に関する評定は、その記憶がどのような機能を担っているかを知るための手がかりになるだろう。Berntsen & Rubin (2006)によるCESは、記憶がアイデンティティの一部として認識されていたり、考え方を方向づける基準になっている程度を問う内容であり、記憶が自己

機能あるいは方向づけ機能を担っているかを検討するものとなっている。また想起過程に関する評定は、想起現象の意識的な側面をとらえるだけでなく、自伝的記憶の構造に関する手がかりも与えてくれる。例えば Johnson らの記憶特性質問紙にある「この出来事の前に関係する出来事を、はっきり覚えている」、あるいは Rubin らの自伝的記憶質問紙にある「その出来事を思い出すと、断片的な事実や一場面ではなく、一貫したストーリーとして浮かんでくる」という項目は、その記憶が他の記憶とつながった系列構造を構成しているのかを問うていると言える。

(3) 研究4で検討する特性

自伝的記憶の記憶特性を検討した研究では、上記の Johnson et al. (1988)の尺度等を参考に、研究目的に合致した項目を設定することが多い。本研究は、自己にとって重要な機能を有する記憶とそうでない記憶の記憶特性を、詳細に比較検討することを目的としている。そこで Johnson et al. (1988)や Rubin et al. (2003)の尺度を中心に、自伝的記憶の記憶特性を検討したその他の先行研究(例: Brewer, 1988; Herz & Schooler, 2002; Larsen, 1998; Porter & Birt, 2001; Rubin & Schulkind, 1997)も参考にし、出来事(中心性、新奇性、感情、特定性)と想起過程(鮮明さ、再体験の感覚、正確への信念、一貫性、リハーサル頻度、等)を評価する項目を作成した(表 3-12, 3-13)。

(3)-1 出来事の評価

出来事そのものに関しては、出来事の「中心性」「感情」等を問うた。「出来事の中心性」は Berntsen & Rubin (2006)の尺度に修正を加えたものである。Berntsen らの尺度は、(1)重要な出来事はアイデンティティにとって重要な位置を占め自己理解に影響する、(2)重要な出来事は転換点となり「あの出来事が人生を変えた」という認識を引き起こす、(3)重要な出来事は参照点となり様々な判断に利用される、という仮説に基づいて構成されていた。しかしこの尺度は本来、トラウマ記憶の特性を検討することを目的に作成されており、また「参照点 (reference point)」といった難解な表現もそのまま用いられていた。本研究で扱う記憶は中学時代の教師をめぐる出来事であり、それが転換点なっ

て人生を変えた可能性は、事故や犯罪の被害経験ほどには高くないと考えられる。そこで、アイデンティティと参照点に関連する7項目を用いるとともに、Johnsonらの尺度を参考に、出来事の重要性を問う4項目を設定した。以上の「中心性」に、経験時の感情や新奇性など自伝的記憶研究では標準的な項目を加えた。また特定性を評価する項目(表3-12, 項目16)も加えた。

(3)-2 想起過程の評価

想起過程に関して研究3では、想起の鮮明度とリハーサル頻度のみを問うていた。研究4では感情やリハーサル頻度など自伝的記憶研究では標準的な項目に加えて、想起過程を多面的にとらえる項目を設定した。

表3-12 研究4で検討する記憶特性(出来事)

(1)出来事を中心性

<アイデンティティ>

- 1 この出来事は私という人間をよく表している。
- 2 この出来事は私がどんな人間であるかということを教えてくれる。
- 3 この出来事と今の自分との間につながりを感じられる。
- 4 この出来事は私の人生における重要なテーマを象徴している。
- 5 自分の人生を物語にたとえると、この出来事はその中の中心的な部分になっている。

<参照点>

- 6 この出来事から私は大切なことを学んだ。
- 7 この出来事は物事に対する私の考え方や感じ方に影響を与えた。

<重要性>

- 8 その当時、この出来事が自分にとって大きな意味を持つと思った。
- 9 振り返ってみるとこの出来事は、自分にとって大きな意味を持っていた。
- 10 この出来事は私にとって重要である。
- 11 この出来事は私に影響を及ぼした。

(2)感情

- 12 この出来事に非常に驚いた。
- 13 この出来事を経験した時の感情や気分は良かった。
- 14 この出来事を経験した時の感情や気分は悪かった。

(3)その他

- 15 この出来事は珍しいことだった。
- 16 これは特定の場所と時刻に起きた出来事の記憶か、あるいは、かなり長い時間(1日以上)にわたる出来事の記憶か、あるいは、似たような出来事が何回かあって、それらが混ざり合った記憶か。

*項目16「特定性」については、「特定の出来事」「かなり長い時間にわたる出来事」「混ざり合った記憶」の中から選択させた。他は1~7の7段階評定である。

表3-13 研究4で検討する記憶特性（想起過程）

(1)鮮明さ

- 17 この出来事の記憶は、はっきりしている。
- 18 この出来事の記憶は、詳細である。
- 19 この出来事を全体的に、よく覚えている。
- 20 この出来事の記憶には欠けている部分がある。
- 21 この出来事を思い出すと、場面が目浮かぶ。
- 22 この出来事を思い出すと、音や声が聞こえてくる。
- 23 この出来事を思い出すと、匂いがよみがえってくる。
- 24 この出来事を思い出すと、味覚がよみがえってくる。
- 25 この出来事を思い出すと、触覚がよみがえってくる。

(2)一貫性

- 26 この出来事に先だって起きた出来事を覚えている。
- 27 この出来事の後に続いて起きた出来事を覚えている。
- 28 この出来事を思い出すと、いくつかの場面がバラバラではなく、一つにつながった物語として思い出される。
- 29 この出来事と関連する他の記憶がたくさん思い出される。

(3)正確さへの確信

- 30 この出来事の記憶は正確である。
- 31 この出来事は自分が思い出している通りに起きたことであり、私の想像は混ざっていない。

(4)再体験の感覚

- 32 この出来事を思い出すと、そのときの感情を再び体験している気がする。
- 33 この出来事を思い出すと、そのときに引き戻される感じがする。
- 34 この出来事が起きた時に自分がどう感じたか思い出せる。
- 35 この出来事を思い出すと、再び経験しているような気持ちになる。
- 36 時には人は、何かが起きたことはわかっているが思い出せないという場合がある。この出来事については、単にそれが起きたとわかっているだけではなく、実際に思い出することができる。

(5)想起の視点

- 37 この出来事を思い出すと、当時見たまを自分の目でもう一度見ているような気がする / 当時とは異なる視点から観察しているような気がする。

(6)リハーサル

- 38 この出来事の記憶が突然心に浮かぶことがある。
- 39 この出来事について、これまで何度も思い出したり考えた。
- 40 この出来事について、これまで何度も人に話した。

(7)感情

- 41 この出来事を思い出して、今感じる感情や気分は良い。
- 42 この出来事を思い出して、今感じる感情や気分は悪い。
- 43 この出来事を思い出すと、心臓がドキドキしたり、汗ばんだりする。

(8)その他

- 44 この出来事を思い出するのは簡単だ。
- 45 この出来事の当時から現在までの時間経過を考えると、もうそんなに経ったのかと思われる。

*項目 37「視点」については、「自分の目でもう一度見ている」「異なる視点から観察している」から選択させた。他は1～7の7段階評定である。

「想起の鮮明さ」について、研究3では「鮮明か」という1項目のみで問うていたが、Johnson et al.(1988)やRubin et al.(2003)を参考に感覚モダリティごとの項目も加えて、詳細に検討する。同様にJohnsonらの尺度を参考に、「一貫性」を問う項目も加えた。その出来事が他の出来事とつながって思い出されるという一貫性は、想起過程の一つであると同時に、記憶の構造も反映している。トラウマ記憶の研究では、トラウマ記憶は他の出来事から切り離されて単独で想起されるという仮説と、他の出来事と結びつけられてライフストーリーの重要な一部を構成するという仮説が提起されている(Berntsen, Willert, & Rubin, 2003; Porter & Birt, 2001)。Berntsen et al. (2003)は、トラウマ記憶は参照点として機能し、他の記憶と結びついていることを指摘した。本研究で収集されるのは不快よりも快な出来事が多いことが研究3からも予測されるが、重要な記憶は快・不快にかかわらず、他の記憶と結びついているのではないかと予想される。

Rubin et al. (2003)の自伝的記憶質問紙にならい、「正確さへの確信」と「その出来事を再体験している感覚」を問う項目を加えた。後者についてRubinらの尺度では"reliving"あるいは"travel back"という表現が用いられている。多くの先行研究がこうした再体験感覚を、エピソード記憶あるいは自伝的記憶想起の重要な特徴として位置づけている(Baddeley, 1992; Brewer, 1996; Wheeler, Stuss, & Tulving, 1997)。再体験感覚を問う項目36は、想起意識を実験的に検討する研究で用いられるRemember/Know手続き(Gardiner, 1988)に準ずる質問である。

「想起の視点」はNigro & Neisser (1983)が提唱した想起特性である。この特性に関する研究は少ないが、強い感情や自己意識を伴う出来事あるいは古い出来事は、当時とは異なる視点で想起されやすいという結果が報告されている(Nigro & Neisser, 1983)。

項目45は当時から現在までの時間経過に対する評価であり、日常では例えば「あれからもう5年も経ったのか」といった感覚(feeling of time gap: 時隔感)として経験される(下島, 2001)。厳密には想起過程とは言えないが、想起の鮮明度が高いほど時隔感が強いことから(下島, 2001)、想起過程に関連させて検討することとした。

4. 方法

(1) 参加者

国立大学教育学部(教員養成系)の大学生, 学校教員, 看護師が参加した。教員ならびに看護師は県主催の講習会の参加者であった。不完全回答ならびに, 後述する基準に照らして不相当と判断された回答は除かれた。最終的に大学生 49 名(男性 22 名, 女性 27 名, 平均年齢 20.4 歳, $SD=1.0$), 教員 41 名(男性 18 名, 女性 23 名, 平均年齢 38.9 歳, $SD=5.8$), 看護師 36 名(男性 3 名, 女性 33 名, 平均年齢 32.8 歳, $SD=4.3$), 計 126 名の回答が分析された。

目的で指摘したように, 時間経過に伴って想起過程が変化することも予測される。そこで結果の分析に際しては参加者を年齢によって, 19-22 歳群 49 名(男性 22 名, 女性 27 名, 平均 20.4 歳, $SD=1.0$), 26-34 歳群 39 名(男性 11 名, 女性 28 名, 平均 31.0 歳, $SD=1.9$), 35-50 歳群 38 名(男性 10 名, 女性 28 名, 平均 41.2 歳, $SD=3.9$)の 3 群に分けた。

(2) 質問紙の構成と手続き

本研究は相対的に重要度が高い記憶と低い記憶を収集し, その想起特性を比較することを目的としている。その際, 最初から参加者に「重要度が高い記憶」あるいは「重要度が低い記憶」を想起するよう求めると, 参加者は重要度を判断しつつ想起することとなり負担がかかる。そこで三つの出来事をまず想起した上で, 重要度に従って順位づけ, 重要度を評定するよう求めた。その上で, 重要度評定の結果に基づいて, 不適切な回答は分析から除いた。

調査は講義あるいは講習会の時間を利用して一斉に行われた。参加者はフェイスシート記入後, 中学校時代の教師にまつわる記憶を三つ思い出して記入するよう求められた。中学時代に限定したのは, 研究 3 で示されたように, この時期の記憶が他の時期に比べると, 教師にまつわる記憶の想起数が多いためである。記入に際しては「先生はよく～～していた」といった一般的な記述ではなく, 特定の一つの出来事(エピソード)をできるだけ具体的・詳細に書くよう指示を与えた。また何年生の時点の出来事かも記入させた。続いて, 想起された三つの出来事を重要度によって順位づけするよう求めた。その際に「『重要』とは, その経験から何かを学んだ, その経験がその後の自分に影響を与え

た、自分を理解するのにその経験が重要な意味を持っているといったことを指す」と教示を与えた。順位づけに加えて、三つの出来事の重要度を7段階で評定させた(1:まったく重要ではない～7:とても重要である)。続いて、三つの出来事のうち一番重要と評定された出来事について、それがどういう意味で重要なのか、自由記述での回答を求めた。

最後に三つの出来事それぞれについて、記憶特性を問う45項目(表3-12, 表3-13参照)への評定を求めた。評定は基本的に1(まったく、そう思わない)～7(とても、そう思う)の7段階であった。ただし「出来事の特異性(表3-12, 項目16)」については、「特定の出来事」「かなり長い時間にわたる出来事」「類似の経験が混ざり合った記憶」の中から選択させた。また「視点(表3-13, 項目37)」については、「自分の目でもう一度見ている」「異なる視点から観察している」から選択させた。回答には全体で25～45分を要した。

5. 結果

最も重要な出来事の重要度評定が、7段階の5(やや重要)未満であった参加者、また三つの出来事の重要度評定が全て同じであった参加者は、分析から除いた。参加者は三つの出来事を想起して重要度に従って順位づけを行ったが、1位と2位あるいは2位と3位の出来事の重要度評定値が等しいケースが認められた(1位と2位の重要度が等しいケースは21名。2位と3位の重要度が等しいケースは29名)。そこで重要度によって記憶特性に差があるか検討する際には、1位・2位・3位の出来事を相互に比較するのではなく、1位と3位の出来事を比較する。

結果は以下の順序で分析する。まず評定結果に因子分析を行い記憶特性を整理する。続いて出来事に関する評定(表3-12参照)の結果と自由記述の分析から、収集された重要な出来事が様々な機能を担っているものであることを確認する。次いで、重要度が1位の出来事と3位の出来事で、出来事を経験してからの経過年数、想起内容の特異性、想起順位に差が無いか検討する。これは出来事の重要度によって想起過程に差異があることが認められたとしても、それが経過年数等によるアーチファクトではないことを確認するためである。そして最後に、重要な出来事が想起過程においても独自性を有しているか検討する

ために、重要度 1 位の出来事と 3 位の出来事の想起過程に関する評定(表 3-13 参照)の結果を比較する。

(1) 因子分析

自伝的記憶の記憶特性に関する従来への検討は十分ではなく、記憶特性を測定する標準的な尺度が開発されているわけではない。多くの研究は Johnson et al. (1988)の記憶特性質問紙(MCQ)等を参考に、研究目的に合致した項目を抽出して使用している。そのため先行研究の中には、20 以上の項目を設定し、それらを個別に分析したものもある(Berntsen & Thomsen, 2005; Byrne, Hyman, & Scott, 2001; Rubin, Feldman, & Beckham, 2004)。ここでは因子分析の結果に基づいて項目をまとめた上で、重要度との関連を検討する。

重要度 1 位と評価された出来事に対する評定結果(項目 16「特定性」と項目 37「視点」を除く 43 項目)について因子分析を行い(重み付けの無い最小二乗法, Varimax 回転), 表 3-14 に示す 9 つの因子が抽出された。これら 9 つの因子は、出来事に関わる 3 因子, 想起過程に関わる 5 因子, 出来事と想起過程双方の感情に関わる 1 因子である。出来事に関わる因子は、(1)重要性(因子 2, $r = .90$, 例: この出来事は私にとって重要である), (2)自己(因子 7, $r = .96$, 例: この出来事は私という人間をよく表している), (3)新奇性(因子 8, $r = .79$, 例: この出来事に非常に驚いた)である。想起過程に関わる因子は、(1)鮮明さ(因子 1, $r = .92$, 例: この出来事の記憶は詳細である), (2)再体験(因子 4, $r = .83$, 例: この出来事を思い出すと、そのときに引き戻される感じがする), (3)一貫性(因子 5, $r = .83$, 例: この出来事の後に続いて起きた出来事を覚えている), (4)身体感覚(因子 6, $r = .83$, 例: この出来事を思い出すと、味覚がよみがえる), (5)リハーサル(因子 9, $r = .67$, 例: この出来事について、これまで何度も思い出したり考えた)である。感情に関わる因子は、感情(因子 3, $r = .95$, 例: この出来事を経験した時の感情や気分は良かった)である。なお重要度 3 位の出来事に対する評定結果を因子分析した場合にも、ほぼ同じ因子構造が見出された。

本研究では先行研究を参考に、出来事と想起過程という二つの領域を設定し、それぞれに「中心性」や「鮮明さ」といった下位カテゴリーを設定していた(表 3-12, 3-13 参照)。抽出された因子はこれらと整合する内容であった。

表3-14 記憶特性の因子分析結果

	因子1 鮮明さ	因子2 重要性	因子3 感情	因子4 再体験	因子5 一貫性	因子6 身体感覚	因子7 自己	因子8 新奇性	因子9 リハーサル
18 詳細である	0.885	0.193	-0.073	0.056	0.117	0.107	0.029	0.081	0.148
19 よく覚えている	0.848	0.161	-0.071	0.062	0.155	0.100	-0.013	0.046	0.147
30 正確である	0.829	0.157	-0.007	0.108	0.121	-0.054	0.080	0.057	0.087
17 はっきりしている	0.816	0.229	-0.025	0.028	0.069	0.099	-0.009	0.150	0.035
20 欠けている部分がある	0.744	0.082	-0.053	0.074	0.051	0.078	0.052	-0.049	0.001
36 実際に思い出すことができる	0.729	0.204	-0.071	0.224	0.210	-0.054	0.082	-0.068	0.022
21 場面が目には浮かぶ	0.677	0.103	-0.005	0.117	0.137	0.081	0.009	-0.017	-0.051
31 その通りに起きたことである	0.668	0.100	0.018	0.065	0.032	-0.070	0.118	0.135	0.009
44 思い出すのは簡単な	0.570	0.242	0.042	0.072	0.113	-0.046	0.018	0.078	0.192
34 その時自分がどう感じたか思い出せる	0.430	0.338	-0.064	0.279	-0.049	-0.119	0.059	0.139	0.050
22 音や声が聞こえてくる	0.413	0.037	0.023	0.229	0.137	0.149	0.031	0.044	0.047
11 私に影響を及ぼした	0.205	0.822	0.122	0.077	-0.009	0.000	0.115	0.028	0.049
10 重要である	0.184	0.787	0.206	0.024	0.088	0.039	0.150	0.018	0.147
4 自分の人生における重要なテーマを象徴	0.116	0.751	0.146	0.109	0.178	0.030	0.147	-0.118	0.016
9 振り返ると大きな意味を持っていた	0.157	0.732	0.176	0.051	0.147	0.026	0.170	0.068	0.138
6 大切なことを学んだ	0.241	0.700	0.130	0.049	-0.022	0.120	-0.071	0.020	0.073
5 人生の物語の中心になる	0.131	0.695	0.174	0.139	0.233	0.106	0.285	0.017	0.159
3 今のつながりが感じられる	0.142	0.653	0.108	0.023	0.217	0.006	0.266	-0.036	-0.047
7 考え方や感じ方に影響を与えた	0.151	0.653	0.030	0.082	-0.020	0.104	-0.081	0.059	0.160
8 当時大きな意味を持つと思った	0.172	0.339	0.096	0.285	0.149	0.072	-0.042	0.187	-0.192
14 経験したときの気分が悪かった	-0.072	0.134	0.931	0.050	-0.003	0.039	0.019	-0.028	-0.013
13 経験したときの気分が良かった	-0.057	0.196	0.897	0.136	0.040	0.078	0.005	0.035	0.016
41 思い出して今気分がよい	0.000	0.267	0.865	0.048	0.018	0.110	0.126	-0.021	0.033
42 思い出して今気分が悪い	-0.073	0.196	0.864	-0.059	-0.037	0.059	0.093	-0.078	0.043
35 再び経験している気持ちになる	0.212	0.068	0.084	0.813	0.120	0.087	0.151	0.064	0.125
32 その時の感情を再体験している気がする	0.151	0.120	-0.012	0.783	0.113	0.116	-0.029	0.096	0.015
33 そのときに引き戻される	0.170	0.055	0.020	0.773	0.061	0.095	0.043	-0.008	0.121
38 突然心に浮かぶことがある	0.193	0.151	0.084	0.471	0.136	0.046	0.256	-0.046	0.407
43 心臓がドキドキしたり汗ばむ	0.080	0.087	-0.044	0.420	0.182	0.396	0.023	0.119	0.226
45 もうそんなに経ったのかと思われる	-0.112	0.068	0.218	0.377	0.151	0.053	0.094	0.135	-0.035
27 後に続いて起きた出来事を覚えている	0.192	0.134	-0.090	0.162	0.824	0.099	0.057	0.033	0.036
28 一つにつながった物語として思い出す	0.338	0.163	-0.012	0.169	0.708	0.019	0.002	0.072	0.191
26 先だって起きた出来事を覚えている	0.219	0.134	0.055	0.089	0.677	0.098	0.049	-0.004	0.015
29 関連する他の記憶が思い出される	0.039	0.109	0.174	0.236	0.478	0.110	-0.012	0.028	0.249
24 味覚がよみがえる	-0.011	0.108	0.109	0.041	0.013	0.882	0.008	-0.017	-0.012
23 匂いがよみがえる	0.026	0.072	0.046	0.152	0.055	0.832	0.045	-0.055	-0.068
25 触覚がよみがえる	0.124	0.059	0.102	0.105	0.114	0.690	-0.015	-0.025	0.067
1 私という人間をよく表す	0.096	0.245	0.101	0.100	0.055	0.023	0.928	-0.099	0.019
2 私がどんな人間か教える	0.140	0.262	0.109	0.129	0.028	0.018	0.845	-0.033	0.051
12 驚いた	0.028	-0.035	-0.047	0.139	-0.030	-0.008	-0.043	0.853	0.077
15 珍しい出来事だった	0.260	0.087	-0.033	0.051	0.105	-0.073	-0.072	0.718	0.103
39 これまで何度も思い出した	0.245	0.285	0.007	0.305	0.160	-0.134	0.112	0.071	0.747
40 これまで何度も人に話した	0.109	0.223	0.044	0.089	0.098	0.107	-0.046	0.184	0.524
寄与率	14.74	12.34	8.21	7.21	5.55	5.51	4.69	3.51	3.37
累積寄与率	14.74	27.08	35.29	42.5	48.05	53.56	58.25	61.76	65.13

出来事を中心性については、「重要性」「アイデンティティ」「参照点」という三つの下位概念を想定して項目を設定した。これらはもともと Berntsen & Rubin (2006)の尺度で、トラウマ経験の記憶特性を検討するために用いられていた項目群である。この尺度は、トラウマ記憶はその人のライフストーリーにとって転換点となっており、参照点や基準点として機能し、アイデンティティの中心を占めるという発想から構成されていた。ただし彼らの研究でも、因子分析の結果は1因子構造を示していた。本研究で出来事の「重要性」を意味する因子に多くの項目が集まったのも、このことと整合している。

一方、「この出来事は私という人間をよく表している」「私がどんな人間であるかということを見せてくれる」の2項目は、「重要性」とは別に「自己」因

子を構成していた。「重要性」因子に含まれる項目の多くは「影響を及ぼした」「大切なことを学んだ」等、その出来事が影響を与えたことを意味している。これに対し「自己」因子の2項目は、その出来事が自分を象徴していることを意味している。

想起過程については、鮮明さ、再体験、一貫性、身体感覚、リハーサル、という5因子が抽出された。「鮮明さ」因子には「詳細である」「目に浮かぶ」といった項目に加えて、記憶の正確さへの確信(「この出来事の記憶は正確である」「この出来事は自分が思い出している通りに起きた」)も含まれていた。Rubin et al. (2003)の自伝的記憶質問紙を用いた検討でも、正確さへの確信は、「視覚的な鮮明さ」や「その状況を想起できる」という項目と高い相関を示し、鮮明に想起できる記憶については、確信度が高かった。鮮明さとは別に、味覚・嗅覚・触覚が「身体感覚」因子を構成していた。Johnson et al. (1988)の記憶特性質問紙を因子分析した高橋・清水(2002)でも、これら身体感覚は一つの因子を構成している。身体感覚は「鮮明に、詳細に思い出せる」という感覚とは異質なのであろう。

Rubin et al. (2003)は自伝的記憶の想起過程に伴う主要な感覚として、正確さへの確信と再体験感覚の二つがあることを主張した(表 3-11 参照)。本研究の結果も、「正確さへの確信」とは別に、「再体験」因子を示している。そしてこの因子の中に、「もうそんなに経ったのかと思われる」という時隔感も含まれていた。これまでの研究でも、時隔感は想起の鮮明度と関連することが指摘されていた(下島, 2001)。その状況に引き戻されるような感覚を伴うほど、「ついこの間の出来事」であるかのように思われ、現実の時間経過と比べると「もうそんなに経ったのか」という感覚を引き起こすのであろう。

また、その出来事と他の出来事がつながって一貫したストーリーとして想起されることを意味する、「一貫性」因子が見出された。Talarico & Rubin (2003)は2001年に起きた9.11テロに関わるフラッシュバルブ記憶を検討し、時間が経過しても鮮明度や確信度は低下しないが、一貫性(「その記憶が単独の場面ではなくストーリーとして想起される程度」等)は低下することを見出している。このことから、一貫性は鮮明さや確信とは独立した想起過程であり、自伝的記憶の構造上の特性を反映していることが推測される。

(2) 収集された出来事の特徴

出来事に関わる記憶特性である「重要性」「自己」「新奇性」の各因子および「感情」に関わる因子について評定平均を算出し、重要度が1位の出来事と3位の出来事について整理した。「感情」は、経験時の感情と想起時の感情がまとまって一つの因子を構成していたが、ここでは経験時の感情に関わる2項目(表3-12の項目13と14、14については逆転して集計)の平均を分析した。また項目13・14の評定値と4(どちらとも言えない)との差の絶対値を求めて平均し、感情強度の指標とした。

結果を、表3-15に示す。年齢群と重要度順位によって評定に差があるかを、年齢群(19-22歳、26-34歳、35-50歳)×順位(1位、3位)の分散分析により検討した。その結果、「新奇性」以外の全てで、重要度順位の主効果が有意であった。すなわち重要度1位の出来事は3位の出来事に比較すると、その人に強い影響を及ぼし重要な意味を有すると認識されていた。人はこうした出来事から大切な事柄を学んでおり、また、こうした出来事は今の自己と結びつき、自分がどんな人間であるかを象徴していると評価されていることがわかる。参加者が最初に行った重要度の順位づけが妥当であることが、評定結果によって裏

表3-15 想起された出来事の重要度順位と
出来事の特徴に関わる評定結果および分散分析の結果

因子	群	出来事の重要度順位				F値		
		1位		3位		重要度順位の 主効果	年齢群の 主効果	順位×群の 交互作用
重要性	19-22歳	5.28	(0.93)	3.05	(1.25)	406.0 ***	3.8 *	3.1
	26-34歳	5.23	(1.07)	2.40	(1.13)			
	35-50歳	5.45	(1.02)	3.28	(1.31)			
自己	19-22歳	4.27	(1.68)	3.53	(1.67)	35.3 ***	1.7	5.8 **
	26-34歳	4.83	(1.71)	2.68	(1.58)			
	35-50歳	4.59	(1.69)	3.91	(1.56)			
新奇性	19-22歳	4.30	(1.72)	4.40	(1.53)	2.7	0.4	2.5
	26-34歳	4.55	(1.75)	4.40	(2.09)			
	35-50歳	5.09	(1.54)	4.12	(1.73)			
感情	19-22歳	4.53	(2.29)	3.46	(2.19)	6.5 *	0.3	0.9
	26-34歳	4.64	(2.15)	3.89	(1.73)			
	35-50歳	4.20	(2.27)	4.00	(1.90)			
感情強度	19-22歳	2.22	(0.83)	2.03	(0.99)	6.0 *	2.1	0.3
	26-34歳	2.03	(0.99)	1.63	(0.95)			
	35-50歳	1.93	(1.21)	1.68	(1.13)			

感情は数値が大きいほど、快であることを示す。感情強度は0~3、それ以外は1~7の値をとる。()はS D。

分散分析の自由度は、重要度順位の主効果が(1,123)、年齢群の主効果と交互作用が(2,123)。

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

付けられたと言える。感情面では快感情を伴い、強度も強いことが示された。年齢群の主効果ならびに年齢群×順位の交互作用が「重要性」と「自己」の因子で認められたが、これは26-34歳群で重要度3位の出来事に対する評定が、他の2群よりも低かったことによる。

本研究ではまず、参加者による順位づけに基づいて、重要度の高い出来事と低い出来事を収集した。参加者に求めたのは「中学時代の教師にまつわる出来事」であったが、ほとんどの参加者が重要度1位の出来事として、「何かを学んだ」「自分に影響を与えた」「自分を理解するのに重要な」記憶を想起していた。一部の参加者は想起された出来事の重要度が低いために分析から除かれたが、そうしたケースは12名(当初の参加者全体の8.7%)に過ぎなかった。出来事に関する評定結果は、収集された出来事が確かに重要度が高く、自己機能や方向づけ機能を担うような内容であることを裏付けている。

以上の評定結果は、参加者による自由記述とも整合している。下記の例に示されるように、その出来事から大切なことを学んだ、あるいはその出来事が自己理解にとって重要であるという内容が認められた(下線筆者)。

(出来事)担任の先生が、消極的だった私たちのクラスみんなに言ってくれた言葉がとても印象に残っています。それは、「みんなもっと恥をかきなさい」という言葉でした。(重要と考える理由)とても恥ずかしがりやで引っ込み思案な私にとって、自分を前に出していくことの大切さ、間違ったりしても大したことではないし、そこから学べるのがたくさんあることを教えてくれた出来事なので、とても重要です。

(出来事)不特定の人を狙ったいじめで、物がなくなることがあった。私の物もなくなったのだが、担任には言わなかった。すると放課後に呼び出され、なぜか無くなっていることを知っていた担任の質問にいくつか答えていたら、「あなたは強い人ですね」と言われた。何が強いのか、いまでも納得できない。(重要と考える理由)その出来事以来、担任のことを信用できなくなった。しかし自分以外の人たちが私についてどう思っているのか考えるようになったし、自分のことを考えるきっかけになった。

ではこうした重要な記憶は、想起過程においていかなる特徴を持っているのであろうか。

(3) 想起された出来事の時間経過，特定性，想起順位

想起過程の特性を検討する前に，重要度 1 位の出来事と 3 位の出来事が，時間経過・特定性・想起順位において差が無いかを検討する。以降の分析で重要度によって想起過程に差が認められた場合，それが時間経過等によるアーチファクトではないことを確認しておくためである。

中 1・中 2・中 3 の時点でそれぞれ 13・14・15 歳であったと仮定し，その出来事から現在までの平均経過年数を算出した。重要度 1 位の出来事と 3 位の出来事を経験してからの経過年数を，表 3-16 に示す。年齢群(19-22 歳，26-34 歳，35-50 歳)×順位(1 位，3 位)の分散分析の結果，年齢群の主効果のみ有意であった($F(2,123)=750.04$, $p<.0001$)。また，出来事の特定性(項目 16)について整理した結果を表 3-17 に示す。評定の際には「特定の出来事」「かなり長い時間にわたる出来事」「混ざり合った記憶」の中から選択させたが，後二者は「非特定の」としてまとめた。McNemar 検定の結果いずれの年齢群でも，重要度 1 位の出来事と 3 位の出来事で特定性の差は有意ではなかった(19-22 歳群， $p=.424$ ；26-34 歳群， $p=.302$ ；35-50 歳群， $p=.180$)。このように重要度 1 位の出来事と 3 位の出来事で，経過年数や特定性には差が無いことが確認された。従って，以降の分析で例えば「重要度 1 位の出来事は 3 位の出来事に比べて非常に鮮明に想起される」という結果が見出されても，重要な出来事は比較的最近に経験されたためであるとか，内容の特定性が高いことによるアーチファクトであるとは言えない。

表3-16 想起された出来事の重要度順位と現在までの経過年数

重要度	群		
	19-22歳	26-34歳	35-50歳
1 位	6.1 (1.0)	16.8 (1.8)	27.1 (3.8)
3 位	6.3 (1.2)	17.1 (2.1)	27.0 (4.0)

()はSD。

表3-17 想起された出来事の重要度順位と特定性

重要度		19-22歳群		26-34歳群		35-50歳群	
		特定の	非特定の	特定の	非特定の	特定の	非特定の
1 位	人数	41	8	27	12	24	14
	%	(83.7)	(16.3)	(69.2)	(30.8)	(63.2)	(36.8)
3 位	人数	37	12	22	17	18	20
	%	(75.5)	(24.5)	(56.4)	(43.6)	(47.4)	(52.6)

最後に、重要度 1 位の出来事と 3 位の出来事で想起順位に差があるかを検討した。もし重要度により想起順位に差があると、結果の解釈に問題が生じる。例えば、重要度 1 位の出来事が最初に想起されやすかったとする。その場合、重要度 1 位の出来事の想起が鮮明であると評定された場合にも、実際の鮮明さではなく、「最初に想起されたから鮮明であるに違いない」という方略を用いて判断していた可能性が生じる。想起順位の平均は、19-22 歳群では重要度 1 位の出来事が 1.9、3 位の出来事が 2.2 だった。26-34 歳群では重要度 1 位の出来事が 1.8、3 位の出来事が 2.0 だった。35-50 歳群では重要度 1 位の出来事が 1.8、3 位の出来事が 2.1 であった。符号検定の結果、いずれの世代でも想起順位に有意差は無かった(19-22 歳群, $Z=1.14$; 26-34 歳群, $Z=0.32$; 35-50 歳群, $Z=1.46$)。従って重要度によって想起順位には差が無く、参加者が上記のような方略によって想起過程を評価した可能性はきわめて低い。

(4) 想起過程の検討

「鮮明さ」「再体験」「一貫性」「身体感覚」「リハーサル」の各因子の評定平均を算出し、重要度が 1 位の出来事と 3 位の出来事について整理した。感情については出来事の記憶特性と同様、想起時の感情と感情強度を分析した(表 3-13 の項目 41, 42)。結果を表 3-18 に示す。年齢群と出来事の重要度順位によって評定に差があるかを、年齢群(19-22 歳, 26-34 歳, 35-50 歳) × 順位(1 位, 3 位)の分散分析により検討した。その結果、「身体感覚」を除く全ての指標で、重要度順位の主効果が有意であった。すなわち重要度 1 位の出来事は 3 位の出来事に比べると、より鮮明に、当時に引き戻される感じを伴って想起され、想起内容が正確であるという確信を伴っていた。さらに前後の出来事や関連する出来事と一緒に、一貫性をもって想起されやすかった。また、これまでも頻繁に想起されたり、他者に語られたりしていた。感情面では経験時と同様に快感を伴い、強度も重要度 3 位の出来事より強かった。

いずれの因子でも重要度順位 × 年齢群の交互作用は有意ではなかった。年齢群の主効果は「一貫性」のみで有意であり、26-34 歳群と 35-50 歳群の評定値が、19-22 歳群よりも低かった。Talarico & Rubin (2003)は 2001 年 9.11 テロのフラッシュバルブ記憶を検討し、一貫性は時間とともに低下するが、鮮明度や

表3-18 想起された出来事の重要度順位と
想起過程に関わる評定結果および分散分析の結果

因子	群	出来事の重要度順位		F 値		
		1位	3位	重要度順位の 主効果	年齢群の 主効果	順位×群の 交互作用
鮮明さ	19-22歳	5.25 (0.97)	4.72 (1.04)	45.4 ***	1.3	0.7
	26-34歳	5.12 (0.98)	4.34 (0.97)			
	35-50歳	5.15 (1.03)	4.33 (1.01)			
再体験	19-22歳	3.62 (1.20)	3.07 (1.15)	58.2 ***	0.2	1.3
	26-34歳	3.85 (1.26)	2.90 (1.10)			
	35-50歳	3.87 (1.33)	3.11 (1.21)			
一貫性	19-22歳	4.54 (1.50)	3.97 (1.33)	20.5 ***	4.4 **	0.2
	26-34歳	4.08 (1.40)	3.30 (1.16)			
	35-50歳	3.84 (1.66)	3.18 (1.52)			
身体感覚	19-22歳	2.10 (1.46)	1.72 (1.29)	0.1	1.1	1.8
	26-34歳	1.78 (1.35)	1.80 (1.11)			
	35-50歳	2.05 (1.25)	2.26 (1.54)			
リハーサル	19-22歳	3.72 (1.57)	2.91 (1.45)	54.3 ***	0.2	0.7
	26-34歳	3.80 (1.52)	2.81 (1.60)			
	35-50歳	4.07 (1.72)	2.86 (1.28)			
感情	19-22歳	4.88 (1.97)	4.05 (1.89)	11.0 **	0.1	0.8
	26-34歳	4.97 (1.82)	3.94 (1.67)			
	35-50歳	4.67 (1.93)	4.30 (1.56)			
感情強度	19-22歳	1.92 (1.01)	1.64 (0.95)	9.2 **	0.9	0.2
	26-34歳	1.87 (0.93)	1.42 (1.05)			
	35-50歳	1.72 (1.10)	1.38 (1.02)			

感情は数値が大きいほど、快であることを示す。感情強度は0～3、それ以外は1～7の値をとる。

()はS.D.

分散分析の自由度は、重要度順位の主効果が(1,123)、年齢群の主効果と交互作用が(2,123)。

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表3-19 想起された出来事の重要度順位と想起の視点

重要度		19-22歳群		26-34歳群		35-50歳群	
		当時と 同じ	当時と 異なる	当時と 同じ	当時と 異なる	当時と 同じ	当時と 異なる
		1位	人数	24	25	20	19
	%	(49.0)	(51.0)	(51.3)	(48.7)	(42.1)	(57.9)
3位	人数	28	21	18	21	18	20
	%	(57.1)	(42.9)	(46.2)	(53.8)	(47.4)	(52.6)

正確さへの確信は低下しないことを見出した。本研究の結果も、時間経過に伴って出来事同士のつながりは弱まるが、重要な出来事そのものは鮮明に、再体験の感覚と高い確信度を伴って想起され続けることを示唆している。

最後に想起の視点を分析したところ(表 3-19)、「当時と同じ視点」と「当時と異なる視点」が相半ばしていた。McNemar 検定の結果、重要度と視点の間には、有意な関連は認められなかった(19-22 歳群, $p=.50$; 26-34 歳群, $p=.77$;

35-50 歳群, $p=0.79$)。

6 . 考察

本研究は、様々な機能を担う自伝的記憶が、単に「出来事」として重要であるだけでなく、記憶としての特殊性を有していることを確認する目的で行われた。このことは一見自明に思えるが、実はこれまでの研究では十分に確認されていたとは言えない問題である。

参加者は中学校での教師にまつわる記憶を三つ想起し、それを重要性(「何かを学んだ」「自分に影響を与えた」「自己理解に関わる」程度)に従って順位づけた。そして三つの記憶に対して、記憶特性(出来事そのものの特性と想起過程の特性)を評価した。出来事の特徴として「重要性」「自己」「新奇性」の3因子、想起過程の特性として「鮮明さ」「再体験」「一貫性」「身体感覚」「リハーサル」の5因子、そして出来事と想起過程の両方に関わる「感情」因子が確認された。

出来事の「重要性」「自己」因子に関わる評価結果から、参加者による順位づけが妥当であることが裏付けられた。参加者が想起した三つの中で重要度1位の出来事は、それだけ影響力があり、そこから大切なことを学んでおり、当時から今も大きな意味を持ち、今の自分とつながり、自分がどんな人間であるかを象徴していた。

想起過程に関わる記憶特性を検討したところ、重要度1位の出来事は3位の出来事と比較すると、再体験の感覚を伴って細部に至るまで鮮明に想起され、「確かにあの通りの経験だった」という確信を引き起こすことが見出された。また繰り返し思い出されたり、他者との会話で話題にされることも多かった。こうしたリハーサルは、記憶の鮮明さを維持している一つの要因と考えられる。従って重要な出来事は、その経験自体が特別な意味を有するだけでなく、想起過程の特殊性を伴っている。この特殊性は、中学時代から平均6年が経過した参加者だけでなく、平均17年あるいは27年が経過した参加者においても確認された。重要な記憶は長い年月を経てもなお色褪せない想起特性を維持していると言える。こうした想起過程の差異は、出来事の特異性や時間経過あるいは想起順位では説明できない。重要度1位の出来事と3位の出来事の間、特

定性や時間経過，想起順位の差は無かったからである。

また「一貫性」においても，重要度による差が見られた。すなわち重要な出来事の記憶は他の出来事ともつながって，一貫したストーリーを構成していた。このことは，重要な出来事の記憶が構造面での特徴も有していることを意味している。ただし「一貫性」の評定結果は時間経過に伴って低下し，他の出来事とのつながりが次第に弱くなることも示された。

われわれの生涯は膨大な経験の蓄積から成り立っている。経験の中には，きわめて重要で，自己認識に影響を及ぼしたり，その後の考え方や行動に影響を及ぼす出来事がある。こうした自己定義記憶や個人的出来事記憶は，最初に経験された時点で影響を及ぼすだけでなく，繰り返し鮮明に想起される過程を通して，記憶として重要な機能を持ち続ける。Pillemer(1998, 2001, 2003)や Singerら(Singer & Blagov, 2004a, 2004b; Singer & Salovey, 1993)は，こうした記憶が鮮明に繰り返し想起されると考えていた。本研究は彼らが自明のこととしていた仮説を検証したと言える。

第6節 研究5 思い出の中の教師 - 自伝的推論の検討 -

研究3では，教師にまつわる自伝的記憶が，教員養成系学部に所属する大学生の職業選択に密接に結びついていることが指摘された。すなわち，教職を志望する意識の強い学生では，教師にまつわる肯定的な記憶の蓄積が，教職志望の基盤に存在していた。またこの学生たちは，教師にまつわる経験から「影響を受けた」と認識しているケースが多かった。さらに教職志望の強さに応じて特徴的な影響が想起されており，これらの記憶は出発点や基準点あるいは類推といった機能を担うことが指摘された。

さらに研究4では，自己機能や方向づけ機能を担うような重要な出来事は，重要度の低い出来事に比較すると，他の出来事とも結びついて一貫したストーリーを構成し，繰り返し鮮明に想起されることが示された。また想起される時には，その出来事を再体験している感覚や，想起内容に対する高い確信度を伴うことが示された。このように，重要な出来事はその内容が特殊なばかりでな

く、記憶としての構造や想起過程においても特殊性を有している。

従って、ある出来事がある人のその後の行動や判断に影響を及ぼしたり、自己の基盤として機能するという場合、その出来事が経験された時点で超長期の貯蔵庫(Bahrick, 1984)に保持され、その後も影響を及ぼし続けるということの意味するものではない。そういうケースも無いとは言えないだろうが、その出来事を自己にとって重要な経験として認識し想起するなかで、人は「あれが出发点になった」「あの出来事からこういう事柄を学んだ」という意味づけを繰り返し行っているのであろう。こうした想起過程が職業選択を方向づけたり、小中学校時代の経験と現在の職業選択が一貫しているという感覚を与えるなど、様々な機能を担っていると考えられる。

自伝的記憶研究は特定性の高い出来事の想起を参加者に求め、その構造や内容を分析してきた。しかし上記の結果は、想起された複数の出来事間の結びつきを考え、想起された出来事と自己を結びつける認識過程について検討することの必要性を示している。こうした認識過程は「自伝的推論 (autobiographical reasoning)」と呼ばれ、近年になって検討が始められている。研究5では自伝的推論という視点から研究4のデータを再分析し、重要な出来事を現在の自己と結びつけ意味づける過程を検討する。

1. 自伝的推論

自伝的推論は自伝的記憶を想起するだけでなく、想起された出来事を解釈・評価したり、過去の記憶を互いに結びつけたり、過去の記憶と現在の自己を結びつけたりする、内省的な思考過程である (Bluck & Habermas, 2000, 2001; Habermas & Bluck, 2000; Singer & Bluck, 2001)。研究3・研究4では自伝的記憶に対して「自分に影響を与えた」「何かを学んだ」「出发点だった」等と評価しているケースが多数見出されたが、こうした評価も自伝的推論の一種と考えられる。自伝的推論は、出来事と出来事、出来事と自己を結びつけ、出来事の意味を解釈したり、ライフストーリーを構成し自己の一貫性を確認するのに不可欠な過程である。その意味で、個別の出来事の記憶を対象とすることが多かった従来の自伝的記憶研究では、十分に検討されてこなかったプロセスであると言えよう。

しかし自伝的推論が注目を集め始めたのはごく最近のことであり、研究自体が少なく、この過程を検討するためのパラダイムが確立されているわけでもない。むしろ現時点では、様々な知見や論考を自伝的推論という枠組で整理し、この過程の重要性を確認しようとしている段階とあって良いだろう。では自伝的推論に関わる研究として、どのようなものがあげられるだろうか。

第一は、高齢者の回想に関する研究である。高齢者の回想研究では、想起された過去を評価し現在と結びつける営みは、人生の後半に重要性を増すと指摘されることが多い(Bluck & Habermas, 2001; Staudinger, 2001)。高齢者が過去の出来事を積極的に評価し、人生の統合を図ろうとする営みはライフレビューと呼ばれ、臨床的な介入技法として、近年、洗練されつつある。すなわち、過去の肯定的な出来事を想起して感情の安定を図るだけでなく、「今ではそのことをどう思いますか」等と問いかけ、その出来事が持つ意味や、それが自分に及ぼした影響を評価するように促すのである(野村, 1998)。

第二は、青年期におけるライフストーリーの発達に関する研究である。ある出来事が自分にどのように影響を及ぼしたか評価するためには、物事の因果関係を認識できる認知発達が必要である。ここから、青年期における認知発達に伴って、ライフストーリーの中に出来事同士の因果関係に言及する表現が増えていくことが予想される。Habermas & Paha (2001)は12-18歳の参加者が語るライフストーリーの分析を行った。その結果、年齢が上がるに従って、出来事を因果関係で結びつける表現が増えること、過去と現在を対比したり、出来事と自己の変化を結びつける表現が増えることが示された。

第三は、「意味づけ」に関する McLean らの検討である。第3章・第2節の方向づけ機能の項でも紹介したが、ある出来事から「こう振る舞うべきだ」「こんなことをしてはいけない」という行動指針(教訓)、あるいは抽象的な自己理解や世界観(洞察)を学ぶことを、McLean は「意味づけ(meaning making)」と名づけた(McLean, 2005; McLean & Thorne, 2003; Thorne, McLean, & Lawrence, 2004)。これも、過去の出来事について「私はそこから~~を学んだ」と評価し、その出来事と現在の行動や判断を結びつけて認識しているという意味で、自伝的推論の一つのかたちと言える。Pratt, Norris, & Arnold (1999)は青年期から老年期までの参加者に、自分の道徳発達にとって重要であったり、現在の価

値観に影響を与えた出来事を想起してもらい、そこから「正義」「社会」「友情」など 14 項目についてどれくらい教訓を学んだかを評定させた。その結果、加齢に伴って、教訓を学んだという評定が高くなることを見出された。Bluck & Glück (2004)は参加者に、自分が賢明なことを言ったり行ったりした経験の想起を求め、そこから何か教訓を学んだかを問うた。その結果、青年と比較すると中高年の参加者の方が、経験から教訓を学んだと判断するケースが多かった。

2. 自伝的推論に影響する要因

(1) 加齢

上で紹介した研究からはいずれも、加齢に伴って自伝的推論の過程が活発化することが示唆される。そこで Pasupathi & Mansour (2006)は自伝的推論の発達の変化に焦点を当てて検討を行った。Pasupathi らは青年期から老年期までの参加者に「転機」と「危機」の体験を語ってもらい、そこにどの程度、経験を自己と結びつける内容(例：その出来事が自己の特性を示している、その出来事が自己に対する見方を変えた、その出来事によってこれまで気づかなかった自己の特性に気づいた)が含まれているかを検討した。その結果、青年期から 60 歳頃にかけて、危機体験を自己と結びつける想起が増えることを見出された。また転機や危機といったテーマを限定せずに想起を求めた場合にも、青年期から老年期にかけて自伝的推論を示す人数比が線型に増加することが示された。

ただし加齢に伴って自伝的推論が変化するとしても、何が変化を引き起こすのかという点は明らかにされていない。児童期から青年期にかけては、因果推論をはじめとする認知スキルが発達すること、自己に対する内省的な思考が活発になることが、自伝的推論を促すと指摘されている(Habermas & Bluck, 2000)。また青年期以降の加齢に伴い、自分の人生を評価することに対する動機づけが強まったり、出来事を物語るスキルが高まったりする。こうした変化が自伝的推論を高める可能性も指摘されている(Pasupathi & Mansour, 2006)。

加齢に伴う自伝的推論の変化に関してはさらに複雑な問題が生じる。それは、自伝的推論にとっては出来事を経験した時点での年齢が重要なのか、あるいは想起する時点の年齢が重要なのか、という問題である。Pasupathi & Mansour

(2006)の研究では、経験時の年齢と想起時の年齢の相関が高かったため(すなわち青年は青年期、中年は中年期、高齢者は老年期の出来事を想起することが多く)、経験時の年齢と想起時の年齢のいずれが自伝的推論の加齢変化をもたらすのかという問題は未解決のまま残っている。

(2) 想起時の自己

年齢に限定することなく、経験時の自己と想起時の自己のいずれが、自伝的推論にとって重要かという問題を考えてみよう。認知発達や動機づけの変化に伴って、出来事を経験した時点での理解や解釈は変化するであろう。同時に、認知発達や動機づけの変化が、出来事を後で想起する際の解釈や評価に影響することも十分あり得る。研究3では教職志望意識の強い大学生は、認知発達が不十分な小学校1-3年の経験についても「それが自己に影響を及ぼした」と認識していた。大学生の自己定義記憶を検討した McLean & Thorne (2003)の研究でも、14歳頃という認知発達が未熟な時期の出来事からも、教訓や洞察が引き出されることが報告されている。これらの結果は、想起時の自己が自伝的推論のあり方に影響していることを示している。また研究4では、中学時に経験された重要度の高い出来事は、繰り返し鮮明に想起されることが示された。人は現在の自己にとって重要な出来事を想起し、自己とのつながりを確認するような自伝的推論を行っているのであろう。

3. 目的

研究3・研究4では自伝的記憶に対して「自分に影響を与えた」「教師になろうと思ったきっかけだった」「今の自分とつながっている」等と評価しているケースが多数見出された。これらは、現在を基点に過去の出来事を振り返って解釈し、今の自己との結びつきを認識しているという意味で、自伝的推論の一種と考えることができる。

研究5の第一の目的は、自伝的推論の内容を明らかにすることである。研究4で収集された出来事を重要と考える理由を述べた自由記述データを分析し、重要な出来事をどのように意味づけているのか、現在の自己とのつながりをどのように認識しているのかを検討する。

第二の目的は、自己の現在の立場と自伝的推論の関連を検討することである。研究3からは、想起時の自己に関わる要因が自伝的推論に影響を及ぼしていることが予想される。研究4の参加者は、教育学部(教員養成系)の大学生、学校教員、看護師といった、年齢も社会的な立場も異なる人たちであった。研究4では出来事を経験してからの年数に着目し、参加者を世代に分けて分析したが、研究5では現在の社会的な立場によって自伝的推論が異なっているかを検討する。人が過去を想起する時には、現在の自己を基点に構成的な想起が行われることから(Ross & Wilson, 2000)、教育学部生・教員・看護師という現在の立場の違いが、年齢とは独立に、教師をめぐる記憶の評価や意味づけに影響していることが予想される。

4. 方法

研究4と同じである。国立大学教員学部(教員養成系)の大学生49名(男性22名、女性27名、平均年齢20.4歳、 $SD=1.0$)、教員41名(男性18名、女性23名、平均年齢38.9歳、 $SD=5.8$)、勤務校は小学校28名、中学校6名、養護学校7名)、看護師36名(男性3名、女性33名、平均年齢32.8歳、 $SD=4.3$)、計126名の回答が分析された。参加者の年齢差は群間で有意であり($F(2, 125)=244.7$, $p<.001$)、下位検定(Ryan法)の結果、3群全ての間有意差があった。

5. 結果

(1) 想起された出来事

研究5で分析するのは、研究4で参加者が想起した中で最も重要と判断された出来事と、それを重要と判断した理由である。研究4と同様、中1を13歳、中2を14歳、中3を15歳と換算した。経験した当時の年齢は大学生が平均14.3歳($SD=0.7$)、教員が平均14.2歳($SD=0.7$)、看護師が平均14.1歳($SD=0.9$)であり、群間の差は有意ではなかった($F(2,125)=1.07$, ns)。出来事を経験してからの経過年数は、大学生が平均6.1年($SD=1.1$)、教員が平均24.7年($SD=5.8$)、看護師が平均18.7年($SD=4.3$)であった。

最も重要と判定された出来事について、どういう状況での出来事だったかを「部活動等の課外活動場面」「授業や進路面談など学業に関わる場面」「生徒指

導の場面」「その他」に分類した。またそれぞれの出来事における本人と教師との関係を、「肯定的」「否定的」「その他」に分類した。肯定的とは「一緒に何かに取り組んでいる」「ほめられた」「教師を尊敬した」など、両者の間に接近的な関係がうかがわれる記述である。否定的とは、「叱られた」「自分の意見が受け容れられなかった」等、回避・葛藤・反発といった関係がうかがわれる記述である。分類は二人の評定者が独立に行い、概ね高い一致率が得られた(一致率は状況、85.7%；関係、82.2%)。不一致のケースについては再度分類し直した。各カテゴリーの記述例を表3-20に示す。

なお「関係」分類の妥当性を検討するために、「肯定的」「否定的」「その他」のそれぞれで、経験時の感情評定「この出来事を経験した時の感情や気分は良かった」(表3-12,項目13)と、「この出来事を経験した時の感情や気分は悪かった」(表3-12,項目14,逆転して集計)の平均を求めた。肯定的が平均5.8

表3-20 想起内容の記述例

【状況】

(1)課外活動

卒業式の日、担任の先生は最後の学級活動で松山千春の「果てしない……」の歌を熱唱し、私たちへのメッセージを伝えていた。

(2)学業

美術の担当教師が生徒の作品を皆の前で批評していた。自分の作品を批評した時、「この作品は好きではない！」と一言で片づけ、作品を放り出したので、かなり腹が立った。

(3)生徒指導

クラスでいじめられていると学校側(校長先生など)に訴えた女の子のために、その子も交えてクラス全員で話し合いをした担任がいた。結局、その子が責められて、とてもかわいそうだった。

(4)その他

中学3年のとき担任の先生からもらった年賀状に「いつも一所懸命な が大好きです」と書かれていた。先生からの年賀状に大好きと書かれていてビックリしたが、変な意味はないだろうと思い、うれしかった。

【教師との関係】

(1)肯定的

高校に合格した時、報告に行ったら、一緒になって喜んでくれた。

(2)否定的

私が評議委員をしていて、体育委員が仕事をしていなくて話し合わなければならぬ議題について話し合おうとした時に、準備ができていないと叱られた。

(3)その他

国語の先生に「何で日本語は縦書きなのか」と聞かれ、思いついたのに答えずにいたら、結局誰も答えず、先生の言った正解が自分の考えと同じだった。

($SD=1.6$)，否定的が平均 2.4($SD=1.7$)，その他が平均 3.5($SD=1.9$)であった。分散分析の結果，関係カテゴリーの効果が有意であった($F(2,125)=54.45$, $p<.001$)。下位検定(Ryan 法)の結果，全てのカテゴリー間の差が有意であり，肯定的な関係が最もポジティブな感情を伴っていた。従って，関係分類の妥当性は評定結果から裏付けられたと言える。

大学生，教員，看護師それぞれの群における各カテゴリーの比率を表 3-21 に示す。状況($\chi^2(6)=9.89$)と関係($\chi^2(4)=3.41$)のいずれにおいても，群間の差は有意ではなかった。従って，出来事が生じた状況やその時の教師との関係という点では，3群の参加者の間に本質的な差異はない。いずれの群でも課外活動や学業に関わる場面での出来事が多く，教師との関係は肯定的なケースが多かった。

表3-21 各群で想起された出来事の状態および教師との関係

		群		
		大学生	教員	看護師
状況	課外活動	16 (32.7)	18 (43.9)	11 (30.6)
	学業	14 (28.6)	15 (36.6)	17 (47.2)
	生徒指導	12 (24.5)	5 (12.2)	2 (5.6)
	その他	7 (14.3)	3 (7.3)	6 (16.7)
教師との関係	肯定	29 (59.2)	25 (61.0)	19 (52.8)
	否定	13 (26.5)	12 (29.3)	15 (41.7)
	その他	7 (14.3)	4 (9.8)	2 (5.6)

数値は人数。()は%。

以上のように，想起された重要な出来事の概要は3群間で差が無かった。それではその出来事に対する自伝的推論は，群によって異なるであろうか。自伝的推論は，想起された出来事を解釈・評価したり，過去の記憶と現在の自己を結びつける過程である。研究4で収集されたデータの中では，(1)出来事に対する評価，(2)その出来事を重要と判断する理由が，自伝的推論の過程に関連している。また重要と判断する理由の内容分析から，(3)その出来事と現在の自己とのつながりに関する認識を検討することが可能である。以上の3点から自伝的推論を検討する。現在の自己と「教師」という想起対象との関係によって，自伝的推論を行う程度やその内容が異なることが予想される。

(2) 想起された出来事に対する評価

想起された出来事を参加者がどう評価しているか見るため，研究4で明らか

になった重要性因子・自己因子の平均評定値について，参加者の群の効果を検討した。結果を表 3-22 に示す。

表3-22 各群で想起された出来事的重要性因子と自己因子の平均評定値

因子	群		
	大学生	教員	看護師
重要性	5.28 (0.9)	5.61 (0.8)	5.02 (1.2)
自己	4.27 (1.7)	5.33 (1.3)	4.01 (1.8)

数値は1～7の値をとる。()はSD。

重要性因子と自己因子のいずれの平均評定値においても，群の効果が有意であった(重要性, $F(2,125)=3.49$, $p<.05$; 自己, $F(2,125)=7.35$, $p<.01$)。下位検定(Ryan 法)の結果，重要性因子については教員群が看護師群よりも高い値を示していた。自己因子については教員群が他の2群よりも高い値を示していた。重要性因子に含まれていたのは，「その出来事が重要である」「影響を及ぼした」「大切なことを学んだ」「今の自分との間につながりが感じられる」といった項目である。また自己因子に含まれていたのは，その出来事が自分を象徴しているという項目である。従って，現在教員として勤務している参加者が，中学当時の出来事的重要性や影響，現在の自己とのつながりを最も強く認識し，それらの出来事が自分を象徴していると考えていることが示された。

しかしながら上記の分析では群と年齢が交絡している。そこで年齢を統制するために，二つの分析を追加した。第一に，教員群と看護師群から年齢がほぼ等しい参加者を抽出した。参加者の年齢は教員が31-50歳，看護師が26-42歳であり，31-42歳の参加者(教員30名，看護師22名)が抽出された。抽出された参加者の年齢は，教員が平均36.2歳($SD=4.0$)，看護師が平均35.2歳($SD=3.6$)で有意差は無かった($t(50)=0.87$, ns)。抽出された参加者について，重要性因子と自己因子の平均評定値を比較したところ，自己因子に関して群間の差が有意であった(教員，平均5.48, $SD=1.16$; 看護師，平均3.80, $SD=2.00$; $t(50)=3.83$, $p<.01$)。重要性因子に関しては，有意差は見られなかった(教員，平均5.52, $SD=0.83$; 看護師，平均5.14, $SD=1.04$; $t(50)=1.47$)。すなわち年齢を統制してもなお，教員群は看護師群に比べると，中学時代の教師にまつわる記憶が自分を象徴していると認識する程度が強かった。

第二に，各群の参加者を年齢の中央値によって分割し(年齢の中央値は，大

学生 20.0 歳，教員 39.0 歳，看護師 31.5 歳であった)，重要性因子と自己因子の平均評定値について，群(大学生，教員，看護師)×年齢(中央値より上，下)の分散分析を行った。結果を表 3-23 に示す。重要性因子・自己因子のいずれに関しても群の主効果のみが有意であり(重要性， $F(2,120)=3.71$ ， $p<.05$ ；自己， $F(2,120)=7.35$ ， $p<.01$)，下位検定(Ryan 法)の結果，重要性因子については教員が看護師よりも評定値が高く，自己因子については教員が他の 2 群よりも評定値が高かった。年齢の主効果ならびに群×年齢の交互作用は有意ではなかった。

表3-23 各群で想起された出来事的重要性因子と自己因子の平均評定値と分散分析の結果(参加者の年齢を統制した分析)

因子	群	年齢		F値		
		中央値より下	中央値より上	群の主効果	年齢の主効果	群×年齢の交互作用
重要性	大学生	5.18 (1.00)	5.39 (0.85)	3.71*	1.18	0.11
	教員	5.58 (0.86)	5.66 (0.87)			
	看護師	4.88 (1.24)	5.16 (1.14)			
自己	大学生	3.85 (1.78)	4.74 (1.49)	7.35**	0.17	3.05
	教員	5.64 (1.10)	4.97 (1.50)			
	看護師	4.31 (1.67)	3.72 (2.02)			

数値は1～7の値をとる。()はSD。

分散分析の自由度は，群の主効果が(2, 120)，年齢の主効果が(1, 120)，交互作用が(2, 120)。

* $p<.05$ ** $p<.01$

以上の分析より，年齢とは独立に現在の社会的な立場が，重要な出来事の評価に影響を及ぼしていると言える。年齢の効果を統制しても教員は看護師より，中学時代の教師にまつわる出来事が自己を象徴していると認識する程度が高かった。また各群内では年齢の影響は有意ではなく，加齢そのものは出来事の評価に影響を及ぼしていなかった。

出来事に対する評価は，それを経験した時点で決定するものではない。重要性因子の中に，「その当時，この出来事が自分にとって大きな意味を持つと思った」「振り返ってみるとこの出来事は，自分にとって大きな意味を持っていた」という2項目が含まれていた。前者の評定は大学生が平均 5.1($SD=1.74$)，教員が平均 4.9($SD=1.98$)，看護師が平均 5.1($SD=1.46$)であり，群の効果は有意でなかった($F(2,125)=0.214$ ， ns)。一方，後者の評定は大学生が平均 5.6($SD=1.17$)，教員が平均 6.0($SD=1.07$)，看護師が平均 5.3($SD=1.22$)であり，群間の差が有意だった($F(2,125)=3.11$ ， $p<.05$)。これは教員による評定が看護師に

よる評定より高かったことによる。従って、出来事を経験した時点では、どの群の参加者も「やや大きな意味を持つ」ものとして、それを受け止めていた。しかしその後、現在までの間に群間に差が生じた。この結果は、出来事に対する評価がその後の自伝的推論過程を経て変化すること、想起時点の自己が出来事の評価に影響することを示している。

(3) 想起された出来事を重要と判断する理由

(3)-1 判断理由の分類

先行研究が扱ってきた自伝的推論の内容はきわめて幅広く、それぞれの研究が独自にコーディング・システムを考案し、参加者の想起にどのような自伝的推論が含まれているかを検討している。そこで研究5では研究3の結果を参考に、参加者が想起した出来事の重要性をどのように意味づけているかを分類した。研究3では教師から受けた影響を分類するために、「教師への肯定的な見方」「教師への否定的な見方」「教職志望」「反面教師」「考え」「学習・行動・性格面での肯定的な変化」「学習・行動・性格面での否定的な変化」「進路」の8カテゴリーを設けた。研究4で収集された記述を検討したところ、教師に対する否定的な記述が僅少であること、自己理解に関わる記述が認められたこと等、研究3とは若干異なる傾向が認められた。そこで研究5では、想起された出来事を重要と判断した理由を、以下の7カテゴリーに分類した。分類は二人の評定者が独立に行い(一致率 75.4%)、不一致のケースについては再度分類し直した。

- (1) 考え：価値観や考え方等を学んだ。
- (2) 行動や性格の肯定的な変化：その出来事が原因(きっかけ)となり、何かができるようになった、精神的に成長した等、行動や性格に肯定的な変化が生じた。
- (3) 自己理解：自分を理解するのに役立った。
- (4) 教職志望や教師モデル：教職を考えるきっかけになったり、「こういう先生になりたい」というモデルとして意識した。
- (5) 進路：自分の進路選択に影響した(ただし「教職を志望するきっかけ」は(4)に分類する)。
- (6) 印象や感情：その場での印象や感情が強かったので覚えている。

(7)その他

各力カテゴリーの記述例を表 3-24 に示す。想起された出来事の中には、単に「その場の印象や感情が強かったから」という意味づけしかされていないものが 20%程度あった。しかし残りの約 80%は、「その出来事から考えを学んだ」「性格や行動が変化した」「自己理解につながった」「教職を目指すきっかけになった」「教師としてのモデルになった」「進路選択に影響した」というように意味づけられていた。

表3-24 想起された出来事を重要と判断する理由

(1) 考え (26.2%)

(出来事)女性体育教師に叱られたこと。前の班、前々の班も捨てに行かなかった汚物の入ったゴミを捨てに行くように指示され、理不尽に思った私は、ゴミを捨てに行かなかった。それを教室まで私を探しだし、連れ戻して、ゴミを捨てると言われ、私は大声で泣きながら片づけた。(理由)自分のことでなくても、人がやらなかったとしても、きちんと自分はやりこなさなければならない。社会のルールという常識というものを大切にすることも、大切なのだと思った。

(2) 行動や性格の肯定的な変化 (16.7%)

(出来事)部活動の時に一度だけ大きなケンカがあり、チームメイトが二つに大きく割れてしまったことがあった。そのときに不安で、顧問の先生に何とかしてもらおうと相談しに行くと、先生は「私はそういう精神面のことについて口を出したくない。そういう揉め事を解決できるチームにならなきゃ。先生が口を出したって根本的には何も変わらない」と言われ、最初は見捨てられたように感じたが、よく考えると、先生も私たちのことを考えてくれてたんだと感じた。(理由)他人に甘えよう、頼ろうとしていた自分が、もっと自分の力でなんとかしようと考えようになり、とても成長できたように思う。

(3) 自己理解 (7.9%)

(出来事)部活の顧問の先生に部活中に呼び出され、体育館の隅で二人で話をした。「おまえは電照菊のような子だ。周りの力で一所懸命手をかけられてきれいに咲かせてもらっているのに、自分一人で立派に咲いたような顔をして全然感謝していない。もっと強くてたくましい、野草のような子になれ」と言われた。(理由)自分を理解するのに重要な意味を持っている。それまで私はすごくわがままで、周囲のことより自分のことばかりを優先させてきた。そのことに少しずつ気づき始めていたが、この先生の言葉ではっきり自覚し、意識することができた。

(4) 教職志望や教師モデル (12.7%)

(出来事)担任の先生が土曜日に一人で教室の掃除をしていて、ある土曜日に自分も手伝ったこと。(理由)教師を目指す上で、何も言わずに黙々と掃除をする先生の姿は、自分にとっての一つの目標である。

(5) 進路 (6.3%)

(出来事)クラスの担任で理科の先生。この先生は中学3年の自分に、理系に進むのがいいのではないかと教えてくださいました。そして卒業式の時、アルバムに一言「理系に進め」と書いてくれました。(理由)私の進路を決める時に大きな一言となった。

(%)は全参加者の報告に占める各カテゴリーの比率。

表3-24 想起された出来事を重要と判断する理由（続き）

(6)印象や感情 (23.0%)

(出来事)教育指導の先生に呼び出され、部活中にアメをなめていたことを怒られた。生徒3人くらいいたのですが、足を蹴り飛ばされた(何を言われたかは思い出せない)。(理由)他の生徒も同じようなことをしているのに、なんで自分だけが怒られなきゃいけないのか、むかついた。教師が生徒を蹴り飛ばしていいのだろうか、しかも女子生徒を!!

(7)その他 (7.1%)

(出来事)3年生、部活最後の大会で、今までずっと勝ち続けていたのに、そこで負けてしまい、責任を感じ涙を流した。そのときに、声をかけてくれたこと。(理由)3年間の部活の締めくくりとして重要。

(%)は全参加者の報告に占める各カテゴリーの比率。

各群におけるカテゴリーの比率を表 3-25 に示す。群によるカテゴリー比率の差は有意傾向を示していた($\chi^2(12)=20.35, p<.10$)。これは大学生群で「自己理解」、教員群で「教職志望や教師モデル」に該当する記述が多かったためである。前者は教員や看護師ではほとんど見られない記述であり、自己に関心が向かう青年期に特徴的な自伝的推論を示しているのかもしれない。また後者は、教員が現在の自分の職業を、約 25 年前の出来事と結びつけて認識していることを示している。

表3-25 各群で想起された出来事を重要と判断する理由

	群								
	大学生			教員			看護師		
	度数	%	残差	度数	%	残差	度数	%	残差
考え	12	(24.5)	-0.3	9	(22.0)	-0.8	12	(33.3)	1.2
肯定的な変化	6	(12.2)	-1.1	9	(22.0)	1.1	6	(16.7)	0.0
自己理解	7	(14.3)	2.1*	1	(2.4)	-1.6	2	(5.6)	-0.6
教職志望・教師モデル	5	(10.2)	-0.7	11	(26.8)	3.3**	0	(0.0)	-2.7
進路	3	(6.1)	-0.1	2	(4.9)	-0.5	3	(8.3)	0.6
印象・感情	13	(26.5)	0.7	7	(17.1)	-1.1	9	(25.0)	0.3
その他	3	(4.1)	-0.4	2	(4.9)	-0.7	4	(11.1)	1.1

* p<.05 **p<.01

ただし表 3-25 に示した理由の中で「教職志望や教師モデル」は、看護師群ではあり得ないカテゴリーである。そこで上で見られた群の効果を確認するため、カテゴリーごとに、その理由を指摘した人数に群間で差があるか検討した(ただし教職志望・教師モデルについては、看護師群は除いて分析した)。その結果、自己理解($\chi^2(2)=4.68, p<.10$)と教職志望・教師モデル($\chi^2(1)=4.22, p<$

.10)で、比の差が有意傾向を示していた。大学生では他の群より自己理解を理由にあげる参加者が多く、教員では大学生に比べて教職志望・教師モデルを理由にあげる参加者が多いことが確認された。

(3)-2 機能との対応

このように意味づけられた記憶は、研究3で収集された記憶と同様、様々なかたちで自己機能や方向づけ機能を担っていることが推測される。いずれのケースも、その出来事を現在につながる出発点として認識するならば、当時の自己と現在の自己が一貫しているという感覚を与えてくれる。あるいは信念の基盤となり判断の拠り所(基準点)として機能することも考えられる。「考えを学んだ」「教師としてのモデルとなった」という出来事は、もとの経験と類似した場面で想起され、行動を方向づけるだろう。これは Pillemer (1998)が方向づけ機能の一つとして提唱した類推機能である。また「自己理解につながった」という出来事は、自己を象徴する機能を果たしていると考えられる。回答の中には次に示すように、想起された出来事の記憶が上記の機能を果たしていることが比較的明瞭にうかがえる記述も認められた(下線筆者)。

【出発点】(出来事)一年生の頃、一番仲の良かった友人が、少々クラスで上手くいっていなかったので、保健室に行っていることが多く、私も友人に会いに(もしくは慰めにかもしれないが)、しばしば保健室へ行っていた。あるとき、保健室の先生と友人と三人で、真剣に、その状況の対処法を暗くなるまで話し合った。(理由)真剣に人間関係の難しさや、こじれた関係の改善を考えたのは、これがはじめて。おそろくこのときに考えたことは、今の考え方にも影響している。

【基準点】(出来事)先生の言った「他人の良いところ探しをしる」という言葉が、今でも心の中に響いている。(理由)他者を理解する際、常に私の念頭に置かれている言葉である。苦手と思うような人でも、「いいところ」を見つけることによって、その人を認めることができる。教師の放った言葉を胸に、私はこれまで実に多くの人と良い関わりをもつことができている。

【類推】(出来事)学校までスクールバスで通っていた。下校時、バス車内で発車待ちをしていると、騒いでいた友だちを叱りに、怖いと評判の体育教師がいきなり車内に怒鳴り込んできて、自分は何もしていないのに、とても驚いて嫌な思いをした。(理由)むやみに怒鳴る人間に

はなりたくないと思った。無関係の人にまで迷惑をかける(うるさい、驚く、等)ので、注意する際に大声を出すのは良くないと思うようになった。

【自己】(出来事)O先生は野球部の顧問をしていたが、ある日新しい先生がもう一人、野球部の顧問につくことになった。新人顧問の方も先生なので、生徒は指導されるとおりに(それまでとは別の)練習をした。すると威厳のあるはずのO先生が少しいじけてしまった。

(理由)教師はあまり感情を表すことが無いと思っていた私に、言葉は少なかったが、少しへこんでいるということが伝わってくるくらいだった。意見を言える人がればいいが、少数派の人間やいじめられている人間の多くはあまり主張することができないし、私はいつも目の前にいる人や、ある出来事の裏にいる人の考えていることが気になります。中学校の時にすでにその片鱗を見せていたなと思った。

このように多くの参加者が、価値観や態度形成、自己の成長や変化、自己理解、進路選択等と結びつけて、中学時代に経験した出来事の重要性を認識していることが示された。さらに大学生や教員といった立場に特徴的な認識も示された。こうした自伝的推論は、記憶の自己機能や方向づけ機能と密接に関わっているようである。

(4) 現在の自己とのつながり

このように約 25 年が経過しても、人は中学当時の出来事を想起し、それがその後の自己に影響を及ぼしたと認識している。さらに参加者の回答の中には、その影響が現在までに及んでいることがうかがわれるものもあった。そこで、参加者のあげた理由について、そこに現在の自己とのつながりが言及されているか検討し、言及の程度に従って3段階に分類した。分類基準と記述例を表3-26に示す。分類は二人の評定者が行い(一致率 80.0%)、不一致のケースは再度分類し直した。この基準に従って、現在とのつながりにどれくらい明確に言及しているかを2～0で得点化した。その結果、大学生は平均 0.84($SD=0.79$)、教員は平均 1.22($SD=0.81$)、看護師は平均 0.44($SD=0.64$)であり、群間の差が有意であった($F(2, 125) = 9.76, p < .001$)。下位検定(Ryan法)の結果、全ての群間に有意差が認められた。

この結果は、出来事に対する評定結果とも一致する。重要性因子に含まれる

【現在の自己とのつながりが明確】

- (1)理由に「現在の自分の目標である」「現在の出発点である」「その影響で今」等、今現在の自己とのつながりが明記されている。

例：(出来事)担任であり社会科担当のS先生に、夏休み中、岩宿遺跡に連れてしてもらった。希望者が指定された日時に高崎駅に集合し、電車で行った。学級の大半の生徒が参加したと思う。遺跡見学そのものはとてもつまらなかったが、出かけたことが強く心に残っている。(理由)生徒のために学校外で時間を割いてくれたことに、先生の人柄がよく出ている。学校にいるときだけでなく、いつも生徒のことを思ってくれている先生として、現在、教職に就いている私の手本となっている。

- (2)「今」「現在」という表現を用いていなくとも、今の自己との関連が示唆される。現在形で記述しているケースが多い。

例：(出来事)進路相談の最終面接で、受かっても行く気が全くない私立をうけるのは「勿体ない」と、一刀両断にされた。なので、かえって迷いが吹っ切れたと言いに行ったら、「でも、やっぱり気持ちに気づくのが大事だよな」と言われた。(理由)自分が全く教師という職種に就くことを考えていなかった時期からずっと心に残っていた一言で、教師を目指そうと思った時にすぐ出てきたエピソードであり、そういうことの言える教師になりたいと思う。

- (3)「教師になりたいと考えたきっかけ」として意味づけている。

例：(出来事)担任の先生(男)の口癖が、「俺はいつでも教師を辞められる。そしてプロボウラーになるんだ。だからみんながやりたいことを何でもやらしてやる。責任は俺がとる」だった。(理由)かっこよかった。私もあんな先生になりたいなと思った。私の職業選択のきっかけになった。

【現在の自己とのつながりが曖昧】

- はっきり「現在の目標」「その影響で今」などとは書いていないが、「～を学んだ」「～が大切」等、その出来事と現在の自己が結びついていることが推測される。

例：(出来事)担任と二者面談をした時に、「あなたは人よりも喜怒哀楽が激しいから苦勞するかもしれない」といきなり言われて困惑した。そしてその後、毎日「感性ノート」を書いて提出するように指示された(喜怒哀楽を感性として文字で表現するように)。(理由)自分について考え始めるきっかけとなった。感性ノートを書き自己を振り返ることで、文学にも興味を持ち始め、進路に影響を与えた。

【現在の自己とのつながりに言及していない】

- 当時の説明や感情に限定した記述であり、現在の自己とのつながりが明示されていない。

例：(出来事)クラスの女子の一部から白い目で見られていた時、担任はいろいろ話を聞いてくれて、仲の良かった友人たちと一緒に焼き肉を食わせてくれた。(理由)クラスでの生活に息苦しさを感ず、ふさぎ込みかけていた自分に、味方がいることに気づかせてくれて、そのおかげで立ち直ることができた。

(下線筆者)

「この出来事と今の自分との間につながりを感じられる」という項目に対する評価結果は、教員が平均 6.07($SD=0.93$)、大学生が平均 5.45($SD=1.14$)、看護師が平均 4.86($SD=1.55$)であり、群の効果が有意であった($F(2, 125)=9.59, p<.001$)。下位検定(Ryan 法)の結果、群間の差は全て有意であった。

現在の自己とのつながりへの言及の程度についても、評価結果の分析に準じて、年齢の効果を統制して分析を行った。31-42 歳の参加者(教員 30 名、看護師 22 名)に限定して教員と看護師を比較したところ、有意差が認められた(教員, 平均 1.13, $SD = 0.86$; 看護師, 平均 0.59, $SD=0.73$; $t(50)=2.39, p<.05$)。また各群の参加者を年齢の中央値に従って分けた上で、群(大学生, 教員, 看護師) × 年齢(中央値より上, 下)の分散分析を行った(表 3-27)。群の主効果が有意であり($F(2,120)=11.06, p<.001$)、下位検定(Ryan 法)の結果、3 群全ての組み合わせで有意差が認められた。また年齢の主効果も有意であり($F(1,120)=4.42, p<.05$)、年長者の方が現在の自己とのつながりに言及していた。群 × 年齢の交互作用は有意ではなかった。従って年齢とは独立に、現在の社会的立場によって、当時の記憶と現在の自己が結びつけられる程度に差が認められた。現在教員として勤務している参加者は、約 25 年前の出来事であるにもかかわらず、今の自己とのつながりを強く感じていた。次いで教育学部の大学生が、過去の出来事と現在の自己とのつながりに言及していた。

表3-27 各群で想起された出来事と現在の自己とのつながりへの言及
(参加者の年齢を統制した分析)

群	年齢	
	中央値より下	中央値より上
大学生	0.62 (0.74)	1.09 (0.78)
教員	1.09 (0.85)	1.37 (0.74)
看護師	0.39 (0.49)	0.50 (0.76)

数値は0~2の値をとる。()はSD。

(5) 自伝的推論は否定的な経験から引き出されるのか

Thorne, McLean, & Lawrence (2004)は大学生の自己定義記憶を分析し、「緊張(tension)」「不快、当惑、不一致、不安、等の否定的な記述)を含む出来事の方が、教訓や洞察を引き出しやすいことを指摘している。それでは研究5の場合、教師との関係が否定的な出来事の方が、自伝的推論を引き起こしやすいの

だろうか。この点について、二つの観点から検討を加える。まず、想起された出来事を重要と判断した理由として、(1)考え、(2)行動や性格の肯定的な変化、(3)自己理解、(4)教職志望や教師モデル、(5)進路、のいずれかの判断がされている場合に、「自伝的推論が行われた」と判定した。これらはいずれも、過去の出来事とその後の自己との間の結びつきを意識した意味づけだからである。その上で、教師との関係(肯定的、否定的、その他)との関連を検討した。結果を表 3-28 に示す。大学生($\chi^2(2)=2.82$)と教員($\chi^2(2)=1.25$)では偏りが有意でなく、教師との関係にかかわらず、自伝的推論が引き出されやすかった。看護師では偏りが有意であり($\chi^2(2)=8.87, p<.05$)、教師との肯定的な関係の方が、自伝的推論を引き出しやすかった。

次に、現在の自己とのつながりに言及しているか否かで記述を二分して、教師との関係(肯定、否定、その他)との関連を検討した。結果を表 3-29 に示す。大学生では偏りが有意であり($\chi^2(2)=6.02, p<.05$)、「その他」の出来事から現

表3-28 教師との関係のタイプと自伝的推論

教師との関係		大学生		教員		看護師	
		自伝的推論		自伝的推論		自伝的推論	
		なし	あり	なし	あり	なし	あり
肯定的	度数	12	17	6	19	3	16
	%	(41.4)	(58.6)	(24.0)	(76.0)	(15.8)	(84.2)
	残差	1.6	-1.6	0.4	-0.4	-2.7	2.7**
否定的	度数	2	11	3	9	8	7
	%	(15.4)	(84.6)	(25.0)	(75.0)	(53.3)	(46.7)
	残差	-1.5	1.5	0.3	-0.3	1.8	-1.8
その他	度数	2	5	0	4	2	0
	%	(28.6)	(71.4)	(0.0)	(100.0)	(100.0)	(0.0)
	残差	-0.2	0.2	-1.1	1.1	1.9*	-1.9

** p<.01 * p<.05

表3-29 教師との関係のタイプと、現在の自己とのつながりへの言及

教師との関係		大学生		教員		看護師	
		言及		言及		言及	
		なし	あり	なし	あり	なし	あり
肯定的	度数	22	7	13	12	17	2
	%	(75.9)	(24.1)	(52.0)	(48.0)	(89.5)	(10.5)
	残差	0.1	-0.1	-0.3	0.3	-0.5	0.5
否定的	度数	12	1	7	5	14	1
	%	(92.3)	(7.7)	(58.3)	(41.7)	(93.3)	(6.7)
	残差	1.6	-1.6	0.4	-0.4	0.3	-0.3
その他	度数	3	4	2	2	2	0
	%	(42.9)	(57.1)	(50.0)	(50.0)	(100.0)	(0.0)
	残差	-2.2	2.2*	-0.2	0.2	0.4	-0.4

* p<.05

在への言及が引き出される率が高かった。教員($\chi^2(2)=0.16$)と看護師($\chi^2(2)=0.36$)では偏りが有意でなかった。

以上より、否定的な経験が自伝的推論を引き起こすという Thorne ら(2004)の仮説は、検証されなかった。肯定的な出来事も否定的な出来事も、自伝的推論を引き出す率にはほとんど差が無かった。また参加者が想起した出来事はもともと肯定的な内容が多かった。そのため度数としては、肯定的な出来事から自伝的推論が引き出されたケースが多かった。

6. 考察

研究5では研究4で収集したデータを自伝的推論という観点から再分析した。教育学部(教員養成系)の大学生、学校教員、看護師という年齢・社会的な立場ともに異なる参加者が想起した中学校の教師にまつわる記憶と、それを重要と考える理由を分析し、その出来事の影響や現在とのつながり等がどのように意味づけられているのか検討した。

(1) 自伝的推論の内容と一般性

当該の出来事から平均6年が経過している大学生のみならず、平均19年が経過している看護師、平均25年が経過している教員でも、重要度の高い出来事が想起された。またそれらの出来事が起きた状況や、その場での教師との心理的な関係では、群間の差は見られなかった。すなわち、いずれの群でも課外活動や学習に関わる比較的肯定的な出来事が多かった。

こうして想起された出来事に対して、いずれの群でもほとんどの参加者が、「価値観や考え方等を学んだ」「行動や性格に肯定的な変化が生じた」「自分を理解するのに役立った」「教職志望のきっかけになった」「教師のモデルとして認識した」等、出来事を自己と結びつけ意味づける記述をしていた。過去の出来事と自己を結びつけて認識する自伝的推論は、青年期以降の参加者にとっては一般的な過程であると言えよう。

(2) 想起時点での立場と自伝的推論

ただし出来事に対する評価や意味づけ、現在の自己との関連づけという点で

は、3群の間に差異が認められた。想起対象となった「教員」という存在に対して現在どれほど近い立場にいるかということが、自伝的推論を左右する大きな要因になっている。

出来事の特徴に対する評定結果からは、特に教員が当該の出来事を「重要で自己を象徴する」と評定していることが示された。またその出来事を重要と判断する記述内容の分析から、「自己理解」「教職志望・教師モデル」という、大学生や教員に特徴的な意味づけが見出された。さらに教員は中学時代の記憶と現在の自己との間に強いつながりを認識しており、このつながりは大学生、看護師の順に低下することが示された。この効果は年齢を統制しても認められたことから、参加者の年齢とは独立に、現在のその人の社会的な立場が自伝的推論に影響していると言える。

白井(2000)は大学卒業後2年目の卒業生に質問紙調査を実施し、将来展望や過去のとらえ方(過去展望)が卒業後に変ったかを問うた。その結果、過去展望が変化した人の中で、過去の経験が現在の自己とつながっていることを実感するという回答が認められた(例:「バイトや部活の経験が、教師になった今では、精神的に役立っている」)。このように人は、現在置かれている立場から過去の経験をとらえ直し、意味づけようとするのである。

その出来事が「その当時大きな意味を持つと思った」という項目に対する評定は、3群間で差が無かった。ところが「振り返ってみると大きな意味を持っていた」という項目に対する評定は、教員群が最も高かった。この結果は、想起時の自己が自伝的推論を左右することを示すと同時に、自伝的推論の過程についても示唆を与える。Bluck & Habermas (2000) は、統合的回想や自らの経験の意味を追求する活動は、大きなライフイベントやトラウマを経験すると増加すると指摘している。また研究4では、重要な出来事は繰り返し鮮明に想起されることが示された。教員群の参加者は、進路選択や職業選択といった人生の節目に、あるいは職業選択後に教師として様々な危機と遭遇する中で、教師にまつわる出来事を想起して判断や行動の拠り所としたり、その重要性を評価し直すという自伝的推論を重ねてきたのではなかろうか。そしてそのことが、「振り返ってみると大きな意味を持っていた」という評価につながっていると考えられる。

以上の結果はまた、研究3と同様に、自伝的記憶の構造にとっても重要である。自伝的記憶は決して、数年程度の幅を持つ lifetime period の連続ではない。重要な出来事は繰り返し参照され、十数年、二十数年といった時間を隔ててなお、現在の自己と結びつけて意識されているのである。

(3) 肯定的な経験への意味づけ

自伝的推論の対象となる出来事について、これまでの研究では否定的な経験の役割が強調されていた(Bluck & Glück, 2004; Thorne et al., 2004)。否定的な経験から肯定的な意味が引き出されると、自己に対する肯定的な認識が得られることから(Debats, Drost, & Hansen, 1995; King, Scollon, Ramsey, & Williams, 2000)、こうした経験を解釈し意味づけることの重要性は否定できない。ところが研究5では、肯定的な経験も否定的な経験も、自伝的推論を引き出す率には概して差が無かったのである。肯定的な経験から自伝的推論を引き出しているケースも、数多く認められた。

否定的な経験を強調した先行研究は、自伝的推論の中でも、出来事から教訓や洞察を引き出す「意味づけ」過程に着目したものばかりである。同じ失敗を繰り返さないためにも、否定的な出来事を注意深く処理して、教訓や洞察を引き出すことは重要である。しかし研究5で見出された自伝的推論は、教訓や洞察に限定されるものではない。研究5で活発な自伝的推論を示したのは教員であり、中学時代の出来事に対して「教職を選択したきっかけ」「教師としての現在の自分の目標」という意味づけを多く行っていた。このように過去と現在を結びつけ、自己の一貫性を確認するような自伝的推論は、否定的な出来事だけでなく、肯定的な経験からも引き出されるのであろう。また否定的な出来事にせよ肯定的な出来事にせよ、「否定的な出来事から教訓や洞察を引き出した自己」「肯定的な経験を基盤にする自己」といったように肯定的な自己像を維持する働きが、自伝的推論にはあるのかもしれない。

第7節 第3章のまとめと考察

本章では三つの研究を通して、自伝的記憶の機能に関して検討を加えた。主要な結果は以下のようにまとめられる。

1. 自伝的記憶の自己機能と方向づけ機能

研究3では、教職を志望する意識の強い大学生では、小学校から高校までの教師に関わる記憶が快方向に偏っていることが示された。こうした肯定的な記憶の蓄積が、教職へと動機づける機能を担っていると推測される。また青年期における職業選択の重要性を考えると、このように職業選択の動機と結びついた記憶は、自己機能を有しているとも言える。

教職志望の強い大学生では、教師に関わる記憶に対して、「その出来事から影響を受けた」と認識することが多かった。影響を受けた出来事の記憶を分析すると、志望の強さにかかわらず、「出発点」「転換点」「基準点」「類推」に該当する内容が確認された。これらは記憶が判断や行動を方向づける機能(方向づけ機能)や、自己を象徴したり自己の一貫性を確認する機能(自己機能)を担っていることを示している。また研究5でも、出来事的重要性に関する記述内容から、記憶が方向づけ機能や自己機能を有している可能性が指摘された。

自伝的記憶の方向づけ機能については、Pillemer を中心に記述的な手法を用いて知見が重ねられてきた(Pillemer, 1998, 2001, 2003)。第3章の研究はそれとは異なる手法によって、自伝的記憶の方向づけ機能や自己機能の存在を明らかにしたと言える。

2. 「出来事」ではなく「出来事の記憶」が機能を担う

研究3・研究4では、その人に影響を及ぼした重要な出来事は、出来事として特別な意味を持つだけでなく、他の記憶とも結びついて繰り返し鮮明に想起されるという意味で、特別な構造や想起過程を伴っていることが示された。特別な出来事が影響を及ぼしたのではなく、繰り返し想起されることを通して、記憶は方向づけ機能や自己機能を果たし続けているのだと言える。

ある出来事とその後の行動や判断に影響を及ぼすとしても、決して、その出来事を経験した瞬間に記憶が固定し、影響を及ぼし続けるというわけではない。おそらく人生の節目や危機的な状況に直面したり、あるいは自己の判断に迷いが生じた時に、意図的あるいは無意図的に、自らの出発点や基準点となる出来事を想起するのであろう。そしてこうして想起された記憶が、その人の判断や行動を方向づける。このように繰り返し想起されることによって、重要な記憶は鮮明さを保ち続けていると考えられる。

3．自伝的推論

このように「過去の出来事が今の自分に役立っている」「過去の出来事が今の自己を支えている」「あの出来事がきっかけで、その後こうなった」等と、出来事と出来事、出来事と自己を結びつけて認識する自伝的推論の過程は、自伝的記憶にライフストーリーとしての一貫性を与える役目を果たす。研究5では、もとの経験から長い時間が経過していても、人はその経験と自己を結びつける自伝的推論を行うことが示された。自伝的推論は青年期以降では一般的な認識過程なのだろう。

従来の研究では、加齢が自伝的推論に強く関わっていることが指摘されていた。研究5では年齢とは独立に、想起時の自己のあり方が影響を及ぼすことが見出された。学校教員は大学生や看護師に比べると、中学時代の教師にまつわる記憶の重要性を高く評価し、その記憶が自己を象徴すると認識していた。また看護師よりも大学生、大学生よりも教員が、当時の出来事を現在の自己に結びつける記述を多く報告していた。教師という存在とどれくらい近い立場にあるかということが、こうした自伝的推論過程の違いを引き起こしていると考えられる。

自伝的推論は記憶の機能と関係が深い。自伝的推論は過去と現在を結びつける内省的な思考過程である。従って、意識的に出発点や基準点を想起することで意志決定を行ったり自らを動機づけたりする行為は、自伝的推論が意味するものと非常に近い。また、環境内の何らかの手がかりが契機となって不随意的に想起された出来事が、自己の一貫性や成長を実感させてくれることもある(神谷、2003)。この場合、想起そのものは不随意的であっても、想起内容に対し

て意識的に意味づけを行ったり内省的な思考を働かせるなら、それも自伝的推論の一種と言えるだろう。このように考えると、自伝的記憶が出発点や基準点としての機能を担っているというよりも、過去経験を出発点や基準点として意味づける自伝的推論の過程が、機能を担っていると考えるべきかもしれない。ただし自伝的推論の検討は始まったばかりであり、概念の整理や洗練が求められる。

4．構造との関連

さらに本章での研究結果は、第2章で検討された自伝的記憶の構造についても示唆を与える。第2章では自伝的記憶が数年程度の幅を持つ lifetime period によって体制化され、その中の出来事が密接に結びついていることが示唆された。しかし職業選択や価値観等に影響を及ぼした重要な出来事の場合、その記憶はより長い時間を越えて、その後の出来事や現在の自己と結びついている。研究3では大学生の職業選択と関連する記憶が、小学校高学年～中学校に偏っていることが示された。研究5の参加者である現職教員は、約25年も前の重要な出来事を「教師を志望したきっかけ」「仕事の上での手本」として想起し、現在の自己と結びつけて認識していた。自己にとって重要な出来事を人は繰り返し想起し、自己の目標や態度と関連づける自伝的推論を重ねているのであろう。こうした記憶は長い時間を経ても鮮明に想起され、現在の自己を支える役目を果たしていると推測される。

5．今後の課題

最後に自伝的記憶の機能に関して、本章では十分に検討されなかった問題を指摘しておく。第一に、本研究では影響のあった出来事が繰り返し想起されていることが見出された。しかしながら、どのような時に人が記憶に立ち戻るのかはわかっていない。類推機能を果たす記憶は、もとの経験と類似した出来事に遭遇した場面で想起されると考えられる。また出発点や基準点といった記憶が自分の価値観や判断を確認し動機づけを高めるのに有効であるとするならば、逆にそうした事柄に疑問を抱いた時や不安を感じた時に想起することが考えられる。Schwarz (1990)は気分が判断に及ぼす影響を検討する中で、不快な

感情は状況に問題が存在することを意味し、精緻な情報処理を促すという仮説を提唱している。この仮説からも、何らかの障壁に遭遇した際の精緻な情報処理の一つとして、自伝的記憶を想起し判断の材料とすることが考えられる。Pillemer (1998)や本研究で収集された記憶の中にも、そうした場面で記憶が想起されることを示す例が認められた。

1 学年 6 クラスある中で、1 クラスが今で言う学級崩壊になりました。体育を受け持っていた他学年の先生がそのクラスに入り、数日間で立ち直らせたのを見たとき、その先生の力のすごさに感動したのを覚えています。(中略) つまりきそうになった時、つまりいた時、手本として 思い出すことに意味を持っています。(研究 4, 下線筆者)

しかしながらこの点については推測の域を出ておらず、さらに実証的な検討が求められる。そのためには、意図的・無意図的に自分の出発点や基準点を想起した事例を収集し、その状況を分析することが一つの方法である。

第二に、本章では Pillemer の研究を参考に、記憶が様々な機能を果たす可能性を検討してきた。Pillemer は抽象的な知識ばかりではなく、特定の出来事記憶が人の行動や判断を方向づけることを強調していた。ところが研究 3 では、自己に影響を与えた出来事で、否定的な内容の記憶には特定性の高いものが多い一方、肯定的な内容の記憶には一般的な記述が多かった。何のために、どのような記憶を想起するのかという点について、機能と構造の間に最適な組み合わせといったものがあるのかもしれない。例えば不快な経験を避けるためにはできるだけ具体的に状況を想起することが必要な一方で、肯定的な経験を想起して自己を動機づけたり自己の一貫性を確認するには、特定のエピソードまでさかのぼる必要はなく、概括的な想起だけでも十分なのかもしれない。

第4章 人生全体を通じての自伝的記憶の想起 - 加齢に伴う変化 - *4

研究1・2では特定の時期から想起された出来事を手がかりに、連想される出来事の想起を求めた。研究3・4・5では特定の時期(「中学校」)や想起内容(「教師にまつわる記憶」)を指示した上で、自伝的記憶の想起を求めた。それでは、こうした制約が加えられない状況で人生全体を振り返った時に、自伝的記憶はどのように想起されるであろうか。またそのときの想起のパターンは、機能という点からはいかなる意味を持つのだろうか。

第3章では想起時の自己の社会的立場によって、特徴的な自伝的推論が行われること、自伝的推論の対象となるような重要な出来事は繰り返し想起されることが見出された。このことは、想起時点での自己の影響を受けて自伝的記憶が様々に意味づけられ、再構成されることを示唆している。第4章ではまず自伝的記憶のこうした再構成的な側面についてこれまでの研究を概観する。続いて再構成を扱った研究の中でも特に、自伝的記憶の想起を繰り返し求めた場合に、想起はどの程度安定しているのか、あるいは変動するのか、という視点から検討した研究を紹介する。その上で研究6において、青年期と中年期以降の参加者に、人生を振り返って重要な出来事の想起を求める。さらに参加者には、約2ヶ月の間隔をおいて2回目の想起を求める。そして2回の想起内容の安定性(変動性)という視点から、加齢に伴う自伝的記憶の構造と機能の変化を探る。

第1節 記憶の再構成

第3章では自伝的記憶が担う様々な機能を検討した。こうした機能を果たす上で、自伝的記憶は必ずしも原体験の正確な複写である必要はない。むしろ機能によっては、積極的に再構成を行うことが必要な場合もあるだろう。例えば自己の一貫性を確認したり、自己の成長を実感するために、人は一貫性や成長

*4 第4章、第1節の内容は、佐藤(1998, 2002a)をもとに加筆修正を行った。第3節の内容は、佐藤(2002b, 2003, 2005b, 2005c)をもとに、加筆修正を行った。

を強調するかたちで再構成的な想起を行うことが考えられる。自伝的記憶の再構成的な側面については、社会学者の Berger(1963)が的確に指摘している。

少なくともわれわれの意識の内部においては、過去は順応性に富み柔軟性に満ちている。すでに起こった出来事を回想し、再解釈し、説明し直すたびに、過去は絶えず変化してゆく。それゆえ、われわれは物の見方と同じ数だけの人生を持つわけである。(Berger, 1963, 訳書 p.85)

人がそれまで誇らしげに思っていた出来事は、その人の前史におけるきまりの悪いエピソードとなる。もしそのエピソードが、かくありたいと願っている自我像からあまりにも掛け離れている時には、それを思い出すことすら抑制されるだろう。したがって、その人がクラスの卒業生総代となったあの輝かしい日は、再構築された生活史の中では、それまで重要とは思われなかった日に、すなわち初めて絵を描こうとした日に席をゆずることとなる。(Berger, 1963, 訳書 p.87)

1．態度や動機に基づく選択的想起

自伝的記憶は望ましい自己像を保証するために、柔軟に選択される。Sanitioso, Kunda, & Fong (1990)は大学生を対象に、ある群(外向群)には「外向的な人は内向的な人に比べると、卒業後、進学するにせよ就職するにせよ成功しやすい」という文章を呈示した。そしてもう一方の群(内向群)には逆に、「内向的な人の方が成功しやすい」という文章を呈示した。これらはいずれも心理学者の書いたものであるという教示が与えられ、参加者はなぜ外向的(あるいは内向的)な方が成功しやすいのか理由を考えて書くよう求められた。その後「人付き合いで困ったことがある」「初対面の人に自分から話しかけた」等、内向的あるいは外向的な行動例が呈示され、自分がそのように行動した経験を想起するように求められた。その結果、内向群の参加者は内向的な経験を、外向群は外向的な経験を、それぞれより速く想起することが見出された。ある特性が好ましいという態度を持った参加者は、自分の自伝的記憶の中からそれに合致する記憶をすばやく想起し、それによって「望ましい自己」を確認することができたのである。

2．潜在理論に基づく再構成

このように、過去は現在の自己の態度や動機に合致するよう再構成される。

そのとき重要な役割を果たすもう一つの要因が「潜在理論(implicit theory)」である。潜在理論とは、性格や能力や態度の可変性や不変性に関して、あるいは可変性や不変性を促進する条件に関して、人々が持っている信念を指す。例えば「性格は数年では変わらない」「重大なライフイベントを経験すると性格が変わる」といった信念は潜在理論の一例である。Ross によると人が過去の自分を想起する時には、現在の自分と潜在理論をもとに過去の状態を再構成する。従って「現在の自分は過去から変化していないはずだ」という潜在理論を持っている場合は、現在の自分とよく似た過去の自分を想起する。一方「現在の自分は過去の自分とは違うはずだ」という潜在理論を持っている場合には、現在とは異なる過去の姿が再構成されることになる(Ross, 1989; Ross & Buehler, 1994a; Ross & Conway, 1986)。

性格特性や態度は短期間ではなかなか変化しないと考えられやすい。そのため実験的に意見を操作した場合、参加者は意見を変化させたにもかかわらず、以前から同じ意見を持っていたりそれに合致する行動をとっていたように想起してしまう(Ross, McFarland, Conway, & Zanna, 1983; Ross, McFarland, & Fletcher, 1981)。また関係が悪化したカップルは、以前から相手のことを低く評価していたかのように想起する(McFarland & Ross, 1987)。このように実際に変化が生じたにもかかわらず一貫した自己を想起することは、自己が安定したものであるという認知を与えてくれるのだろう。これとは反対に、短期間であっても特別な経験をした場合や、あるいは非常に長い年月が経過した場合には、「人は変化するはずだ」という理論に基づく再構成が行われる。Conway & Ross (1984)は学習スキル改善プログラムを受講した学生が、実際はスキルが上達していないにもかかわらず上達したと見出した。彼らは過去のスキルを実際よりも低く想起することにより、プログラムの効果があったように考えていたのだろう。

潜在理論の中には社会的に共有されているものもある。高齢者は「若い頃に比べて記憶力が衰えたはずだ」「理解力は高まったはずだ」という理論に基づいて過去を想起する(McFarland, Ross, & Giltrow, 1992)。また鬱病患者は「親の厳しい養育が鬱の原因だ」という理論に基づいて過去の親子関係を想起する。親子関係の認知について鬱患者群と健康群を対象を比較すると、「親は私に愛

情を示してくれなかった」といった拒否的な項目に対する評定値は患者群の方が高かった。ところが鬱から回復した群の評定値は健康群と差が無かった。拒否的な親の姿は、いま鬱に苦しんでいる患者の想起の中に存在していると言えよう(Lewinsohn & Rosenbaum, 1987)。

第2節 反復想起に見られる安定性と変動性

自伝的記憶の再構成を実験的に検討する場合には、上で紹介したように、参加者間計画を用いることが多い。すなわち、想起時点での態度や動機を群間で操作し、想起内容に差が生じるか検討する。これに対して、同じ参加者が時間をおいて、自伝的記憶を繰り返し想起するという計画(以下、「反復想起」と呼ぶ)を用い、自伝的記憶の想起がどの程度安定しているのか、あるいは変動するのかを検討することもできる。

1. 反復想起と信頼性

同じ参加者に反復想起を求める一つの目的は、想起された記憶の信頼性を確認することである。例えばCohen & Faulkner (1988)は、記憶に伴う感情や評価の信頼性を検討する目的で、最初の想起から3ヶ月後に再検査を行っている。Rivers (2001)は学校時代に受けたいじめの被害経験について反復想起を求めた。その結果、中心的な情報については安定性が高いことが見出され、想起の安定性は信頼性の一つの指標となると主張した。目撃証言の研究では、同じ被害者に繰り返し証言が求められることが多い。証言を繰り返すことで想起内容が変化するのか、そこにはどういう要因が影響を及ぼすのかという問題を扱った研究も、反復想起を通して記憶の信頼性を検討していると言える(Peterson, Moores, & White, 2001; Poole & White, 1991; Salmon & Pipe, 2000)。

2. 変動の持つ意味

しかし2回の想起で自伝的記憶が変動するということを、単に信頼性の低さを示すものとして、否定的に評価すべきではないだろう。面接調査を用いた研

究報告から印象的な知見を紹介しよう。

Erikson, Erikson, & Kivnick (1986)は多くの夫婦に若い頃から老年期までの縦断的なインタビューを行ったが、かつて危機を経験した夫婦の多くが年齢を重ねると、そのことを忘れてしまっているかのように見えたという。ある女性は30～40代の頃はずっと、夫とは共通点がなく報われない結婚から開放されたいと訴えていた。それが結婚後61年を経た時点では、「わたしたち夫婦がよく似た考え方をするという事実は、ふたりを結びつけている強い絆なのです。何をするにもいつも一緒でした。いつも助け合いました。61年間ずっと」と回想していた(訳書 Pp.118-119)。これは想起時点の態度や夫婦関係に基づいて、過去が再構成的に想起されていることを示している。

想起段階の視点から過去が再構成されることは、Blackburne-Stover, Belenky, & Gilligan (1982)の研究でも示されている。彼らは妊娠中絶をした女性に、中絶直後と1年後に面接を実施した。また道徳性発達検査も同時に行った。その結果、道徳性発達検査の得点が1年間で上昇した人は上昇しなかった人に比べると、1年前とは違う情報が加わったり、同じ質問に異なる答を返したり、1年前には回答できたことを忘れていたケースが多かった。道徳発達に伴い、中絶という問題への対処に関わる記憶が再構成されたのである。

面接調査では語り手と聴き手の関係の変化によって、想起される内容も変化する。このことに気づいた社会学者や人類学者たちは、語り手の話すライフストーリーが実は語り手と聴き手の共同制作の産物であると指摘している(Langness & Frank, 1981)。小林(1992, 1995)はカナダ移民の女性に対する3回にわたるインタビューを分析し、一つの話題が異なる解釈のもとで語られる「ヴァージョンのある話」に気づいた。それはいずれも「夫の賭博」などネガティブな経験に関するものであった。小林(1992, 1995)はヴァージョンのある話が語られる過程を、次のように考察している。すなわち、聴き手に支持され共感されていく中で、語り手がこうした経験に言及してもよいと思う程度の「親密さ」が形成される。そしてこの親密さを基盤にして、ネガティブな経験が次第に様々な表現や解釈で語られ、一つの話題が複数のヴァージョンで構成される「深さ」のある生活史ができあがったのである。一つのエピソードが繰り返し語り直されることは、臨床場面においても重要な意義を持つとされている(横

本, 1999; 小森・野口・野村, 1999; 森岡, 1994)。

このように反復想起の安定性や変動性は、信頼性の指標である以上に、自伝的記憶の重要な側面を示している。

3．二種類の安定性・変動性

想起の安定性・変動性を詳細に検討する場合、二つの問題を分けて論じることができる。一つは、ある出来事を反復想起した場合に、それが前回と同じように想起されるかという問題である。もう一つは、自分の過去を振り返って複数の出来事を想起した場合に、同じ出来事が想起されるかという問題である。ここでは前者を出来事の安定性・変動性、後者を選択の安定性・変動性と表現しよう。

(1) 出来事の安定性・変動性

ある出来事を反復想起した場合、2回の想起はかなり安定していることが示されている。Wynn & Logie (1998)は大学の新生を対象に、入学直後の出来事(例：ゴシック建築の中でのガイダンス)について2～4回、2ヶ月ずつの間隔を挟んで反復想起を求めた。想起内容は安定しており、反復回数や時間経過にかかわらず忘却や変容は少ないことが見出された。また出来事の内容だけでなく、日付判断や記憶特性の評定も安定している(McCormack, 1979; Robinson, 1976; Rubin, Schrauf, & Greenberg, 2004)。Rubin et al.(2004)は20の自伝的記憶について、2週間の間隔を挟んで様々な評定を繰り返し求めた。その結果2回の評定間で、日付判断の相関は非常に強かった。また出来事の重要さに関する評定、想起の鮮明度など想起過程に関わる評定ともに、中程度の相関を示していた。Cohen & Faulkner (1988)は鮮明な記憶の想起と重要度・鮮明度・感情強度等の評定を参加者に求め、3ヶ月後に再評定を行わせた。その結果、参加者の世代にかかわらず、2回の評定の相関は高かった。

ただし一つの出来事は、さらに詳細な細部情報から構成されている。そのため詳細な想起を反復して求めた場合には、細部情報が変動する。Conway(1996b)の研究では参加者は、手がかり語から自伝的記憶を想起した上で、その細部を列挙し、さらにその記憶にタイトルをつけた。数日後、その手がかり語とタイ

トルを再提示し、出来事の細部を再び列挙させたところ、1回目には想起されていなかった細部情報が30%を占めていた。こうした細部情報の変動性は参加者の年齢にも影響される。Anderson, Cohen, & Taylor (2000)は青年と高齢者を対象に、2ヶ月の間隔をおいて2回、同じ出来事の反復想起を求めて、出来事の細部にわたる記述を比較した。2回目に想起された記述のうち1回目と同じ記述は、実験1の青年群では46%、高齢群では58%であった。同様に実験2の青年群では43.8%、高齢群では64.3%であった(複数の実験条件を平均した結果)。すなわち、高齢者の方が安定性が高いことが示されたのである。

(2) 選択の安定性・変動性

上記の研究は、出来事の反復想起は比較的安定していることを示している。では「これまでの人生」の様に幅のある過去を振り返り、複数の出来事を想起した場合、同じ出来事が選択され想起されるのだろうか。

Robinson & Taylor (1998)は参加者に、1回目は「一貫性」に焦点を当てて、2回目は「混乱や転機」に焦点を当てて、これまでの人生を想起してもらった。すると2回目に語られた出来事の60%は、1回目には語られていなかった新たな内容であった。しかしこのように想起時の視点を操作しなくとも、自伝的記憶の選択は不安定である。Thorne, Cutting, & Skaw (1998)の実験では参加者は6ヶ月の間隔をおいて2回、記憶に残る出会いについて面接者に語るよう求めた。参加者は毎回、最低10の出会いについて語り、2回の面接で共通して想起された出会いは平均12%に過ぎなかった。Sutin & Robins (2005)は参加者に2週間の間隔をあけて2回、自己定義記憶の想起を求めた。参加者には最近の学業と恋愛に関わる、肯定的あるいは否定的な記憶を一つずつ想起するよう指示が与えられた。参加者の約70%は、2回目には1回目とは異なる出来事を想起しており、自己定義記憶であっても選択の変動性が高いことが示された。

このように「選択」の問題として想起をとらえると、複数回の想起のそれぞれで、異なる出来事が思い出され、自伝的記憶は不安定であると言える。このことは、出来事の細部の想起が不安定だったこと(Conway, 1996b)と類似している。また出来事の安定性に関するAnderson et al. (2000)の検討と同様、選択についても、加齢に伴って想起が安定化する傾向が示されている。高田(2003)、

高田・阿波・小俣・鶴田(2004)は青年と高齢者を対象に、「これまでの人生で印象深かった出来事」について2ヶ月の間隔をあけて2回、聴き取り調査を行った。その結果、高齢者の方が青年よりも同じ出来事が反復想起されやすいことが見出された。2回の面接で想起された総エピソード数のうち、反復想起されたエピソードは、青年群では20.2%、高齢群では32.4%であった。

第3節 研究6 自伝的記憶の安定と変動

1. 目的

(1) 自伝的記憶の安定性

研究1～5では、時期や内容をある程度指定した上で自伝的記憶の想起を求め、そこから自伝的記憶の構造や機能を探ってきた。研究6ではそれらに比べて制約の少ない課題設定のもとで自伝的記憶の反復想起を求め、記憶がどれほど安定しているのか(あるいは変動するのか)、また、どのような記憶が安定して想起されるのかを検討する。

ただし参加者に想起を求める際に、どのような課題を設定するかが問題となる。単語を手がかり語に用いた場合、青年期の出来事が想起されやすいというバンプ現象が知られているが、実はそれ以上に最近1年以内の出来事が想起されやすい(Rubin, 2000)。従って、単に「人生全体を振り返って思い出せる出来事」という教示を与えただけでは、最近の出来事に偏った想起が行われる可能性が高い。そこで本研究では「大切な出来事」を想起するように指示し、さらに「もし自分が自伝を書くとしたらその中に含めるような出来事」(Fitzgerald, 1996)という補足を加えた。すなわち本研究で検討するのは、自己定義的で、ライフストーリーの素材になるような記憶である。

(2) 加齢に伴う変化

本章第2節で紹介した先行研究からは、加齢に伴って自伝的記憶の想起が安定することが予測される(Anderson et al., 2000; 高田ら, 2004)。先行研究では青年と高齢者を比較しているが、本研究では20歳前後の青年と、30-60歳の中

高年を比較する。Habermas & Bluck (2000)は青年期の認知発達や自己理解への動機づけの高まりが自伝的推論を促し、ライフストーリーの構築へとつながると指摘している。また研究5・6からは、重要な記憶は繰り返し想起されたり、自己と結びつけた意味づけが行われやすいことが示された。こうした結果から、高齢者でなくとも、青年期以降は、自伝的記憶が次第に安定化していくことが予想される。

ただし、加齢に伴って同じ出来事が想起されるという結果が得られても、解釈は複数考えられる。一つは、加齢に伴って自伝的記憶の表象が固定化する等、自伝的記憶の構造に原因を求める解釈である。もう一つは、参加者の想起内容や想起方略に原因を求める解釈である。中年群の参加者は「卒業」「就職」「結婚」「出産」等、人生の節目になるような出来事を、青年期の参加者よりも多く経験している。こうした出来事がランドマーク(Shum, 1998)になり、それらを順に想起していけば、自ずと2回の想起内容は重複し高い安定性が得られることになる。そこで本研究では、中年期の参加者として、人生全体を振り返って想起する群(人生条件)と、20歳頃までの人生を振り返って想起する群(青年条件)を設定する。もしも中年期の自伝的記憶の構造が安定しているのなら、20歳頃までを想起した場合にも、青年期の参加者よりは安定した想起が得られるであろう。

また Pasupathi(2001)は自伝的記憶を他者に語る場合、加齢に伴ってストーリーの一貫性が高まると指摘している。その背景には、語りのスキルが巧みになること、あるいは反対に聴き手の反応に応じて語り方を変えることが少なくなること、といった理由が考えられる。また実験者と対面して自伝的記憶を反復想起した場合には参加者は会話の習慣に則り、意図的に前回とは違う内容を話す可能性がある(Anderson et al., 2000)。本研究では語りのスキルや会話の習慣とは切り離して、自伝的記憶の表象そのものの変化を探る。そのため「人生を語る」という課題ではなく、「大切な出来事を8つ想起する」という課題を設定する。

(3) 構造と機能

研究6では人生全体を振り返って反復想起を求め、かつ、青年と中年で想起

の安定性を比較する。そして想起される出来事を選択の安定性，想起順序の安定性，反復想起された出来事に対する評価の安定性等を検討する。語りのスキルが混入しない課題設定のもとで，こうした点を検討することを通して，加齢に伴い自伝的記憶の構造(表象)がどのように変化するのが，明らかになるであろう。またこうした変化がいかなる適応的な意味を持つのか考察することを通して，機能に関しても示唆が得られることが期待される。

2. 方法

(1) 参加者

青年群として大学生 109 名(19-24 歳，平均 20.1 歳，男性 33 名，女性 76 名)，中年群(人生条件)として社会人 109 名(30-58 歳，平均 40.1 歳，男性 28 名，女性 81 名)，中年群(青年条件)として社会人 73 名(30-59 歳，平均 43.6 歳，男性 15 名，女性 58 名)が参加した。中年群の参加者は全員，大学でスクーリングを受講している社会人学生であった。

(2) 調査内容と手続き

青年群の参加者には授業中に調査を依頼し，質問紙を配布し，翌週の授業で回答を回収した。中年群の参加者には同じ質問紙を郵送して調査を依頼し，2 週間以内に返送してもらった。

これまでの自分の人生を振り返って，自分が自伝を書くとしたらその中に含めるような大切な出来事を 8 つ想起するように求めた。そして 8 つの出来事の各々について，(1)内容の自由記述，(2)その時の年齢(学年)，(3)その出来事にまつわる感情(非常に不快，不快，快，非常に快，快・不快の複合，快でも不快でもない)，(4)その出来事が自分の人生においてどのくらい重要であるか(1:まったく重要でない～ 5:きわめて重要)，(5)その出来事が今の自分にどのくらい強い影響を及ぼしているか(1:まったく影響を及ぼしていない～ 5:きわめて強く影響を及ぼしている)，という 5 項目について回答を求めた。調査用紙は B4 版 1 枚であり，その片面に 8 つの出来事を記述する欄と，評定する欄が設けられていた。

1 回目の調査から約 8 週間後に，同じ内容の調査を再度依頼した。なお反復

想起を求めることは、最初の調査時点では参加者に告げていなかった。また2回目の回答に際しては「前回の回答を思い出そうとするのではなく、いま現在思い出せる事柄や、現在のお気持ちをお答えください」と指示した。1回目の回答から2回目の回答までの日数は、青年群が平均 59.7 日 ($SD=4.2$)、中年群(人生条件)が平均 60.5 日 ($SD=4.4$)、中年群(青年条件)が平均 63.6 日 ($SD=5.6$)であり、群間の差は僅かであった。

3. 結果

(1) 想起された出来事の感情と重要度

1 回目に想起された出来事の数と感情ごとに整理した結果を表 4-1 に示す。感情タイプの効果を検討するために、6 種類の感情を快(非常に快, 快), 不快(非常に不快, 不快), その他(快・不快の複合, 快でも不快でもない)にまとめ、群(青年, 中年・人生条件, 中年・青年条件) × 感情タイプ(快, 不快, その他)の分散分析を行った。その結果、感情の主効果のみ有意であり ($F(2,576)=59.62$, $p<.001$)、いずれの群でも快感情を伴う出来事が最も多く想起されていた。次いで不快感情を伴う出来事、その他の出来事の順に想起数は低下していた。

表4-1 各群で想起された出来事と感情

群	感情					
	非常に不快	不快	快	非常に快	複合	中性
青年	1.6 (1.3)	1.1 (1.0)	1.1 (1.0)	2.4 (1.5)	1.1 (1.1)	0.7 (1.0)
中年(人生条件)	2.0 (1.3)	0.8 (0.9)	1.5 (1.2)	2.1 (1.3)	1.2 (1.1)	0.5 (0.8)
中年(青年条件)	2.1 (1.4)	1.0 (1.0)	1.2 (1.3)	1.9 (1.2)	1.1 (1.2)	0.7 (0.9)

()はSD。

「複合」は「快・不快の複合」, 「中性」は「快でも不快でもない」を示す。

想起された出来事の重要度と影響度は強い相関を示していた。1回目に想起された全ての出来事の評定値に基づいて相関係数を求めたところ、青年群で $r = .75$ 、中年群(人生条件)で $r = .73$ 、中年群(青年条件)で $r = .74$ と、いずれの群でも有意であった ($p<.001$)。また参加者ごとに1回目に想起された出来事の重要度評定の平均と影響度評定の平均を求め、その値に基づいて相関係数を求めたところ、青年群で $r = .81$ 、中年群(人生条件)で $r = .87$ 、中年群(青年条件)

で $r = .87$ と、いずれの群でも有意であった ($p < .001$)。従って以下の分析では重要度評定と影響度評定を合算して「重要度(2 ~ 10)」とする。各群の重要度は青年群が平均 7.4 ($SD = 1.1$)、中年群(人生条件)が平均 8.0 ($SD = 1.3$)、中年群(青年条件)が平均 7.2 ($SD = 1.3$)となった。分散分析の結果、群の効果が有意であり ($F(2, 290) = 11.23, p < .001$)、下位検定(Ryan 法)の結果、中年群(人生条件)の重要度が他の2群よりも有意に高かった。

(2) 想起の安定性

1 回目に想起された出来事のうち、2 回目も繰り返し想起されたものを「反復事象」、1 回目のみで想起された出来事を「単独事象」と呼ぶ。反復事象の記述例を下に示す。

1 回目 小6の時の運動会で私は児童代表で選手宣誓をした。とても緊張したが小学校の思い出の中では一番強いものだ。

2 回目 小6の時の運動会でみんなの前で選手宣誓をしたこと。このことによって少し自分に自信を持てるようになった。(青年群)

1 回目 長女が脳性マヒと診断されたこと。

2 回目 長女が脳性マヒと4ヶ月の時診断されたこと。(中年群・人生条件)

1 回目 ピアノの検定試験に失敗してしまった。

2 回目 ピアノの検定に不合格。(中年群・青年条件)

一人の評定者が全ての回答について反復事象か単独事象かの判定を行った上で、無作為に抽出した55名の参加者(全体の18.9%)の回答について、もう一人の評定者が独立に判定した。反復事象の記述は2回の回答で非常に類似しており、一致率はきわめて高かった(97.0%)。

以下では、(1)1回目に想起された出来事のうちのいくつが2回目も反復想起されるのか、(2)どのような出来事が繰り返し想起されるのか、(3)反復想起された出来事は評価も安定しているのか、(4)反復想起された出来事は想起順序も安定しているのか、という観点から想起の安定性を検討する。

(2)-1 反復事象数と感情ごとの反復想起率

反復事象数ならびに感情ごとの反復想起率を表4-2に示す。1回目に想起さ

表4-2 反復事象数と感情ごとの反復想起率

群	反復事象数	反復想起率		
		快	不快	その他
青年	3.4 (1.8)	0.44 (0.31)	0.34 (0.35)	0.45 (0.38)
中年(人生)	5.0 (2.1)	0.59 (0.35)	0.65 (0.34)	0.64 (0.40)
中年(青年)	4.3 (2.1)	0.55 (0.37)	0.55 (0.39)	0.46 (0.40)

()はSD。

れた8つの出来事に占める反復事象の比率は、青年群が平均43.0%、中年群(人生条件)が平均61.9%、中年群(人生条件)が平均53.4%であった。大切な出来事の想起を求めたにもかかわらず、青年群では半数以上の出来事が入れ替わっていた。反復事象数について分散分析を行ったところ群の効果が有意であり($F(2,290)=15.93, p<.001$)、下位検定(Ryan法)の結果、全ての群間に有意差が見られた。すなわち、中年群(人生条件)の想起が最も安定しており、次いで中年群(青年条件)、青年群の順に不安定になった。

感情は快・不快・その他の3種類にまとめて分析を行った。感情ごとの反復想起率は、1回目に当該の感情を伴う事象を想起した参加者について算出した。例えば1回目に快事象を4つ想起した参加者が、2回目に同じ快事象を3つ想起した場合には、快事象の反復想起率は0.75となる。感情ごとに反復想起率を角変換し、群の効果を分散分析で検討したところ、いずれの感情の反復想起率でも群の効果が有意であった(快、 $F(2, 285)=4.86, p<.01$ ；不快、 $F(2, 281)=19.33, p<.001$ ；その他、 $F(2, 238)=5.26, p<.01$)。下位検定(Ryan法)の結果、快事象の反復想起率は中年群(人生条件)が青年群より高かった。不快事象の反復想起率は、中年群(人生条件)と中年群(青年条件)が青年群よりも高かった。その他事象の反復想起率は、中年群(人生条件)が他の2群よりも高かった。このように、感情ごとに見ても、中年群の想起は青年群よりも安定していることが見出された。

(2)-2 感情タイプ・感情強度・重要度と反復想起

それではどのような出来事が繰り返し想起されやすいのであろうか。

第一に感情タイプの影響を検討した。ただし「その他」に分類される事象の

想起数は最も少なく，1回目に快事象・不快事象・その他事象の全てを最低1つは想起した参加者に限定すると，該当する人数がきわめて少なくなることがわかった。そこで，1回目に快事象と不快事象を最低1つは想起した参加者について，感情の影響を検討した。該当するのは青年群 104 名，中年群(人生条件)104 名，中年群(青年条件)69 名であった。感情ごとに反復想起率を整理した結果を図 4-1 に示す。反復想起率を角変換し，群(青年，中年・人生条件，中年・青年条件) × 感情(快，不快)の分散分析を行った結果，群の主効果($F(2,274)=12.83, p<.001$)のみ有意であった。下位検定(Ryan 法)の結果，中年群(人生条件)と中年群(青年条件)の反復率が青年群よりも高かった。

第二に，感情強度の影響を検討した。「非常に快」あるいは「非常に不快」と評定された事象の感情強度を 1，「快」あるいは「不快」と評定された事象の感情強度を 0 として，反復事象と単一事象それぞれの平均感情強度を参加者ごとに求めた(図 4-2)。反復事象数が 0 あるいは 8 だった参加者，また反復事象・単一事象のいずれかが感情「その他」のみに該当して感情強度を算出できない参加者は除いた。青年群 92 名，中年群(人生条件)90 名，中年群(青年条件)

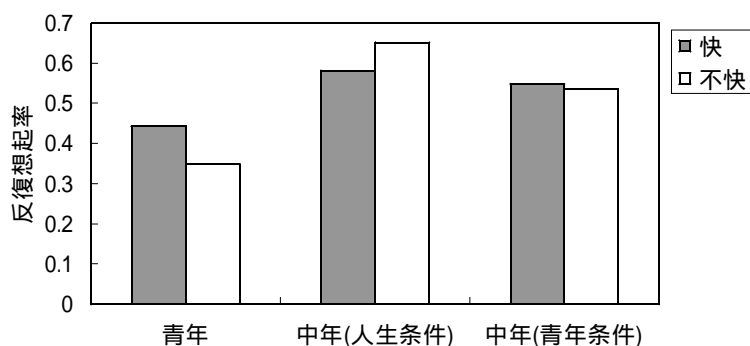


図4-1 各群における快・不快感情別の反復想起率

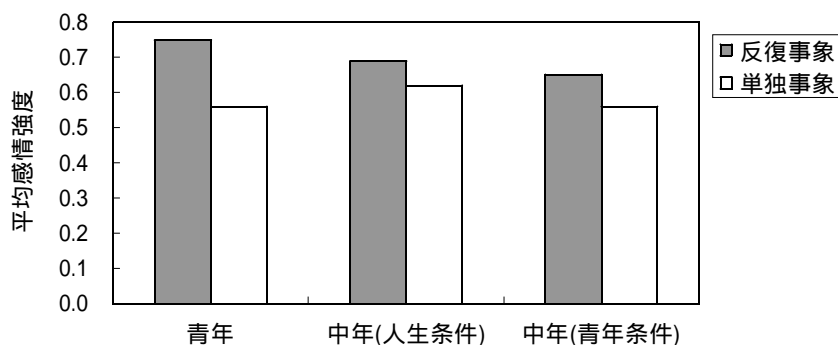


図4-2 各群における反復事象・単一事象の感情強度

件)61名の結果が分析された。群(青年, 中年・人生条件, 中年・青年条件) × 事象(反復, 単独)の分散分析の結果, 事象の主効果($F(2,258)=18.57, p<.001$)が有意であり, 反復想起された事象は強い感情を伴っていることが示された。

第三に, 重要度の影響を検討した。反復事象数が0あるいは8であった参加者を除いて, 参加者ごとに, 反復事象と単独事象それぞれの平均重要度を求めた(図 4-3)。該当するのは青年群 102 名, 中年群(人生条件)94 名, 中年群(青年条件)65 名であった。(青年, 中年・人生条件, 中年・青年条件) × 事象(反復, 単独)の分散分析の結果, 群の主効果($F(2,258)=6.61, p<.01$)と事象の主効果($F(2,258)=94.11, p<.001$)が認められ, 反復想起された事象は重要度が高いことが見出された。群の主効果は既述の通り, 中年群(人生条件)の重要度が他の2群よりも有意に高いことによる。

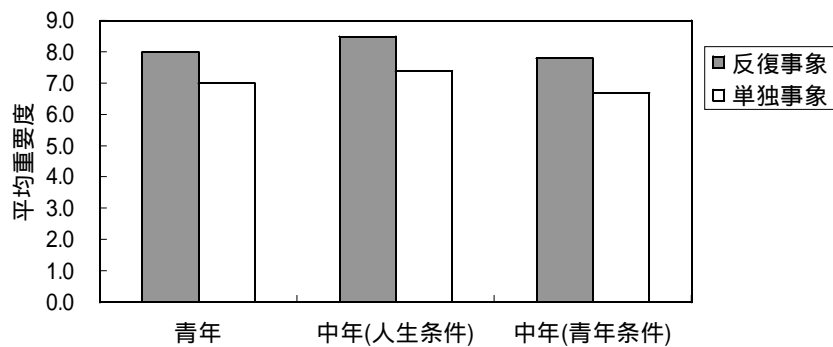


図4-3 各群における反復事象・単独事象の重要度

以上より, どの群でも重要度が高い出来事と強い感情を伴う出来事が, 繰り返し想起されやすいことが示された。

(2)-3 反復想起された出来事に対する評価

それでは反復想起された出来事に対する評価は, どの程度安定しているのだろうか。また, この安定性は群によって異なるのだろうか。反復事象数が0であった参加者を除き, 青年群 102 名, 中年群(人生条件)103 名, 中年群(青年条件)70 名について, 以下の分析を行った。

第一に, 1 回目と 2 回目の重要度の差を計算し, 参加者ごとに平均を求めた。その結果は, 青年群が平均-0.12($SD=0.8$), 中年群(人生条件)が平均 0.04 ($SD=0.7$), 中年群(青年条件)が平均-0.18($SD=1.0$)であり, 群間の差は有意で

はなかった($F(2, 272)=1.75, ns$)。この分析で1回目と2回目の差が小さかったのは、評定が変化していないためではなく、評定値が上昇したケースと低下したケースが混在していたためである。そこで、変化の方向にかかわらず、重要度評定がどの程度変化したか検討するために、1回目と2回目の重要度の差の絶対値を計算し、参加者ごとに平均を求めた。その結果は青年群が平均 1.0 ($SD=0.7$)、中年群(人生条件)が平均 0.9($SD=0.6$)、中年群(青年条件)が平均 1.2 ($SD=0.8$)であり、群間の差は有意ではなかった($F(2, 272)=2.95, ns$)。

第二に、反復想起された事象に対する感情評定が、1回目と2回目でどのように変化したかを分析した。結果には(1)感情評定が1回目と2回目で同じ(例：2回とも「非常に不快」)、(2)感情が弱まった(例：「非常に不快」から「不快」への変化)、(3)感情が強まった(例：「不快」から「非常に不快」への変化)、(4)異なる感情へ変化した(例：「快」から「快・不快の混合」への変化)の4パターンがある。反復事象に占める上記(1)～(4)の比率を参加者ごとに求めた。その平均を表 4-3 に示す。比率を角変換し、群(青年, 中年・人生条件, 中年・青年条件)×パターン(同じ, 弱化, 強化, 変化)の分散分析を行ったところ、パタンの主効果のみ有意であった($F(3,816)=3287.97, p<001$)。下位検定(Ryan 法)の結果、2回の想起で感情が同じである率が最も高く、次いで変化、そして強化あるいは弱化の率が最も低かった。

表4-3 反復に伴う感情評定の変化

群	感情評定の変化パターン			
	同じ	弱まった	強まった	変化
青年	0.62 (0.31)	0.11 (0.20)	0.07 (0.14)	0.20 (0.27)
中年(人生条件)	0.68 (0.24)	0.07 (0.13)	0.08 (0.14)	0.17 (0.16)
中年(青年条件)	0.66 (0.28)	0.08 (0.15)	0.06 (0.13)	0.20 (0.22)

()はSD。

先に明らかになったように、同じ事象が繰り返し想起されやすいという意味では、中年群の想起の方が安定していた。しかし繰り返し想起された出来事に対する評価の安定度には、群間で差が無かった。いずれの群でも重要度評定・感情評定ともに、2回の想起の間での変化は小さかった。

(2)-4 反復想起された出来事の想起順序の安定性

反復想起された事象が1回目と2回目で同じ順序で想起されていたかについて、分析を加えた。反復事象数が2以上の参加者について、反復事象の1回目と2回目の想起順序について Spearman の順位相関係数を算出した。例えば1回目と2回目に想起された事象が下記の通りであったとする。

1回目：A B C D E F G H

2回目：A I J B G K L E (下線部：反復事象)

このとき、反復事象A, B, E, Gの想起順位は、1回目が1, 2, 3, 4, 2回目が1, 2, 4, 3であり、順位相関係数は.80となる。このように想起順位の相関を求め、5%水準で有意な相関を示した参加者数をカウントした。ただし反復事象数が2の場合で、2回の想起順序が一致している場合も、有意な相関とみなした。結果を表4-4に示す。群による差が有意であり($\chi^2(2) = 13.93, p < .01$)、中年群(人生条件)の参加者は反復事象を1回目と2回目で同じ順序で想起しやすい傾向が認められた。また中年群(青年条件)の参加者も、青年群に比較すると、2回の想起順序が安定している傾向が見られた。

表4-4 各群における反復事象の想起順序の順位相関

群		2回の想起順序の相関	
		有意でない	有意である
青年	度数	67	27
	(%)	(71.3)	(28.7)
	残差	3.7**	-3.7
中年(人生条件)	度数	46	54
	(%)	(46.0)	(54.0)
	残差	-2.6	2.6**
中年(青年条件)	度数	33	33
	(%)	(50.0)	(50.0)
	残差	-1.2	1.2

** p<.01

中年が想起する人生全体、中年が想起する青年期までの期間は、青年が想起する人生全体に比較すると、同じ出来事が同じ順序で想起されやすいという意味で、安定度が高いと言える。ただしどの群でも、反復想起された事象に対する評価は安定していた。本章・第2節での表現を用いると、出来事の安定性は群間で差が無いが、選択の安定性や、選択された出来事をどのような順序で想起するかという点では、群間に差が認められたと言える。

(3) 想起内容に含まれる移行事象の検討

ここまで検討したように、中年群、特に人生条件の想起は安定性が高かった。こうした安定性をもたらした一つの要因として、中年群(人生条件)は青年群に比較すると、目印(ランドマーク)となるような出来事を多く経験していることが考えられる。

ではどのような出来事がランドマークとなるのであろうか。Shum(1998)は大学生を対象に、過去1年間の出来事の中からランドマークを指摘させた。その結果、高校卒業、大学入学、誕生日、対人関係の大きなトラブルなどが報告された。ここから Shum は、カレンダー上の出来事(例：卒業)や鮮明な記憶がランドマークとなって、自伝的記憶を体制化する可能性を論じている。神谷(2002)もまた、大学生を対象に最近1年間で印象に残っている出来事を想起させたところ、「受験」「人との出会い・別れ」に関連する出来事が多いことを報告している。

「入学」「就職」「結婚」など発達上の移行(山本・ワップナー、1991)に関わる出来事は、個々の内容はきわめて個人的だが、われわれの文化・社会では比較的共通のランドマークとして機能することが考えられる。そこで、こうした移行に関わる出来事がランドマークとなり、中年群(人生条件)の想起の安定性をもたらしている可能性を検討する。具体的には、入学、卒業、就職、転職、退職、結婚、第一子の誕生(親への移行)に関わる出来事を「移行事象」とした。1回目に想起された出来事のうち移行事象に該当するものは、青年群が平均 1.3 ($SD=1.0$)、中年群(人生条件)が平均 2.5 ($SD=1.6$)、中年群(青年条件)が平均 1.5 ($SD=1.1$)であった。分散分析の結果、群の効果が有意であり ($F(2,290)=26.19, p < .001$)、下位検定(Ryan 法)の結果、中年群(人生条件)の移行事象数は他の2群よりも多かった。

移行事象の特性を検討するために、移行事象を最低1つは想起した参加者について、移行事象とそれ以外の事象(非移行事象)の平均重要度を求めた。該当するのは青年群 86 名、中年群(人生条件)97 名、中年群(青年条件)59 名であった。結果を表 4-5 に示す。群(青年, 中年・人生条件, 中年・青年条件) × 事象(移行, 非移行)の分散分析の結果、事象の主効果が有意であり ($F(1,239)=78.41, p < .001$)、いずれの群でも移行事象の重要度は非移行事象よりも高かった。

さらに参加者全員を対象に検討したところ，1回目に想起された移行事象数と反復事象数の間に有意な相関が見出された($r=.28, p<.001$)。従って，中年群が人生全体を振り返った場合に想起が安定しているのは，重要度の高い移行事象がランドマークとなって，繰り返し想起されやすいことが，一つの原因であると考えられる。

表4-5 各群における移行事象と非移行事象の平均重要度

群	事象	
	移行事象	非移行事象
青年	8.5 (1.4)	7.2 (1.1)
中年(人生条件)	8.4 (1.4)	7.8 (1.4)
中年(青年条件)	7.9 (1.6)	6.9 (1.3)

()はSD。

(4) 想起方略の検討

参加者の想起方略を検討するために，想起された出来事を経験した時点の年齢と想起順序について，Spearman の順位相関係数を求めた。有意な正の相関は，参加者が時間軸に沿って過去から現在に向けて順向的に想起していることを意味する。逆に有意な負の相関は，現在から過去に向けて，逆方向的な想起を行っていることを意味する。有意な相関が見られない場合は，その他の方略が用いられていると判断した。

群ごとの想起方略を整理し表 4-6 に示す。群の効果が1回目は有意($F(4)=10.3, p<.05$)，2回目は有意傾向を示していた($F(4)=8.6, p<.10$)。残差分析の結果，中年群(人生条件)では1回目・2回目ともに，過去から現在へと時間軸に沿った順向想起の方略を用いる参加者が多いことが示された。また1回目

表4-6 各群における1回目と2回目の想起方略

群		1 回目			2 回目		
		順向	逆向	その他	順向	逆向	その他
青年	度数	31	5	73	25	8	76
	%	(28.4)	(4.6)	(67.0)	(22.9)	(7.3)	(69.7)
	残差	-1.6	-1.0	2.1*	-2.1	0.8	1.6
中年(人生条件)	度数	48	6	55	43	4	62
	%	(44.0)	(5.5)	(50.5)	(39.4)	(3.7)	(56.9)
	残差	2.7**	-0.5	-2.3	2.6**	-1.2	-1.9
中年(青年条件)	度数	21	8	44	20	5	48
	%	(28.8)	(11.0)	60.3	(27.4)	(6.8)	(65.8)
	残差	-1.2	1.8	0.2	-0.6	0.4	0.4

** $p<.01$ * $p<.05$

に順向あるいは逆向想起のパターンを示した参加者について、1回目と2回目で同じ方略が用いられていたか検討した。同じ方略を用いた参加者は青年群の13.8%、中年群(人生条件)の31.2%、中年群(青年条件)の21.9%であった。群間の差が有意であり($\chi^2(2)=9.6, p<.01$)、中年群(人生条件)の参加者は1回目も2回目も時間軸に沿って同じ方略で想起する傾向があることが見出された。

4. 考察

(1) 自伝的記憶の変動と加齢に伴う安定化

研究6では反復想起の手続きを用いて、自伝的記憶の安定性(変動性)を調べるとともに、安定性が加齢に伴っていかに変化するかが検討された。重要な出来事の想起を求めたにもかかわらず想起は不安定であり、青年群が人生全体を振り返る条件では、最初に想起された出来事のうち2回目も反復して想起されたのは、43.0%に過ぎなかった。ところが加齢に伴い想起は安定度を増し、中年群が人生全体を振り返る条件では、最初に想起された出来事の61.9%が2回目も想起された。また中年群(人生条件)で反復想起された出来事は、1回目も2回目も同じ順序で想起される傾向が強かった。以上の結果は、Thorne et al. (1998)、Sutin & Robins (2005)、高田ら(2004)の先行研究とも合致する。

ただし上で述べたのはあくまで、選択の安定性に関わる結果である。反復想起された出来事に対する感情評定や重要度評定は、青年群でも中年群でも安定しており、同様の安定性を報告したRubin, Schrauf, & Greenberg (2004)やCohen & Faulkner (1988)と合致する結果が認められた。

(2) 想起の安定化をもたらす要因 - 移行事象の経験

中年群(人生条件)の想起が安定している原因の一つとして、この群の参加者は「卒業」や「就職」などランドマークになるような出来事を多く経験していることが考えられる。分析の結果この群では、ランドマークになるような移行事象を多く想起していることが見出された。中年期から老年期の参加者に鮮明な記憶の想起を求めたCohen & Faulkner (1988)でも、人生の中盤では「結婚」や「近親者の死」など、典型的なライフイベントが想起されやすいことが見出されている。

移行事象はそれ以外の事象に比べると重要度が高い。また、反復想起された出来事は1回目だけで想起された出来事よりも重要度が高いことも示されている。移行事象は人生を区切る重要なランドマークとして想起されやすいのであろう。神谷(2002)も環境の移行に関わる出来事は繰り返し想起されやすいことを指摘している。研究6では、移行事象を多く想起している参加者の方が、想起全体が安定している傾向が認められた。こうした出来事を多く経験していることが、中年群(人生条件)の想起を安定させている一つの要因と思われる。

(3) 想起の安定化をもたらす要因 - 記憶表象の安定化

ところが、移行事象という出来事そのものの特性だけでは、加齢に伴う自伝的記憶の安定化は説明しきれない。まず、移行事象数と反復事象数の間に有意な相関が見られたものの、その値は高くない($r = .28$)。さらに重要な結果が、中年期の参加者が20歳頃までの出来事を想起した、中年群(青年条件)で得られた。この群の想起内容を分析すると、移行事象の数は青年群と差が無い。にもかかわらず、この群は青年群よりも多くの出来事を繰り返し想起しており、また、想起順序も安定していた(表4-2, 表4-4参照)。従って、中年群(人生条件)で見られた安定性の一部は移行事象によって説明できるとしても、それ以外の要因が中年群の安定性に寄与していると考えられる。安定性をもたらす原因に関して、三つの仮説をあげることができる。

第一は、加齢に伴いライフストーリーを語るスキルに変化が生じるという仮説である(Pasupathi, 2001)。語り方が巧みになりストーリーが洗練され固定化されるという肯定的な変化と、逆に、聴き手の反応に注意を向けなくなり同じストーリーを繰り返すだけになるという否定的な変化が考えられる。反復事象の想起順序までが安定していたという結果は、加齢とともにライフストーリーが固定化していくことを示唆するように思えるかもしれない。しかし研究6ではもともと、参加者にライフストーリーを語ることを求めているわけではない。参加者は調査用紙に設けられた8つの記入欄に、重要な出来事を思い出す順に記述していくことを求められただけである。従って語りのスキルという点から説明することには無理がある。

第二に、ライフストーリーではなく、その素材となる自伝的記憶の表象その

ものが、加齢とともに安定化すると考えることができる。第3章の研究から、人は自己定義的で重要な記憶については繰り返し想起したり、自伝的推論を働かせたりしていることが指摘された。こうした行為がリハーサルとして機能し、自伝的記憶の鮮明な想起を可能にすると同時に、内容や構造を固定化させる可能性がある。フラッシュバルブ記憶の研究からは、驚きや強い感情やリハーサルが記憶を固定化し、長期間が経過した後も安定して想起されることが指摘されている(Conway, Anderson, Larsen, Donnelly, McDaniel, McClelland, & Rawles, 1994)。特定の重要な出来事がリハーサルされ想起されるということは、他の出来事のリハーサルや想起が抑制されることを意味する。こうして時間経過にともない、重要でしばしばリハーサルされる出来事とそうでない出来事では、接近可能性において大きな差が生じるのではなかろうか。その結果、重要で繰り返しリハーサルされた出来事は、移行事象と同様に、ランドマークとして機能するようになる可能性がある。

第三は、想起方略の安定化である。中年群では時間軸に沿って過去から現在に向かって順向的に想起すること、また、1回目と2回目で同じ想起方略を用いるケースが多いことが示された。ある程度安定化した自伝的記憶から、一定の方略に従う想起を繰り返すことで、2回の想起結果が安定したものになったと考えることができる。

(4) 自伝的記憶の安定化と機能

このように、自伝的記憶や想起方略は、加齢あるいは時間経過に伴って固定化することが示唆された。出来事を経験した直後には、記憶に対する接近可能性はおしなべて高いと考えられる。その後、重要な出来事が選択的にリハーサルされたり想起される過程を通じて、特に接近可能性の高い記憶とそうでない記憶へと分離していくのであろう。

記憶や学習が外界の変化に適応していくための手段であるとするなら、記憶は絶えず更新されなければならない。では自伝的記憶の安定化にはどういう機能的な意味があるのだろうか。第一に、中年期以降に自伝的記憶が安定するということは、それだけ、安定した自己概念が保証されることにつながる。一方、青年期は自己概念自体が不安定であり、自己を確立することを目指しながら、

新たな経験を自伝的記憶に組み込んでいる時期なのであろう。その過程で、記憶に対する接近可能性は、短期間のうちに変化していると思われる。第二に、自伝的記憶が方向づけ機能を有していることを考えると、安定した記憶は意志決定や行動調整に際して、安定した行動指針となることが期待できる。加齢に伴って認知的な処理資源が低減する可能性を考えると(Park, 2000)、安定した記憶は少ない資源で確実な指針を与えてくれることになるだろう。

ただし安定した記憶は機能的にマイナスの面も有している。Neimeyer & Metzler (1994)は青年期の参加者に性格特性語を呈示し、それに該当する自伝的記憶の想起を求めた。アイデンティティ・ステータスとの関連を検討したところ、早期完了群では自己イメージに反するネガティブな特性語からの想起が抑制されていた(想起数が少なく潜時も長かった)。早期完了群とは自我の発達において危機を経ずに、社会通念や両親が支持する対象に自己投入している人たちであり、彼らの想起は固定した自己像を維持する方向にバイアスがかかっていると言える。記憶の安定化は、自己イメージに反する行動や自己の変化に気づきにくくするという作用を及ぼすだろう。また、いつも同じ記憶を参照し行動の指針とするということは、より良い意志決定の方法を見逃すことにつながる。さらに、安定した記憶を参照することはライフストーリーの構成を容易にする反面、対人的な場面では「いつも同じストーリーを繰り返している」という状態を引き起こしかねない。

(5) 今後の課題

研究6からさらに発展させるべき検討課題を述べておく。第一に、研究6では青年群と中年群を比較しただけであるが、老年期まで含めた検討が必要である。第二に、加齢の効果は時間経過の効果と交絡している。高齢者の想起は最近の出来事に関しても安定しているのであろうか。青年が児童期に限定して想起した場合には、想起は安定するのだろうか。広い範囲の世代の参加者を対象に、様々な想起時期を限定することにより(例：青年が想起する児童期、中高年が想起する最近の出来事)、記憶の安定化に寄与しているのは加齢なのか、時間経過なのかが明らかになるだろう。第三に、加齢に伴って自伝的記憶が安定化するとして、それは自伝的記憶だけの特性なのだろうか、それとも記憶シ

システムに共通の特性なのだろうか。安定化の背景に処理資源の低減があるのだとすると、意味記憶や実験室的なエピソード記憶課題でも同様に、想起内容が加齢に伴って安定化することが予想される。この問題を検討することは、エピソード記憶や意味記憶と関連づけて、記憶システム全体の中で自伝的記憶の位置づけを明らかにすることにつながるであろう。

第5章 総合論議

われわれが持つ膨大な自伝的記憶は、いったいどのような原理に従って貯蔵され、表象され、想起されるのであろうか。そして自伝的記憶を想起することには、どのような機能的意義があるのだろうか。またこうした構造や機能は、発達や時間経過に伴っていかに変化していくのであろうか。本研究では6つの調査・実験を通して、自伝的記憶の構造と機能について検討してきた。第5章ではここまで明らかにされた事柄を整理し、構造と機能を統合的に理解するための枠組を提示する。さらに今後の検討課題を論じる。

第1節 本研究のまとめ

1. 自伝的記憶の構造

(1) 自伝的記憶のつながり - event cueing法による検討

研究1・研究2では event cueing 法を用いて、自伝的記憶の構造を検討した。ここで検討されたのは、記憶は相互にどのような原理に従ってつながっているのか、という問題である。

研究1では Brown & Schopflocher (1998a, 1998b)の開発した event cueing 法に修正を加えて、参加者が連続して想起した出来事(cueing-event と cued-event)の間の時間的、内容的、感情的な関連性が検討された。その結果、cueing-event と行為・活動・文脈あるいはその解釈・意味・評価を共有し、感情が一致する出来事が、cued-event として想起されやすかった。また時間的には、cueing-event と同じ lifetime period に属する出来事が、cued-event として想起されやすかった。ただしこの点については cueing-event の古さも影響しており、古い時期の出来事からは、時間的に離れた出来事も想起されやすくなっていた。

研究2では、参加者の想起内容が最近の出来事に偏らないような課題を設定し、研究1の知見をさらに確認した。その結果、やはり lifetime period の影響が明確に認められた。すなわち、参加者は cueing-event と時間的に接近した出

来事を，cued-event として想起することが多かった。さらに cueing-event と cued-event が同じ lifetime period に属する場合には，両者が異なる lifetime period に属する場合に比べると，二つの出来事間の関連性や因果関連性が強いと評価されていた。一方，時間経過に伴う変化も見出された。研究1と同様，古い時期の cueing-event からは時間的に離れた cued-event が想起されやすかった。内容面では研究1と同様，行為・活動・文脈あるいはその解釈・意味・評価を共有する出来事が，続けて想起されやすかった。研究1で見出された気分一致効果は，最近1年間の出来事を手がかりとした場合にしか見出されなかった。

研究1と研究2では event cueing 法を用い，ある出来事から最初に連想される出来事の想起を求めた。その結果，cueing-event と時間的に接近して同じ lifetime period に属する出来事が想起されやすかった。また同じ lifetime period に属する出来事間の関連性は，強く評価されていた。このことは膨大な自伝的記憶が，lifetime period によって区切られて体制化されていることを示唆する。同時に内容面では，cueing-event と cued-event は，行為・活動・文脈あるいはその意味・解釈・評価を共有している率が高かった。すなわち自伝的記憶は時間と内容 - 本人が関わった行動の内容や意味 - という二つの原理に従って体制化されていることが示された。

(2) 自己にとって重要な記憶 - lifetime periodを越えるつながり

ところがこうした lifetime period の役割が強力であるとすると，われわれの自己は数年単位の記憶の連続に過ぎないことになってしまう。その一方で本人にとって重要度の高い出来事については，数年程度の時間枠を越えて，記憶と記憶，過去の記憶と現在の自己が結びついていることが考えられる。そこで研究3と研究5では，自己との関わりがより強い出来事について，自伝的記憶を検討した。研究3では教員養成系学部の大学生を対象に，小学校から高校までの教師にまつわる記憶を想起させた。その結果，教職を志望する意識が強い参加者は，想起された出来事から自分が影響を受けたと認識している率が高く，しかも小学校低学年で経験した出来事から既に，影響を認識していた。影響の内容は教職志望の強さと密接に関連しており，教職を志望する意識の強い参加者は「教職を志望したきっかけ」の記憶を，教職を志望する意識が弱い参加者

は「教師という存在に対して否定的な見方をするようになった」という記憶を、それぞれ多く想起していた。さらにこのように職業選択に強く関わる記憶は、小学校高学年から中学校に偏っていた。以上の結果は、lifetime period という枠を越えて、時間的に離れた過去の出来事とその後の自己が結びついていることを示している。

研究5では大学生だけでなく社会人(現職の学校教員と看護師)も対象に、中学校の教師にまつわる重要な記憶を収集した。その出来事を重要と考える理由を記述してもらい、内容を分析したところ、現職の学校教員にとっては約25年前の出来事であるにもかかわらず、その出来事と現在の自己とのつながりに言及しているケースが多く見出された。当時の経験が職業選択のきっかけになった、あるいはその時の教師の姿が現在の自分の目標となっているという記述が多く認められた。

従って自己にとって重要な出来事の場合には、時間よりも内容(テーマ)に基づく構造化が優位なのであろう。そのため lifetime period という時間枠の制約を受けにくく、遠い過去の出来事とその後の職業選択や現在の自己が、強く結びついて表象されていると考えられる。

(3) 記憶表象の安定化 - 反復想起による検討

研究6では、加齢に伴って自伝的記憶が安定化する可能性が検討された。参加者は19-24歳の大学生と30-59歳の社会人であった。参加者には約8週間の間隔をおいて2回、重要な出来事を8つ想起するように求めた。青年群と中年群(人生条件)の参加者は、これまでの人生全体を振り返って想起した。中年群(青年条件)の参加者は20歳頃までを振り返って想起した。その結果、青年群に比べると中年群の方が、同じ出来事を繰り返し想起しやすいことが見出された。この安定性は、単に加齢に伴って「卒業」「就職」などのライフイベント(移行事象)を経験する機会が増えることだけでは説明できない。20歳頃までを想起した中年群(青年条件)の想起も、青年群よりも安定していたからである。また想起順序の検討から、中年群では同じ順序で2回の想起を行うケースが多いことが示された。加齢に伴い重要な出来事が繰り返しリハーサルされ、個人的なランドマークになるような記憶が増えていることが推測される。研究6の結

果は、参加者の語りのスキルや聴き手の反応などの社会的な要因とは独立に、加齢に伴って自伝的記憶の表象が安定化することを示している。

2. 自伝的記憶の機能

(1) 教師に関わる記憶と自己機能・方向づけ機能

自伝的記憶の機能に対する関心は近年急速に高まり、自己、社会、方向づけという3種類の機能の存在が指摘されている。本研究でもこの枠組に則し、自己と方向づけという二つの機能を検討した。特に方向づけ機能については従来、Pillemerの研究が主要なものとしてあげられるが(Pillemer, 1998, 2001, 2003)、記述的な分析にとどまっていた。そこで本研究ではPillemerの理論に依拠しつつも、記憶の機能をより実証的に検討することを目指した。

研究3では教師にまつわる記憶と教職志望意識との関連を検討した。その結果、教職を強く志望している学生は、教師にまつわる記憶が肯定的な方向に偏っていることが示された。こうした肯定的な記憶の蓄積が、職業選択という自己にとって重要な判断を方向づける方向づけ機能を果たしていることが示唆された。さらに「影響を受けた出来事」の内容を分析した結果から、研究3で収集された記憶が、Pillemerが提唱した4つの方向づけ機能(出発点、転換点、基準点、類推)を担っている可能性がうかがわれた。

研究5では大学生・現職の学校教員・看護師を対象に、中学時代の教師にまつわる記憶が検討された。その結果、大学生と同様に成人の参加者についても、出発点、転換点、基準点、類推といった機能を果たすような記憶が想起されていた。経験した時点から約25年が経過しても、自伝的記憶は種々の機能を有していると言える。また大学生では「自己理解につながった」、現職教員では「教職志望につながったり教師モデルとして意識した」等、現在の立場に特徴的な機能を示す記憶も想起されていた。

このように研究3・研究5では、職業選択という自己にとって重要な問題に関して、自伝的記憶がそれを方向づける機能を果たしていること、それ以外にも、現在の判断や意志決定に影響し得る記憶が多数あることが示された。自伝的記憶が自己機能や方向づけ機能を担うことが、Pillemerとは異なる枠組から示されたのである。

(2) 自伝的推論

研究3では、「あの出来事が出発点だった」「あれが転機だった」あるいは「悩んだ時にはあの時の経験を思い出す」といった記憶が多数見出された。このように出来事を自己と関連させて評価したり意味づける過程は、「自伝的推論」と呼ばれる。自伝的記憶の機能のなかでも出発点や基準点は、このように記憶を想起し意識的に意味づける過程があって初めて顕在化するのだろう。

これまでの研究で、自伝的推論の過程は加齢に伴って変化することが指摘されていた。研究5は年齢とは独立に、想起時点での自己の社会的な立場が、自伝的推論過程に影響を及ぼすことを明らかにした。すなわち研究5では、現職の学校教員は他の参加者(大学生、看護師)に比べると、中学時代の教師にまつわる出来事を重要で、そこから大切なことを学び、自分に影響を及ぼした出来事であり、自己を象徴していると評価していた。さらに、その出来事を重要と判断する理由を分析したところ、現在の自己とのつながりに言及する記述が多く見出された。

また従来検討では、自伝的推論は否定的な出来事に対して行われると主張されていた。しかし研究5の結果は、経験に伴う感情と自伝的推論の間には関連が無く、肯定的な出来事からも豊かな自伝的推論が引き出されることを示していた。このことは自伝的推論の過程がこれまで検討されてきた以上に多様なものであることを示唆する。同時に、自伝的推論という概念の洗練と詳細な検討が求められる。

(3) 記憶としての特殊性

記憶の機能を議論する際には、最初の出来事そのものではなく、その記憶が機能を果たしていることが重要なポイントになる。このことが確認されなければ、自伝的記憶という概念そのものの必要性が低下するからである。

研究4では大学生と社会人を対象に、重要度の高い出来事と低い出来事の想起を求めた。さらに想起過程を評価する質問紙を実施したところ、どの世代でも、重要度の高い出来事は低い出来事に比べると、鮮明に再体験している感覚を伴って想起されることが示された。こうした鮮明さは同時に「確かに自分が経験した出来事だ」という確信にもつながっていた。さらに、その出来事と前

後の出来事がつながって想起される，繰り返し想起される，という特性が認められた。すなわち何らかの機能を担っているような重要な記憶は，もとの経験そのものが特別なだけでない。他の記憶と結びついているという意味で構造面の特殊性も有しているし，鮮明に繰り返し想起されるという意味で想起過程の特殊性も有している。もとの出来事ではなく，その記憶を想起する過程が機能を果たしていると考えられる。

研究5では現職の学校教員が，中学時代の教師にまつわる記憶を特に重要なものであると評定していた。さらに「振り返ってみると大きな意味を持っていた」と判断していた。もとの出来事が重要なだけでなく，その出来事を繰り返し想起する過程において記憶が種々の機能を果たし，重要性の認識が次第に高まっていったと推測される。

杉浦(2004)は1000名を越える大学生を対象に「転機」の経験を調査した。対象者の約70%が「転機の経験があった」と回答し，また転機を境にして自分が肯定的に変化したと考えるケースが多かった。杉浦は，ある出来事を転機として語り，それを境に自分は成長したと主観的に考えることで，実際にそうした成長が起こる可能性が高くなると論じている。すなわち，転機となった出来事そのものではなく，それを転機として認識することが，自己を成長させるのである。同様に本研究で収集された記憶についても，ある出来事が何らかの機能を有するのではなく，その記憶を想起し意味づける過程が，機能を有すると言えるだろう。例えば「出発点」となった経験が人を動機づけるのではなく，「あれが出発点だった」と想起することが，人を動機づけるのである。

(4) 加齢と記憶の機能

研究6では自伝的記憶は加齢とともに安定化する可能性が指摘された。記憶が環境への適応という機能を担うのであれば，変化する環境に合わせて，記憶も絶えず更新されなければならないだろう。しかし加齢に伴って認知的処理資源が低減することを考えると，記憶表象や想起方略が安定化することで安定した自己像が維持されたり(自己機能)，定型的な問題解決方略が得られる(方向づけ機能)という機能上の意味があるのかもしれない。

3 . 自伝的記憶の構造と機能 - 統合的な枠組の提案 -

ここでは本研究で得られた知見をもとに、自伝的記憶の how と why (Bruce, 1985, 1989) を結びつけ、構造と機能を統合的に理解するための枠組を提示する。自伝的記憶の構造に関して本研究では、lifetime period と呼ばれる数年単位の時間枠が、記憶を体制化する強固な役割を担っていることが見出された。同時に、本人の自己に関わるような重要な出来事に関しては、lifetime period の制約を越えて、長い時間間隔を越えて記憶同士が結びついたり、過去の記憶と現在の自己が結びついていることが示された。自伝的記憶は lifetime period レベルの時間的にミクロな構造と、より長期的でマクロな構造の両方から構成されていると考えられる。そして各々の構造が、特有の機能を担っているであろう。

(1) lifetime periodによるミクロな構造

lifetime period は数年の時間幅で自伝的記憶を体制化している。同時に lifetime period の中では自伝的記憶は、活動やその意味によって結びつけられている。われわれが暮らしている社会においては、数年程度の幅はちょうど、小学校から中学校、中学校から高校といった、社会的な移行の区切りと対応している。研究6で移行期の出来事が繰り返し想起されたのも、こうした出来事が人生を区切るランドマーク(Shum, 1998)として機能していることを示している。

数年という幅が一つの区切りになっていることには、相応の適応的な意味があると推測される。この点に関連して未来展望の研究から、示唆的な知見が得られている。都筑(1999)は大学生に将来の目標をあげさせるとともに、その目標がいつごろ実現可能かを問うた。さらにアイデンティティ・ステータスとの関連を検討した。その結果、アイデンティティ・ステータスが「拡散」と判定された大学生では、5年以上先の非常に長期的な目標をあげる傾向が見られた。すなわち長すぎる時間展望が、自我発達の問題と結びついていることが示されたのである。この研究はあくまで未来展望に関わるものであり、自伝的記憶における時間の分節や過去展望とどのように関連するかは現時点では不明である。しかしながら、青年期という変化の大きい段階にある人間にとっては、数

年程度の幅で人生を分節化して認識することが適応的であることを示唆しているとも解釈できよう。

lifetime period の中で記憶がまとめられていることは、類推機能という点でも意味があるのだろう。アナロジー推論の研究では、ベース領域とターゲット領域の間の類似性が高い場合に、自発的類推による問題解決が促進されることが見出されている(山崎, 2001)。研究2では、同じ lifetime period に属する二つの出来事は、活動やその意味が共通で、関連性も高く評価されていた。一方、異なる lifetime period に属する二つの出来事は、関連性が低く、人や物や場所といった「要素」だけで結びついている率が高かった。ここから、同じ lifetime period に属する出来事では共有される情報が多く、類似度も高いことが推測される。従って、ある問題に直面したとき、同じ lifetime period に属する出来事が想起されやすいということは、それだけ効果的な類推を働かせることにつながるのだろう。

このように数年単位の区切りの中でプランを立てたり、その区切りの中で複数の経験に関連づけて問題解決に役立てたりすることは、一つの適応的な情報処理の方法であろう。

(2) 目標やテーマに基づくマクロな構造

しかし人の自己は、数年単位で分節化された lifetime period の、単なる連続ではない。いくつもの lifetime period を通じて、その人が置かれている状況は変化する。そうした変化にもかかわらず、自己は一貫性を維持している。参加者に反復想起を求めた Sutin & Robins (2005) や Thorne, Cutting, & Skaw (1998) の研究では、想起される出来事は変動するが、出来事の背景にある動機(例：対人関係において相手を援助する)は比較的安定していることが報告されている。このように一貫した自己を維持するには、過去から現在へと至る時間という枠組みに従いつつ、同時に目標やライフ・テーマによっても記憶が体制化されたマクロな構造が必要である。

研究3～5では小学校から高校までの教師にまつわる記憶を検討した。この記憶に特に強い意味を見出していたのは、教育学部(教員養成系)の大学生や現職の学校教員であった。大学生にとって職業選択は、自己に関わる重要なテー

マである。現職教員にとって自分が教師であるという認識は、自己観の大きな部分を占めるであろう。こうした参加者にとって、小中学校の教師をめぐる記憶は、その当時の lifetime period 内で完結しているものではない。その後の職業選択や現在の自己と結びつく出来事として認識され、鮮明に想起される。こうした記憶は教職を目指している自己、教職を拒否している自己、あるいは教師である自己の重要な部分を占め、繰り返し想起され、鮮明さを維持している。

このようにマクロな構造においては、lifetime period という枠を越えて、時間的に離れた出来事同士が内容(テーマ)によって構造化されている。そして、過去の出来事と現在の自己を結びつけ意味づけようとする自伝的推論の過程を通して、マクロな構造に独自の機能が果たされる。例えば人は過去の出来事を現在の出発点(あるいは転換点)として位置づけて、自己の一貫性や成長を確認したり、ライフストーリーを構成する。あるいは重要な出来事を自己の拠り所(基準点)として想起し、意志決定に生かしたり、自らを動機づけたりする。

自己定義的で重要な出来事は、経験した直後にはその意味が不明であったり、評価が不安定であるかもしれない。しかし、繰り返し想起されることを通じて固定化していく。その結果こうした出来事は、マクロな構造における個人的なランドマークとなる。これらは卒業や就職といった社会に共有されたランドマークとともに、人生という長いスパンで自伝的記憶を体制化するのに重要な役割を果たす。また、こうした個人的なランドマークができあがるのが、加齢に伴って自伝的記憶が安定する一因なのである。

(3) ミクロな構造とマクロな構造をつなぐパラダイムの必要性

Conway のモデル(Conway, 1998b; Conway & Pleydell-Pearce, 2000)では自伝的記憶の階層構造の最上位に、lifetime period とテーマという二つの構造化原理が仮定されている。本研究の結果は、これらの妥当性を示したと言える。

しかし本研究では、ミクロな構造とマクロな構造のそれぞれが、異なるパラダイムで検討されてきた。今後は、共通のパラダイムでの検討方法を探ることで、二つの構造の特徴をさらに明確にすることが求められる。

Brown らの標準的な event cueing 法では、最初に名詞を手がかり語として呈示して、cueing-event を収集する(Brown & Schopflocher, 1998a, 1998b)。これに

対して、テーマや目標(例：教職志望)に関わる事柄を手がかりとして呈示して cueing-event を収集し、そこから連想される cued-event の想起を求めるという方法が考えられる。cueing-event と cued-event が同じテーマや目標に関わる場合には、lifetime period の範囲を超えた出来事も想起されやすくなると考えられる。このように event cueing 法に改訂を加えることで、マクロな構造に関わる知見を得ることも可能になるだろう。

第2節 今後の検討課題

最後に今後の課題を指摘する。各章の末尾でも検討課題を論じたが、ここでは今後の自伝的記憶研究にとって重要度が高いと思われる課題を提示する。

1. いつ過去に立ち返るのか

本研究では、重要な出来事は繰り返し想起され意味づけられることが示唆された。しかし、いかなる状況で人は意図的・無意図的に過去経験に立ち返るのか、詳細は不明である。日々の選択や問題解決は比較的自動的に進行しており(Langer, 1989)、第3章・第1節の冒頭でも論じたように、日常生活では意外に自伝的記憶が意識的に利用されることが少ないのかもしれない(Chapman & Underwood, 2000; Ross & Buehler, 1994b)。

Klein & Loftus (1993)は参加者に形容詞を呈示して、それが自分自身を記述しているか判断する(記述)、その形容詞に該当する行為を自分が行ったエピソードを想起する(自伝的記憶)、その形容詞を定義する(意味)、という3種類の課題を設定した。実験にはプライミングの手続きが用いられ、第1段階では記述・自伝的記憶・意味のいずれかの判断が求められた。続く第2段階では第1段階と同じ形容詞が呈示され、記述あるいは自伝的記憶のいずれかの判断が求められた。その結果、第1段階で自伝的記憶を想起しても、第2段階での記述判断が促進されない(反応潜時が短縮されない)ことが見出された。この結果からは、自分がどのような人間であるかということを判断する際に、人は個別の自伝的記憶を参照していないと考えられる。藤本(2006)は面接場面を設定して

参加者に複数の形容詞を呈示し、自己への適合度が高い形容詞を選択させた。そしてそう考えた理由となるような出来事の報告を求めたのだが、回答の多くは概括性の高いものであった(例：「いつもそう。いつも できなくて、だから」)。

こうした研究が示すように、ひとたび態度や価値観あるいは自己スキーマが固定してしまうと、それらに基づいて判断を下せばよく、一々もとの出来事に立ち返る必要はない。そうであるなら、特定の自伝的記憶にまで立ち返って記憶を意識的に利用するのは、(1)スクリプトができていないので個別の記憶に頼らざるを得ない、(2)既存のライフストーリーを考え直したい、(3)重要な問題に対処するため自伝的記憶を含めて様々な情報を精緻に処理する必要がある、(4)自分がその出来事を経験したことを確認したい等、限られた状況なのではなかろうか。すなわち、何らかの意味で行為が妨げられ、調整が必要になった時と考えられる。

高齢者の回想を扱った研究では、どういうときに過去を振り返るのかを問う Telling About Life Experiences (TALE)尺度が作成されている(Bluck et al., 2005)。ただしこの尺度は、例えば「今の自分を理解したいときに、私は人生や人生の一時期を振り返る」のように項目を呈示し、こうした理由で過去を想起することがどれくらいの頻度であるかを6段階で評定させる内容になっている。その意味でこれは、どういう目的で過去を振り返るかということに関するメタ記憶を検査する尺度であり、現実の回想行動との対応が確認されているわけではない。人が現実にどのような場面で過去を振り返るのか、ダイアリー法を用いたフィールド研究等によって検討されることが望まれる。

人が現実にどのような状況で記憶を想起しているのかという問題は、不随意記憶の研究でしか検討されていない。しかもそこでの検討結果は、注意が拡散しているときや穏やかな感情状態でいるときに外的刺激(例：新聞や本)が契機となり不随意的記憶が想起されやすいという、内的・外的環境要因の指摘にとどまっている(Berntsen, 1998; 神谷, 2003)。行為が妨げられ調整が必要な状況での意図的な想起も含めて、いつ記憶に立ち返るのかという問題を検討することが求められる。

この問題はまた、自伝的推論の過程を明らかにするのにも重要である。先行

研究ではネガティブな経験が自伝的推論を引き出すと論じられることが多かった(Bluck & Habermas, 2000; Thorne, McLean, & Lawrence, 2004)。しかし研究5では、肯定的な出来事と現在の自己を結びつけるような自伝的推論も多く見出された。もちろんネガティブな経験について反芻し、その意味を探ろうとすることもあろう。しかしそれだけでなく、ネガティブな状況にあって、肯定的な経験を基準点として想起することもあるのではなかろうか。こうした点を検討するのにも、「いつ過去に立ち返るのか」という問題は重要な意味を持っている。

2. 構造と機能の適合性

研究3では、教師に対する否定的な見方につながった出来事は特定性の高いものとして記述されていたのに対して、教師への肯定的な態度や教職志望につながった出来事には、概括的な記述のものも多く含まれていた。不快な経験を避けるためには、その状況を詳細に想起できることが望ましい。これに対して、「小学校の先生の影響で教職を選択した」というライフストーリーを構成したり、教職へと動機づけることは、概括的な記憶でも可能なのであろう。

では細部のエピソード情報まで想起することには、何の意味もないのであろうか。おそらくそうではないだろう。細部のエピソード情報を想起することは、研究4でも明らかにされたように、想起内容が確かに自分の経験に基づくものであるという確信を与えてくれる。脳損傷によってこの想起意識が損なわれた場合には、リアリティ・モニタリングの問題が生じ、例えば再認検査のディストラクターに対して、“remember”判断(その項目が学習リスト中にあったことを、ありありと想起できるという判断)を下すことになってしまう。これでは空想や白昼夢についても、自分自身の経験として(誤って)想起し、その後の判断材料に用いることになりかねない(Conway, 2005)。

Conway(1996a)のモデルによると自伝的記憶は、「lifetime period」 - 「一般的な出来事」 - 「出来事の細部」という階層構造を成している(第2章・第1節参照)。各々の階層には抽象度の異なる情報が存在している。特定性の高いエピソード情報から、あるlifetime period全体に対する評価のように抽象的な情報に至るまで、自伝的記憶の階層構造の各々が、独自の機能を担っていると

考えられる。記憶の機能と構造の間には、「この機能を果たすためには、このレベルの情報が最適である」といったように、最適な組み合わせ(適合性)が存在しているのかもしれない。

Bluck & Alea (2002)はRFS(Webster, 1993)やTALE(Bluck et al., 2005)といった回想機能尺度(第3章・第3節参照)を用いて、構造と機能の適合性を検討することを提案している。これらの尺度では「……したいときに私は過去を振り返る」のように項目が呈示される。Bluck & Alea (2002)は「……したいときに私は人生全体を振り返る」「……したいときに私は過去に経験した特定の出来事を思い出す」(下線筆者)のように回答する際の視点を操作することで、階層構造の各レベルに応じた機能を検討できると提案している。ただし先にも指摘したように、これらの尺度は記憶の機能に関する回答者のメタ記憶を調べるものであり、適合性の問題についても、あくまで予備的な検討として位置づけるべきであろう。

3. 経験の符号化と想起

自伝的記憶の研究では実験室的記憶研究とは異なり、個々の参加者がこれまでの人生で何を経験し記憶したのか、研究者は把握することができない。そのため想起過程を通じて自伝的記憶に接近するアプローチをとらざるを得なかった。本研究でも参加者が想起した出来事同士の関連性や想起内容を手がかりとして、自伝的記憶の構造と機能を探った。しかし記憶の過程を明らかにするためには、符号化についての検討や議論を避けるべきではない。

記憶の実験室研究では符号化と検索の交互作用が重視されており、検索手がかりの有効性は符号化に依存するという「符号化特定性原理」(encoding specificity principle : Tulving & Thomson, 1973)や、どのような符号化が有効かは検索方法に依存しているという「転移適切性処理」(transfer-appropriate processing : Morris, Bransford, & Franks, 1977)といった知見が提出されている。自伝的記憶においても、想起の特性は実は符号化の反映である可能性が考えられる。

符号化を考慮することの必要性を示唆する研究テーマを二つ紹介しよう。第一はフラッシュバルブ記憶である。強い情動を喚起する事件で形成されたフラ

ッシュバルブ記憶(例：その事件を最初に何で知ったか)は変容しやすい。この現象は、強い情動が記憶を混乱させたことによると説明できる。これに対して越智・相良(2003)は、強い情動を喚起する事件の場合、様々なメディアを通じて情報に接したり、他者と話題にすることが多く、その結果、情報源の混乱が生じるためだと指摘している。第二は、パーソナリティ特性の一つである「抑圧的コーピングスタイル」(Davis, 1987)である。この特性を持つ人は不快な出来事の記憶が劣っていることから、防衛機制として抑圧を働かせていると解釈される。これに対してLuborsky, Crits-Cristoph, & Alexander (1990)は、抑圧的コーピングスタイルの人は、不快な状況から目をそらして見ようとしないうことを、眼球運動データに基づいて指摘した。また Newman & Hedberg (1999)は、出来事をより肯定的に解釈する方向で符号化にバイアスがかかっている可能性を指摘している。

本研究で検討した中でも、符号化との関連がうかがわれる問題がある。例えば活動優位説を検討する中で、特定の種類の手がかりが優位に働くことはないという知見が得られている(Barsalou, 1988：第2章・第1節参照)。これは人がそれだけ多様な視点から出来事を符号化していることを意味しているのかもしれない。また広義の「行為・活動」が記憶をつなぐ原理として優位であるという研究1・研究2の結果は、人が日々の出来事を「自分が何をしているか」という視点から認識していることを意味しているのかもしれない。自己機能に関わる知見として、親密さや生殖性に関わる動機によって記憶の内容や語り方が異なることが指摘されている(McAdams et al., 1997; Woike et al., 1999：第3章・第2節参照)。こうした結果も、動機の違いが独自の符号化を導いていることによる可能性があるだろう。すなわち、人々の動機が異なると、それによって異なる出来事や、同じ出来事でも異なる側面に注意が向けられ、そのことが記憶内容や語り方の差異をもたらしている可能性がある。

Reiser, Black, & Anderson (1985)は自伝的記憶のインデックスを検討する中で、出来事の記憶に基礎水準があり、「活動」が最適な水準として機能していると論じた(第1章・第2節参照)。想起のインデックスが符号化を反映しているとすれば、人は出来事を符号化する際に、「活動」よりも抽象的すぎる符号化や、反対に細かすぎる符号化は行いにくいということになる。活動優位

説の適否とは別に、人が経験をどのように符号化しているのかという問題は、今後も検討する必要があるだろう。Reiser らの発想を受けて Burt, Kemp, & Conway (2003)は、人は複数の経験をつなげて一つの「出来事」として判断していること、その場合の一つの出来事は、数十日に及ぶこともあることを指摘した。こうした検討は、自伝的記憶研究者が曖昧なまま用いている「出来事(event)」という言葉の意味を問い直し、研究方法を洗練させるためにも、さらに進める必要がある。

4．加齢の影響

本研究では加齢に従って自伝的記憶の表象が安定化することが示唆された。ではこうした安定化は、自伝的記憶に特有の現象なのだろうか。それとも意味記憶や実験室的エピソード記憶課題にも共通の現象なのだろうか。加齢に伴う自伝的記憶の安定化のメカニズムを探ることは、記憶システム全体の中で自伝的記憶の位置づけを明らかにすることにもつながる、重要な課題である。この問題を検討するためには、できるだけ共通のパラダイムで、自伝的記憶の安定性と意味記憶やエピソード記憶の安定性を比較検討することが望ましい。

意味記憶からの検索の安定性を高齢群と若年群で比較した研究から、今後の研究の方向が示唆される。Mäntylä & Bäckman (1990)は3週間の間隔をあけて2回、同じ単語の定義的特徴(例:「リンゴ」の特徴)を繰り返し回答させ、高齢群の方が反応が不安定であることを見出した。この手法を応用し、過去の自己や現在の自己の特徴を繰り返し回答させるという手続きを用いることが考えられる。これにより、加齢に伴う安定化が特定性の高い自伝的記憶に限定されるのか、自己スキーマのような内容にもあてはまるのか、あるいは意味記憶にもあてはまるのか、検討することができるだろう。また Burke & Peters (1986)は参加者に単語刺激を呈示し、最初に思い浮かんだ単語を回答する連想課題を行った。2-3ヶ月の間隔をおいて再検査を行い、2回の回答の安定性(同じ連想反応が引き出されるか)を検討したところ、若年群の参加者と高齢群の参加者で安定性に差が無かった。同様の手続きを用いた Perlmutter(1979)は、高齢群の方が不安定であるという結果を得ている。同じ単語刺激を用い、連想される単語を回答させる手続きと、連想される自伝的記憶を回答させる手続き(手

がかり語法)の両方を用いることで、意味記憶の安定性と自伝的記憶の安定性を、共通のパラダイムで比較検討できるだろう。

エピソード記憶との関係についてはどうであろうか。研究6で見出された安定化 - 同じ情報が同じ順序で想起される - は、実験室的なエピソード記憶課題における群化(clustering)や主観的体制化(subjective organization)に類似している。群化や体制化は加齢の影響を受けないという結果(Rönnlund, Nyberg, Bäckman, & Nilsson, 2003)と、加齢に伴い群化量や体制化量が低下するという結果(Riefer & Batchelder, 1991; Witte, Freund, & Seby, 1990)が得られている。しかし研究6で検討された自伝的記憶は、その人にとって重要度の高い出来事に関わるものであり、長期記憶内に比較的強固に貯蔵されていると考えられる。そうであるなら、実験室で学習されたばかりのリストの再生と比較するのではなく、十分に学習された記銘材料について群化や体制化を調べ、自伝的記憶の安定化と比較検討することが必要であろう。

安定化が自伝的記憶のみならず、意味記憶や実験室で学習したエピソード記憶でも認められるなら、記憶システムに共通の検索メカニズムを考えることが必要になる。記憶システム全般に加齢に伴う安定化の傾向があるのだとすると、認知的処理資源の低減を補償するような機能的な意味を考えることが可能である。例えば加齢に伴い新たな情報の獲得が困難になったり(Burke, 2006)、情報の獲得に価値を置かなくなったりする(Carstensen, Isaacowitz, & Charles, 1999; Pasupathi & Carstensen, 2003)。そしてそのことを、既存の表象からの安定した検索で補っていると考えることができよう。

一方、安定化が自伝的記憶に特有な現象であるとするなら、自伝的記憶に特有の原因を探らなければならない。研究6では移行に関わる出来事や個人的に重要な出来事がランドマークとなり、それ以外の出来事に比較すると接近可能性が高まっているのではないかと論じた。この他にも、加齢に伴って想起の目的が変化したり(Webster, 1993, 1995, 1998)、自伝的推論過程が活発になることが(Pasupathi & Mansour, 2006)、自伝的記憶の安定化に関連しているのかもしれない。

第3節 結び

自伝的記憶が認知心理学の枠組の中で検討され始められてから、既に 30 年が経過した。その間、自伝的記憶研究の裾野は広がった。しかし自伝的記憶研究者は、「百花繚乱」な現状に満足することなく、豊かな実りを目指さなければならない。そのためには以下の事柄を意識しなければならないだろう。

第一は、「自伝的記憶」という名のもとに何を検討するのか、という問題である。人は経験を符号化し、貯蔵し、想起し、そしてしばしば他者に語る。その全てが「自伝的記憶」の研究である。しかし、自伝的記憶を「記憶」の問題として扱うのか、「語り」の問題として扱うのか、あるいは「語りに現れた出来事の記憶」を検討するのかによって、異なる方法論やモデルが求められる。自伝的記憶が人間行動の様々な側面に関わることは認めつつも、扱っている問題の位置づけを意識することが必要である。

第二に、自伝的記憶をあくまで「記憶」の問題として検討するのなら、常に記憶システム全体の中での位置づけを意識しなければならない。前節では加齢を通してこの問題に接近することを提案した。記憶全体の中での位置づけを意識し、自伝的記憶研究を理論的に精緻化することが必要である。

第三に、どういう面から自伝的記憶を研究するかにかかわらず、頑健な現象を探求するということである。それがなければそもそも知見を蓄積することもできないし、その蓄積の上に自伝的記憶のモデルや理論を構築することも難しくなる。

本研究は「構造」と「機能」という自伝的記憶の核となる問題に、6つの実験・調査を通して接近した。もとより、ここから得られた知見で構造と機能の全体像が明らかになったとは言えない。上にあげた三点を念頭に、本研究で明らかになった知見をさらに深める方向で、検討を重ねていきたい。

引用文献

本文中の引用文献

【 A 】

Anderson, S. J., Cohen, G., & Taylor, S. 2000 Rewriting the past: Some factors affecting the variability of personal memories. *Applied Cognitive Psychology*, **14**, 435-454.

Atkinson, R. C., & Shiffrin, R. M. 1972 The control of short-term memory. *Scientific American*, **225**, 82-90.

【 B 】

Baddeley, A. D. 1992 What is autobiographical memory? In M. A. Conway, D. C. Rubin, H. Spinnler, & W. A. Wagenaar (Eds.), *Theoretical perspectives on autobiographical memory*. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers. Pp.13-29.

Baddeley, A. D. 1997 *Human memory. revised ed.* Hove, UK: Psychology Press.

Bahrick, H. P. 1984 Semantic memory content in permastore: Fifty years of memory for Spanish learned in school. *Journal of Experimental Psychology: General*, **113**, 1-29.

Banaji, M. R., & Crowder, R. G. 1994 Experimentation and its discontents. In P. Morris & M. Gruneberg (Eds.), *Theoretical aspects of memory. 2nd ed.* London, UK: Routledge. Pp.296-308.

Barclay, C. R. 1996 Autobiographical remembering: Narrative constraints on objectified selves. In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: studies in autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.94-125.

Barclay, C. R., & DeCooke, P. A. 1988 Ordinary everyday memories: Some of the things of which selves are made. In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to the study of memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.91-125.

Barclay, C. R., & Subramaniam, G. 1987 Autobiographical memories and self-schemata. *Applied Cognitive Psychology*, **1**, 169-182.

Barsalou, L. W. 1988 The content and organization of autobiographical memories. In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to the study of memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.193-243.

Bavelas, J. B., Coates, L., & Johnson, T. 2000 Listeners as co-narrators. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 941-952.

Beals, D. E. 1991 Stories from the classroom: Rate of response to personal event narratives told by beginning teachers. *The Quarterly Newsletter of the Laboratory of*

- Comparative Human Cognition*, **13**, 31-38.
- Belli, R. F., Schuman, H., & Jackson, B. 1997 Autobiographical misremembering: John Dean is not alone. *Applied Cognitive Psychology*, **11**, 187-209.
- Berger, P. L. 1963 *Invitation to sociology*. New York, NY: Doubleday & Company. 水野節夫・村山研一(訳) 1979 社会学への招待 思索社
- Berntsen, D. 1996 Involuntary autobiographical memories. *Applied Cognitive Psychology*, **10**, 435-454.
- Berntsen, D. 1998 Voluntary and involuntary access to autobiographical memory. *Memory*, **6**, 113-141.
- Berntsen, D., & Rubin, D. C. 2006 The centrality of event scale: A measure of integrating a trauma into one's identity and its relation to post-traumatic stress disorder symptoms. *Behaviour Research and Therapy*, **44**, 219-231.
- Berntsen, D., & Thomsen, D. K. 2005 Personal memories for remote historical events: Accuracy and clarity of flashbulb memories related to World War II. *Journal of Experimental Psychology: General*, **134**, 242-257.
- Berntsen, D., Willert, M., & Rubin, D. C. 2003 Splintered memories or vivid landmarks? Qualities and organization of traumatic memories with and without PTSD. *Applied Cognitive Psychology*, **17**, 675-693.
- Blackburne-Stover, G., Belenky, M. F., & Gilligan, C. 1982 Moral development and reconstructive memory: Recalling a decision to terminate an unplanned pregnancy. *Developmental Psychology*, **18**, 862-870.
- Blagov, P. S., & Singer, J. A. 2004 Four dimensions of self-defining memories (specificity, meaning, content, and affect) and their relationships to self-restraint, distress, and repressive defensiveness. *Journal of Personality*, **72**, 481-511.
- Bluck, S. 2003 Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*, **11**, 113-123.
- Bluck, S., & Alea, N. 2002 Exploring the functions of autobiographical memory: Why do I remember the autumn? In J. D. Webster & B. K. Haight (Eds.), *Critical advances in reminiscence work: From theory to application*. New York, NY: Springer. Pp.61-75.
- Bluck, S., Alea, N., Habermas, T., & Rubin, D. C. 2005 A tale of three functions: The self-reported uses of autobiographical memory. *Social Cognition*, **23**, 91-117.
- Bluck, S., & Glück, J. 2004 Making things better and learning a lesson: Experiencing wisdom across the lifespan. *Journal of Personality*, **72**, 543-572.
- Bluck, S., & Habermas, T. 2000 The life story schema. *Motivation and Emotion*, **24**, 121-147.
- Bluck, S., & Habermas, T. 2001 Extending the study of autobiographical memory: Thinking back about life across the life span. *Review of General Psychology*, **5**, 135-147.
- Borgida, E., & Nisbett, R. E. 1977 The differential impact of abstract vs. concrete

- information on decisions. *Journal of Applied Social Psychology*, **7**, 258-271.
- Bower, G. H., & Forgas, J. P. 2001 Mood and social memory. In J. P. Forgas (Ed.), *Handbook of affect and social cognition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.95-120.
- Bower, G. H., Gilligan, S. G., & Monteiro, K. P. 1981 Selectivity of learning caused by affective states. *Journal of Experimental Psychology: General*, **110**, 451-473.
- Brewer, W. F. 1986 What is autobiographical memory? In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.25-49.
- Brewer, W. F. 1988 Memory for randomly sampled autobiographical events. In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to the study of memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.21-90.
- Brewer, W. F. 1996 What is recollective memory? In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.19-66.
- Brown, N. R. 2005 On the prevalence of event clusters in autobiographical memory. *Social Cognition*, **23**, 35-69.
- Brown, N. R., & Schopflocher, D. 1998a Event clusters: An organization of personal events in autobiographical memory. *Psychological Science*, **9**, 470-475.
- Brown, N. R., & Schopflocher, D. 1998b Event cueing, event clusters, and the temporal distribution of autobiographical memories. *Applied Cognitive Psychology*, **12**, 305-319.
- Brown, R., & McNeill, D. 1966 The "tip-of-the-tongue" phenomenon. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **5**, 325-337.
- Bruce, D. 1985 The how and why of ecological memory. *Journal of Experimental Psychology: General*, **114**, 78-90.
- Bruce, D. 1989 Functional explanations of memory. In L. W. Poon, D. C. Rubin, & B. A. Wilson (Eds.), *Everyday cognition in adulthood and late life*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.44-58.
- Bruner, J. 1987 Life as narrative. *Social Research*, **54**, 11-32.
- Bruner, J., & Feldman, C. F. 1996 Group narratives as a cultural context of autobiography. In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.291-317.
- Burke, D. M. 2006 Representation and aging. In E. Bialystock & F. I. M. Craik (Eds.), *Lifespan cognition: Mechanisms of change*. New York, NY: Oxford University Press. Pp. 193-206.
- Burke, D. M., & Peters, L. 1986 Word association in old age: Evidence for consistency in semantic encoding during adulthood. *Psychology and Aging*, **1**, 283-292.
- Burt, C. D. B., Kemp, S., & Conway, M. 2003 Themes, events, and episodes in autobiographical memory. *Memory & Cognition*, **31**, 317-325.

- Butler, R. N. 1963 The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, **26**, 65-76.
- Byrne, C. A., Hyman, I. E. Jr., & Scott, K. L. 2001 Comparisons of memories for traumatic events and other experiences. *Applied Cognitive Psychology*, **15**, S119-S133.

【 C 】

- Campbell, D. T. 1957 Factors relevant to the validity of experiments in social settings. *Psychological Bulletin*, **54**, 297-312.
- Campbell, D. T., & Stanley, J. C. 1963 *Experimental and quasi-experimental designs for research*. Chicago, IL: Rand McNally College Publishing Company.
- Carstensen, L. L., Isaacowitz, D. M., & Charles, S. T. 1999 Taking time seriously. *American Psychologist*, **54**, 165-181.
- Chapman, P., & Underwood, G. 2000 Forgetting near-accidents: The roles of severity, culpability and experience in the poor recall of dangerous driving situations. *Applied Cognitive Psychology*, **14**, 31-44.
- Cohen, G. 1996 *Memory in the real world. 2nd ed.* Hove, UK: Psychology Press.
- Cohen, G. 1998 The effects of aging on autobiographical memory. In C. P. Thompson, D. J. Herrmann, D. Bruce, J. D. Read, D. C. Payne, & M. P. Toglia (Eds.), *Autobiographical memory: Theoretical and applied perspectives*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.105-123.
- Cohen, G., & Faulkner, D. 1988 Life span changes in autobiographical memory. In M. M. Gruneberg, P. E. Morris, & R. N. Sykes (Eds.), *Practical aspects of memory: Current research and issues. Vol.1: Memory in everyday life*. Chichester, UK: John Wiley & Sons. Pp.277-282.
- Conway, M. A. 1992 A structural model of autobiographical memory. In M. A. Conway, D. C. Rubin, H. Spinnler, & W. A. Wagenaar (Eds.), *Theoretical perspectives on autobiographical memory*. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers. Pp.167-193.
- Conway, M. A. 1996a Autobiographical knowledge and autobiographical memories. In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.67-93.
- Conway, M. A. 1996b Autobiographical memory. In E. L. Bjork & R. A. Bjork (Eds.), *Memory*. San Diego, CA: Academic Press. Pp.165-194.
- Conway, M. A. (Ed.) 1997 *Recovered memories and false memories*. New York, NY: Oxford University Press.
- Conway, M. A. 2005 Memory and the self. *Journal of Memory and Language*, **53**, 594-628.
- Conway, M. A., Anderson, S. J., Larsen, S. F., Donnelly, C. M., McDaniel, M. A., McClelland, A. G. R., & Rawles, R. E. 1994 The formation of flashbulb memories.

- Memory & Cognition*, **22**, 326-343.
- Conway, M. A., & Bekerian, D. A. 1987 Organization in autobiographical memory. *Memory & Cognition*, **15**, 119-132.
- Conway, M. A., & Holmes, A. 2004 Psychosocial stages and the accessibility of autobiographical memories across the life span. *Journal of Personality*, **72**, 461-480.
- Conway, M. A., & Pleydell-Pearce, C. W. 2000 The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review*, **107**, 261-288.
- Conway, M. A., & Rubin, D. C. 1993 The structure of autobiographical memory. In A. F. Collins, S. E. Gathercole, M. A. Conway, & P. E. Morris (Eds.), *Theories of memory*. Hove, UK: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.103-137.
- Conway, M., & Ross, M. 1984 Getting what you want by revising what you had. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 738-748.
- Crovitz, H. F., & Schiffman, H. 1974 Frequencies of episodic memories as a function of their age. *Bulletin of the Psychonomic Society*, **4**, 517-518.
- Csikszentmihalyi, M., & Beattie, O. V. 1979 Life themes: A theoretical and empirical exploration of their origins and effects. *Journal of Humanistic Psychology*, **19**, 45-63.

【 D 】

- Davis, P. J. 1987 Repression and the inaccessibility of affective memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 585-593.
- Debats, D. L., Drost, J., & Hansen, P. 1995 Experiences of meaning in life: A combined qualitative and quantitative approach. *British Journal of Psychology*, **86**, 359-375.
- Dijkstra, K., & Kaup, B. 2005 Mechanisms of autobiographical memory retrieval in younger and older adults. *Memory & Cognition*, **33**, 811-820.

【 E 】

- Ebbinghaus, H. 1885 *Über das Gedächtnis: Untersuchungen zur experimentellen Psychologie*. Leipzig: Duncker and Humblot. (Translation by H. A. Ruger & C. E. Bussenius 1913/1964 *Memory: A contribution to experimental psychology*. Dover.)
宇津木保(訳) 1978 記憶について - 実験心理学への貢献 誠信書房
- 榎本博明 1998 「自己」の心理学 サイエンス社
- 榎本博明 1999 <私>の心理学的探求 - 物語としての自己の視点から 有斐閣
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York, NY: International Universities Press. 小此木敬吾(編訳) 1973 自我同一性 誠信書房
- Erikson, E. H. 1982 *The life cycle completed: A review*. New York, NY: W. W. Norton & Company. 村瀬孝雄・近藤邦夫(訳) 1989 ライフサイクル,その完結 みすず書房
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. 1986 *Vital involvement in old age*. New York, NY: W. W. Norton & Company. 朝長正徳・朝長梨枝子(訳) 1990 老年期 - 生き生きとしたかかわりあい - みすず書房

Evans, J., Williams, J. M. G., O'Loughlin, S., & Howells, K. 1992 Autobiographical memory and problem-solving strategies of parasuicide patients. *Psychological Medicine*, **22**, 399-405.

【 F 】

Fitzgerald, J. M. 1980 Sampling autobiographical memory reports in adolescents. *Developmental Psychology*, **16**, 675-676.

Fitzgerald, J. M. 1981 Autobiographical memory: Reports in adolescence. *Canadian Journal of Psychology*, **35**, 69-73.

Fitzgerald, J. M. 1988 Vivid memories and the reminiscence phenomenon: The role of a self narrative. *Human Development*, **31**, 261-273.

Fitzgerald, J. M. 1996 The distribution of self-narrative memories in younger and older adults: Elaborating the self-narrative hypothesis. *Aging, Neuropsychology, and Cognition*, **3**, 229-236.

Foa, E. B., Molnar, C., & Cashman, L. 1995 Change in rape narratives during exposure therapy for posttraumatic stress disorder. *Journal of Traumatic Stress*, **8**, 675-690.

Forgas, J. P. 1976 The perception of social episodes: Categorical and dimensional representations in two different social milieus. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 199-209.

Freud, S. 1914 *Zur Geschichte der psychoanalytischen Bewegung*. 高橋義孝・生松敬三他(訳) 1983 フロイト著作集 10 文学・思想篇 人文書院(該当箇所は野田倬の訳による「精神分析運動史」であり, Pp.255-310 に収録されている。)

藤本裕子 2006 青年期健常群における自己の記憶の想起および捉え方に関する探索的研究 - 臨床群の理解に向けて - 九州大学心理学研究, **7**, 77-88.

藤永保 1999 心理学の展開 藤永保・柏木恵子 エッセンシャル心理学 ミネルヴァ書房 Pp.222-230.

福田健 1997 事象の想起における抽象化の効果 認知科学, **4**, 72-82.

福田健 2001 アナロジーと想起 大西仁・鈴木宏昭(編著) 類似から見た心 共立出版 Pp.120-147.

【 G 】

Galton, F. 1907 *Inquiries into human faculty and its development*. 2nd. ed. London: J. M. Dent & Sons. (本論文の執筆にあたっては, 2004年に Kessinger社から刊行された reprint 版を参照した。手がかり語法を用いた実験は Pp.133-146 に記載されている。)

Gardiner, J. M. 1988 Functional aspects of recollective experience. *Memory & Cognition*, **16**, 309-313.

Gergen, K. J., & Gergen, M. M. 1988 Narrative and the self as relationship. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Volume 21: *Social psychological studies of the self: Perspectives and programs*. San Diego, CA:

Academic Press. Pp.17-56.

- Gick, M. L., & Holyoak, K. J. 1980 Analogical problem solving. *Cognitive Psychology*, **12**, 306-355.
- Gick, M. L., & Holyoak, K. J. 1983 Schema induction and analogical transfer. *Cognitive Psychology*, **15**, 1-38.
- Glenberg, A. M., & Swanson, N. G. 1986 A temporal distinctiveness theory of recency and modality effects. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **12**, 3-15.

【 H 】

- Haberlandt, K. 1999 *Human memory*. Boston, MA: Allyn and Bacon.
- Habermas, T., & Bluck, S. 2000 Getting a life: The emergence of life story in adolescence. *Psychological Bulletin*, **126**, 748-769.
- Habermas, T., & Paha, C. 2001 The development of coherence in adolescents' life narratives. *Narrative Inquiry*, **11**, 35-54.
- Haden, C. A. 2003 Joint encoding and joint reminiscing: Implications for young children's understanding and remembering of personal experiences. In R. Fivush & C. A. Haden (Eds.), *Autobiographical memory and the construction of a narrative self: Developmental and cultural perspectives*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.49-69.
- Han, J. J., Leichtman, M. D., & Wang, Q. 1998 Autobiographical memory in Korean, Chinese, and American children. *Developmental Psychology*, **34**, 701-713.
- Haque, S., & Conway, M. A. 2001 Sampling the process of autobiographical memory construction. *European Journal of Cognitive Psychology*, **13**, 529-547.
- Herz, R. S., & Schooler, J. W. 2002 A naturalistic study of autobiographical memories evoked by olfactory and visual cues: Testing the Proustian hypothesis. *American Journal of Psychology*, **115**, 21-32.
- Hirst, W., & Manier, D. 1996 Remembering as a communication: A family recounts its past. In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.271-290.
- Holmes, A., & Conway, M. 1999 Generation identity and the reminiscence bump: Memory for public and private events. *Journal of Adult Development*, **6**, 21-34.
- Holyoak, K. J., & Thagard, P. 1995 *Mental leaps*. Cambridge, MA: MIT Press. 鈴木宏昭・河原哲雄(監訳) 1998 アナロジーの力 - 認知科学の新しい探求 新曜社
- Hyman, I. E. Jr., & Faries, J. M. 1992 The functions of autobiographical memory. In M. A. Conway, D. C. Rubin, H. Spinnler, & W. A. Wagenaar (Eds.), *Theoretical perspectives on autobiographical memory*. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers. Pp.207-221.

【 J 】

- Jansari, A., & Parkin, A. J. 1996 Things that go bump in your life: Explaining the reminiscence bump in autobiographical memory. *Psychology and Aging*, **11**, 85-91.
- Johnson, H. M., & Seifert, C. M. 1992 The role of predictive features in retrieving analogical cases. *Journal of Memory and Language*, **31**, 648-667.
- Johnson, M. K., Foley, M. A., Suengas, A. G., & Raye, C. L. 1988 Phenomenal characteristics of memories for perceived and imagined autobiographical events. *Journal of Experimental Psychology: General*, **117**, 371-376.
- Jung, J. 1968 *Verbal learning*. New York, NY: Holt, Rinehart and Winston. 国分振(訳)
1971 言語学習の心理 明治図書出版

【 K 】

- 神谷俊次 1996 記憶と感情 - 快・不快刺激の忘却 - アカデミア(人文・社会科学編), **63**, 217-247.
- 神谷俊次 2000 自伝的記憶のパーソナリティ特性による分析 心理学研究, **71**, 96-104.
- 神谷俊次 2002 自伝的記憶の保持に関する追跡的研究 アカデミア(人文・社会科学編), **74**, 269-290.
- 神谷俊次 2003 不随意記憶の機能に関する考察 - 想起状況の分析を通じて - 心理学研究, **74**, 444-451.
- 神谷俊次 2004 自伝的記憶の想起における感情手がかりの効果 アカデミア(人文・社会科学編), **78**, 287-309.
- 川口潤 2005 指定討論 - ヒトにとって自伝的記憶はどのような意味を持つのか？
佐藤浩一・越智啓太・神谷俊次・上原泉・川口潤・太田信夫 自伝的記憶研究の理論と方法(2) 日本認知科学会テクニカルレポート No.55 Pp.22-24.
- King, L. A., Scollon, C. K., Ramsey, C., & Williams, T. 2000 Stories of life transition: Subjective well-being and ego development of children with Down syndrome. *Journal of Research in Personality*, **34**, 509-536.
- Klein, S. B., & Loftus, J. 1993 The mental representation of trait and autobiographical knowledge about the self. In T. K. Srull & R. S. Wyer Jr. (Eds.), *The mental representation of trait and autobiographical knowledge about the self. (Advances in social cognition, Volume V)*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.1-49.
- 小林多寿子 1987 <都市化>とノスタルジー - 都市における奄美出身者の心性 - 年報人間科学, **8**, 23-40.
- 小林多寿子 1992 <親密さ>と<深さ> - コミュニケーション論からみたライフヒストリー - 社会学評論, **42**, 419-434.
- 小林多寿子 1995 インタビューからライフヒストリーへ 中野卓・桜井厚(編) ライフヒストリーの社会学 弘文堂 Pp.43-70.
- 小林多寿子 1998 戦争体験と自分史 - 「記憶の共同体」をもとめて - 日本女子大学紀要(人間社会学部), **8**, 127-140.

Kolodner, J. L. 1992 An introduction to case-based reasoning. *Artificial Intelligence Review*, **6**, 3-34.

小森康永・野口裕二・野村直樹(編著) 1999 ナラティブ・セラピーの世界 日本評論社

【L】

Lancaster, J. S., & Barsalou, L. W. 1997 Multiple organizations of events in memory. *Memory*, **5**, 569-599.

Langer, E. 1989 *Mindfulness*. Cambridge, MA: Perseus Books.

Langness, L. L., & Frank, G. 1981 *Lives: An anthropological approach to biography*.

Novato, CA: Chandler & Sharp. 米山俊直・小林多寿子(訳) 1993 ライフヒストリー研究入門 - 伝記への人類学的アプローチ - ミネルヴァ書房

Larsen, S. F. 1998 What is it like to remember? On phenomenal qualities of memory. In C. P. Thompson, D. J. Herrmann, D. Bruce, J. D. Read, D. C. Payne, & M. P. Toglia (Eds.), *Autobiographical memory: Theoretical and applied perspectives*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.163-190.

Levine, B., Svoboda, E., Hay, J. F., Wincour, G., & Moscovitch, M. 2002 Aging and autobiographical memory: Dissociating episodic from semantic retrieval. *Psychology and Aging*, **17**, 677-689.

Levine, L. J. 1997 Reconstructing memory for emotions. *Journal of Experimental Psychology: General*, **126**, 165-177.

Lewinsohn, P. M., & Rosenbaum, M. 1987 Recall of parental behavior by acute depressives, remitted depressives, and nondepressives. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 611-619.

Linton, M. 1975 Memory for real-world events. In D. A. Norman, & D. E. Rumelhart (Eds.), *Explorations in cognition*. San Francisco, CA: Freeman & Company. Pp.376-404.

Linton, M. 1982 Transformations of memory in everyday life. In U. Neisser (Ed.), *Memory observed: Remembering in natural contexts*. San Francisco, CA: Freeman & Company. Pp.77-91.

Luborsky, L. U., Crits-Christoph, P., & Alexander, K. J. 1990 Repressive style and relationship patterns: Three samples inspected. In J. L. Singer (Ed.), *Repression and dissociation: Implications for personality theory, psychopathology, and health*. Chicago, IL: University of Chicago Press. Pp.275-298.

【M】

Mackavey, W. R., Malley, J. E., & Stewart, A. J. 1991 Remembering autobiographically consequential experiences: Content analysis of psychologists' accounts of their lives. *Psychology and Aging*, **6**, 50-59.

- Mäntylä, T., & Bäckman, L. 1990 Encoding variability and age-related retrieval failures. *Psychology and Aging*, **5**, 545-550.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- Marsh, E. J., & Tversky, B. 2004 Spinning the stories of our lives. *Applied Cognitive Psychology*, **18**, 491-503.
- McAdams, D. P., & Aubin, E. de St. 1992 A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 1003-1015.
- McAdams, D. P., Aubin, E. de St., & Logan, R. L. 1993 Generativity among young, midlife, and older adults. *Psychology and Aging*, **8**, 221-230.
- McAdams, D. P., Diamond, A., Aubin, E. de St., & Mansfield, E. 1997 Stories of commitment: The psychological construction of generative lives. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 678-694.
- McAdams, D. P., Hart, H. M., & Maruna, S. 1998 The anatomy of generativity. In D. P. McAdams, & E. de St. Aubin (Eds.), *Generativity and adult development: How and why we care for the next generation*. Washington, DC: American Psychological Association. Pp.7-43.
- McCormack, P. D. 1979 Autobiographical memory in the aged. *Canadian Journal of Psychology*, **33**, 118-124.
- McFarland, C., & Ross, M. 1987 The relation between current impressions and memories of self and dating partners. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **13**, 228-238.
- McFarland, C., Ross, M., & Giltrow, M. 1992 Biased recollections in older adults: The role of implicit theories of aging. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 837-850.
- McLean, K. C. 2005 Late adolescent identity development: Narrative meaning making and memory telling. *Developmental Psychology*, **41**, 683-691.
- McLean, K. C., & Thorne, A. 2003 Late adolescents' self-defining memories about relationships. *Developmental Psychology*, **39**, 635-645.
- Meltzer, H. 1930 Individual differences in forgetting pleasant and unpleasant experiences. *Journal of Educational Psychology*, **21**, 399-409.
- Moffitt, K. H., & Singer, J. A. 1994 Continuity in the life story: self-defining memories, affect, and approach/avoidance personal strivings. *Journal of Personality*, **62**, 21-43.
- Molinari, V., Cully, J. A., Kendjelic, E. M., & Kunik, M. E. 2001 Reminiscence and its relationship to attachment and personality in geropsychiatric patients. *International Journal of Aging and Human Development*, **52**, 173-184.
- 森敏昭 1995 記憶のしくみ 高野陽太郎(編) 認知心理学 2 記憶 東京大学出版会 Pp.9-26.
- 森岡正芳 1994 緊張と物語 - 聴覚的統合による出来事の変形 - 心理学評論, **37**, 494-521.

- Morris, C. D., Bransford, J. D., & Franks, J. J. 1977 Levels of processing versus transfer appropriate processing. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **16**, 519-533.
- Myerhoff, B. 1992 *Remembered lives: The work or ritual, storytelling, and growing older*. Ann Arbor, MI: The University of Michigan Press.

【N】

- Neimeyer, G. J., & Metzler, A. E. 1994 Personal identity and autobiographical recall. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.105-135.
- Neisser, U. 1978 Memory: What are the important questions? In M. M. Gruneberg, P. E. Morris, R. N. Sykes (Eds.), *Practical aspects of memory*. London, UK: Academic Press. Pp.3-24.
- Neisser, U. 1982 *Memory observed: Remembering in natural contexts*. San Francisco, CA: Freeman & Company.
- Neisser, U. 1988 Time present and time past. In M. M. Gruneberg, P. E. Morris, & R. N. Sykes (Eds.), *Practical aspects of memory: Current research and issues. Volume 2: Clinical and educational implications*. Chichester, UK: John Wiley & Sons. Pp.545-560.
- Nelson, K. 1993 The psychological and social origins of autobiographical memory. *Psychological Science*, **4**, 7-14.
- Nelson, K., & Fivush, R. 2000 Socialization of memory. In E. Tulving & F. I. M. Craik (Eds.), *The Oxford handbook of memory*. New York, NY: Oxford University Press. Pp.283-295.
- Newman, L. S., & Hedberg, D. A. 1999 Repressive coping and the inaccessibility of negative autobiographical memories: Converging evidence. *Personality and Individual Differences*, **27**, 45-53.
- Nigro, G., & Neisser, U. 1983 Point of view in personal memories. *Cognitive Psychology*, **15**, 467-482.
- 野村豊子 1998 回想法とライフレビュー 中央法規

【O】

- 越智啓太 2004 感情・情動と自伝的記憶の関連 - 本当に感情システムは自伝的記憶に影響を及ぼすのか - 佐藤浩一・槇洋一・下島裕美・堀内孝・越智啓太・太田信夫 自伝的記憶研究の理論と方法 日本認知科学会テクニカルレポート No.51, Pp.15-18.
- 越智啓太・相良陽一郎 2003 フラッシュバルブメモリーの忘却と変容 日本認知科学会テクニカルレポート No.48.
- 太田誠・越智啓太 1996 イベント記憶の想起内容の分析 - 初期記憶の感情価と想起内容 - 大阪青山短期大学研究紀要, **22**, 1-10.

Ornstein, P. A., Haden, C. A., & Hedrick, A. M. 2004 Learning to remember: Social-communicative exchanges and the development of children's memory skills. *Developmental Review*, **24**, 374-395.

長田由紀子・長田久雄 1994 高齢者の回想と適応に関する研究 発達心理学研究, **5**, 1-10.

【 P 】

Park, D. C. 2000 The basic mechanisms accounting for age-related decline in cognitive function. In D. C. Park & N. Schwarz (Eds.), *Cognitive aging: A primer*. New York, NY: Psychology Press, Pp.3-21.

Pasupathi, M. 2001 The social construction of the personal past and its implications for adult development. *Psychological Bulletin*, **127**, 651-672.

Pasupathi, M. 2003 Emotion regulation during social remembering: Differences between emotions elicited during an event and emotions elicited when talking about it. *Memory*, **11**, 151-163.

Pasupathi, M., & Carstensen, L. L. 2003 Age and emotional experience during mutual reminiscing. *Psychology and Aging*, **18**, 430-442.

Pasupathi, M., & Mansour, E. 2006 Adult age differences in autobiographical reasoning in narratives. *Developmental Psychology*, **42**, 798-808.

Perlmutter, M. 1979 Age differences in the consistency of adults' associative responses. *Experimental Aging Research*, **5**, 549-553.

Peterson, C., Moores, L., & White, G. 2001 Recounting the same events again and again: Children's consistency across multiple interviews. *Applied Cognitive Psychology*, **15**, 353-371.

Pillemer, D. B. 1992 Remembering personal circumstances: A functional analysis. In E. Winograd & U. Neisser (Eds.), *Affect and accuracy in recall: Studies of "flashbulb" memories*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.236-264.

Pillemer, D. B. 1998 *Momentous events, vivid memories*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Pillemer, D. B. 2001 Momentous events and the life story. *Review of General Psychology*, **5**, 123-134.

Pillemer, D. B. 2003 Directive functions of autobiographical memory: The guiding power of the specific episode. *Memory*, **11**, 193-202.

Pillemer, D. B., Goldsmith, L. R., Panter, A. T., & White, S. H. 1988 Very-long term memories of the first year in college. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **14**, 709-715.

Pillemer, D. B., Koff, E., Rhinehart, E. D., & Rierdan, J. 1987 Flashbulb memories of menarche and adult menstrual distress. *Journal of Adolescence*, **10**, 187-199.

Pillemer, D. B., Picariello, M. L., Law, A. B., & Reichman, J. S. 1996 Memories of college: The importance of specific educational episodes. In D. C. Rubin (Ed.),

- Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.318-337.
- Pillemer, D. B., Rhinehart, E. D., & White, S. H. 1986 Memories of life transitions: The first year in college. *Human Learning*, **5**, 109-123.
- Poole, D. A., & White, L. T. 1991 Effects of question repetition on the eyewitness testimony of children and adults. *Developmental Psychology*, **27**, 975-986.
- Poon, L. W., Welke, D. J., & Dudley, W. N. 1993 What is everyday cognition? In J. M. Puckett & H. W. Reese (Eds.), *Mechanisms of everyday cognition*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.19-32.
- Porter, S., & Birt, A. R. 2001 Is traumatic memory special? A comparison of traumatic memory characteristics with memory for other emotional life experiences. *Applied Cognitive Psychology*, **15**, S101-S117.
- Pratt, M. W., Norris, J. E., & Arnold, M. L. 1999 Generativity and moral development as predictors of value-socialization narratives for young persons across the adult life span: From lessons learned to stories shared. *Psychology and Aging*, **14**, 414-426.

【 R 】

- Reiser, B. J., Black, J. B., & Abelson, R. P. 1985 Knowledge structures in the organization and retrieval of autobiographical memories. *Cognitive Psychology*, **17**, 89-137.
- Riefer, D. M., & Batchelder, W. H. 1991 Age differences in storage and retrieval: A multinomial modeling analysis. *Bulletin of the Psychonomic Society*, **29**, 415-418.
- Rivers, I. 2001 Retrospective reports of school bullying: Stability of recall and its implications for research. *British Journal of Developmental Psychology*, **19**, 129-142.
- Robinson, J. A. 1976 Sampling autobiographical memories. *Cognitive Psychology*, **8**, 578-595.
- Robinson, J. A. 1986 Autobiographical memory: A historical prologue. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.19-24.
- Robinson, J. A. 1992 Autobiographical memory. In M. Gruneberg & P. Morris (Eds.), *Aspects of memory. 2nd ed. Volume 1: The practical aspects*. London, UK: Routledge. Pp.223-251.
- Robinson, J. A., & Swanson, K. L. 1990 Autobiographical memory: The next phase. *Applied Cognitive Psychology*, **4**, 321-335.
- Robinson, J. A., & Taylor, L. R. 1998 Autobiographical memory and self-narratives: A tale of two stories. In C. P. Thompson, D. J. Herrmann, D. Bruce, J. D. Read, D. C. Payne, & M. P. Toglia (Eds.), *Autobiographical memory: Theoretical and applied perspectives*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.125-143.
- Robinson, J. O., Rosen, M., Evans, J. M., Revill, S. I., David, R. H., & Rees, G. A. D. 1980 Self-administered intravenous and intramuscular pethidine: A controlled trial in

- labour. *Anaesthesia*, **35**, 763-770.
- Romaniuk, M., & Romaniuk, J. G. 1981 Looking back: An analysis of reminiscence functions and triggers. *Experimental Aging Research*, **7**, 477-489.
- Rönnlund, M., Nyberg, L., Bäckman, L., & Nilsson, L-G. 2003 Recall of subject-performed tasks, verbal tasks, and cognitive activities across the adult life span: Parallel age-related deficits. *Aging, Neuropsychology, and Cognition*, **10**, 182-201.
- Rosch, E. H., Mervis, C. B., Gray, W. D., Johnson, D. M., & Boyes-Braem, P. 1976 Basic objects in natural categories. *Cognitive Psychology*, **8**, 382-439.
- Ross, M. 1989 Relation of implicit theories to the construction of personal histories. *Psychological Review*, **96**, 341-357.
- Ross, M., & Buehler, R. 1994a Creative remembering. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.205-235.
- Ross, M., & Buehler, R. 1994b On authenticating and using personal recollections. In N. Schwarz & S. Sudman (Eds.), *Autobiographical memory and the validity of retrospective reports*. New York, NY: Springer-Verlag. Pp.55-69.
- Ross, M., & Conway, M. 1986 Remembering one's own past: The construction of personality histories. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Fundamentals of social behavior*. New York, NY: Guilford Press. Pp.122-144.
- Ross, M., McFarland, C., Conway, M., & Zanna, M. P. 1983 Reciprocal relation between attitudes and behavior recall: Committing people to newly formed attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 257-267.
- Ross, M., McFarland, C., & Fletcher, G. J. O. 1981 The effect of attitude on the recall of personal histories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 627-634.
- Ross, M., & Wilson, A. E. 2000 Constructing and appraising past selves. In D. L. Schacter & E. Scarrey (Eds.), *Memory, brain, and belief*. Cambridge, MA: Harvard University Press. Pp.231-258.
- Rubin, D. C. 1977 Very long-term memory for prose and verse. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **16**, 611-621.
- Rubin, D. C. 1982 On the retention function for autobiographical memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **21**, 21-38.
- Rubin, D. C. (Ed.) 1986 *Autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Rubin, D. C. 1989 Issues of regularity and control: Confessions of a regularity freak. In L. W. Poon, D. C. Rubin, & B. A. Wilson (Eds.), *Everyday cognition in adulthood and late life*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.84-103.
- Rubin, D. C. (Ed.) 1996 *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press.

- Rubin, D. C. 2000 Autobiographical memory and aging. In D. C. Park, & N. Schwarz (Eds.), *Cognitive aging: A primer*. New York, NY: Psychology Press. Pp.131-149.
- Rubin, D. C. 2005 Autobiographical memory tasks in cognitive research. In A. Wenzel & D. C. Rubin (Eds.), *Cognitive methods and their application to clinical research*. Washington, DC: American Psychological Association. Pp.219-241.
- Rubin, D. C., Feldman, M. E., & Beckham, J. C. 2004 Reliving, emotions, and fragmentation in the autobiographical memories of veterans diagnosed with PTSD. *Applied Cognitive Psychology*, **18**, 17-35.
- Rubin, D. C., Rahhal, T. A., & Poon, L. W. 1998 Things learned in early adulthood are remembered best. *Memory & Cognition*, **26**, 3-19.
- Rubin, D. C., Schrauf, R. W., & Greenberg, D. L. 2003 Belief and recollection of autobiographical memories. *Memory & Cognition*, **31**, 887-901.
- Rubin, D. C., Schrauf, R. W., & Greenberg, D. L. 2004 Stability in autobiographical memories. *Memory*, **12**, 715-721.
- Rubin, D. C., & Schulkind, M. D. 1997 Distribution of important and word-cued autobiographical memories in 20-, 35-, and 70-year-old adults. *Psychology and Aging*, **12**, 524-535.
- Rubin, D. C., Wetzler, S. E., & Nebes, R. D. 1986 Autobiographical memory across the lifespan. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.202-221.
- Ruth, J-E., & Kenyon, G. M. 1996 Biography in adult development and aging. In J. E. Birren, G. M. Kenyon, J-E. Ruth, J. J. F. Schroots, & T. Svensson (Eds.), *Aging and biography: Explorations in adult development*. New York, NY: Springer Publishing Company. Pp.1-20.

【 S 】

- 相良陽一郎 2000 日常記憶 太田信夫・多鹿秀継（編）記憶研究の最前線 北大路書房 Pp.151-169.
- Salmon, K., & Pipe, M-E. 2000 Recalling an event one year later: The impact of props, drawing and a prior interview. *Applied Cognitive Psychology*, **14**, 99-120.
- Sanitioso, R., Kunda, Z., & Fong, G. T. 1990 Motivated recruitment of autobiographical memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 229-241.
- Sato K. 2002 Changes in the temporal organization of autobiographical memories. *Psychological Reports*, **91**, 1074-1078.
- 佐藤浩一 1998 自伝的記憶研究に求められる視点 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **47**, 599-618.
- 佐藤浩一 2000 思い出の中の教師 - 自伝的記憶の機能分析 - 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **49**, 357-378.
- 佐藤浩一 2002a 自伝的記憶 井上毅・佐藤浩一（共編著）日常認知の心理学 北大路書房 Pp.70-87.

- 佐藤浩一 2002b 自伝的記憶の安定性 日本心理学会第 66 回総会発表論文集, p.740
- 佐藤浩一 2002c 自伝的記憶の構造 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **51**, 337-353.
- 佐藤浩一 2002d 日常認知研究の意義と方法(日常認知研究の方法, 日常認知研究の妥当性) 井上毅・佐藤浩一(共編著) 日常認知の心理学 北大路書房 Pp.7-16.
- 佐藤浩一 2003 自伝的記憶の安定性 - 想起内容と想起順序の検討 - 日本認知心理学会第 1 回大会発表論文集, p.137
- 佐藤浩一 2004 自伝的記憶の機能 佐藤浩一・槇洋一・下島裕美・堀内孝・越智啓太・太田信夫 自伝的記憶研究の理論と方法 日本認知科学会テクニカルレポート No.51, Pp.3-5.
- 佐藤浩一 2005a 自伝的記憶に研究における方法論的折衷主義 - 収束的証拠を求めて - 佐藤浩一・越智啓太・神谷俊次・上原泉・川口潤・太田信夫 自伝的記憶研究の理論と方法(2) 日本認知科学会テクニカルレポート No.55 Pp.3-7.
- 佐藤浩一 2005b 自伝的記憶の安定性 - 中高年が想起する青年期までの自己(1) - 日本認知心理学会第 3 回大会発表論文集, p.95
- 佐藤浩一 2005c 自伝的記憶の安定性 - 中高年が想起する青年期までの自己(2) - 日本心理学会第 69 回大会発表論文集, p.881
- 佐藤浩一 2006a 自伝的記憶の意味づけと記憶特性 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, p.887
- 佐藤浩一 2006b 自伝的記憶の構造 - event cueing 法を用いた検討 日本認知心理学会第 4 回大会発表論文集, p.89
- 佐藤浩一 2007 自伝的記憶の機能と想起特性 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **56**, 331-355.
- Schuman H., Akiyama, H., & Knauper, B. 1998 Collective memories of German and Japanese about the past half-century. *Memory*, **6**, 427-454.
- Schuman, H., Belli, R. F., & Bischooping, K. 1997 The generation basis of historical knowledge. In J. W. Pennebaker, D. Paez, & B. Rime (Eds.), *Collective memory of political events*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.47-77.
- Schuman, H., & Rieger, C. 1992 Collective memory and collective memories. In M. A. Conway, D. C. Rubin, H. Spinnler, & W. A. Wagenaar (Eds.), *Theoretical perspectives on autobiographical memory*. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers. Pp.323-336.
- Schuman, H., Rieger, C., & Gaidys, V. 1994 Collective memories in the United States and Lithuania. In N. Schwarz & S. Sudman (Eds.), *Autobiographical memory and the validity of retrospective reports*. New York, NY: Springer-Verlag. Pp.313-333.
- Schuman, H., & Scott, J. 1989 Generation and collective memories. *American Sociological Review*, **54**, 359-381.
- Schwarz, N. 1990 Feelings as information: Informational and motivational functions of affective states. In E. T. Higgins & R. M. Sorrentino (Eds.), *Handbook of motivation: Foundations of social behavior. Volume 2*. New York, NY: Guilford

- Press. Pp.527-561.
- Seifert, C. M., McKoon, G., Abelson, R. P., & Ratcliff, R. 1986 Memory connections between thematically similar episodes. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **12**, 220-231.
- 下島裕美 2001 自伝的記憶の時間的体制化 風間書房
- 白井利明 2000 大学から社会への移行における時間的展望の再編成に関する追跡的研究() - 大学卒業 2 年目における未来と過去の展望の変化に対する知覚 - 大阪教育大学紀要(第 部門), **49**, 23-32.
- Shum, M. S. 1998 The role of temporal landmarks in autobiographical memory processes. *Psychological Bulletin*, **124**, 423-442.
- Sidley, G. L., Whitaler, K., Calam, R. M., & Wells, A. 1997 The relationship between problem-solving and autobiographical memory in parasuicide patients. *Behavioural and Cognitive Psychotherapy*, **25**, 195-202.
- Singer, J. A., & Blagov, P. 2004a Self-defining memories, narrative identity, and psychotherapy: A conceptual model, empirical investigation, and case report. In L. E. Angus & J. McLeod (Eds.), *The handbook of narrative and psychotherapy: Practice, theory, and research*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications. Pp.229-246.
- Singer, J. A., & Blagov, P. 2004b The integrative function of narrative processing: Autobiographical memory, self-defining memories, and the life story of identity. In D. R. Beike, J. M. Lampinen, & D. A. Behrend (Eds.), *The self and memory*. New York, NY: Psychology Press. Pp.117-138.
- Singer, J. A., & Bluck, S. 2001 New perspectives on autobiographical memory: The integration of narrative processing and autobiographical reasoning. *Review of General Psychology*, **5**, 91-99.
- Singer, J. A., & Salovey, P. 1993 *The remembered self: Emotion and memory in personality*. New York, NY: The Free Press.
- Skowronski, J. J., & Walker, W. R. 2004 How describing autobiographical events can affect autobiographical memories. *Social Cognition*, **22**, 555-590.
- Staudinger, U. M. 2001 Life reflection: A social-cognitive analysis of life review. *Review of General Psychology*, **5**, 148-160.
- Steckle, L. C. 1945 Again-affect and recall. *Journal of Social Psychology*, **22**, 103-106.
- 杉浦健 2004 転機の心理学 ナカニシヤ出版
- Sutin, A. R., & Robins, R. W. 2005 Continuity and correlates of emotions and motives in self-defining memories. *Journal of Personality*, **73**, 793-824.

【 T 】

- Taft, L. B., & Nehrke, M. F. 1990 Reminiscence, life review, and ego integrity in nursing home residents. *International Aging and Human Development*, **30**, 189-196.
- 高田理孝 2003 自伝的記憶の検索メカニズム 都留文化大学研究紀要, **58**, 27-34.
- 高田理孝・阿波瞳・小俣芳恵・鶴田望 2004 高齢者の自伝的記憶 臨床教育実践学

- 研究(都留文科大学大学院臨床教育実践学専攻), **3**, 23-31.
- 高橋雅延 1997 偽りの性的虐待の記憶をめぐって 聖心女子大学論叢, **89**, 91-114.
- 高橋雅延 2000 記憶と自己 太田信夫・多鹿秀継(編) 記憶研究の最前線 北大路書房 Pp.229-246.
- 高橋雅延・清水寛之 2002 記憶特性質問紙による自伝的記憶の研究 - 日本語版記憶特性質問紙の作成 - 日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 747.
- Talarico, J. M., & Rubin, D. C. 2003 Confidence, not consistency, characterizes flashbulb memories. *Psychological Science*, **14**, 455-461.
- 田中宏二・小川一夫 1982 教師職選択に及ぼす親の影響 - 子の認知した親の期待と職業モデル - 教育心理学研究, **30**, 257-262.
- Taylor, H. A., & Tversky, B. 1997 Indexing events in memory: Evidence for index dominance. *Memory*, **5**, 509-542.
- Thorne, A., Cutting, L., & Skaw, D. 1998 Young adults' relationship memories and the life story: Examples or essential landmarks? *Narrative Inquiry*, **8**, 237-268.
- Thorne, A., McLean, K. C., & Lawrence, A. M. 2004 When remembering is not enough: Reflecting on self-defining memories in late adolescence. *Journal of Personality*, **72**, 513-541.
- 都筑学 1999 大学生の時間的展望 中央大学出版会
- Tulving, E. 1972 Episodic and semantic memory. In E. Tulving & W. Donaldson (Eds.), *Organization of memory*. New York, NY: Academic Press. Pp.381-403.
- Tulving, E. 1983 *Elements of episodic memory*. New York, NY: Oxford University Press.
- 太田信夫(訳) 1985 タルヴィングの記憶理論 - エピソード記憶の要素 教育出版
- Tulving, E., & Thomson, D. M. 1973 Encoding specificity and retrieval processes in episodic memory. *Psychological Review*, **80**, 352-373.

【W】

- Wagenaar, W. A. 1986 My memory: A study of autobiographical memory over six years. *Cognitive Psychology*, **18**, 225-252.
- Wang, Q. 2001 Culture effects on adults' earliest childhood recollection and self-description: Implications for the relation between memory and the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 220-233.
- Webster, J. D. 1993 Construction and validation of the reminiscence functions scale. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, **48**, P256-P262.
- Webster, J. D. 1995 Adult age differences in reminiscence functions. In B. K. Haight & J. D. Webster (Eds.), *The art and science of reminiscing: Theory, research, methods, and applications*. Bristol, PA: Taylor & Francis. Pp.89-102.
- Webster, J. D. 1997 The reminiscence functions scale: A replication. *International Aging and Human Development*, **44**, 137-148.
- Webster, J. D. 1998 Attachment styles, reminiscence functions, and happiness in young

- and elderly adults. *Journal of Aging Studies*, **12**, 315-330.
- Webster, J. D. 2003 The reminiscence circumplex and autobiographical memory functions. *Memory*, **11**, 203-215.
- Wenzel, A. 2005 Autobiographical memory tasks in clinical research. In A. Wenzel & D. C. Rubin (Eds.), *Cognitive methods and their application to clinical research*. Washington, DC: American Psychological Association. Pp.243-264.
- Wheeler, M. A., Stuss, D. T., & Tulving, E. 1997 Toward a theory of episodic memory: The frontal lobes and autonoetic consciousness. *Psychological Bulletin*, **121**, 331-354.
- White, R. 2002 Memory for events after twenty years. *Applied Cognitive Psychology*, **16**, 603-612.
- Williams, J. M. G. 1996 Depression and the specificity of autobiographical memory. In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.244-267.
- Williams, J. M. G., & Broadbent, K. 1986 Autobiographical memory in suicide attempters. *Journal of Abnormal Psychology*, **95**, 144-149.
- Witte, K. L., Freund, J. S., Seiby, R. A. 1990 Age differences in free recall and subjective organization. *Psychology and Aging*, **5**, 307-309.
- Woike, B., Gershkovich, I., Piorkowski, R., & Polo, M. 1999 The role of motives in the content and structure of autobiographical memory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 600-612.
- Wright, D. B. 1997 Methodological issues for naturalistic event memory research. In D. G. Payne & F. G. Conrad (Eds.), *Intersections in basic and applied memory research*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.69-86.
- Wright, D. B., & Nunn, J. A. 2000 Similarities within event clusters in autobiographical memory. *Applied Cognitive Psychology*, **14**, 479-489.
- Wynn, V. E., & Logie, R. H. 1998 The veracity of long-term memories - Did Bartlett get it right? *Applied Cognitive Psychology*, **12**, 1-20.

【 Y 】

- やまだようこ 2000 人生を物語ることの意味 - なぜライフストーリー研究か? -
教育心理学年報, **39**, 146-161.
- 山本多喜司・S.ワップナー(編著) 1991 人生移行の発達心理学 北大路書房
- 山崎晃男 2001 「教訓」の提示または産出による類推的問題解決の促進 教育心理学研究, **49**, 21-30.

表1-1の文献 *5

- 雨宮有里・関口貴裕 2006 無意図的に想起された自伝的記憶の感情価に関する実験的検討 心理学研究, **77**, 351-359.
- Anderson, S. J., & Conway, M. A. 1993 Investigating the structure of autobiographical memories. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, & Cognition*, **19**, 1178-1196.
- Aschermann, E., Dannenberg, U., & Schulz, A-P. 1998 Photographs as retrieval cues for children. *Applied Cognitive Psychology*, **12**, 55-66.
- Barsalou, L. W. 1988 The content and organization of autobiographical memories. In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to the study of memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.194-243.
- Bavelas, J. B., & Johnson, T. 2000 Listeners as co-narrators. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 941-952.
- Berntsen, D. 1996 Involuntary autobiographical memories. *Applied Cognitive Psychology*, **10**, 435-454.
- Berntsen, D. 2001 Involuntary memories of emotional events: Do memories of traumas and extremely happy events differ? *Applied Cognitive Psychology*, **15**, S135-158.
- Brewin, C. R. 1998 Intrusive autobiographical memories in depression and post-traumatic stress disorder. *Applied Cognitive Psychology*, **12**, 359-370.
- Brewin, C. R., Watson, M., McCarthy, S., Hyman, P., & Dayson, D. 1998 Memory processes and the course of anxiety and depression in cancer patients. *Psychological Medicine*, **28**, 219-224.
- Brown, N. R., & Schopflocher, D. 1998 Event cueing, event clusters, and the temporal distribution of autobiographical memories. *Applied Cognitive Psychology*, **12**, 305-319.
- Brown, R., & Kulik, J. 1977 Flashbulb memories. *Cognition*, **5**, 73-99.
- Burt, C. D. B. 1992 Reconstruction of the duration of autobiographical events. *Memory & Cognition*, **20**, 124-132.
- Burt, C. D. B., Watt, S. C., Mitchell, D. A., & Conway, M. A. 1998 Retrieving the sequence of autobiographical event components. *Applied Cognitive Psychology*, **12**, 321-338.
- Conway, M., & Ross, M. 1984 Getting what you want by revising what you had. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 738-748.
- Conway, M. A., Anderson, S. J., Larsen, S. F., Donnelly, C. M., McDaniel, M. A., McClelland, A. G. R., & Rawles, R. E. 1994 The formation of flashbulb memories.

*5 本文中の引用文献と重複するものも再掲している。

- Memory & Cognition*, **22**, 326-343.
- Conway, M. A., & Bekerian, D. A. 1987 Organization in autobiographical memory. *Memory & Cognition*, **15**, 119-132.
- Conway, M. A., Turk, D. J., Miller, S. L., Logan, J., Nebes, R. D., Meltzer, C. C., & Becker, J. T. 1999 A positron emission tomography (PET) study of autobiographical memory retrieval. *Memory*, **7**, 679-702.
- Csikszentmihalyi, M., & Beattie, O. V. 1979 Life themes: A theoretical and empirical exploration of their origins and effects. *Journal of Humanistic Psychology*, **19**, 45-63.
- Cully, J. A., LaVoie, D., & Gfeller, J. D. 2001 Reminiscence, personality, and psychological functioning in older adults. *The Gerontologist*, **41**, 89-95.
- Davis, P. J. 1999 Gender differences in autobiographical memory for childhood emotional experiences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 498-510.
- Dritschel, B., Kogan, L., Burton, A., Burton, E., & Goddard, L. 1998 Everyday planning difficulties following traumatic brain injury: A role for autobiographical memory. *Brain Injury*, **12**, 875-886.
- Eacott, M. J., & Crawley, R. A. 1998 The offset of childhood amnesia: Memory for events that occurred before age 3. *Journal of Experimental Psychology: General*, **127**, 22-33.
- Eacott, M. J., & Crawley, R. A. 1999 Childhood amnesia: On answering questions about very early life events. *Memory*, **7**, 279-292.
- Ehrlichman, H., & Halpern, J. N. 1988 Affect and memory: Effects of pleasant and unpleasant odors on retrieval of happy and unhappy memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 769-779.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. 1986 Vital involvement in old age. New York, NY: Norton. 朝長正徳・朝長梨枝子(訳) 1990 老年期 - 生き生きとした
かかわりあい - みすず書房
- Evans, J., Williams, J. M. G., O'Loughlin, S., & Howells, K. 1992 Autobiographical memory and problem-solving strategies of parasuicide patients. *Psychological Medicine*, **22**, 399-405.
- Fitzgerald, J. M. 1981 Autobiographical memory: Reports in adolescence. *Canadian Journal of Psychology*, **35**, 69-73.
- Fivush, R. 1998 Gendered narratives: Elaboration, structure, and emotion in parent-child reminiscing across the preschool years. In C. P. Thompson, D. J. Herrmann, D. Bruce, J. D. Read, D. G. Payne, & M. P. Togli (Eds.), *Autobiographical memory: Theoretical and applied perspectives*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.97-103.
- Fromholt, P., & Larsen, S. F. 1991 Autobiographical memory in normal aging and primary degenerative dementia (dementia of Alzheimer type). *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, **46**, P85-P91.

- Gilboa, A., Ramirez, J., Kohler, S., Westmacott, R., Black, S. E., & Moscovitch, M. 2005 Retrieval of autobiographical memory in Alzheimer's disease: Relation to volumes of medial temporal lobe and other structures. *Hippocampus*, **15**, 535-550.
- Goddard, L., Dritschel, B., & Burton, A. 1996 Role of autobiographical memory in social problem solving and depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **105**, 609-616.
- Goddard, L., Dritschel, B., & Burton, A. 1997 Social problem solving and autobiographical memory in non-clinical depression. *British Journal of Clinical Psychology*, **36**, 449-451.
- Habermas, T., & Paha, C. 2001 The development of coherence in adolescents' life narratives. *Narrative Inquiry*, **11**, 35-54.
- Hamond, N. R., & Fivush, R. 1991 Memories of Mickey Mouse: Young children recount their trip to Disneyworld. *Cognitive Development*, **6**, 433-448.
- Han, J. J., Leichtman, M. D., & Wang, Q. 1998 Autobiographical memory in Korean, Chinese, and American children. *Developmental Psychology*, **34**, 701-713.
- Harley, K., & Reese, E. 1999 Origins of autobiographical memory. *Developmental Psychology*, **35**, 1338-1348.
- Harvey, A. G., Bryant, R. A., & Dang, S. T. 1998 Autobiographical memory in acute stress disorder. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **66**, 500-506.
- Herz, R. S., & Schooler, J. W. 2002 A naturalistic study of autobiographical memories evoked by olfactory and visual cues: Testing the Proustian hypothesis. *American Journal of Psychology*, **115**, 21-32.
- Hodges, J. R., & McCarthy, R. A. 1993 Autobiographical amnesia resulting from bilateral paramedian thalamic infarction. *Brain*, **116**, 921-940.
- Holmes, A., & Conway, M. 1999 Generation identity and the reminiscence bump: Memory for public and private events. *Journal of Adult Development*, **6**, 21-34.
- Hudson, J. A., & Fivush, R. 1991 As time goes by: Sixth graders remember a kindergarten experience. *Applied Cognitive Psychology*, **5**, 347-360.
- Hyman, I. E. Jr., & Billings, F. J. 1998 Individual differences and the creation of false childhood memories. *Memory*, **6**, 1-20.
- Hyman, I. E. Jr., & Faries, J. M. 1992 The functions of autobiographical memory. In M. A. Conway, D. C. Rubin, H. Spinnler, & W. A. Wagenaar (Eds.), *Theoretical perspectives on autobiographical memory*. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers. Pp.207-221.
- Hyman, I. E. Jr., & Pentland, J. 1996 The role of mental imagery in the creation of false childhood memories. *Journal of Memory and Language*, **35**, 101-117.
- Jansari, A., & Parkin, A. J. 1996 Things that go bump in your life: Explaining the reminiscence bump in autobiographical memory. *Psychology and Aging*, **11**, 85-91.
- 神谷俊次 1997 自伝的記憶の感情特性と再想起可能性 アカデミア(自然科学・保険体育編), **6**, 1-11.
- 神谷俊次 2003 不随意記憶の機能に関する考察 - 想起状況の分析を通じて - 心理

- 学研究, **74**, 444-451.
- Karney, B. R., & Coombs, R. H. 2000 Memory bias in long-term close relationships: Consistency or improvement? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 959-970.
- 小林多寿子 1987 <都市化>とノスタルジー - 都市における奄美出身者の心性 - 年報人間科学(大阪大学人間科学部), **8**, 23-40.
- 小林多寿子 1992 <親密さ>と<深さ> - コミュニケーション論から見たライフストーリー - 社会学評論, **42**, 419-434.
- Kurbat, M. A., Shevell, S. K., & Rips, L. J. 1998 A year's memories: The calendar effect in autobiographical recall. *Memory & Cognition*, **26**, 532-552.
- 黒川由紀子 1994 器質性障害を背景に有する夫婦の事例から 心理臨床, **7**, 192-198.
- 黒川由紀子 1995 痴呆老人に対する心理的アプローチ - 老人病院における回想法グループ - 心理臨床学研究, **13**, 169-179.
- Levine, L. J., Prohaska, V., Burgess, S. L., Rice, J. A., & Laulhere, T. M. 2001 Remembering past emotions: The role of current appraisals. *Cognition and Emotion*, **15**, 393-417.
- Lewinsohn, P. M., & Rosenbaum, M. 1987 Recall of parental behavior by acute depressives, remitted depressives, and nondepressives. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 611-619.
- Linton, M. 1975 Memory for real-world events. In D. A. Norman, & D. E. Rumelhart (Eds.), *Explorations in cognition*. San Francisco, CA: Freeman & Company. Pp.376-404.
- Loftus, E. F. 1993 The reality of repressed memories. *American Psychologist*, **48**, 518-537.
- Lyubomirsky, S., Caldwell, N. D., & Nolen-Hoeksema, S. 1998 Effects of ruminative and distracting responses to depressed mood on retrieval of autobiographical memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 166-177.
- Maguire, E. A. 2002 Neuroimaging studies of autobiographical event memory. In A. Baddeley, M. Conway, & J. Aggleton (Eds.), *Episodic memory: New directions in research*. Oxford, UK: Oxford University Press. Pp.164-180.
- 槇洋一・仲真紀子 2006 高齢者の自伝的記憶におけるバンプと記憶内容 心理学研究, **77**, 333-341.
- Mazzoni, G. A. L., Loftus, E. F., Seitz, A., & Lynn, S. J. 1999 Changing beliefs and memories through dream interpretation. *Applied Cognitive Psychology*, **13**, 125-144.
- McAdams, D. P., Aubin, E. de St., & Logan, R. L. 1993 Generativity among young, midlife, and older adults. *Psychology and Aging*, **8**, 221-230.
- McCloskey, M., Wible, C. G., & Cohen, N. 1988 Is there a special flashbulb-memory mechanism? *Journal of Experimental Psychology: General*, **119**, 171-181.
- McFarland, C., Ross, M., & DeCourville, N. 1989 Women's theories of menstruation and biases in recall of menstrual symptoms. *Journal of Personality and Social*

- Psychology*, **57**, 522-531.
- Molinari, V., Cully, J. A., & Kendjelic, E. M. 2001 Reminiscence and its relationship to attachment and personality in geropsychiatric patients. *International Journal of Aging & Human Development*, **52**, 173-184.
- Neimeyer, G. J., & Metzler, A. E. 1994 Personal identity and autobiographical recall. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.105-135.
- Newman, L. S., & Hedberg, D. A. 1999 Repressive coping and the inaccessibility of negative autobiographical memories: Converging evidence. *Personality and Individual Differences*, **27**, 45-53.
- 野村晴夫 2002 高齢者の自己語りと自我同一性との関連 - 語りの構造的整合・一貫性に着目して - 教育心理学研究, **50**, 95-106.
- 野村信威・橋本幸 2001 老年期における回想の質と適応との関連 発達心理学研究, **12**, 75-86.
- Ornstein, P. A., Merritt, K. A., Baker-Ward, L., Furtado, E., Gordon, B. N., & Principe, G. 1998 Children's knowledge, expectation, and long-term retention. *Applied Cognitive Psychology*, **12**, 387-405.
- 長田由紀子・長田久雄 1994 高齢者の回想と適応に関する研究 発達心理学研究, **5**, 1-10.
- Pillemer, D. B. 1992 Remembering personal circumstances: A functional analysis. In E. Winograd & U. Neisser (Eds.), *Affect and accuracy in recall: Studies of "flashbulb" memories*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.236-264.
- Pillemer, D. B. 1998 *Momentous events, vivid memories*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Pillemer, D. B., Goldsmith, L. R., Panter, A. T., & White, S. H. 1988 Very-long term memories of the first year in college. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **14**, 709-715.
- Pillemer, D. B., Koff, E., Rhinehart, E. D., & Rierdan, J. 1987 Flashbulb memories of menarche and adult menstrual distress. *Journal of Adolescence*, **10**, 187-199.
- Pillemer, D. B., Picariello, M. L., & Pruett, J. C. 1994 Very-long term memories of a salient preschool events. *Applied Cognitive Psychology*, **8**, 95-106.
- Pillemer, D. B., Rhinehart, E. D., & White, S. H. 1986 Memories of life transitions: The first year in college. *Human Learning*, **5**, 109-123.
- Reese, E., & Fivush, A. 1993 Parental styles of talking about the past. *Developmental Psychology*, **29**, 596-606.
- Reese, E., Haden, C. A., & Fivush, A. 1993 Mother-child conversations about the past: Relationships of style and memory over time. *Cognitive Development*, **8**, 403-430.
- Reiser, B. J., Black, J. B., & Abelson, R. P. 1985 Knowledge structures in the organization and retrieval of autobiographical memories. *Cognitive Psychology*, **17**, 89-137.

- Reviere, S. L., & Bakeman, R. 2001 The effects of early trauma on autobiographical memory and schematic self-representation. *Applied Cognitive Psychology*, **15**, S89-S100.
- Robinson, J. A. 1976 Sampling autobiographical memories. *Cognitive Psychology*, **8**, 578-595.
- Rubin, D. C., & Schulkind, M. D. 1997 Distribution of important and word-cued autobiographical memories in 20-, 35-, and 70-year-old adults. *Psychology and Aging*, **12**, 524-535.
- Rubin, D. C., Wetzler, S. E., & Nebes, R. D. 1986 Autobiographical memory across the lifespan. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.202-221.
- Sakaki, M. 2004 Effects of self-complexity on mood-incongruent recall. *Japanese Psychological Research*, **46**, 127-134.
- Salovey, P., & Singer, J. A. 1989 Mood congruency effects in recall of childhood versus recent memories. *Journal of Social Behavior & Personality*, **4**, 99-120.
- Sanitioso, R., Kunda, Z., & Fong, G. T. 1990 Motivated recruitment of autobiographical memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 229-241.
- Schrauf, R. W., & Rubin, D. C. 1998 Bilingual autobiographical memory in older adult immigrants: A test of cognitive explanations of the reminiscence bump and the linguistic encoding of memories. *Journal of Memory and Language*, **39**, 437-457.
- Schuman, H., Belli, R. F., & Bischooping, K. 1997 The generation basis of historical knowledge. In J. W. Pennebaker, D. Paez, & B. Rime (Eds.), *Collective memory of political events*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.47-77.
- Sheen, M., Kemp, S., & Rubin, D. 2001 Twins dispute memory ownership: A new false memory phenomenon. *Memory & Cognition*, **29**, 779-788.
- Sheingold, K., & Tenney, Y. J. 1982 Memory for a salient childhood event. In U. Neisser (Ed.), *Memory observed: Remembering in natural contexts*. San Francisco, CA: Freeman and Company. Pp.201-212.
- 下島裕美 2001 自伝的記憶の時間的体制化 風間書房
- 白井利明 2001 青年の進路選択に及ぼす回想の効果 - 変容確認法の開発に関する研究) - 大阪教育大学紀要第 部門(教育科学), **49**, 133-157.
- Sidley, G. L., Whitaler, K., Calam, R. M., & Wells, A. 1997 The relationship between problem-solving and autobiographical memory in parasuicide patients. *Behavioural and Cognitive Psychotherapy*, **25**, 195-202.
- Taft, L. B., & Nehrke, M. F. 1990 Reminiscence, life review, and ego integrity in nursing home residents. *International Aging and Human Development*, **30**, 189-196.
- Thompson, J., Morton, J., & Fraser, L. 1997 Memories for the Marchionese. *Memory*, **5**, 615-638.
- 上原泉 1998 再認が可能になる時期とエピソード報告開始時期の関係 教育心理学研究, **46**, 271-279.

- Wagenaar, W. A. 1986 My memory: A study of autobiographical memory over six years. *Cognitive Psychology*, **18**, 225-252.
- Wagenaar, W. A., & Groeneweg, J. 1990 The memory of concentration camp survivors. *Applied Cognitive Psychology*, **4**, 77-87.
- Webster, J. D. 1997 The reminiscence functions scale: A replication. *International Aging and Human Development*, **44**, 137-148.
- Welch-Ross, M. K. 1997 Mother-child participation in conversation about the past: Relationships to preschooler's theory of mind. *Developmental Psychology*, **33**, 618-629.
- West, T. A., & Bauer, P. J. 1999 Assumptions of infantile amnesia: Are there differences between early and later memories? *Memory*, **7**, 257-278.
- Williams, J. M. G. 1996 Depression and the specificity of autobiographical memory. In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*, 244-267. New York, NY: Cambridge University Press. Pp.244-267.
- Wilson, A. E., & Ross, M. 2001 From chump to champ: People's appraisals of their earlier and present selves. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 572-584.
- Woike, B., & Polo, M. 2001 Motive-related memories: Content, structure, and affect. *Journal of Personality*, **69**, 391-415.
- Wright, D. B., Gaskell, G. D., & O'Muirheartaigh, C. A. 1997 The reliability of the subjective reports of memories. *European Journal of Cognitive Psychology*, **9**, 313-323.
- Wright, D. B., Gaskell, G. D., & O'Muirheartaigh, C. A. 1998 Flashbulb memory assumptions: Using national surveys to explore cognitive phenomena. *British Journal of Psychology*, **89**, 103-121.
- 山口智子 2000 高齢者の人生の語りにおける類型化の試み - 回想についての基礎的研究として - *心理臨床学研究*, **18**, 151-161.

謝 辞

本論文を提出するにあたり、これまでお世話になった方々に対する感謝の気持ちを、一言述べさせていただきます。

私は 1980 年に新潟大学人文学部行動科学課程に一期生として入学いたしました。新潟大学で御指導下さった先生方に、心より感謝申し上げます。教養部では木原孝先生に心理学の基礎を教えて頂きました。専門課程では竹中治彦先生、長塚康弘先生、本田仁視先生、津崎実先生に、専門的な知識と研究の基礎を教えて頂きました。ことに本田仁視先生には、卒業研究の指導教官として、文献の読み方、研究の方法、研究成果の発表の仕方に至るまで、多くのことを教えて頂きました。本田先生の研究室から聞こえてくるタイプライターの音に、研究者としての憧れを覚えた日のことが思い出されます。私の出発点となった新潟大学に本論文を提出できることは、この上ない喜びです。

大阪大学大学院人間科学研究科に進学後は、小野茂先生と中島義明先生にご指導頂きました。お二人の先生は、私が修士論文を作成する過程で、またそれ以降も研究を進める過程で、たえず有益なご助言と励ましを下さり、私が研究者として進んでいくための道を開いてくださいました。

また私は博士後期課程進学後、大阪教育大学の北尾倫彦先生が主催される学習理論研究会に参加させて頂きました。この研究会では北尾倫彦先生をはじめ、森敏昭先生(広島大学)や野村幸正先生(関西大学)からもご指導頂きました。さらに記憶・認知を研究する多くの先輩方や同世代の方々と知り合うことができました。新潟大学を出発点とするなら、学習理論研究会は私にとっての転換点です。

1995 年 4 月に私は群馬大学教育学部に着任しました。すでに退官・転出された先生方も含めて、教育心理学教室の先生方には、研究を進める上で様々なお心遣いを頂きました。ことにこの一年間は、本論文の執筆に専念できるようご配慮くださいました。深く感謝致します。

2000 年 1 月に私は越智啓太先生(法政大学)、下島裕美先生(杏林大学)と三人で、自伝的記憶研究会を発足させました。お二人からは常々研究会やワーク

シヨップを通じて、刺激を頂いています。本論文の中には、この研究会なくしては書かれなかった箇所がいくつもあります。また下島裕美先生には、データの分析に際してもご協力頂きました。感謝申し上げます。

一つの研究が形になるには - それがどんなにささやかなものであれ - ，多くの方の支えがなければならぬことを、本論文の執筆中、幾度も痛感いたしました。研究に協力して下さった全ての皆様に、御礼申し上げます。

最後に、いつも私のそばで心身の健康を気遣ってくれる妻(由紀)と、常に私のことを祈ってくれている両親(佐藤元信・三和)に、感謝の気持ちを捧げます。

2007年1月

佐藤 浩一